浮城物語

龍溪著

緒言

大分縣豐後國南海部郡。蒲佐伯藩領に日向泊なる一漁村あり。昔し神武帝東征の時。龍舟此地に泊せしを以て日向泊の名あり。海濱沙積中の一小井。潮來れば海水の浸す所となり。潮去れば瞰ち見はる。而して其水清冽鹽氣を帶ひす。傳へ云ふ帝行營を置くに當り。兵士をして穿たしむる所の者と。後人之を神とし。名けて神井と云ふ。藩政の時。此村に里正あり。其家神井の傍に在るを以て神井を姓とす。後改めて上井とす。此職を世襲す。傳て清商門なるものに至り早く死す。其孤清太郎幼より伯父某の家に養はる。年甫めて十六七。（明治五年頃の由）笈を負て坂。神の間に學遊すると稱し鄉を出づ。其後ち失踪して所在を知らざるもの幾んど十餘年。去歲明治廿二年外國郵便を以て伯父某の許に一函の書を送致す。某既に死して數年なり。其書傳へて社員の手に至る。之を讀むに清太郎自家身上の經歷史にして。其事絶快。人をして魂飛び神遊ばしむ。宛然一個の好小說なり。乃ち繁を芟り。冗を去て更に修飾を加へ題して浮城物語と云ふ。書中記する所の事。其の年月詳かならず。然れども世に知られたる事變に徵して之を考ふるに。第一回發端は蓋し明治十一年の頃より始まる者とす。又た書中著大の事變にして內外の新紙に記せざるもの尠なからず。其跡或は疑ふへきあらは。讀者一部の小說として之を恕して可なり。原書は日記の類なり。總て本人の自叙躰を用ゆ。本社之を修飾する亦た其舊に依。書中「余」と稱するは。上井清太郎自家を指すものと知るべし

龍溪居士　識

第一回　小革囊

九時四十五分。東京行の瀛車に飛乘らんと。横濱瀛船問屋の朝飯を喫し。終て宿料を拂はんと。小革囊を引寄せ。開き見れば。這は如何に。中に藏めし胴卷（昨夜入浴の時。帳場に預けんと革囊の中に入れ。其の儘に爲し置きたる胴卷）は勿論。懷中すら消失せて一物も跡を止めず。或は怪み。或は憤り。遂に惘然自失して。腰を抜かせしを結局とし。遽に下女を呼び主人を招き。泣くが如くに訴ふれとも「誠に御濟みませぬ」御氣の毒樣「飛んだ事で一杯との詫口上を得る外には。一錢の損失だも恢復す可き見込なし。賊が革囊のまゝ持行かすして。囊中の金のみ奪去りしは。持主に早く覺られじとの狡智ならん抔と。左も發明らしく下女の物語るは。之を聞くすら猶ほ腹立ちし。赤手空拳を以て東京に赴くも。我が前途を如何せん。去りとて此地に止るも詮なし。責めては東京迄の瀛車賃と兩三日の宿賃に充る金なりとも手に入れんと思ひ定めて後ち第一の問題は可成く高價に外套を賣却するの一事なり。大坂出立の二三日前こそ新調して我ながら能く出來たりと喜びし外套に別れを告くるは最愛の美人に別るゝより尚ほ悔やしく實に本意なき限りなれども「事急なれは鼻をも削ぐ」の諺に從ひ主人に請て六圓の金に代へ得たり。結果もなき前途の考案に一日を室中に空費し唯た身に着けたる一領の洋服と空革囊と洋傘とを一身有限の財產として悄然と瀛船問屋を立出て徒步停車場に至りしは既に薄暮の頃なりき

余の乘りし下等列車は乘客雜〻と詰合ひ身動きもならす衆客思ひ〳〵の談話も耳に入らす五十分間の馳行は唯余が前途の苦痛なる考案中に終りつゝイザ新橋よと乘客の動搖めき騷くに驚かされ衆人の跡に附き我れもなく停車場を出てゝ先つ芝口の旅人宿に投宿せり扨て晩餐を喫する後ち日記帳（常には外套に入れたれとも今は革囊の中に藏めんと）洋服のポッケットより取出し小革囊を引寄せ之を打開かんとするに眞て開かず依て鍵を用ゆれは難なく開きたり此中なる四五圓の金は今の我身に千金の價あり無事に居るか其顏見んと紙包を取出し見れは先きに我か入置きし包より一倍の大さなる包物現はれたり這は訝しと開き見れば五圓札六十枚合せて三百圓の大金なり余の呆然知る可きのみ余は直に室の襖障子を確と占切り身躰少しく震るへなから能く〳〵點檢すれば五圓札六十枚に相違なし嗚呼何ぞ余が革囊の不可思議なるや今朝は余が大坂より携へ來りし九十二圓の金を吸消し今又た三百圓の大金を

吐出だせり何故に此の三百圓が突然として革囊中に現はれ來りしやと包紙を改め見れは「東京。御伯母樣。横濱グランド。ホテル義文」の文字あり此問題を解釋するに三四分間を費やし後ち忽ち思ひ得たり先きに瀛車にて余の隣席を占めし一男子。余の革囊と大小色合甚だ似たるものを携へたり。川崎にて瀛車の駐りし時停車場に何事か人立ちするを見んとて我か同車の乘客か立騒き二三の手提革囊輾落せるもありき或は其時に於て隣席の者が我か革囊と取違へたりしに非ざる乎。是外には心當りなし我が革囊も數日前こそ大坂にて新調せし舶來の者なり此の革囊も亦た新調せしと見へすん分違はぬ舶來の者なり左るにても此の三百圓は天の我に與る所。取らすんは却て禍を受けん。余か前途も頼のみ多きかなと朝來の憂雲遽に開て忽ち朝陽の上るを見るか如く余の總身は覺へず春の如き温氣を生じたり。此の三百圓は如何に用ゆ可き乎。一ヶ月の下宿料五圓小遣三圓とするも九十餘圓を以て一年を支へ。三百圓を以て三ヶ年一ヶ月二十四日の永きを支へ得可し其間には必ず善き風の吹廻はしありて判任三四等の榮任を得るに難からじ。此上は可成く節儉策を講すへし。イヤ〳〵先つ差當りの必要品を購はん乎。今朝賣却せしより一層花やかなるオーバーコートを造らん乎。フロックコートの一揃ひも入用なり。銀時計も欠く可らず。長靴の一足も入用ならん。總計四十六圓（外套十三圓。フロックコート二十五圓。銀時計八圓。長靴五圓）を差引くも猶ほ二百五十四圓の巨額を餘す可し此の大金は如何にして賊難を防ぐべき。明日直に驛遞局に預込まん乎。夫迄旅宿の帳場に預けんは餘り巨額なりなどと案じ煩らへり

斯る想像の生じ來ると幾んど同時に又た一種の心配を生じ來たれり。余は他人の大金を拾て之を自家の用に供するは正道に背くとなき乎。余か今朝九十二圓を失ひたる時の苦痛は今猶ほ忘れず此三百圓を失ひたる人は余よりも三倍大なる苦痛を感じ居るには非る乎。余か失ひたる金よりも此金は其持主に一層大切のものには非る乎。又一時余は遺金を拾ひし跡を蔽ひ得るも余の一生涯に他日何れの時か露顯し來る危險は無き乎。是等の憂慮。慚羞惻怛の情念は時間を經過すると共に積累し來れり。今より横濱に引還しグランドホテルに赴て持主に此金を引渡さん乎。將た我かオーバーコートを新調せん乎。と或は瀛車の時間表を眺め或は我が洋服を打眺めてオーバーコートのあらざるを恨む

第二回　班超傳

横濱グランド。ホテルの小使余を案内して長廊下の隅なる一室に至り指して曰く是れ即ち八番室なりと。戸を開て余を誘ふ。室内には二名の日本人あり余と初見の禮を叙して互に名刺を通ず甲は「作良義文」。乙は「立花勝武」と印す。作良は年齒三十内外なるへく立花は二十六七ならん二人與に旅行前の服裝にて未た汚染せざる新調の縞羅紗の「セビロ」を着けたり一見して其の風采の鄙しからさるを覺ゆ。余即ち來訪の大意を述べ其の金員及ひ紙包の紙質等を問ひしに答辯一々違ふ所なし。因て革嚢の儘金員を作良に授與せり。其の時余は心中竊に思へらく此の遺金は我に於て取るへきの道理なきも持主に於ては幾分の謝禮を爲すへきの道理ありと。又た思へらく彼れ果して我に幾何を與ふるならんか。之を與へなは我は之を受納すへきか。此の一事は我か前途祥福の決する所。如何すへきか。此の一事は我か前途祥福の決する所。如何にせは可ならんかと早脳中に一の苦勞を生し來れり。作良氏は深く余の好意を謝し余の正直を感する言を述へ彼の紙包を取去り更に新紙もて彼の三百金を包み直したり。此時余の眼は始終其の爲す所に注ぎ居たり。

包み終て作良氏は其儘三百金を余の前に進め其の謝意を表する爲め之を余に贈るへしと述へたり。余は其事の意外なるに驚き心臟忽ち鼓動を高めたり。凡そ持主か返却されし遺金の一半を拾人に與ふるは往々珍しからぬ事なれとも半額以上の謝金を與ふるは甚た稀に聞く所なり。況や其の全額を與ふるをや。此の先年餘程不可思議なる人物なりと三百圓の欲さを耐らへ先つ其の所以を問へば作良氏答て曰く余は明日にも洋行をなすへき身なり一人の叔母に贈りたる金子か途中にて紛失せしことを一刻も早く知りしは其の一事だけにても余に取ては非常の仕合なり余は富裕の身にあらぬとも金員は吝むに足らず。唯此事を托せし者の粗忽にて此金か叔母に届かす余か其儘に洋行せは如何計り悔しかりなん。幸に足下の如き人あれはこそわざ〳〵其事をも知らしめ金員迄も御持參ありしなれ。夫故に此〻金員は其儘足下の好意に酬ひ之を進呈致すのみ。叔母の方へは明日更に送金を爲すへきなりと太と叮寧に彼の三百圓を進むるにぞ余は之を懷中に攫入れたきは山〻なから期る快濶なる人物の手前。直に受納せんは流石にて尚ほモヂ〳〵と幾度か心にもなく固辭したり。其内に豫ねて誂へしものと見へ小使は紅茶とビス

ケットを持來れり此時立花と稱する人も傍らより頻りに余に受納すべきを勸めたり。談話の語次遂に先方より余の身上を問掛けられ乃ち今朝旅宿にて盜難に罹りし顛末を述べしに兩人は太く感服し左程窮厄の中に在りながら遺金を返却せらるゝの志操は轉た感歎の外なし强ても受納ありたしとの勸めに余も始めて受納すべき機會を得て先方の意に任せたりしが嬉しさの餘り。ソヲ〳〵として身躰落附かず。爭で喜色を現はすべきと勉强はしたれども定めて先方の慧眼に早くも之を看抜れしならん。此儘に暇を告げんも不興なれば彼等兩人の洋行する用向抔を尋ね且つ頗に已も多年此志を懷きながら空く今日迄之を遂げ得ざるの慨歎を述へ。アハレ何人か伴ひ行く愚人あらは縱令蒸氣釜の火夫。機關室の職方と爲るも何の憾む所あらんと述へたりしが此の一事は余が年來の素懷なりし故にや其の眞實自から言語に現れたりと見へ立花氏此時「足下は左程に洋行を爲し度きや」と問へり其の語氣を察するに余が正直を嘉みし何か心あり氣に見へたりけれは此時一種の大望忽ち余の胸中に湧出せり。二人の擧動を察するに非常の金滿家と見へたり一人の小使を伴ふも或は難きにあらじ先つ其身分用向を確かめ見んものと「御兩處は官用を帶ひ御洋行相成候やと問ひたるに立花氏「然らす」と答へたり。「左らは御商用ありや」と問ひしに「先つ左樣な事なり」と答へたり。然れとも熟ら二人の樣子を察するに是迄外國貿易に身を入れたる商人とも見へず是に於てか余の怪み益々深きを加へ頻に種々の問を發せしに彼の立花氏は稍や五月蠅と見ゆる風情にて「君は洋書を讀み得るや」と問ふ。依て「是迄坂神間にて諸國の宣教師に就き英。佛。曼語の短語通辯位は爲し得たり且つ英書も一通りは讀み得ざるにあらず」と暗に余が平生の技倆を誇りたり立花氏曰く「然らは君はウリヤム。プレスコット氏の有名なる『コンクエスト。オフ。ペリュー』(白露侵略志)と題する書を繙讀せしことある乎。と是に至て余は甚た當惑せり余は尋常學校用の英國史。佛國史。其他リードル位は讀みたりしも未た斯る雜書を見たることなし。斯る問を蒙むるならば一切洋書を讀まざりしと言へかりしに。失敗せりと悔みなからも隱すに術なく「不學未た之を讀まず」と答へたり彼又た問ふ「君は漢書を讀しや」「然り嘗て鄕に在て秋月。楠兩先生の門に遊ひ四書五經の素讀を終り其後上國に遊ひし後も聊か漢學を修めさるにあらす乍去ら是れとても淺學寡聞元とより貴

問に應するに足らす」と此度は先敗に懲りて眞實謙遜の意を表したり「然らは君は後漢書の班超傳を讀みしことありや」曰く「無し」「十八史畧は如何ん」曰く「有り」立花氏笑て曰く「余等兩人の心事を知らんと欲せは子夫れ去て十八史畧東漢の部を見よ其中に班超の傳あらん」と余は此時謂らく。此兩人果して普通の商人にあらす。何等仔細ありげの人物なり今幾何の問を發するも徒らに余か無學を笑はるゝのみならん。如かす一と先つ立歸て更に思案を廻らさんにはと匆々に暇を告け三百圓入の革囊の把子を斷ぎるゝはかりに。しかと攫みつゝ今朝の濱船問屋を指して一さんに歸り來りて主人に再ひ投宿する旨を述て彼の革囊をは確と主人に預けつゝ飛ふか如くに書林を求め十八史畧舊本一部を購ひ歸て餘事を閣き先づ第三卷東漢の部を讀下せり。

第三回　好丈夫

孝和皇帝の十四年に至て曰く班超起て自書生一投筆有封侯万里外一之志有相者一謂曰生燕頷虎頸飛而食肉萬里侯相也目下假司馬一入西域一（中略）平定諸國一在西域一三十年以功封定遠侯一讀て此に至り覺えず膝を擊て曰是なり彼等果て大志あり作良氏曰く「子の依賴は左るとなから子は我ふか洋行の目的を知り居る乎」曰く「知らす然れとも昨夜立花君の仰せに從ひ早速十八史畧を讀て班超の事を詳に聊か心に會する所あり。又た其節同君は白露侵畧志を讀みしかとの御尋あり。當時は心に浮ばざりしが班超傳を讀了るの後ち忽ち米國史にフランシスコ。ピザロウが僅々六十餘名の部下を帥ひ白露の王國を征服せし事あるを思起したり小生未た侵畧志を讀ますと雖とも其事の大に班超に類するものあるを知り兩閣下が雄圖を懷くの心事或は此の如くならん乎と思へは益々景慕渴仰の念に堪へす若し兩閣下の隷御と爲り海外の遊に從ふを得は畢生の本懷之に過きすと存し斯くは揖附けかましき不敬の儀をも悃願仕るにて候」と此時作良氏は微笑して立花氏の方を見やり又余を顧て曰く「甚た好し々々々。子に父母ありや」曰く「無し」「已でに妻子ありや」曰く「未たし」「多病ならさるや」曰く「否な御覽の通り中肉なれとも頗ふる健康なり」余は心中獨語す。假令ひ多病なりとも斯る場合に何そ不健康と言ふものあらんと夫より兩氏は余の本貫を問ひ且つ曰く「子は鄉を出てし後ち今日迄四五年間何事を爲せしそ」最初は相應の學資を帶ひたれとも惡友に誘はれて

遊蕩の爲めに過半を浪費し盡したり夫より後は頗ふる困窮して前非を悔ひ神戸なる外国宣教師の家に寄食し小使を勤めて事ら語學を修め且つ暇ある節には漢學をも學ひたり然れとも其教師が歸國せし後は又大坂なる他の宣教師に使はれ三年の間。節儉して小遣錢を貯蓄して和く百圓の高に上りしかは此れより東京に出て身を立るの計を爲さんと横濱に着せり爾後の仕合せは昨夜も申述たる如しと。陳じ終て余か言に偽りなきを警はんと言ひしに立花氏「それには及はす、一言以て智とし。不智とす。余は君子にあらぬとも人の情偽は察するに難からす」とて此間二人暫く無言なりき余は兩氏か余の請求を如何に處置すへきやと頻に其の顏色に注目し居たりしが忽ち余の携へたる革囊より彼の三百圓を出取し之を兩氏の前に差遣めて曰く「昨夜は此の報酬を賜はりたれとも今は之を固辭すへし願くは其代りとして兩閣下洋行の御供を御許容あらんことを望むと。精神を込めて歎願せり此時立花氏は作良氏の顏色を窺ふものゝ如くなりき作良氏余に向て曰く「子が熱心の程察入りたり尚ほ兩人篤と熱議して返答せん本日午後二時。重ねて來訪あるへし」と言ひ終て又問ふ「子は語學を修めしと言ひしが佛語。英語。獨語をも話し得るや如何ん」「敢て善くすと言にはあらす。只た一と通りの用を辨し得る迄に候」「算術は如何ん」「殊に嗜む所の藝に候」「然らは新聞躰の文章は如何ん」「不文なる癖に小説躰の作文を好折々は地方新聞に投書致したるとも候先づ日記を書する位は出來申へし」作良氏曰く「甚た好し然らば後刻重ねて來るへし」と終に臨みて又た曰く「余等兩人の心事は略ぽ子の覺り得たる所なりと考ふ。我々は幸運を萬里の絶域に求むる者なり其事業たるや苦多して樂少し子夫れ之を記臆せよ又余等兩人は今日迄一の聖事を爲したる人物にあらす余は只た是丈けの事を足下に語るを必要とす餘は唯子が余等兩人を信ずると否やとに任せんのみ」と余は唯々と答へつゝ一先つグランドホテルを辭し去れり

始めて手に入れたる器物は何人も慾目にて之を珍重し正當なる度合より高く價値を付するを常とす人物の品評も亦猶ほ此のごとき乎。作良。立花の兩氏は余が後來の師兄とも君とも仰ぎ事へんと欲する人物なるが故にや。今朝面會せし節は昨夜に比すれば其の人品。一層立ち上りて見受けたり。作良氏は中肉中背にして肥滿ならず痩羸ならず擧止沈靜にして言語正確なり世

問小説家の口調を假て之を形容せば眉秀て鼻筋通り。皓月流雲。亭々として塵表の姿ありとも云ふべき乎。又立花氏は筋骨逞しく眼光人を射て。雄健快活。武人の風あり。此の兩個の人物相提携して進退せば如何なる大難に遭逢するも畏るゝに足らずと見へたり扨も彼の兩氏は如何なる出處の人物なるかと且つ讃賞且つ怪みながら早く午後二時の來れかしと旅宿の二階に只だ夫のみを待居たり

余か素性經歷は既に遺る所なく述へ置きたり。又我か藝能の大畧も已に之を述べ盡せり。而て彼の兩氏は尚ほ余を棄てさるの樣子見へたり先づ大抵は事成らん。併しなから今茲に殘れる只た一事を質問されなは。余は實に當惑ならん。余は自ら省みるに生來常人に比較して甚た臆病なるか如し。若し彼の立花氏の烱眼を以て余に臨み「足下は勇氣あるや如何」と問はれんに其時は如何すへきや。只た此の一事來る二時に於て最も心配の大なるものとす旅宿屋の時計。方に二時を報ずるや否や直にグランドホテルに到て調を乞ふ「來るへし」との挨拶に恐る〳〵八番室の戸を開き先づ兩氏の顏色を打眺め敬しく禮を施したり。兩氏今朝よりは殊に會釋宜し。座定て作良氏曰く「如何にも御熱心の諸求なれば兩人相談の上御同行致すへきに決したりと（此一言を聞きし時の余の悅び知るへきのみ）但し今朝も申せし如く我々の事業は苦。多して。樂少し。能く其境に忍耐して屈せざるの決心あるや如何ん」と余は唯數回稽首して謝意を述へ如何なる艱難に遭逢するも敢て變心せす生死を與にすへき旨を誓へり作良氏曰く「大に安心せり」子は辯を能し且つ算術も心得。新聞脉の文章をも作ると聞けば先つ當分余等兩人の書記兼譯官の心得にて始終兩人に附添ふことと爲すへし此義承知なりや」答て曰く「至極。有難く候」と此時作良氏は余か今朝携けたる三百金を取出し再ひ之を與て曰く「我々は今日午後乘船すべき筈なりしに聊か差支ありて明日午時の乘船となれり依ては此の金子を以て速に旅裝を整へ海外旅行券を政府より乞ひ受くるの手續如何にせは宜しからんと問ふ氏笑ふて曰く「無用なり。我々は一應旅券を乞受けたれとも香港に着する上は之を東京府に送還すへき心得なり「其は何故に候や」立花氏曰く「我々は將に天下を横行せんとす。日本政府の旅券を所持せは恐くは累ひを父母の國に及ぼさんと。既にして又た曰く「今

余か謂ふ所の天下とは此の全地球を指す敢て日本を言ふにあらす日本は天下の一部分のみ」と余。心中獨語して曰く「好丈夫」

第四回　吟詩

今朝の新聞紙に正午十二時英國彼阿會社の汽船「バタビヤ」號香港に向け出發すと記載せり。今日の午後には余は已に其船中の人なるへしと思へは前途の樂み言はん方なし。午前十時に至り作艮。立花の兩氏に隨ひグランドホテルを立出つ。我〻はホテルの小蒸汽に乘らすして稅關の波止場に到る一艘の端艇早く此處に待合はせ居れり艇中には水夫の外に數名の人物あり我〻の一行を望見て帽を脫し禮を爲せり我〻三人の乘込むと同時に端艇を漕出せり舷頭に當て遙に宏大なる六七千噸の汽船あり檣頭には白地に青色もて緣を取りたる小旗を揭げ本日の出發船なるを表す漸くにして之に近つけは其船尾に「バタビヤ」の金子銘あり問はすして彼阿會社の汽船なるを知る我か端艇は船後を廻て反對の側に漕着るならんと思ひの外一直線に駛せ抜けて直行せり少しく隔たりし前面を眺むれは二千噸許りなる一汽船あり其の檣上亦た出帆旗を揭く我か端艇は間もなく此の汽船に乘着け我々の一行は甲板に上り作艮立花の兩先生は機關の後ろ舵樓の前の廣やかなる處に安置したる二脚の籐椅子に着席せり此時服裝賤しからさる人物十餘名進來り列立して一同恭しく禮を施し本日の好天氣出發に便なるを祝したり次て又た二十餘名の人物出來て列立し一層恭しく禮を施して出發の祝辭を述ふること前の如し。夫より艦長機械方等と覺しきもの又た二十餘名來て禮をなし引續て當務の水夫を除く外。船中一同七八十名の者とも兩先生の前に列立して敬禮を表し立去れり是に於てか始て知る此船は兩先生の所有にして船中の人擧けて皆其の部下に屬する者たることを。一個の旅客として外國飛脚船に乘込まんよりは小船なからも持船の方こそ海中の便利多からんと思へは余も聊か慰むる所あり然れとも二千噸以下なる此の汽船を以て安全なる航海を為し得るや否やの一事に想到れは甚た心配に堪へさるものあり

作艮先生。事務長に命して余の部屋を定めしむ部屋は甲板の下先生の部屋に隣する處に在り。立花先生の部屋は甲板上の艦長室に隣れり。余は部屋を受取り荷物を安排せし後。船中の有樣を見廻はりたり。船の外面

は黒色にして上層の甲板及ひ船形は一切通常の商船に異ならす。第二層版に降れは其の後半部を以て乗組人の居處とし他の一半と最下層とは悉く荷物にて充満せり。先つ第一。余の眼に觸れたるは金物類（古包丁。刀劍。釘。鍋釜の類）役立つへしとも思はれざる物。山積せり。又た垢染たる兵士の古軍服。或は巡査の舊衣。舊帽子。舊靴等を堆積す一も用に堪ふへきものあるを見す。唯是れ古着古物の競進會のみ。其他古切れ古道具の類は幾何と言ふ數を知らす。又た一方には大砲數門及ひ小銃數百挺あり是等の戎器は前の衣服金物類とは反對の極度にして孰れも磨き立てたる如き新製なり。又た余か是迄見し事もなき異樣の兵器頗る多し。或は小銃を一束に縛げたる如く銃口。蜂窩に似たるあり。或は十挺許の小砲を一列に并へたる如きもあり。尚ほ其他には煉鉄熟鉄及ひ機械を組立つる如く番號を付したる巨大の金物澤山あり。其他種々樣々の物あれとも余は其の何の材料なるやを知らす。船底の下層は薄暗くして明かならされとも食料薪炭の類甚た多きに倒たり又た無烟石炭を多量に積み居れり百物あらざる所なし若し之に加るに諸般の動物を以てせは即ちノアの船と一般

右は余か一時間許りの中に見得たる所の概畧のみ夫れより再ひ甲板に上ぼ。作良先生の側に侯せしに先生「望遠鏡を取來るへし」と命す依て先生の部屋に至り一見するに先つ書籍館とも許すへし余か未た見しこともなき英書。漢書。和書。を處狹き迄並へ立て。其傍には米國製の射的銃。大形の射鴨銃。兩眼銃。各々一挺あり壁には短銃を懸く。六穴連發の式にして把手は象牙。他の部分は總て金鍍なり。外には仕込杖一挺と手比なる二尺許りの寶刀一口あり。一面の壁には地球圖を掲け其上なる額面に兩陛下の寫眞なり尚ほ其外に翁。嫗の寫眞及ひ妙齡の美人と十歳。六歳計りの童子の寫眞あり。因て思ふに翁嫗は蓋し先生の双親なら ん但し彼の美人は先生意中の人なるや將た其の姉妹なるや是を一大疑問とす。童子は先生の子としては年長せり恐くは兄弟なるへき歟。左すれは彼の美人も姉妹ならん。然れとも彼の先生亦た木石にあらじ先生。望遠鏡を捧けて其の傍に立つこと數分間。カン〳〵カン〳〵の鐸聲八鳴して方に正午十二時を報すると與に余か汽船は哮々として高く汽笛を鳴らすこと數回遙か彼方なる「パタビヤ」號亦た汽笛を發す足下に微動を覺へ船尾の螺線戛々として輪轅を始む煙筒の黑

煙は靉々直上して天に冲る此日の風なきを知るへしり。垂天の鵬翼。今や萬里の長風に駕して將に南を圖らんとす兩先生胸中の快如何ん

彼阿の汽船も亦た均く進動を始め彼我兩船纜に八九丁を隔て相平行して前進す。舷頭。涙を劈き觀音崎の燈臺を離るゝ頃には彼阿の汽船已に十分の速力を出せしと見え疾きこと矢の如し然れとも我か汽船は彼に先つこと已に十餘丁なり余の傍に在る人曰く此船は彼よりも速なりと乙曰く彼れ大船なり未た十分の速力を出さゞるのみと丙曰く否々彼船は極度の速力十四ノット（一時間十四海里を走る）と稱す我ゝの船は十六ノットの速力あり縱令び彼我其全力を較するも尚ほ彼より速ならんと余は始めて我船が船躰の小なるにも拘らす其の速力の實に稀有なることを知れり（余は神戸に在ること數年稍や船船の事を知る）「バタビヤ」號は觀音崎を出ると二三里にして西に轉折す然るに我船は正南に直進し漸く其道を異にせり時方に三月初旬。餘寒未だ去らすと雖とも此日は天氣清朗。海上鋪席の如し。前面は水天一色蒼々として洋涘なく遙に陸地を顧れは房總相豆の諸山は髣髴として將に翠靄の中に沒せんとす。此時。作良先生船舷に倚て長嘯し一詩を微吟す其末句に曰く「痴兒不了公家事。男子要爲天下奇」と立花先生と相見て微笑せ

第五回　密話

第二日は南風強く船少しく動搖す豫ねては香港に向ふと聞しに觀音崎より南向するは蓋し薩摩沖より西に向こゝに至て余は聊か疑ふが爲めならんと思居たりしに今日も亦直線に南行すなき能はす昨日出發の後ちは船中の當務受持ちの人ゝコヽ仕事あれ他の乘組人は無聊の餘り互に早く懇意となれり。作良先生は重なる諸氏に向て余を紹介し立花先生亦た余の履歷を說明し吳れたり小革囊より余か兩先生に見へし奇遇を笑ひ立花先生は此時より余を「人」として「革囊子」と呼へり。先生は磊落の人なり余か最も早く懇交を結ひしは菊川清と云へる醫家なり性頗る氣散にして又た何事にも人に厚し。其室は余の室に近きを以て互に屢ゝ往來談笑し忽ち骨肉の思ひを爲せり是に於て余は何事をも打明け語りしに彼も亦た船中一切の事を敎へ吳れたり。余は性來或事柄を思想し計畫するには纖密なること人に絕すと雖とも一時發情の爲めには時として輕舉粗忽に失することあり此度の

如きも一時外遊の熱情勃興せしより此船に乘込しと雖とも今更ツク〳〵と熟考すれは我れなから餘り疎忽なること少からす。先つ第一に此船の堅牢。脆弱すら之を詳かにせす。況んや始めは香港に赴くと稱して今日尚は南に馳するをや。且つ最も詳かにし置の必要あるは。作艮。立花。兩氏の素性なり。今菊川氏に就て探聞かば大抵は其詳かなるを得んと乃ち話頭を轉し問て曰く「作艮先生は金滿家なりや」曰く「然り。余は本來立花氏の餘程の金滿家なりや」曰く「然り」故に作艮氏の事を方に親交あるを以て此の行に伴へり詳かにせす。嘗て立花氏に向て之を問ひしこと數回なれとも其詳細を語りしことなし唯余か仄かに知り居る丈けを物語らんに。氏は日本東北の素封家なり。其家本より十万以上の資産を有す彼人智慮あり昨年西南の亂。將に起らんとすその機を察し其家産の一半五万圓を提て種々の投機相塲をなし。一攫二十餘万金を得たりと云ふ。此の汽船及ひ積荷等は總て氏の辨する所に係る。又氏の人と爲り財を輕んし士を愛す是を以て士皆爭て之に歸す。舟中に在る重なる。人々も多く皆氏か往年多少の學資を給與して藝術を修めしめし所の者なりと聞く」「彼の先生は學者なりや」「然り非常の學者なり余か一二ヶ月以來交際せし所に就て之を評すれは內外の形勢に通する所は大政治家なり。金儲けを爲す所は大理財家なり天文算術器械の事に明かなる所は理科學家なり古今の治亂を詳かにし優美にして詩歌に暗からぬ所は文學家と爲すも耻かしからす」「ハアー」（感嘆の詞）「又海外に遊びしとあり殊に地理地文の學に通す」「然らは申分なき人物ならすや」「如何にも然り」「怒り易き人にてはなき乎」（書記を勤むる余の身には此事最も大切なり）「否な〳〵。明察にして人の肺肝を見ると恰も硝子板を見透すか如く何人も一たひ彼人に睨まるれば其情を遁るゝと能はすと雖とも平居寛裕にし人の過を責むること少し。但事の急なるに當ては時に人を叱咤するとあるのみ」と（余は思へらく恐ろしき人かな何事も一層正直に爲さん）と「彼の先生は酒を嗜むや」「多くは飲ます然れとも時に一二盃を擧くるを見る」「左程の英物ならば何故日本にて働らかさる乎」「日本は恐らく彼人の絕大なる雄闘を容るゝ能はさらん。彼人は日本の大業を立つるに地なきを憾み去て功名を萬里外に求むるのみ」（余は思へり日本も亦た小ならす）と又た問ふ「先生左程の學者ならば其聲名日本の社會に嘖々たるへきに作艮義文なる姓名の未

た大に聞えざるは同そや」「作良とは蓋し變名ならん。余は未だ眞姓名を知らず」余は思ふ「天下豈期る萬能の人あらんや。此の醫者殿。彼の先生に惚込み居るが故に山を懸て話すと見えたり併し其言の半分と假定るも亦た非凡の英雄なり」と

「然らば立花先生は如何ん」曰く「彼は本と薩人なり」

「然り〳〵其言に薩音あり」「彼人は年少にして維新の變。已に頭角を現はし海軍に從事せり。嘗て函館の戰ひに臨み又臺灣の役に從へり。且つ西洋にも遊びしことあり。軍艦の駕引き百般の海事一として習熟せざるや」「彼人佚宕所なし」「然らば何故に海軍省に仕へざるや」「彼人佚宕動もすれば長上を犯すの失あり是を以て有司に容れられず。自ら謂ふ。賞其勞に酬ひすと。蓋し沈滯を慣ほり此金を發せしなら彼人倨傲にして眼中人無し獨り作良先生に推服す。常に曰ふ作良兄を除ては五大洲中與に謀るに足る者なしと」「立花とは實姓なるか」「否々余は之を知れり。然れども未だ之を語るへからず」「船中に古物。古道具。古手商賣をなすの意なる乎」「否々。其れは副業ならん」「然らば本業には何をか爲す」爾時。菊川氏。聲低して曰く「多分海賊なるへし」と余は忽ち沉思無言の中に陷れり

第六回　大事業

第三日は好天氣。海上無事。船少しく東南に向ふ。午前十一時に至て一簇の島嶼髣髴として舷に現はるゝを認む。間もなく之に近けは閩粵里餘を其の最大なるものとし。點々相ひ連る。船其間を過く。航路殊に危險なり。最大の島嶼三個相ひ密接して鼎峙し。其の中間は盆の如く一の良港灣を形くれり。海圖に據り艦長の說く乘込み。錨を此處に投じたり。余の船は中央に二十度東經百四十五度七分の處に在り。昨日以來漸々暑熱を覺え今日は氣候恰も日本の舊曆四月の末に似たり。船中の人皆衣を更え服を改む。我船を圍環する三個の島嶼は處々に灌木茂生すれとも一の大樹なし船に近き最大島には稍や平坦なる磯邊より山麓迄の處に方五六町の平地有て海濱に陵夷す。物珍らしくや思ひけん唯た海鷗の群飛して頻に船の前後を環り翔る外は一物の目を留むへきなく眞個の無人島なり。若し船

グリーガン群島の中なりと覺ゆ。南緯二十

船を失はゝ我々は是れ百餘人の俊寛。翌日も亦た好天氣。此日兩先生より船中一同濱邊に上陸すへき命あり又た後刻酒肴食物を運搬すへき命あり午前十時に至り皆上陸す。員百二十餘名毛氈を芝生に布並へ圍繞環坐す。兩先生は相並て洋式の三脚胡床に踞し余は其後ろに地圖二軸を携へ蹲踞せり。立花先生一同に向ひ作良先生より重要の談話あるへき旨を傳ふ是に於て皆〻跪坐し形を正しくす。此日は晴朗にして風なく礫打つ涙すら唯た時にピチヤリ〳〵苦着きたる岩頭を洗ふのみ。衆皆肅然たり。作良先生胡床を離れ少しく進て左の物語を說出せり。

我〻の事業は諸君已に其の大要を承知するならん今日まで憚かる所ありて我〻も未た其詳細を語るを得さりき。今や此處に於て委細を說明すべし諸君が去就を決するも亦た此時に於てすへきなり

其熟〻考ふるに我〻已に此の地球に生れ來りし以上は亦た此の全地球を横行するの自由あるへし豈其日本に生れたるの故を以て其働きを日本のみに限るへきの理あらんや。視よ我〻の眼前に横はる海洋は是れ天の我〻をして地球を横行せしむるの道路なり五大洲中何の處か天の我〻に蹂躙を許さゞるの地あんや。我〻已に此の地球に生れ來れり應に此の全地球を以て一舞臺とし稀世の大業を成すへきのみ。何そ必すしも日本のみに躊躇たらん

諸君は。僅々三百騎のコサック兵を以て亞細亞全洲に手ばするシベリヤを畧有し之を露帝に獻ぜし英雄あるを知れりや。又た微々たる一商會を以て印度の大半を畧有せし人物あるを知れりや。又僅々二百餘人を以てメキシコの帝國を覆せし豪傑あるを知れりや。又六十餘の兵を以て白露の王國を侵畧せし英雄。ピザロウ。あるを知れりや。今我々の一行は總員多きにあらさるも尚は百名の上に出つ。計畫尚も宜きを得は何そ大業を成すに難からん。人生朝露の如し假令ひ蜻蛉洲の一隅に退縮して黄老養生の道を求むるも豈能く百歲の壽に超んや。骨を埋る青山は到處に在り。世界何の邊か墳墓の地なからん

西洋人種は地球を以て功名の地と爲し日本國人は自國を以て功名の地とす。痛歎に堪ふへけんや。青神后。異域を征すと雖ども其事藐焉たり虛實保すへからす。豐公。師を海外に出すも亦た寸土を加ふる能はす。嗚呼何そ古より我か國人の小膽なるや。彼の西洋人種の偉業を立つる者多きを考ふれば日本人

は顔色なしと言ふへし。日本千古の英雄中我々の心事を知る者は只た一個の猿面公あるのみ他は是れ蠻觸。數ふるに足らず。我々今將に全地球を蹂躙して無人の地を席捲し日本に幾十倍するの大版圖を拓て以て之を陛下に獻し我々請て其地を鎮せんとす。若し不幸にして日本の國力之を所有するに勝へすんは。我々諸君と與に自ら其地に王たらん彼れ西人は嘗て一兵を置かす唯一竿の國旗を無人の地に建てい曰く是れ我か版圖なりと。嘗て一村を植へす其の寄客一たひ足を容るゝの地を目して曰く是れ我か領屬なりと何そ其傍若無人なるや。我々今去て無主の地を零し。微弱にして自立する能はざる邦國を征服するも何の不可かあらん。万國公法は論なり法にあらさるなり。若し先取を以て所屬の權利を定むと言はゝ我々は先取すへきの地あり。若し守衛の力以て所有の權利を生すと言はゝ我々の武力以て守るに足るの地あり。諸君夫れ能く我々と死生を共にして此の大業に從ふへき乎。余は諸君の心中實に其好む所を取らんとを欲す敢て強いさるのみ。依て今日正午より明日正午迄二十四時間。篤と熟考あらんとを望む。明日正午。甲板上喫煙遊戯室の卓上に一の連判帳を備へ置かん。同夜十二時迄に余と死生を共にするの士は各其姓名を記入あるへし。又た本國に父母妻子ある等餘義なき事情の爲め此行に從ひ難き者は決して遠慮に及はす其旨を申出られよ。香港に至るの後ち手厚く旅費を支給して之を日本に送り還すへし。諸君夫れ之を諾せよ。以上述ふる所は是れ我々か志望の概略なり倘ほ是より以下に其方略手段を詳説せん

（演説未完）

第七回　新版圖

作良先生物語の續き

前の如く述へ來らは諸君或は謂はん。南洋諸島最も零有すへきの地多しと。大に然らす。南洋には未開の地なきにあらぬとも其所屬既に定て又た動かす可らす今之を爭ふも勞して功なし。獨り中央亞弗利加の地尚ほ蒙昧に屬す。我々の驥足を伸ぶへきもの實に此地に在り然れとも之を略有するに次叙あり我々は左の如くせんとを要す

我々の事業に必要にして日本に乏しき材料多し故に一先つ香港に立寄らん。然して。呂宋。ボルネオ。ジャバ。スマタラの諸島を巡航し我か船中の荷物（昨

年西南の亂後に不用となりし兵隊巡査の古服及ひ古道具類）を是等諸島の蠻人に賣渡して其產物。胡椒。珈琲香材等を廉價に買取らは茲に莫大の利益を得へし之を以て更に一隻の新艦を買入れ尙ほ兵備を整へて印度洋に乘出さん。印度洋の極南にはグラウセット。セントパウル。アムステルダム等の諸島あり然れとも是等は已に諸國の所屬に歸したり。唯南緯四十度。東經六十度の地に一島あり。昔年一海客此地に至ると雖とも其事秘して傳へす。故に歐洲列國未た之を知る者少し。余の嘗て西遊するや密に此事を探知せり。故に今諸君と共に先つ此島を取らん。海客の秘記に據るに廣の島さ幾んと我か對馬に同し。我か日本の福島及ひ仙臺は北緯四十度の間に在り。此島は南緯四十度に在り。南緯北緯の異るありとも同く是れ赤道を距ること四十度氣候最も日本人に可なり。其地味亦た磽确ならす是れ豈天の賜にあらすや。我々諸君と共に先づ此地を以て本據と爲さん。此地や東に航すれば濠洲の諸都府あり。西に航すれは英領喜望峯の繁華あり。南に航すれは印度の大都會あり。貿易の便。航海の利實に天府の地と云ふへし。我々は諸君と與に後來海上の大王たらんとを期す此島は則ち我々の居るへき所。故に之を名けて海王島とせん。

海王島を畧有する後は夫より馬太加須島を取らん。馬太加須島と聞かは諸君は定めて小島の如く思ふへしと雖とも大に然らす。其面積は二二八。五七〇平方里にして幾んと日本に二倍せり（日本は一四七。六二九平方里のみ）此地は人口三百万の多きに及ひ地形は亞非利加に接すれとも其の人種は亞非利加種に屬せすして馬來種に屬す則ち我か日本人種と大に相ひ似たるものなり。又た其の言語も子音母音の二音を以て成立つの聲多く明かに日本人と其の語原を同くす又其地は豐饒にして最も米作に可なり現に土人は米を食とす。其他薩摩芋。蕉實等を產す穀食を專らとせし我々には最も便なり。國人三分の一は耶蘇教を奉すと雖とも他の二分は尙ほ回教なり。是等の事は聊か我々と異なる所ありと雖とも之を占筮する上は如何樣にもなるへし又此國の未開なる一事を言はゝ六十年前佛帝より其王アポヨに一輛の馬車を贈りしに馬を駕することを知らす國王出る毎に之に乘り。舁夫をして轎子の如く之を荷はしめたり然れとも後ち其重きに堪へす遂に之を廢せしと云ふ此の

一事以て其他を推すに足らん。此國は南緯二十度の地に在るを以て日本に比すれは其の氣候頗る熱し此一事獨り慨むへきのみ然れとも其代りには又た木材に富み熱帶地方に限る高價の產物夥し之を我々の有と爲すも決して不足あること無けん已に馬島を畧有せは夫より手を延て接近せる亞非利加內地を侵畧せん馬島に對し亞非利加大陸より海に注く散別せる大河あり。其長さ數百里に亘る沿河の地最も豊饒なり今や亞非利加大洲の赤道以南は其の所屬。已に定まれり。又た南緯二十度以南には喜望峯の英領あり。トランスバールあり ナタール等あり然れとも其の中間廿度より赤道に至るの間。三百万平方里に餘る國土（日本に幾十倍するの國土）は未た定主あることなし是れ天の我々に賜ふ所にあらすや。今や歐洲多事にして露。土の戰ひ僅に終るも創痍未た愈へす。英國は方にアフガンに事あり。佛國の志はトニスに向ひ。伊太利はトリポリーを窺はんとす。我々か亞非利加內地を畧有するの機會。今日に過くるものあるとなし。若し歲月を遷延せば十年を出すして中央亞非利加は必す列國の爭地たらん。是れ我々か本年に於て是の大業を思立ちし所以なり。尙ほ我々の航路と畧有すへき土地の廣狹とを示さんか爲め最も分り易き略圖を製し置きたり（此時余に命して携へ來れる地圖二軸を開き之を一同に示さしめたり其一は普通の輿地圖其一は我々の新版圖の印しを附したるもの）我々方算の向ふ所即ち此の如し諸君之を熟思せよ。尙ほ死生を誓ふ遠畧の人員明かに定まる上は各其職務を定め大に準備を整へん余は吳々も諸君に告く。余は敢て諸君を强いさるなり。去る者は去れ從はんと欲する者は從へ一毫も其心に强ゆる所あるなかれと

作艮先生の物語り了るや皆〻立寄て彼の地圖を點檢せり。作艮先生の方算は何人にも意外なりし樣子にて重立ちし人〻二十餘名を除く外は何れも皆茫然たりき。然れとも氣早なる面々は欣々として喜色ある者無きにもあらさりし。夫れより齎らし來れる酒肴にて小宴を張り衆皆醉飽せり

作艮先生の示せし地圖の大略は左の如し。圖中の點線は航海の豫定線なり其黑く抹せし地方は我〻が後來侵略すへき版圖なり（但しグリーガン島に立寄りし航路は圖中に之れを除き日本より直ちに香港に至るものと

す）

第八回　連判狀

明日は乘人去就を決して連判帳に記名すへき日なり。故に此夜。先生。余に命して船中の人氣如何なる樣子かを探り見せしむ。是に於て余は船中の諸處を見廻りしに三々五々相集て談笑せり。先きに催せし酒宴の餘醉尚ほ力ありと見へ何れの群も皆活氣を帶ひ談話總て高調子なり。幾間室の後なる廣間の一群は其人數最も多し。何事を話し居るやと余は扉に沿ひ柱に倚て立聽けり。甲曰く「彼島は其廣さ日本に二倍すと云ひしにあらすや。然らは知事縣令の數も亦た百餘名は入用ならん我ゝも此位の役目を勤めさるを得ざる〳〵し」乙曰く「縣令とならは汝曹は先つ何事を爲すならん」丙曰く「他人は知らす。余は先つ二頭引の馬車を造らん」余か鄉里の縣令殿の縣廳に出勤するを見しに見苦しき人力車に乘れり縣令は天子樣の御名代ならすや余は常に彼れがケチ〳〵然たるを恥つ。我れ若し縣令とならば先つ二頭曳の馬車にて出勤せん」丁曰く「縣令樣々々。馬車ダケは壯なるも乃公の顏色の鄙醜なるを奈何せん」と（此時余も亦思へらく。兩先生果して大國に帝たらは余は內閣書記官長たるを失はす。否な。請て首府の知事たらんも亦た惡しからす）と戊曰く「彼島は未開の地多しと言ひしにあらすや。我はの縣令にあらす寧ろ開拓長官なら」と。丙曰く「庚曰く「彼島が我ゝと同人種ならは亦た日本の如き美物多からん開拓長官最も妙なり」壬曰く「余は一丁字を知らす故に縣令知事も望ましからす唯た十町歩若くは十五町歩の桑畠を貰受けんことを要す是れ亦た愉快ならすや」癸曰く「小膽奴。日本に二倍する大國を分配するに十五町歩とは何事そ」曰く「我父は祖父の質入せし二反五畝の地面を受戻すに十五ヶ年を費せり。地面程得難きものはあらす我は十五町の土地すら中ゝに手の届かさらんことを恐るゝのみ」戊曰く「汝等は只た得意の事のみを書き出すと雖とも其裏面には幾多酸辛の堆積し居るを知らすや。一日颶風に逢はゝ汝等皆饜の腹に葬むられんのみ。況んや事によれは戰爭をも爲さねはならぬをや。丙曰く「諺に曰はすや。板子を隔る三尺其下是れ地獄と。舟子一生危險則ち常事。河育は河に果てる。難風破船恐るゝに足らぬとも戰爭丈けはチト難澁なり。庚曰く「否々。余は

去年の田原坂に經驗あり軍は思ひし程。恐ろしきものにあらず只た胸壁より時々頭を出して發銃するのみ。囈語を吐く勿れ。我々は英吉利。佛蘭西と大戰爭を爲すのみ又た彼の島には三百万人ありと云ふ我々百二十九人にて三万倍の人口を征服せんとす。豈氣樂なる仕事ならんや」曰く「何そ恐るゝに足らん昔しビザロウは三十人を以てシベリヤを征服しメキシコを取れり」「先生の演説を眞似る勿れ。ビザロウの取りしはシベリヤにあらず。汝はシベリヤを何れの地と思ふ乎」「固より知れり。亞非利加の内地散剌河の邊に在り」呆れた奴」此の時忽ち傍らに濁聲の詩吟起る「衣は肝に至り袖は腕に至る。腰間の秋水人をも斫るべし」「夕顔棚の此方より現はれ出たる武智光秀」「お言葉無理とは思はねど」と義太夫。都々逸。並び起る夫より余は甲板なる談話室に至れば此處には重もなる人〻十餘名あり談笑殊に靜かなり。唯「彼の材料は積み込み方少量なりし「香港に赴かは之れ有らん」抔と稍や實の入りたる談話をなり又た餘念なく骨牌を戰はしめ居たる人〻もあり。察するに是等の人〻は横濱を發するに先だち已に其志を決する者にて今に至り去就を念頭に置かざるものと見ゆ。余は一々見聞する所を先生に報告せり其次日は甲板上の談話室に卓を備へ花氈を延べ。墨汁。ペン及ひ鄭重なる一冊の白紙帳を備へたり。日午後よりは決心の面々之に已にして午後一時に至り先生の命に依て彼の白冊子を見れば第一番には先生の命に依て余が記入せる三人の姓名あり第一は作良義文。第二は立花勝武。第三は松本棟一。楠笑三。八木田正友。桂逸平。梅山雷造。杉村熊。菊川清。薊小藤太。轟大八。眞木正堅。都合十七名なり。之れに次で已に左の人名を記入すべき筈なり。先生の命に依て余が記入すべき筆者を撰び苗秀。萩千里。笹野繁。梨山鉄男。杉山貫一。

午後三時に至り又た彼の冊子を見れば殘る百十二名皆其姓名を記入しあり蓋し一人の代筆者を百十二名と見へ其姓名皆同一の手迹なり姓名の下には銘々の實印を押捺せり。此時作良立花兩先生及び重なる人〻十餘名此室に入來りて八人名を點檢し皆欣々然たり船中一同を甲板上に招集し船中の人員を盛宴を張る所なく互に歡を盡し入滿足なる旨を述べ是より船中一同殘る午後五時に於て兩先生一同の事務役割を定むべき旨を通知すしより以來最も盛なるものとす此夜の酒宴は横濱を出でし日より明日は船中一同の慰安を兩先生の廻狀

第九回　部署。訓練

次日船中一同命に因て甲板上に聚合す作良先生起て衆に告て曰く「諸君已に死生を誓ひ余の大業を助くるに決す我〻兩人の瀑足言語に盡し難し。今日は其役割及び席順を定むべし」と顧て余に謂て曰く「携たる所の書付を朗讀せよ」と余は内閣書記官長の身振にて畢生の朗音を發し左の如く讀上げたり

第一　大統領　作良義文
第二　海陸兵事綜理　立花武勝
第三　化學專務　桂逸平
第四　機械專務　梨山鐵造
第五　算數兼測量專務　梅山雷一
第六　地質兼植物專務　松本棟
第七　氣象專務　杉田秀
第八　土木兼建築專務　眞木正堅
第九　水雷專務　楠菊川笑三
第十　醫師兼衛生課長　萩野清友
第十一　艦長　笹野千里繁
第十二　大砲專務
第十三　小銃狙擊專務
第十四　水兵隊長　杉村龍
第十五　陸兵隊長　大八木
第十六　遊撃專務　蘭井清太郎
第十七　主簿兼譯官　小藤太

以上別格取扱とす。以上の人員を以て將校會議を組成す

自餘の水。陸兵百十二名。一々姓名を列記し鐵匠。大工。裁縫。染工。水夫。火夫。砲兵。銃兵に至る迄各〻役割殘る所なし

余が朗讀を終りし時衆人一同。生背かざるの誓旨を述べたり。作良先生曰く「我々他日幾万の陸兵を備るに至らば更に鄭重なる官名を用ゆべし。幾隻の艦隊を備るに至らば更に軍大將水師提督。抑と稱せんも似合しからず依て前の如き平易の名稱を撰びたり然れども各位の任。甚だ大なり自ら輕んずることなかれ」と衆皆唯〻す。此時より一同。立花先生を綜理と呼べり。作良先生は大學者として尊崇するの故にや衆人。大統領と呼ばずして却て先生〻と呼べり。唯偶々儀式ばりたる時のみ作良統領と言へり是れより將校會議を開きしに國旗を定むるの論起る。

兩先生日本の國旗を用るを不可とするが故なり。是に至て議論紛々。化學專務桂氏は曰く「此十九世紀は文武の道皆化學の力に賴らさるはなし。屬の鍛錬。人躰の養素。醫藥の用法。何物か化學の外に出るあらん然るに世界列國の國旗未だ曾て此意を寓するものなきは余の常に不滿に堪えざる所なり。依て我々の新國旗には此の意を寓し先づ西洋古人の四行の說（エレメンツ）に從ひ。旗に畫くに風。土。水。火の形を以てせん」と。又算數象測量專務梅山氏は乃ち曰く「此行や天文地理。一として算術の力を要せさるはなし。航海の術最も然りとす且つ算測は天地を經緯するの根本なり。請ふ新國旗に寓するに此意を以てせん」と先生氏に問て曰く。「風。土。水。火を畫くに如何なる形を以てすべき乎。水。火。土の三物は尙ほ畫き得べし風に至ては之を如何せん」氏曰く其邊は某し疾くより工夫し置けり。先づ旗地には遙に一帶の山脈を畫き其下に海を畫くべし。海上には一隻の帆走船が滿帆の風を含て走る處を畫かん。而て山麓には村家を畫き火災に罹て半ば燒け居る處を寫し出さん。山は土なり。海は水なり。船帆を以て風を表し。火災を以て火を表せば四行茲に備はるべし。列國の理科學社會に大喝采を博せんと分明なり。先生笑を含て曰く。我船の檣頭に斯る一幅着色の山水畫を翻へすは極て是れ風流。然れども揚武の遠征には何とやら不似合なる處あり。又山麓の村家火災の點に至ては實に是れ異觀なり。チト採用し難きやに思はる」と顧て梅山氏に問て曰く「子は何を以て算數の意を國旗に寓せん乎」「某の畫樣は桂氏の如く入組たるものにあらず唯『コンパス』（叉股）を畫きし國旗も何とを畫くのみ」然れども「コンパス」を畫きし國旗も何とやら穩かならず。是に於て立花綜理。議を建て曰く「事の人情に遠きものは其論當れりと雖ども用ひ難し兩氏の論。稍や是に類するを免れず。今我々大業を海外に立てんと欲するも其心。日本を忘れず尙ほ陛下の民たらんことを希ふ者なり因ては日本の國旗に稍や近似するものを用ひんと欲す。印するは其意蓋し此地球は太陽系統の一屬星なるを以て本家を忘れざるの意に取りたる者ならん。其理。極て當れり。然れども。武を輝かし軍勢を張るに當ては白地に赤丸のみにては如何にも淋しきに過るの心地なきにあらず是れ余が臺灣の役。深く心に感ぜし所なり因て我々の旗は其地を青色とし中央に太陽を附し四方に光線を發せしめん。而て赤地と青地との間には白地

を殘すべし。故に色彩は赤。青。白の三色にして中央に太陽あり光線四方に發揮す。是れ一は我〳〵の事業。前途の好運を祝し一は其心尚ほ父母の國を忘れざるの意を表するものなりと」作良先生大に此議を贊し遂に日輪放光青赤白三色の國旗を用るに決し染工をして直に之を製せしめ。香港を發するの日より之を掲ぐべしと定めたり

作良先生又た衆人に告て曰く我〳〵が父母の國を忘れざるは立花綜理の言の如し依て幾年の久きを經るも我〳〵は日本の正朔を用ひ年號は明治と記るさん又た如何なる僻隅に在るとも十一月三日の天長節は必ず共に之を祝せん」と衆皆喜悅す

先生又た曰く「我〳〵の一行は人少うして事多し。成るべく諸事を兼務するを必要とす。陸兵專務の者と雖ども海事を習ふべし。水兵も亦た陸事を習ふべし唯だ其專務に至ては相紊ることを許さず」と此日は此にて事終はり。夫より種々の準備に取懸れり

先づ機械專務梨山氏は土木兼建築專務眞木氏と共に其部下を率て島上海濱の廣野に假小屋を搆へ。船中より用意の機械を引上げて茲に一大製鐵所を設け連日種々の機械を製造せり。又た化學家桂氏は別に山間の地を卜して此處に一大製藥所を設け部下を令して連日調劑の事に忙はし。陸兵隊長轟氏は船中一同を集めて隊伍を編制し陸上の操練に暇なし。小銃狙擊專務笹野氏は一行の人をして日々射的を習はしむ。大砲專務萩氏は部下の砲兵を集めて遠近距離の測量より發射の術。獨り此際閑裝藥の手續に至るまで訓練怠ることなし。

暇なるは地質兼植物家松本氏と醫者菊川氏二名のみ二氏は山に上り濱に下て或は魚介を拾ひ或は草根木葉を集め學術上の參考と爲せり作良先生は余を從て日々處々を巡視せり。

先生と最も屢々相談を爲し且つ先生の最も見舞ひしは化學家桂氏の製藥所なりき

余等此島に泊すること已に五週。其間陸地の製造所は晝夜の別なく煤烟を吐き立て丶黑雲天を蔽ひ鐵匠の槌音。機械の運轉。其聲絶ゆるとなく兵式操練。射的の銃聲。大砲發射の響きは日々轟々として海上に響き渡り。開闢以來幾千年寥々寂々として海妖海魔の棲處たりし無人島も今は嚴然たる一箇の海鎭に似たり

第十回　大演習

諸般の準備。愈〳〵整ひ出船の期近きに在るを以て第六週の初日は各種技術の實地大試驗を行ふの日と定ま

れり。此日船中一同朝第九時より上陸す。別格取扱以上の面々。皆海軍士官の服を着け自餘兵士は總て水兵の服を着く余も亦た書記譯官たるの故を以て金筋一本入りの海軍服を被たり只作良先生のみは。フロックコートに山高の高帽を冠せり百餘名の軍隊中着け得たり一個の文人。萬緑叢中紅一點

第一は喇叭の演習なり。軍中皆其譜を諳んじて進退を爲し得るや否やを檢査す

第二は歩兵操練なり。立花綜理自ら之を帥ゆ。全軍を二隊に編製し。縱隊。戰隊及び散兵式に至る迄。運用を試み。終て銃槍の試合ひあり又擊劍の立合あり

第三は射的の試驗なり一百ヤルド（五十間）より五百ヤルド（二百五十間）の遠距離を射る。一同の熟練驚くに堪えたり平均。皆七分以上を命中す。蓋し此技藝は立花先生の殊に意を用て訓練せしめたる所なり。先生の說に曰く「銃戰の勝敗は一に命中の多寡に關す。千人の敵兵各々一發を命中し。我が百人皆十發を命中せば衆寡の勢ひ正に相當るに足る。且つ彼れ百ヤルド以內の命中を能くし我れ百ヤルド以上の命中を能せば我に十倍の强みあり」と。余も此島に來りしより始て小銃を操るの道を習得たり。余は性來臆病なれども此地にて擊劍射的を學び得たる後は稍や臆病の一割を減じたるが如く覺ゆ

試驗終て作良先生自己の射的銃を用ひ試に五百ヤルドの遠距離を射て命中せり先生の武技に暗からざる衆皆感賞す此時狙擊隊長笹野繁氏は其技。殊に衆人を驚かせり作良先生に次て一千ヤルド（八町二十間）人形の的を射て命中せり。又遙か海中の岩頭に一羽の信天翁あるを見出し衆皆笹野氏に之を射擊せんとを請へり氏乃ち肉眼を以て測量して曰く「正に千百ヤルドなるべし」と又た其測量鏡を以て之を望て曰く「一ヤルドを誤れり」と乃ち小銃の照尺櫓を起し凝心一發すれば信天翁忽まち海中に落つ衆皆拍賞して曰く。「那須野與市〳〳〳〳〳〳」と。以上の試驗終て玆に午餐を喫し小憩す

午後。第一の試驗は使鳩なり。最遠島の反對側に運び行き籠を開て之を放たしむ鳩群一たび高翔する後。忽ち本船を望て飛還り皆甲板上の籠中に歸來れり是れ作良先生の工夫に出るものなり。之より以下の條々は最も大切なる試驗とす則ち化學專務桂氏の事務にして最も秘密の新發明に係る者多し第一。輕氣球の上騰を試む。其製を見るに尋常氣球の端艇をして六羽の鳩を

如く廣大不器用なるものにあらずして球の大さ僅にタタミ四疊半許に過ぎず又た通常氣球家の用る如き迂遠なる水素瓦斯等の類を以て緩々悠々と之に充たすにあらず。其法。火吹竹の大にして。長さ貳尺許りなる鉄筒に籠むるに一種の漸燒火藥を以てしゴム管を以て此の筒を氣球の口に通ぜしめ。然る後ち筒内の火藥に點火す。然る時は三分間を出でず漸燒火藥より發吐する瓦斯氣球内に充滿し直ちに膨脹昇騰す其法實に簡便なり。小なりと雖ども球中の瓦斯が空氣より輕きこと幾百倍なるを以て其上昇する力亦た甚だ大なり。故に前記する小球を以て尚ほ能く二十貫目の重量を帶びて地上を離るゝを得たり。氣球の形ち小なるが故大に運搬に便なり。又輕氣を球中に充たすも僅に三分間を要す。世界列國の軍用氣球。其輕便なると未だ曾て斯の如き者あるを聞かざるなり。桂氏が時に作戸先生と相談し又た先生が屢〻化學所に赴きしは蓋し是の氣球及び以下新發明の藥劑の爲めなりしことを知れり

又第一は無烟火藥の試驗なり。此の新發明の火藥は全く烟なきにはあらぬども其稀小なると幾んど烟無きかの如し。小銃に用ゆれば發射の時綿香の烟に同じき細烟微かに銃口より出るを見る。又大砲に用るも僅に卷烟草の烟ほどの微烟を見るのみ實に奇劑と云ふべし伏兵狙擊。其他軍中秘密の用。最も多しと云ふ（記者曰く近來列國皆秘して此の發明に力を用ゆ今日已に幾分の結果を得たり）

第三は無聲火藥の試驗なり是れ亦た作戸先生。桂氏と相謀て發明せし所なり。火藥の爆裂力は普通のものに劣らずして其聲響殊に小なり試に一小隊の兵をして此の火藥を小銃に用ひ百ヤルド（五十間）の地に於て一齊發射せしむるに其響き僅に室内射的銃を放つが如し。若し此の火藥を一挺の小銃に用ひなば二十間の近に於て發射するも亦た殆と其聲を聞かざらんとす。又た之を五インチ（口徑五寸）の大砲に試み發射せしに僅に小銃を放つが如きの聲を爲せり（記者曰く昨明治二十二年の暮。曼國にて無聲火藥の秘法を發明す其成績稍や右の如くなりと傳ふ）

第四は桂氏が雷藥と名けたる一種猛烈無比の爆裂藥の試驗なり。此の劇劑の破裂力は「ダイナマイト」綿火藥」の上に出ること幾十倍にして佛國近時の新發明たる「メリニイト」も亦た三舍を避くべし通常の火藥に比すれば綿火藥は五倍の爆裂力を有し。佛國の「メリニイト」は綿火藥よりも三倍の力を有すと云ふ然れど

も今作良先生と桂氏とが發明せし此の雷藥に比すれば亦た是れ曾孫の如きのみ。此の雷藥は一尺立方の容積を以て其爆裂力は三百六十ヤルド（三町）四方に及び。其破裂力の圍範内に在る物は鉄石。共に粉碎す。又た「メリニイト」「ダイナマイト」の如く容易に爆發するの危險あることなし。之を大砲の彈中に裝入して發射するも銃身内に於て爆裂するの憂なしと云ふ實に無比の一奇藥なり

第十一回　新發明

（雷藥試驗の續き）船中に積む所の大砲二門。皆口徑五「インチ」（五寸）のクルップ砲あり桂氏の發明せる漸燃法を以てする時は彼の雷藥を用て五寸クルップ砲を十五度の仰角に發射し能く六千ヤルド（五十町）の遠距離に達するを得べし最も巨大にして且つ遠距離を射るに堪ゆる世界の大砲中にてはクルップ氏の百五十噸砲を以て近世第一とす彼等は三千「ヤルド」に於て二尺の鋼鐵を貫き及びアームストロング氏の百三十九噸砲を以て二尺の鋼鐵を貫き得ると雖ども六千「ヤルド」に於ては大用を爲し難きものあり。然る處我が此の新製彈は必ずしも堅鐵を貫くを要せず唯だ一尺立方の猛裂藥を六千「ヤルド」の遠距離に送り屆け其地にて着發又は自發せしむれば即ち目的の物躰を粉碎せしむるを得べし故に斯る口徑の小なる者と雖ども其効力。却て前記する百噸巨砲の上に出づへし是れ作良先生桂氏の殊に誇る所なり

此の新彈の試驗には別に的を設けす。兩嶋相對する中間より遙かに六千「ヤルド」（五十町）を隔て一小島を望む島の周圍凡そ七八町痘面上に屹立すること五六丈。桂氏大砲專務萩氏に謀て之を射擊する事となせり。此の試驗は最も大切なるが故に兩先生始め一同皆望遠鏡を取り片唾を呑んで眺め居たり。萩氏。角度を計り風力を考へて彈道の傾斜を定め電氣發火法を用ひて第一發を放射す。只見る小島の前面。一團手鞠の如き白煙を發すると同時に小島の半形忽如として飛散す。暫らくして聲あり轟然たり（音聲の五十町を渡り來るは遙に後るゝものと知るへし）衆皆手を拍ち雀躍す。已にして又た第二彈を發す。島嶼全形を失ひ海面一物なし。作良先生手を以て額に加へ立花總理と相慶して曰く以て英佛の艦隊を走らしむるに足る」と

第五には大風砲を以て大爆裂彈を發射するの試驗あり此の風砲は其口徑。一尺に餘り。長さ二間半に及ふ然れとも尋常大砲の如く銃身の厚く且つ重きものにあら

す。我が陸上の製鐵所に於て之を造り出せしものなり。其法壓迫せし空氣を以て爆裂彈を發射す。然れども最遠距離。只僅に十五町を射るに過きす是れ壓迫せる空氣の彈力は火藥の如く大ならさるに由るなり。製鐵所に於て巨砲を作り出す能はさるか故に暫く此の風砲を用て大爆裂彈を發射するの用に供すと云ふ此砲は斯く遠距離に達する能はすと雖とも十五町以内の近地に於ては彼猛烈無比なる雷藥を多量に裝入する巨彈を射て百物を粉碎せしむるの効能あり。試驗には此砲を以て三島中の一なる最遠島の頂上に在る黄色の岩石を射る。島頂崩るゝこと五六町殆んと噴火山の破裂せし如く尖頭形の島頂は忽ち變して富士山形となれり觀る者戰慄す

以上は作良。立花兩先生の深く心を用ひ桂氏と相謀て數回の試驗の上此の成蹟を得たるものにして皆我か軍中の最大利器なり余は是に於て始めて彼の力もなく勵きもなきか如き化學專務桂氏が兩先生に除置され。別格取扱諸氏の中に於て第一席を占るの偶然ならさるを知れり

其次には機械兼電氣專務梨山氏の受持に係る電氣の試驗あり此の試驗は甚た異樣なり別に見るべきものなし只た五週間「ダイナモー」を以て作りに作り出せる電氣を一種の貯蓄函に盛れるもの幾十個となく山積するを見るのみ。其法秘して人に示さすと雖も函は蓋し彼のレーデン壜の類にして多力且つ安全のものなるへし兩先生其函數を改め見たり夫れより電氣階子及電氣棒の試驗あり。余は生來始て斯の如く奇異なる者を見た

本船より小舟に昇降する階子（船の左右に各々一箇つつあるもの）に施し用ふる新工夫の電氣試驗を行へり其法は階子の最下級踏段と其上の一二段とに電氣線を通し。（法を用ひて電氣の迸散を防き）人の來り觸る者あれは忽ち之に傳感卒倒せしむるを目的とす。而して階子の電氣線は遙に甲板上の電氣儲蓄函に通す。此函に。螺釘あり其捻方次第にて或は階子に電氣を通し或は之を止むへし是れ亦た作良先生が桂氏に命して設る所の者なりと云ふ此の奇異なる試驗は衆人皆電氣の觸撞に恐れ敢て犧牲たるを肯んする者なし作良先生。試驗電氣の特に少量にして毫も危險なき旨を保證するに至り始て水兵五名の之に應する者を得たり依て先つ階子の電氣を止め彼等をして緩歩して短艇に下らしむ嘗て異狀あるとなし。依て電氣を通し。彼等をして再び

バッケーラ短艇より上り來らしむ。第一に上り來る者「アッー」と叫ひ滾轉して海中に投す續て上り來る者亦た倒落とさるなし。甲板上に在る者皆手を拍て大笑せしに兩先生の爲に不人情の擧動を叱責せらる。彼の受驗者等。短艇に這上り叫て曰く「階子に上れは身躰ズーンと痳れたり」と兩先生其勞を謝して賞金を與ふ又た電氣棒の試驗あり。其法。電氣儲蓄函の小なる者を一人の「ポッケット」に藏む。函より細線（凧の糸の大さなる者）を傳て棒に至る。棒は長さ一尺許り大さ眞書筆に同し。其頭少しく尖形を爲す。此の尖形を點すれは觸るゝ處の動物忽ち皆震死すへしと云ふ實に恐る可き殺生器なり。試驗には人を用ひ難きを以て一頭の羊を索き來らしむ。桂氏自ら電氣棒を帶ひ左手に螺を開き右手にて棒端を羊背に點せしに羊忽ち卒倒す。其他には魚形水雷を海中に放入し其自動進行の力果して絶息せり。觀る者慄ひ恐る邊より魚形水雷の浮ふを窺ふ。距離千「ヤルド」を走るの後水雷は海上に浮へり然れとも直行する能はす少く離れし塲處に達着せり其成績最上ならすと雖とも兩先生は雷藥を盛らす唯た濱り魚形水雷の試驗あり右は雷藥を盛らす唯た濱幾何の遠さに達するやを見る。前面には三艘の短艇あ

は倘ほ之を以て滿足するに堪たりと云へり程なく夜に入れは照遠電燈の試驗あり其光力能く二十町の遠さを照して白晝の如くならしむるを得たり。此器は近來諸國の海軍に用るものと大同小異。唯其光力遙に尋常のものに優ると聞く又た此夜一二の電氣函を用ひ船中各處に電燈を點し宴會の興を助けたり此に至て一切の試驗。悉く終り兩先生より船中一同に褒詞あり夫れより小宴を開く唯た最初に着手して今日の試驗に間に合ひ難く中途にして廢止せしは潛海器なり桂氏及ひ梨山氏の說に據るに其材料不足せるが爲なりと云ふ或は香港にて之を買入るゝならん

第十二回　香港

大演習の翌日。諸般の兵器を備へ付く。「クルップ」砲二門は第二層版（甲板の下層）船首。船尾に。霹靂風砲二門は甲板上の前檣後檣の下に裝置す。第二層板の前後左右には砲門を作り。無事の日は之を閉つ。又甲板上の風砲二門は取外しの板蓋を以て之を掩ひ人の怪みを避く又銃口の蜂窩に似たる「ガッテリング。ゴン」連發銃（一分間に百五十發以上を連射するの利器）及ひ小砲を並へたる如き「ノルデンヘルド」砲（是れ亦

た速射連發の利器）各々一臺を船の前後左右に備へ。又魚形水雷を發射する風砲二管を第二層板の船尾「クルップ」砲の傍に裝置す場所狹くして位置甚た不都合なり

次日は海上演習をなす銃を發し砲を放ち船躰を縱横に旋轉す恰も實地の戰の如し。「クルップ」砲の聲船中に震ふ響きの凄きに幾んと余をして頭痛を發せしめたり。若し此の如き海戰一晝夜の永きに亘らは余は辭職をなすの外なしと心配せり。不日余は無聲火藥を用ゆへしとの建白を爲さんを欲す

實地演習の終りし後ち作良先生より布告あり曰く「萬事已に整ふ明日を以て此地を發すへし我々の船は是まで高砂丸の舊名を冠し來れりと雖ども今や兵器の裝置已に整ひ萬事一變す須く此時に於て名號を改むへし因て案するに我々の大業は實に一着手として先つ海王島を占領するに在り故に以後此船を名けて海王丸と稱せん」と船尾に海王丸の三金字を附す

次で又た大切なる布告あり曰く「我々百廿九名は死生を與にせんとを誓ふ皆是れ同心一躰の人なり。四ては將來如何なる事變の爲に一人を失ふとも其死生を確めさる限りは百事を閣て必らず之を救援し敢て相棄ることなかるへし是れ一行の人。艱難相救ふの德義を全からしむるものなり」と此の布告を見て船中皆欣々如たり

四月廿一日第二層板のクルップ砲より一聲の祝砲を發す。煙筒。煤煙を漲らせて海王丸グリガン島を發す。此地は自由海上多少の風浪。四日を經て香港に着す。此地は自由港なるを以て關稅等の煩ひなし。翌日は立花綜理別格取扱の諸氏及び自餘の人々を從て上陸す。余は作良先生と與に一艘の端艇を仕立て上陸し處々を遊覽せり此地の西洋風の家屋の壯宏なると市街を來往する西人子女の派手やかなるは實に余の目を驚かせり。途上低聲にて先生に問て曰く「英佛諸國も此の如く繁華ならん乎」先生笑て曰く「此に十倍す」又曰く「倫敦。巴里の繁華を以てするも五種雜居の奇觀は此地に如くものなし」と。身材六尺に近くして顏色逞く其色赤黑くして頭に黃赤の布を纏ひし巡査を指して曰く「是れ印度人なり英人の爲に使用せらる」と又た六尺有餘なる白面の赤衣兵を指して曰く「彼れは英人。本國より此地に在勤する精選の募兵なり。故に其身躰此の如く美服を着けたる者あり是れマカオ邊の雜種葡萄牙人なり。又此地には人力車あり其他日本人に似て洋服を着けたる者あり是れ事なり」と

り日本より輸入せしものと云ふ車夫は豚尾髪の支那人なり。白色。黄色。赤黒色。異様の人種此地に在らざる所なし。余は今に至る迄此の奇觀を忘るゝ能はず。先生は書店に於て二ケ月以來の香港發行の英字新聞及ひ倫敦發行の新聞を幾種購入せり又其外には甲比丹コック。バスコ、デ、ガマ。マゼラン及ひコロンブス等を始めとして有名なる航海者の畫像を購入せり夕刻歸船す。此夜別格諸氏兩先生と共に甲板上の談話室に於て笑語す。余頃日印度巡査と英國赤衣兵の身躰強健なるを稱贊して日本人種の短矮なるを憾み語りしに先生笑て曰く「歎息することなかれ。我ゝ。マダカスカル馬島を罹有するの後は胸中種々の心算あり余は先つ南亞米利加大洲の極北パタゴニヤの地に遠征して彼の土人數百名を率來らんと欲す。當時地球中に於て其支躰最も強壯にして身材最も高きものをパタゴニヤ人種とす。彼等は六尺五寸を通例と爲し其長大なる者に至ては七尺五寸に越ゆ。余は憑さに此の七尺五寸の壯年數百人を練習して之を我か近衛兵と爲すへし。他日我々の略有する版圖上の事件に付日本天皇陛下の御名代として外交談判の爲め英佛に至るの日我れ足下と與に象の如きアラビヤ馬に跨り。七尺五寸以上の巨人五百名を前後に引率し倫敦。巴里の大道を緩歩して鉄重なる英人と高慢なる佛人とを驚到せば豈亦た愉快ならずや」と（余は思へり「如かず新橋より銀坐迄りを緩歩して日本人を驚倒せんにはと。又た思ふ此兵隊の肩にする銃槍は其尖頭必ず一等煉瓦の二階の窓よりも高からん」と）余は大に欣笑せり先生曰く「我れ後ち必らず之を實行せん」先生又た笑て曰く「尚ほ一事の諸君に語るへきものあり。上井子には最も大切の事と考ふ。此全地球に於て最も美人を産するの地を土耳格領アルメニヤとす是れ歐米諸國の皆許るす所なり。而て此地は今尚ほ美人を買賣せり。我れ他日。馬島を罹するの後は必らず此地に至り美人市場に於て其絶美なるもの百餘名を購ひ來り之を我か一行に頒つへし。然る時は諸君の子孫。其身材必す長大にして其容姿亦た極めて端正ならん。是れ余か固く保證する所なり。海王島及ひ馬島に於ける日本人種の子孫は世界第一の姿容端正なる者なりとの評を後世に殘さんは豈亦た好からずや」と衆皆手を拍て曰く「謹て先生の賜を拜せん」と

第十三回　地理。風俗

香港に在ること三日。石炭の積入を始め諸事全く整ふ。將に明日を以て開帆せんとす此夜兩先生別格取扱の人々列席の上にて陸兵の一人山田松夫と稱する者を喚出したり立花總理。船中諸人の旅行券を山田に授け且つ謂て曰く「子を煩はさん。子は此地より日本に歸へし」と其人悶然たり。總理曰く「歸て川路大警視に語れ。日本の警視廳は流石に善く行屆きたり。我々の擧動を探知せんが爲め故らに汝をして我々一行の中に在らしむ。其注意到れりと云ふへし。然れとも我々亦疾より細作を放て警視廳内に在り。汝の事を探知し得たるが故に汝をして我々の爲す所を報せしめ却て我々の用に供したり。然れども今より以後は最早汝を用ひ難し」と松夫色を失ひ頓首して曰く「謝罪々々」一總理曰く「歸て川路大警視に余の容貌を語れよ。川路氏必ず能く其の何人たるを想起せん。余も氏と相識れり。近來憚る所有て出發前も意外に無沙汰を爲し御暇乞にも參上せさるは甚た遺憾なりき。併し他日海外の地に於て或は御對面仕るへしと傳へよ」と山田叩頭して曰く「慚羞に堪へす死を誓つて兩先生の雄圖を聞きし後は一意欽慕の情に堪へす。願くは長く一行の中に加へ玉へ」と。尙ほ追て熟議すへしと答へ。彼者を退かしめたり。後ち山田は愈よ隨行するに決し諸人の旅券は郵便にて送り返したり

翌日海王丸香港を發す。灣口を離るゝ後ち日輪放光三色の新國旗始て檣頭に翻飜たり是より先き香港を發するに先ち將校會議を開き海王丸が第一に貿易を行ふ可き地を議す。作良先生衆人に說て曰く「東印度諸島の重なる者をスモタラ。瓜哇。ボルチヲ。セレベス等とす猶ほ其手前にヒリッピン群島あり然る處是等の地は何れも皆既に西洋諸國の有に歸するもの多しスモタラ。瓜哇。セレベスの如きは和蘭の有なり。呂宋。ミンダノー等のヒリッピン群島と稱するものは西班牙の有なり。是等の地は西洋の諸商人既に其利を吸盡して又た思はしき利潤ある可らす。唯ボルチヲに至ては或は非常の利益を得るの見込あり。此島は東印度諸島中。其面積最も大なるものにして殆んと日本に二倍半するの廣さあり。所屬の上にては之を四區に分つ。南方は和蘭ボルチヲと稱し和蘭の所屬に係る。其北端は北ボルチヲと稱し英國の所有なり。其西南に面する者を二區に分ち。一をサラワクと稱し。一をブルニーと呼ぶ。共に皆土人の獨立するものにし

て未だ諸國の有に歸せず。サラワクは稍や國らしき姿をなせども蠻族なり東印度諸島は諸國の有に歸すと雖ども概して取締り無きが爲め我〻は至る所土人と自由に貿易を爲すの妨げあるとなし。然れども土人の獨立する地方に赴くときは交易の利潤最も夥し。今や太陽既に赤道以北に移るの時にしてボルチヲ地方は却て稍や暑氣を減ずるに向ふ。

ブルニーの沿岸に直航す可し旁〻先づ他の地を差置て此地の土人の最も好む所の物品は色染の古布片。鹽。及ひ瀨戸物類とす其産物の重なるものは護謨カ、ナツト。及び燕巣密蠟等是なり彼の支那人が料理に最上等の珍味とする燕巣の上品は多く此地に産す價最も廉なり又た此地は一大島をなすと雖ども上古亞細亞大陸の如き動物も亦た其森林中に棲めり其他諸般の動物珍禽奇獸あらざる所なし。此地は前記する物産の外に最も上等の象牙を出し又た眞珠をも多量に産す其他鼈甲類あり又た內地の河川には鰐魚多し土人は之を得て其皮を高價に西人に鬻ぐと聞く又た鑛物に富み鐵。銅。アンチモニー。水銀の類至る所に發見す可し殊に河川には沙金多し。土人は最も眞鍮の器を好むと聞く今我〻の船中に携ふる所の古布片。瀨戸物。眞鍮器の類は甚だ少からず此等の物品を以て眞珠。象牙。燕巣の類に代え之を新嘉坡に輸入せば一攫直ちに幾萬金を得へし。故に余は先づボルチヲの西北岸ブルニーの地に赴かんとを欲す但し此地の蠻族は人を啖ふを以て有名なり」醫師菊川氏忽ち首を縮めて曰く「我〻は是れ大江山入りを爲す歟」と梨山氏問ふ「彼等は人肉を如何にして啖ふなる乎」先生曰く「旅客の記する所に依れは多く炙て之を喰ふ」菊川氏曰く「然らは我〻誤て蠻人の手に落るときは忽ち『ビーフ、ステーキ』と爲る譯なる乎」先生曰く「然り。然れども今我〻の至るへきブルニー沿海の土人は今日此の如きことを爲さず唯極めて狡黠なるのみ。セレベス諸島よりバプアの土人中には實に啖人種多し。東印度諸島中にて殊に恐るへきはボルチヲの處〻に棲む『ダイカ』と唱る蠻族なり彼等は吹矢を以て武器とす筒の長さ八尺徑り一寸に過きす。矢は極めて小にして尖頭は針の如し。塗るに毒汁を以てす（植物家が「アンチアリス、トキシカリア」と稱する樹の汁なり）是矢を吹立てらるゝ者は傷の深淺に論なく忽ち死に至る。實に恐るへし。又「キリス」と名る太刀を帶ふ其柄を飾るに自ら殺せし人の髮を以てす。髮を飾る多き者は目して驍

勇とす。是を以て壯者は故なきに人を殺し髮を取る。部落の間。闘爭絶ゆることなし。阿蘭陀領の地にも亦此風行はる。鎮臺制すれども止むること能はすと云ふ。故に我〻は是の帶髮蠻の地に成るべく近づかさるを以て安全とす。沿岸の地と雖とも。土人此の太刀を帶る村落には近くへからす」と是に於て余又問て曰く「此度我〻の赴く地方には是等の悪蠻族なきや」先生曰く「憂る勿れ。最も安全の地を選はんと欲す」と（記者曰く以上作良氏の述へし土地産物の條はモーレイ氏の商業地志に同し又風俗の條はブラウン氏の世界風俗志に同し）

又曰く「假令ひ如何に熱地なりとも如何に悪蠻族多しとも我〻は最も貿易に大利ある地を選はさる可らす。何となれば今や香港を發して貿易を行ふ第一着手なり。最初に大利を博取して人心を勵ますにあらされば却て其鋭氣を沮喪せしむるの憂あらん」と諸氏其説に服し海王丸ボルネヲに向ふ

第十四回　ラボアン灣

海王丸。香港より直にボルネヲに向て進航す。此より後は熱度實に強く日本大暑の氣候なり。香港を發して第五日目の早天。稍く北ボルネヲの東北岸を遠望し夫れよりブルニーの海濱に沿て航行しラブアン島の大灣に投錨す。地方に當て稀なる大村落の相連るを見る。船中一同先つ望遠鏡を把て陸地の有樣を眺め居たりしに我艇の碇泊するを見るや彼の村落より裸躰の蠻人多勢濱邊に走り出て粗造なる船（獨木舟の少く進歩せしもの）を濱上より引卸し十餘艘にて我船近く漕き來り頻に椶櫚の葉を振て我々を招くの狀をなす。衆皆其意を解せす。作良先生曰く「見れ蠻民か歡心を表するの禮なり」と彼等は先生の話たる如き吹筒をも持たす又太刀をも帶せす最も平和なる形裝なり。彼等の顏色は薄黑くして其の身躰強壯なれとも面部躰格は瘦せて骨を露はせり但し蠻人の常として筋骨は極て強健に見ゆ。又常に強烈なる日光を受くるか故にや皮膚の驚くなると甚たし。前に喫人種の事を聞きたるか故。船中一同皆戒心の樣子あり兩先生曰く「彼等は異志なし雖とも之を船に上らしむへからす陸上に於て貿易を行ふへし」と其れより立花綜理は船中の陶器及ひ眞鍮の金物類を端艇二三艘に積込み上陸せり彼我の言語通ぜす不便殊に甚たしけれとも此地の蠻族は時に外商に接することありと見え手眞似を以て畧ほ交易上の意

を通するを得たり。彼等は兼てより積儲へたるものと見え數ケの村落には不似合なるほど多量の産物を濱邊に持出たせり。乃ち茲に互市場を開き眞珠。燕巣。象牙。珈珈。カヽナット。胡椒の類。船艇七八艘に滿載する計りを買得たり彼の蠻族は尙ほ役にも立たぬ種々樣々の草木を持來りしが植物專務松本氏が學術上の參考品となるへき者數十種を二三本の釘に易えたる外は何人も相手になさず。立花綜理の説に據れは此日の貿易は莫大なる利潤を得たりと云ふ尙二三週間。此の海岸に沿て數十ケ處に貿易を行はゝ十餘万圓の大利を得るに難からさるへしと聞けり余は此朝蠻民より雪白の鸚鵡一羽を買ふ但し古鍋一つの價なり。是より余は船中にて暇ある時は此鸚鵡に種々の歌を敎へ大に無聊を消するの具となれり此日。船中貿易の事務は總て立花綜理の監督する所なるか故に作良先生は午後より余と陸兵二名を隨へて射的銃及兩眼銃を携へて村落より里餘を隔る森林に向て孔雀狩りに赴けり。此鳥は甚た多からさりしかとも尙三四羽に出逢ひたり。其驚き飛ふに當り翠羽金光を放ち日光に映射するところは又一層の光景あり。半日を費して唯一羽を獵し得たり

內地の深林には象あり虎あり又川々には鰐魚あり。先生は此の沿岸に十餘日留るの時あらは象獵りを爲さんと云へり然れども余は切に之を諫めんとす彼の吹矢に斃されて先生か『ビーフ、ステーキ』と爲るの禍あらんとを恐るれはなり。余等の孔雀狩りを爲せし森林は樹木の繁茂して丈けたかき上人を驚かすもの多し流石に熱帶地方は草木の王國なり又妙音を發する啼鳥甚た多し茂樹森々として日光を蔽ひ遍り微風楚々として清涼を送り來るの際。彼處此處に名をだも知らぬ異鳥の囀り渡るは天樂を聞くの心地せり。但し此の林中に天小の蛇蜥多く往々道に横るの一事は實に余等を閉口せしめたり

日暮。海濱に下り端艇の來り迎ふるを待つ。時に新月方に上り海波漂渺。風景畫くか如く微風徐ろに來て日中の炎熱を一掃す。先生は余等と與に樹枝を折來て地上に敷き遙に海上の月を望み轉た感慨に堪へさる樣子なりしが。フト顧て余に謂て曰く「子は公衡が獵歸の古歌を知れりや」曰く「知らず」先生余の爲に口吟して曰く

狩り暮らし片野の眞柴打敷きて淀の川瀨の月を見るかな

と且曰く家郷を去る幾千里。圖らさりき又た此樣の風趣あらんとは」已にして端艇來り。先生と與に本船に還る。直に會議あり。氣象專務杉苗氏の議に依るに晴雨計俄に氣壓を增し十二時間を出てすして强風將に起らんとするの兆なりと云ふ此の海濱は弓の如しと雖ども其灣甚た大にして船を泊するに便ならす尤も風は東南にして陸地より吹くべきが故に先づ憂ひなき方なれども可成くは船を安全の地に泊すへしとの事にて兩先生と艦長八木田氏と共に此邊の地形を案せしに大村落を去ること五十町餘にして「パダッス」と云へる大河あり海に注く。先きに端艇をして河口を測量せしめたる節。河底甚た深くして河を溯る四五町の處までは泊舟に便なりと云ひしを憶起し即ち此處を拔錨して船を河口に泊するに決す。依て直に船を河口に進めたり河の幅は三町餘と見ゆ一船の沉沒して其檣頭一丈計り尙ほ水上に現はるゝを見たり河の深きこと知るへし。我船は河口より五町餘の處に投錨す。實に安全の良港なり

此夜甲板上に於て、衆人月を望む。日本の事抔語り出て覺えす懷郷の情を催せり。十二時寢に就く夜中二時と覺しき頃船中俄に騷動す。耳を欹つれば鐸聲鏘然たり。是れ船中火災の警報なり。余は狼狽の餘り規則の軍服を着くるに及ばず浴衣の儘直に先生の部屋に候せしに先生既に在らす。乃ち甲板上に躍り出づれは只見る船の前面に當て黑煙。天に張り。火光晝の如し然れども船中は却て是れ事無し

第十五回　火焰山

余か駈せ上りし時は兩先生已に甲板上に在り。亦た過半已に此處に在り。別格取扱の諸氏火災の警報に應じて皆其持場〳〵に駈付け消防具を準備す。此時。前面の火光。其混雜。言ふへからす焰は空に張る。幾條の大火焰ピラ〳〵と立昇る有樣は恰も火の舌。天を嘗るに似たり。益々盛なり。其勢ひ天を焦がし煙火光の發灼せし塲處は其位置。船を隔てゝ上流八九町の處に在るか如し。此夜は月明なるか上に山の如き大火焰あるを以て四面。晝よりも明かなり。余等皆望遠鏡を以て望み見ると雖とも川の上流。少しく迂曲するが故に。作良先生眉を顰めつゝ双眼鏡にて火光を凝視し居たりしが立花綜理に其狀を詳かにする能はす。

向て曰く「彼の火焔は漸々と位置を變するにあらずや」綜理亦た凝視すること數回。又た令して曰く「水兵一半は消防準備」と。戰爭準備の譜を吹くこと數回。又令して曰く「出船準備」と。船中の諸人は兼て訓練に訓練を加へしことなれども。戰爭と火災と出船と三樣の準備なれば混雜。言語に盡し難し。余は尙ほ其何の謂なるを解せず。寢衣の儘に慄へながら眺め居たり。此時。風威稍く加はり前面に大火焔已に五六町の上に現はれ出つ。只た看る滿江の大火塊。水流に乘して下り來る。前後相踵き二三個の火山あるか如し山々の火光益〻燃上れり。立花總理忽ち大砲專務萩氏を顧て曰く「霹靂彈を發せよ」萩氏。霹靂一聲山川爲に震ふ。前面の大火焔山其中央より破裂し火光万丈一發を打發す。火山の中央に爆發す。八方に飛散す。只た是れ万道の煙火を一齊に打揚げたるか如し。萩氏霹靂彈を發する三回。前後の火焔山皆中央より破裂し。滿空。火を降らすこと雨の如し。火片の驟雨海王丸の船舷上に降り來る。帆を燒き綱を燒き。火片處々に燃え移らんとす。消防專務の水兵は死力を出たして幾條の唧筒を用ひ海水を甲板上に注ぎ。

るにあらず。

て之を消止めんと周章す。此時忽ち沿岸森林の中二三丁を隔てゝ小銃の聲前後に起る。綜理。萩氏に令して曰く「ガットリングゴン及ひノルデンヘルド打發」と聲に應してガットリンクの蜂窩銃は森林を望み銃丸の雨を注射し。ノルデンヘルド連發砲亦た之に次て四邊を射る。然れとも敵の銃聲は甚た稀なり且つ我に應するほどの勢ひもなし此時遙か十餘町計りの上流に當て又た大火光を見る。綜理。艦長八木田氏に命して曰く「錨綱を斷て」と。昨夜此の河口に泊せし以來。誰れ一人斯る變災あるへしとも思はぬは蒸氣釜の下には全く火を絶てり今俄かに蒸氣を作り出たし機關を運轉せんと欲するも亦た其急に應する能はさるなり。已にして錨鎖を斷ちしかは船は漸〻と水流に從て海の方に流れ下る。其間。船は水流の爲に轉回し江に横はれは。散亂して水上に浮ひ流る幾十個の火塊は流れ來て船舷に集まる。水兵一同死力を奮て之れを拂除けんとすれとも尙ほ船腹を燒爛らすを免れす。漸くにして船は河口を出て沖中に漂ふこと三十分間。陸地より吹き來る風に漂はされて流れ出つること七八町。船中始めて蘇生の心地を爲せ

已にして蒸氣機關も運轉を始め是塊より進行して少し
く隔たりし島蔭に碇泊したり甲板上には尚ほ見張りの
哨兵を倍して不虞に備へ。用心殊に嚴なり。此時夜は
早やホノ〳〵と明け初めたり作良。立花の兩先生は先
つ船脇及ひ船中の人員を點檢せしに。幸にして一人も
恙なし。唯た鬚を燒き手を爛かし處〻に火傷せる等。
少々の手疵を負はさる者は船中幾んと稀なり。余の如
きも當時は氣付かざりしが他人の注意に依て始めて心
付き見れは處〻に火傷し浴衣には燒焦け甚た多し最も
困却せるは鼻端に一傷を得たると是れなり。彼の大火
塊の破裂し火片の降り下る際は燒爐。片々雨の如く下
り來りしが故に消防及ひ砲銃專務の人々は殆んと降り
懸る火を拂ふに暇なき有樣なりし斯く負傷者多きも亦
た至當なり

船中一同。斯く火傷多きのみならず海王丸の船脇の有
樣は殊に憐れむに堪へたり。帆桁に纏ひし三檣の帆々
は何れも皆過半燒失し。船板處〻を燒爛らかし。其他
帆綱。繩階子等破損の个處甚た少からす。先きに香港
を出てし時は我なから勇〻しく覺へたりし海王丸も今
は見苦しき燒餘の怪我人に似たり船中一同の憤懣は名
狀すへからす

第十六回　復讐

午前。將校會議を開く。餘怒未た止ますと見え諸氏
の容色皆憤々たり。先つ彼の大火焰の事に語り及ひ。衆
人作良先生の說を叩く。先生曰く「察するに。此地の
蠻奴は已に外商と貿易をなすと度々にして商船を襲
擊し。殺人奪貨の經驗あるものと見ゆ。先きに河口に
一層の沈沒船ありしも蓋し亦た蠻奴の毒手に罹りしも
のならん。彼等は河の上流に大筏を組み燃料木材を山
の如く積載せ。兼てより備へ置くものと見へたり沿岸
には恰好の港なき故何れの商船も彼の河口に碇泊すへ
し然るときは十餘町の上流に於て數十の筏を連約し燃
料に火を放て河流の急なるに乘し下り來らしむ。碇泊
の商船は俄に蒸氣を作り出たすと能はす進退不自由な
る時に於て彼の連約せし數十の大筏は船脇に來り迫り
之を燒沈むへし此時狼狽する舟子乘客商客を殺して
貨物を奪ふと見えたり。故に彼等は必らす大川の上流
に平日より幾個の大筏燃料を用意しあると見ゆ然るに
我々は之を知らす殆んと其毒手に罹らんと欲したり幸
ひに霹靂砲の在る有て早く火塊を破裂せしめたれば。
こそ辛うして其難を免れたるのみ若し尋常の商船なら

んには必す焚き包まれて沈没せしなるへし往時の海客濠洲地方に於て嘗て此厄に罹りしものあり」と人々是に至て始めて彼の火焔か一時の仕業にあらさるを覺り得たり

艦長八木田氏曰く「錨を捨て走るは戰艦の大辱とす請ふ再ひバダッス河に殺到して奴輩を走らせ。前きに捨てたる此船の錨を恢復せん」と。一同直ちに之を可決す

諸將校皆蠻族の聚落を進擊するの議を唱て止まず。作良先生獨り肯んせざるの色あり。立花總理。諸氏の爲に固く請て曰く「若し此儘に放任し置かは蠻賊の心益々驕り。後來此の地に來るの海客皆彼等の毒手に亡ふへし。如かす一たひ彼等を懲らして以て其將來を戒しめんには」と先生亦た甚た拒まず。唯曰く「奴輩の頭上に數個の霹靂彈を送るは可なり無用の屠戮を爲すは不可なり。昔し甲比丹コークの地球を周航すや蠻族の寇するに會ふ毎に或は空砲を發し或は海水に發砲し彼等を驚倒潰散せしむるの外曾て殺を嗜むの行なかりしかは後世其德を稱す。余も亦た常に其行を高しとす。依ては今蠻奴の聚落を襲ふも大砲の發射を三發に限るへし是れ一は我か彈藥を浪費するを減し一は

多殺の不德を免れんか爲なり」と立花總理切に請ふて曰く「軍容を張るか爲には轟聲なかるへからす。因ては霹靂砲三發の外。更に二發のクルップ砲を加へん」と先生已むことを得すして之に從ふ。此の議決を聞くや船中皆躍躍す。午後三時出船の號令あり。此地を發して進航す。途中に於て戰爭準備の令あり。已にして遙に大村落を望む作良。立花。の兩先生甲板上に在り余も亦た其後に立つ。喇叭手及ひ諸將校皆集まる先つ軍容の盛なるを示さんか爲め海王丸。海灣を乘廻はすと一周轉。巴の如く廻り來り濱邊を距ること八町餘の海上に至る。立花綜理萩氏に令して曰く「クルップ砲」と萩氏聲に應して打發す。轟然一響。雷火彈。大聚落の上に破裂す双眼鏡を取て之を望めは蠻奴の四方に散走すること蜘蛛の子を散らすか如し蓋し是の一發は開戰の布告にして彼等に遁走の猶豫を與るか爲めなり作良先生時計を案し遙に賊奴の散走了るを候ふこと四十分間。立花綜理に謂て曰く「可なり」綜理。令して曰く「霹靂彈」と萩氏村落を望て發射す。一團の白烟。一聲の轟雷。一連數十戶の家屋忽ち空中に躍る。衆皆手を拍て曰く「復讐〳〵」と前後三彈を發す。聚落半は是れ荒原。最後にクルップ砲を發す。

萩氏燒彈を用ひたりと見え燒餘の村落忽ち火を發し見る〳〵全村を延燒す。衆皆な手を拍て快と呼ふ。遙に村落を隔てし森林中より蠻奴小銃を發す。距離遠して我船に達せず。是に至て衆怒稍や晴れ。船中皆釋然たり

是れより船を轉してベダッス河に向ふ。河口に至て檣頭より陸上の樣子を望み見るに異狀なし乃ち船を留めて短艇三隻を下ろし水兵をして河口の上流なる昨夜の碇泊處に至り河底を探りて錨の所在を表せしめ。然る後ち本船を乘入れて難なく錨を甲板上に引揚けたり船躰の修繕を加るか爲め然るへき港灣を求むるに此邊の沿海には之を見出たすと能はす。依てサラクの港に赴くへしと決し。沿岸貿易を見合せて先つ同地に進航す

翌日は風浪惡し。陸地に沿ひ西北を望て馳す。終日船動搖して止まず。風威益々猛を加ふ。此日夕陽將に沒せんとする頃。始てシリク岬をみ見るに此時船舷に當て海上遙に一抹の煙を望む。漸々にして相近けば一隻の汽船此方に進行し來るなり。已にして近くこと一里餘。兩先生始め皆望遠鏡を取て之を望む。兩船相近くと一里餘。最早や分明に船躰及甲板上の有樣を認むるを得。余。艦長八木田氏に問て曰く「何れの國の船ならん乎」曰く「未た詳かならす。此船と行違ひに並ふ時。海上の禮式に從ひ互に國旗を揭けて相應答すへし其時は之を知るを得ん」と。又た問ふ彼の甲板上には大砲を備へ居るにあらすや」八木田氏曰く「然り。彼れを「クルイザー」形（巡洋艦）と稱す即ち軍艦中の輕快なるものなり。攻戰。防禦。二つながら其用を兼ね當時諸國の遠航艦隊。多く此形を用ゆ。彼船を見るに其噸數。正さに五六千噸の間に在らん乎。此形のものにては蓋し第一二等の間のものとす。視よ其甲板上に於て船首船尾に各一門の巨砲を裝置し又た其船舷左右には各四門の砲を備ふ」此時彼我との兩船行き違ひさま正に相對し我は西南に向ひ彼は東北に向ふ。兩船の距離幾んと十餘町なるべし

見得たり彼の船の檣頭。忽ち一流の信號旗を揭く。八木田氏余に謂て曰く「彼の信號をQ。H。とす信號錄に於て「汝の船を止めよ。我れ語るへき要事あり」の符調とす海上の信號は諸國皆之を共用す」と此時迄。作良。立花兩先生は唯た双眼鏡を以て彼の船を凝視するのみ嘗て一言を發せさりしか彼の號旗を見るに及て頻りに相偶語せり。艦長八木田氏慌たゝしく綜埋に謂て

曰く「彼の號旗に應せん乎」綜理曰く「應する勿れ」と彼船は號旗を掲げつゝ我船の應するを待つこと暫時なりしに我船か之を顧みすして馳去るを見るや。號旗を檣頭より下たすと見えしが忽ち其甲板上の巨砲を發轟せり。飛彈。我船の前檣に着發し。檣頭三分の一以上を天外に奪ひ去る。實に是れ晴天の霹靂なり。船中色を失ふ。余は忽ち兩脚。顫動を始め甲板上の繩欄を握て僅に腰を拔かさゞるのみ

第十七回　遁逃

彼船は第一彈を放て我か檣頭を擊折る後。又其船檣に信號旗を掲けたり。符調前の如し。八木田氏慌てゝ曰く。「我か船を停めは如何ん」と綜理。眼を睜り頭を左右に打振て曰く「勿れ〳〵燕氣極度の速力を出たせ」と八木田氏曰く「然らは遁走乎」綜理。聲を勵まして曰く「進航を急くのみ何そ遁走と謂はん」余は謂ふ亦た是れ遁走」と此時。彼船の甲板上復た一彈を發す。聲あり我船の左舷に吊るしありし端艇を微塵に掠め去れり。且つ此時。彼船は其行違はんとする針路を轉折して巴の如く乘り廻し將に我船を追はんとす。隆然。立花綜理喇叭手を顧て曰く「戰爭準備」と一聲の號令。船中皆持場〳〵に馳集まる。綜理又た八木田氏に命して曰く「最極度の速力」と此時。彼れ又た一彈を發す。幸にして中らす。我船は以前の方針を變せず一向西南に向て遁走す。彼れ亦た追躡し來る綜理。萩氏に謂て曰く「事急なり。船尾の霹靂風砲を運發せよ」綜理曰く「唯た最遠距離に發射せよ」又曰く「船尾のクルップ砲をも連射せよ」此時。風力益々猛に。怒濤。山を崩すか如く彼我兩船は互に波間に隱見せり我船先つ霹靂風砲を放つ。飛彈十五町に落て爆裂し海水を舊飛することと幾十丈。恰も龍卷を見るか如し。又たクルップ砲を發す船艄の動搖。烈しきか故にや流石の萩氏も命中を誤り。彼船の前と後に破裂すること二回。空く海水を數丈の高さに蹶起するのみ。敵船も亦た巨砲を連發せしが幸にして中らす。唯た我船より發射する霹靂彈の爆裂する毎に其響き海上に震ひ。海水を捲上ること驟雨の如く勢の凄しきこと言ふへからす。此時敵船は漸く其航路を轉し更に北方に向はしめつゝ我船は益々一直線に西南を望んで急航す。綜理。八木田氏を叱して曰く。「何そ極度の速力を用ひさ

る。」氏曰く「是れ即ち極度の速力なり」と。走る者は如何に速かなるも尚ほ其遅きを覺ふ。事の急なるに當ては立花綜理の驍勇を以てするも亦た尚ほ此の如し。須臾にして令わり。發砲を止めしむ。此時敵船は已に西北に向て進行し彼我の距離。凡そ四里以上を隔つ一同始て虎口を逃れたる心地せり。我船は益々風浪を犯して直進す。時方に日暮。月夜なりと雖とも墨を流すが如き黒雲。斷續して空を走る矢の如く月光も隱見常なし。然れとも彼船の靡き殘せし蒸氣の煤煙は漸々と彼眼界より消去るを覺え漸く安堵の思をなせり彼我兩船の砲戰せし時間は僅に三十分内外なりしとも事の不意に生したる。今にして之を思へは尚ほ寒心するに堪えたり。彼は追ひ我れは走る。双方か射擊する物躰は互に船と船との木口なるが故に我か鍛練の砲手も亦た其命中を誤りしなるへき乎。將た搖り上け搖り下ろす崩浪の爲に船躰動搖して定まらす擦發の角度を誤まりしに由る乎。兎にも角にも双方共に結果なき砲戰なりき。唯た彼れは最初に我船を尋常の商船と見侮りしに。我れより發射する大爆裂彈連々海上に爆裂するの猛勢に畏憚し中途より追躡を見合せたるものならん乎。是れ船中一同の評なりき

辛くして虎口を逃れ。稍や安堵せしと雖とも唯た此に懸念なるは作戛。立花の兩先生か此時より其部屋に籠りて人を遠け互に何事をか密談するの有樣是なり。左るにても彼船は何れの國の軍艦にして又た何故に我船を呼止めしや或は曰ふ「我船が其信號旗に應せさる旗に應せさるは海上の禮式を欠くに止まる。之を憤りて發砲を爲すか如きは未た曾て聞かさる所なり」と衆評紛々たり。

船中尚ほ戒嚴の令あり。「イザ」と云はゝ直に敵に向ふの手配りを備へ。一同持場〳〵を守る。然れとも其後は何事もなし。夜十二時。サラワク灣に安着す。兩先生船中を巡視し人員を點檢す。水兵一人。短艇の碎片にて下顎を打外されし外は手負なし船躰も亦た幸に大破損を見ず。然とも此行の發途に於て。帆綱。繩階子も多く端艇をば打折られ。帆は燒燬損したる上に今又た前檣をば燒爛らされ。船躰は處々を燒碎かれ左しも雄圖を載せたる海王丸も今は見る蔭もなく碎かれ。我々の大業は此先き何に成行くへき乎と一たひ臆し始めしより心細きと限りなし。英遇非凡なる兩先生の在るあれはよも悪しくはあらじと

唯た夫れのみを頼りに思ふ計りなりき。兩先生の點檢。終る後ち直に將校會議を開くの通知あり

第十八回　新聞紙

會議席にて兩先生始め諸氏一同互に無事を祝し且つ先刻の危急なりし事ども語り出でたり中にも八木田氏は分けて憤激の色甚たし。蓋し艦長の身分としては彼の前檣と端艇とを擊碎されし遺恨。衆人よりも一層大なるに依るならん。氏曰く「余は幼きより海事を業とし海上に在ること幾んと二十年。日本海。支那海。南洋諸島を巡航せしこと既に幾十回。世界万國の軍艦商船と海上に相逢ふこと亦た幾百度なるを知らす。然れとも。信號旗に應せすとて發砲をなす如き暴横なる船艦には未た曾て出會ひたることなし。今と爲りて考ふれは我れに雷彈。霹靂彈の利器ありながら看〳〵遁走せしは遺憾に堪へす」と杉村轟。薊等の諸氏皆同音に遺憾千萬なる旨を述ふ。立花綜理。頭を掉て曰く「否な〳〵。彼船は其排水積六千五百噸にして船骨は鋼鉄を以て組成し。全躰亦た鉄を以て張り詰め其堅牢なること幾と甲鐵闘艦に異ならす又た其蒸氣は八千三百馬力。口徑一尺二寸以上の巨砲二門。口徑五寸砲六門を左右に備ふ。且つ船内は錬鐵を以て細かに幾區にも仕切りあり。故に砲丸の爲に一ヶ處を打拔かれ海水其處より浸入するも唯た其一區域を浸たすに止まり。他の部分に浸入する能はす。是を以て假令ひ船躰數ヶ處を一時に打崩さるゝも尚ほ容易に沈沒するを免かるへし。況んや其の虞なき堅艦に向ひ巡洋蒸氣機關は總て水平線下に在て砲丸に破らるゝの近し。是れ艦中第一二等の間に位す。以上述ぶる如き小船を以て前以て何等の方略をも施さす此の粗造なる二千噸の木造船。若かも五寸クルップ砲二門の外なき小船に利器卒然相逢ふ焉んそ相避けさるを得んや。我船にも亦た左まで多少の難きをや且つ行進速力亦た二十ノットに近し。なきにあらすと雖とも其間に我か木製の船腹は亦た此處に蒸氣機關の水門を打開せらるへし殊に我か所を破碎するなきにあらねは彼の船躰數個の商船に一彈の總へて水上に露出せり若し唯常し前途の大望を如何せん加るに昨日の如し我〳〵も強ち荒浪に優劣を爲す能はす。利害得失已に期の手の巧拙の如く彼船に大傷を與へ得るも亦た我船に大傷を負はすして言なく一矢に出つ」と一同之を聽て大砲の狙ひは着發するあらば彼船に定り難く。砲の性命は夫迄ならんのみ。假令ひ〳〵避るも亦た止むを得さるに出つ」と一同之を聽て大砲の狙ひは着發するあらば彼船に定り難く。砲の性命は夫迄ならんのみ。假令ひ〳〵避るも亦た止むを得さるに出つ」と一同之を聽て大砲の狙ひは着發するあらば彼船に定り難く。砲の性命は夫迄ならんのみ。假令ひ〳〵避るも亦た止むを得さるに出つ」と一同之を聽て大砲の狙ひは着發するあらば彼船に定り難く。砲の性命は夫迄ならんのみ。假令ひ〳〵避るも亦た止むを得さるに出つ」と一同之を聽

先刻の危險を感したり。八木田氏問て曰く「船体外見の大畧は某亦た之を知れり。綜理は何を以て彼船の蒸氣馬力の詳細を始め。船内の仕切り迄を詳かにし給ふや又た彼船は國旗を掲けさりしが果して是れ何れの國の船なるを知り玉ふや」綜理曰く「彼れこそ海賊艦なれ」と諸氏皆恐怖の色あり。八木田氏曰く「海賊が如何にして此の如き堅艦を所有するや」綜理曰く「千八百四十六年より同四十九年に至る迄。有名なるヘイ氏。ウ井ルコックス、リオン氏及ひブリッヂ氏等の諸驍將か支那海及ひ南洋に於て前後數回に大賊艦隊を打破り有名なる支那の賊將シャン、シウー、ツー及ひ其次將フェー、ポー、等を鏖殺せしより南洋支那海上の平和を得たること茲に三十餘年なりき。然るに去る三月下旬再ひ恐るへき大賊艦の現はれ來るあり。是れ我々も香港著後、西字新聞に依て始て詳かにせる所なり。昨年露土の戰ひ方に酣なるに當り黒海艦隊の一に備へんとて土耳格より歐洲の有名なる造船會社に一の巡洋堅艦を注文したり然るに間もなく此戰を終りしが當時。土國は露國に向て莫大の償金を約し今や戰止て不用となりし堅艦を買入るゝの力なく手附金を棄て違約せり依て此船は空く造船會社の持餘し物となりしが其後支那政府より之を買取るの約定整ひ南洋艦隊に加ふるか爲め廣東に廻航せしは當年初春の事なり。然るに未た南洋艦隊に加はらさる先き。其試航をなしして香港の近海を航せし時。支那の海賊共も之を窺知りしと見え其備へ無きに乘して不意に此船を奪しは即ち去る二月の頃なり。彼等は此堅艦を以て新嘉坡。香港間に出沒し商船二艘を脅かして莫大の貨物を奪取れり依て支那の南洋艦隊は彼船を追跡して頻に搜索すれとも爾後絶えて所在を知らさるもの幾んと二三ヶ月未た南洋艦隊に加へさるの前にもあり此事の未た世上に現はれさるを幸ひ。支那政府は此事を深く秘し其間に彼船を取押へんと盡力せり。故に慥なる所は知れされとも香港の發行新聞中仄かに之を記せしものあり」と此時綜理は香港にて作良先生の購ひし新聞紙を取出して卓上に積累ねて曰く「委細は此の紙上に記せり。然れとも其踪跡を得さるもの已に三ヶ月なるか故に船事に熟れさる海賊輩の事なれは或は彼船を岩礁に乘り碎きし歟。否らされは颶風の爲に覆沒せし歟ならんと記載しあり又た英國の艦隊二三艘も追跡の爲め一二ヶ月間南洋諸島を巡廻せしに其所在を見出し得さりしと記載せり。故に我々は香港出發の際左程之れを念頭

も懸けさりしに何そ圖らん今日彼の恐るへき賊艦に襲撃せられんとは。彼船が始め國旗を掲けすして忽ち『相近つき語らん』との號旗を掲けし躰たらくと云ひ船躰の構造船形まで總て新聞紙上に圖載せし所に違はさる樣子と云ひ余は作良統領と早くも之を疑へり故に其號旗に應せしめさりしのみ諸君之を視よ此紙上に略圖あり（新聞紙の圖を指す）我〻を追懸けし所の船は即ち此者にあらすや」と八木田氏始め一同打寄て其圖を點檢し實に其紛れなきを覺れり

第十九回　議決

諸氏船圖を閲し了る。八木田氏曰く「賊輩斯の如き堅艦を擁して海上を横行す向後又た復た何れの地に相會はんも計り難し。如かす我〻は速に印度洋に走り。遠く安全の地に遁れ避けんには」と諸氏皆先刻の戰に辟易して暗に氏の言を贊成するの狀あり。此時立花綜理。容を正し諸氏に向て曰く「否な〳〵。余の意見は大に之に異なり余は彼船を乘取て之を我有と爲さんと欲す。抑〻我か海王丸は元と是れ木造の商船にして大用に堪ゆへきものにあらず。我〻は早晩更に一堅艦を作り出さゝる可らさるの必要あり。今我々か英佛の造船會社に一等巡洋艦一隻を注文すると假定めよ如何に早きも其進水式までには幾んと一ヶ年の歳月を費さゝるを得す。又た之を買取るの資金を詹出たすも容易ならす然るに今や此の如き堅艦か賊手に落ちたるは是れ天の我々に與る所なり。且此の新聞紙に余か點を附したる處を視よ。彼の賊船は先きに香港新嘉坡の間にて二艘の船商を脅かし幾んと四五十万弗の貨物を奪取れり。彼の堅艦のみならす四五十万弗の貨物を幷て我有と爲すを得は我々の所得も亦た大ならすや虎穴に入らすんは虎子を得す。一行の存亡大業の成敗。賭して此一舉に在り。諸君夫れ之を勉めよ」と其言や壯なるに似たれとも。我か木造船。然かも不具なる商船を以て彼の堅艦を乘取らんは幾んと望外の事たるに近く。諸氏皆之を難んずるの色あり一言を發せす。暗に作良先生の顔を打守りしは其說を聞んと欲するものならん。先生從容として說き起して曰く「我々か胸中の大業を成さんと欲するには列國の同盟艦隊をも一手に引受るの覺悟なかる可らす況んや一船の草賊をや。若し彼の賊艦を乘取り得さるほどならは我々亦た將た何事をか爲し得ん。立花綜理の意見。正に我意に合す」と作良先生が此言を爲すに至りしか兼て衆人の信用する

ば皆々大に尤もと思ふが如き樣子あり。立花綜理又た曰く「一木船を以て一等巡洋堅艦を乘取んと欲す其業實に容易ならす然れども船艦は機械なり。運轉宜きを得されは利器亦た其用をなさす。之を小兒に利又を假すに譬ふ祇に自ら傷るに足るのみ。諸君熟ら彼我の優劣を比較せよ砲礮舟楫の運用に於て我々は海上一等弱國の艦隊に對するも尚ほ一歩を讓らさらんとす況んや相手は高の知れたる海賊なるをや。彼等は元と海事軍事を習熟せし者にもあらす假令ひ粗造の支那船を乘り得たりとも焉そ能く十九世紀の理科世界の産物たる今日の船艦兵器を自在に運轉するを得んや何そ深く畏るゝに足らん」と是に於て諸氏大いに勇氣を恢復し愈〻賊艦を乘取るへしと決したり議已に決す。綜理曰く「我雷彈と霹靂彈を用ひて單に敵艦を破壞するは左して難事にあらすと雖ども此度の企は彼を奪て我物となすに在り故に成るへく船躰を損傷せしめすして之を手に入るゝを必要とす是れ實に難事たり。此事に付て諸君如何なる良案かある」一大砲專務萩氏沈思すること數分間答て曰く「之を行ふ他術なし唯た我か霹靂彈若くは雷彈を用て彼れか甲板上の巨砲を拂ひ倒すの一事あるのみ。此の如くせは少しく甲板を損するを免れすと雖とも砲身は恙なけん。我か爆裂雷藥をして二三回其甲板幾十尺の上に破裂せしめは必らす甲板上の物を拂ひ倒さんは然らんには大砲は必ず其砲車臺と相離れて轉落するか。外圍の鐵牆に壓せられて運轉を止むるか何れにせよ一時其用を爲す能はさらん。彼れが甲板上二門の巨砲已に其用を失する船躰は如何に堅牢なるも其死命を制すると我か手中に在り彼は唯た「ノルデンヘルド」。「カッラリング」を放つか魚形水雷を放射するに過きさるのみ。然れとも我か船躰をして正しく彼に向はしめ常に船首側面を見せ居らは魚形水雷の危難亦た之を減するを得へし。況んや我船を千五百ヤルド以外の地に保つに於ては魚形水雷も亦た其用をなさゝらん。但し敵艦を襲ひ首尾好く前述の技倆を逞しくせんには彼船の碇泊するに乘して不意に之を襲擊するを可とす。先つ彼の巨砲をして其用を失はしめ然る後ち我か霹靂彈を放て船の前後左右に爆裂せしめ以て大に兵威を示さは。假令ひ百ヲルソリありとも終に白旗を揭けさるを得さるへし」と作良。立花の兩先生大に此議を然りとす。然れとも尚ほ不安心に思ひしと見え萩氏向て再三。彼船躰に大破損

なからしめ能く大砲をのみ拂落し得へきや否やを尋問せり萩氏「海上甚た穩にして敵艦か碇泊不動なる時は多分之を誤まらさるべし」と保證せり。綜理曰く「襲撃の議已に決し其方算亦た定る此上は彼船を何れの地に見出たすへき乎」

第二十回　踪跡

（會議の續き）先生曰く「暴風未た止ます。風位。東北よりす。支那海は殊に浪高し。彼亦た必らす碇泊を求むるならん。彼れ元と賊船にて探捜を恐るゆゑ新嘉坡柴昆等の如き繁華の港に赴くの理なし。ポルチオ沿海に於て碇泊に便なるは獨りナツナ群島のみ。彼若し投錨せは夫れ或は此の地方ならん乎」八木田氏亦た先生と説を同くす。然らは兎も角も明日より追踪を始むへしと議決す

此時立花綜理。氣象專務杉苗氏をして風力を候し來らしむ。氏返り報して曰く「益ゝ猛なり。一時間三十里を走るの風なり」と綜理。色樂ます。八木田氏亦た眉を顰めて曰く「斯る暴風明日までも吹き續かは航海殊に危險ならん」綜理曰く「否な。余は不熟練なる賊輩が大切なる軍艦を暴風の爲に覆されんことを憂ふるのみ」

此夜。事なし。

翌朝出發の筈なりしも風力の強き昨日に異ならざるを以て發せす。午後漸く衰ふ乃ちナツナ群島を望て西北に向ひ出發す。此夜綜理より命あり。以後當分無煙炭を燕氣釜に用ゆる事と爲る

翌日午前遙にナツナ島の遠影を渺茫中に認む。戰爭準備の令あり。已にして漸く此島に近き泊舟の船躰を望み得へき遠距離を保ちつゝナツナ大島（最も大なる者は對馬の二倍半あり）の東岸に沿て廻航す一隻の船影たもなし。此夜恰好の碇泊所なきを以て海王丸を洋中に漂はしむ。凡そ海上の遠望に於て最初に人目に觸るものは突の煤煙なり次て船躰を認むるを得へし。昨夜來我船は無煙炭を用るか故に他船の爲に遠方より認め得られさるの便あり

次日。亦たナツナ大島の北岸を廻航す。午前より風止む會議あり。先生曰く「昨日より此島を廻航して已に四分の三を終はるも尚ほ彼船を見出たし能はさるものは彼れ或は抄掠を行ふ爲め再ひ支那海に直航せしにはあらさる乎。果して然らは此の島を回航するも詮なし寧ろ我か航路を轉せん乎」と諸氏皆沈思す。化學專務桂氏曰く「此島甚た大ならす兼て用意の輕氣球を用ふ

へきもの方さに此時に在り。見よ彼の沿岸に一高峯あり。某。峯頭より氣球を放て六千尺に昇ほらん然る時は其高サ幾んと富士山の半に同し一望。下界を瞰下さば此島の半面は歴々手に取る如く明かならん。若し尚ほ海灣の蔭見え難き處あらは空中より號旗を振り更に其綱を八千尺に放ち貫はん。我か氣球は甚た小なり四里以上を隔つれは青空の點塵に同し。敵の注意を惹くへき憂なけん」と。衆人大に喜ふ。

乃ち端艇を下して桂氏と風船とを上陸せしむ陸兵十餘之に從ひ風船器具を運搬して彼の最高峯に登れり。看る〳〵輕氣球。中天に冲る其小なると細かに注視するにあらされは見えす。一たひ眼を轉すれは再ひ其所在を見出たすに苦しむこと恰も春郊の揚け雲雀に於けるか如し。待つこと暫らくにして桂氏歸り來る。端艇の本船に近つくを見るや兩先生甲板上より呼んで曰く「如何ん。々々々」桂氏曰く「〆たり〳〵」兩先生手を拍て相慶す。

又た會議を開く桂氏報して曰く「何分。遠方にて詳かならねとも一艦あり。島の西面なる一大灣に泊す」立花綜理首肯し諸氏に向て曰く「然り。海圖を視よ西面に一灣あるにあらすや」と桂氏又た海圖を案して曰く「確かに此地なり」綜理曰く「果して彼船なるを證明するに足るへき廉は無かりし乎」曰く「無し」綜理又曰く「彼灣は尋常商船の猥に立寄るへき地にあらす多分彼船ならん万端其積りにて襲撃せん」と議乃ち決す。

綜理。氣象專務杉苗氏に向て風位風力を問ふ。答て曰く「晴雨針と某の測候する所とにより是今や風の凪間なりと雖とも三時間の後は前日暴風の反動を赤道以北に生して必らす西北の風を生せん」綜理熟考すること數分間。諸將校に方畧を授けて曰く「若し西北の風ならんには彼船の船首は陸に向ひ船尾は必らす斜に灣口に向ひ居るへし。然るときは第一。我船の船首をして遥に彼の船尾に對せしめよ。又た我船は常に三千ヤルド（廿五町）以上の距離を保ち其以内に近くへからす。彼我の距離此の如くなる時は我か霹靂風砲を用ふ能はす依ては專ら船首のクルップ砲を用ふへし然れとも船首にある一門のみにては不足なり。船尾の一門をも急に甲板上に裝置するを要す。又彼船に巨砲二門と我かクルップ砲に均しき大砲四門あり若し彼我の兩船横さまに相對せは彼は二門の巨砲と二門の五寸砲。并て四門を用ひ得るに我は唯二門の五寸砲の外なし此の

如くんは此戰は彼に利有て我に利あらす。故に我船は彼れの船尾に對して常に船首を保ち以て側面を現はすへし。我船幅は最廣處。僅に四十尺に越えす。側面を以て敵に對すれは砲彈に當るへき所。僅に七間の廣のみ。廿五町の遠距離に於て七間に過きさる物躰に命中するは訓練なき賊輩の蓋し容易に爲し能はざる所ならん。此の如くんは我に於て已に七分以上の勝算ありしかれとも彼等前日の手際も亦た侮るへからす。依ては我の勝敗を定むと爲ん。此事の成否は一に萩氏の盡力に賴るものとす氏夫れ細心發射せよ。我船の船首をして遙に彼の船尾に對せしめは。彼か船首の巨砲は本より其用をなさす。我か打壞すへきは唯た船尾の一巨砲のみ

是れより直に戰爭準備の令あり萩氏は部下の砲手及ひ水兵を指揮して。船尾のクルップ砲を甲版上に運はしめ霹靂風砲と其位置を變換する等ナカ〳〵混雜なり其他砲兵。銃兵。機關手。水兵に至る迄出戰の用意忙はし。「今日の日沒迄を以て必らす勝敗を決せん」と立花綜理は言へり。二時半海王丸彼灣に向て出發す木造の商船を以て一等巡洋艦を襲ひ之を奪ふて我有となさんとす實に大膽不敵なり首尾よく行けは大儲けなり。之を誤まれは反對なり。我〳〵の安危は只た是れ今日の日沒迄に決すへき乎と思へは暑の西に傾くも恨めしく。出船の號令を聽きしより余か胸の動悸は休む時なく呼吸さへも塞るへき心地せり。乃ち醫師菊川氏に就て鎭心劑を求む。氏診して曰く「適藥なし。止むとなくんば夫れ麻睡劑乎」と

第二十一回　船室內

十八ノット極度の速力。船。疾きこと矢の如し。蒸氣釜には無煙炭を用ゆ。煙筒煤煙なし。成るへく海岸に沿て駛す。敵の爲めに見出されんことを恐るれはなり。午後五時。成して岬頂。忽ち一縷の煙立昇るを見る。立花綜理曰く「是れ必らす、賊艦の哨兵が船の通行するを見て注意の信號を本艦に傳るならん」と五時五十分海王丸灣口に殺到す。遙に灣口の岬を望む。近つくこと四五里に灣の巾さ二里餘深きこと三四里。灣底に一艦の碇泊するを見る。兩先生望遠鏡を以て凝視すること二三分間。相言て曰く「是なり〳〵」と此より先き已に戰爭準備の令あり。今此時。砲銃發射用意の令あり。立花綜理の唇頭一聲の響きと共に直に戰端を開か

んとす

余は思へらく「我職。元と是れ主簿譯官のみ。戰時。別に官守あるとなし。然るに危險の際。空しく甲板上に在らんは益なし。如かず退て我か船室に蟄伏せんには」と又た考ふ「敵艦十二インチの巨砲は三千ヤルドにして能く一尺の練鐵を貫き得と聞く。然らんには木造の商船二三艘を連ねて其船腹を打拔くに難からず。我か船室も亦た安全の地にあらず。否な〳〵。甲板上には破裂彈の裂片。必らす雨の如く降らん。我か部屋の天井板は尚ほ能く小裂片を防くに足れり」と乃ち狐鼠〳〵階子を降りて船室に飛入り錠を下さんと欲せしが。爾か爲すときは逃るに便ならす。と扉を引き占めし儘。ベッドに腰掛け。樣子如何んと窺ひ居たり

潛むこと十五分間。轟然一聲ヅドーン（始まれり）。ウワー（響き船躰に震ふ）。一二分を隔てゝ大小の砲聲。震響。不調子に轟き起る。ワリ〳〵〳〵（折れる聲ドサッー。（仆れる音）ウワー（喊の聲）。ズドーン。ウワー。ヤアー。斯る轟響震動の打續くこと凡そ二十分間少しく絶間あり

「怖い物見たさ」の諺に違はず余は此時我を忘れて船室より躍り出れは。第二板層は硝煙糢糊として硝氣紛々。甲板上に駐上れは薄煙茫々として船の前後を掩ひ。恰も朝霧の晴間に似たり。舷頭に馳行かんとす。檣折れて途に横はる。硝煙の爲めに辨すへからす蹉躓一頓。余は彼方に勉斗す。人あり來て扶け起す。其面を見れは桂氏なり。余は問ふ。「我々負けたる乎」と氏曰く「勝たゝ〳〵。彼處を視よ。〳〵〳〵〳〵一と指頭の指す所を見れは敵艦あり薄煙蒼〳〵たる間に檣頭白旗を掲げ居れり。其甲板上に又た四五人あり頻に白布片を掀る。兩船の距離は此時八町を出てしと見ゆ。我船は尚ほ進行しつゝあり是に至て余の勇氣忽ち回復し。始て元の上井清太郎たるを覺ゆ舷頭に駐行き見れは兩先生恙なく

クルップ砲の後ろに立てり。先つ安心なり。八木田氏。立花綜理を諫て曰く「彼れ賊輩信義を顧るの徒にあらす假令ひ白旗を掲くるも又た油斷すへからす。近く我船を進めは恐くは水雷火を迸出せん」綜理曰く「否な。彼艦の水雷管四門は總て艦首に在り今我れ船尾に向ふ其憂あることなけん然れとも船中尚ほ伏兵なきを保すへからす」と作戸先生眺め居たる双眼鏡を止め顧みて綜理に謂て曰く「先刻より賊輩の端艇。海濱に漕付けたるもの三四艘。艇中各々三四十人を滿載す。今又た遁走し居る

者を合すれは上陸せし賊數幾んと百六七十人に垂んとす。船中に殘り留まる者。最早や甚た多からし」綜理諸氏を顧て曰く「誰か彼の船を乘取る者ぞ」水兵隊長杉村氏。陸兵隊長轟氏。遊擊專務薊氏等同音に曰く「某等之を能くせん」

見る〳〵諸氏等端艇三艘を投下し。水兵陸兵從ふ者四十餘人。賊艦を望て漕行けり。此時双眼鏡を把て眺むれは。逃け後れたる賊輩。互に一艘の端艇を爭ひ。競て之に乘込む。艇中。人の山をなせり。我船の端艇を下すを見て益々慌て騷しと見え。如何なる機會にかあらん。其艇を踏覆へし海上忽ち幾頭の海豚を現出せり我船は「スハ」と云はゞクルップ砲。風砲。發射の準備をなし。敵艦に異狀あらは一擊粉齏となさん手配りを緩めす。綜理。八木田氏に令して曰く「尚我船の横面を現はすなく。常に側面を保て且つ五町以内に近くなかれ。彼れ已に巨砲を發する能はすとも尚ほ一二門の殘砲あらん」と我か端艇三艘は看る〳〵敵艦に乘付けたり然れとも小銃の聲をも聞かす賊輩か遁走する爲めに用ひたる階子の殘り居るを幸ひ我か水兵陸兵は猿の如く駈上れり。待つこと數分間。杉村氏敵艦の舷頭に立て小旗を掀れり。「異狀なし。進み來れ」との合圖なり。是に於て海王丸三町餘の近距離に航進す尚ほ錨を下さす常に蒸氣を保てり。兩先生。諸氏を顧て曰く「イザ。點檢に赴かん」

第二十二回　巡視

兩先生。端艇を下して賊船に赴く。余等之に隨ふ。近つき見れは船躰の堅牢宏大なること海王丸の比にあらす。先つ甲板上に登る。兩先生最初に船首を巡視す。前檣の下には厚さ壹尺五寸の鋼鐵を以て作りし函臺場あり。十二インチの巨砲其砲門より外に見はれ出ると四五尺。鐵臺場の内に入れは砲身の後部の巨大なる實に人を驚かすに足れり。立花綜理。萩氏をして之を運轉せしむるに全く障る所あることなし。兩先生大に喜ふ。夫れより甲板の中央部を巡視す。此邊は總て我か砲彈の害を蒙りしと見え。斜めに我船に對する左側の甲板に裝置せし二門の五寸砲は孰れも其位置を失ひ。半は車臺より外れ居れり。此處には賊兵の死屍五六。縱横に倒れ居れり。其最も慘酷なるものは口。目。手。足の別なく一團の肉塊と變して微塵に碎け居るもあり又た頭肉に毛髮の着きし儘。横さまに飛散て船舷

に附着し居るもあり。實に目も當られず。因て思ふ。勝者は戰爭を無造作に思へとも敗者は斯も無慘なるものかな。我々も後來何時。斯る肉塊と變せんも測られすと思へは轉た惻怛の情なき能はす。作良先生も亦た色動くに似たり獨り立花綜理。杉村。萩。轟の諸氏に至ては意氣雄揚。平日よりも欣々たり此等の人々には賊兵の死屍を定めて牛肉店頭幾塊の屠肉を見るに同しきならん。流石に武人は武人なり。大砲專務萩氏は此時頻に彼の車臺が再用に堪ゆへきや否やを吟味し居れり。兩先生夫れより船尾を巡視す此部分は最も我か砲彈の衝に當りし所なれは處々の損害亦た最も大なり後檣の下に在る鋼鐵の函臺塲は其左側に龜折を生して斜に巨砲を壓し其運轉の自由を失はしむ。巨砲其用を失ひしより賊兵は早くも遁逃を始めたるものと見ゆ。諸氏の話に據れは此鐵臺塲を損せしは我船より發せし第二彈なりしと云ふ。兩先生萩氏と與に鐵函の内に入て改め見しに砲身及ひ車臺とも別に大損害少く。唯僅に一時運用の止まりし迄なるを見出しけれは其喜ひ一方ならす。萩氏の如きは最も欣躍せり。其れより甲板上の右側に至り見れは船尾に近き五寸砲一門は覆て砲門にノメリ落つ。此處にも賊兵の屍骸一二あり。甲板上は概して左せる損傷なけれとも唯た彼の第二彈の爆裂は其勢ひ猛烈を極めたりしと見え後檣は甲板上四五間の處より碎折す遙か隔りし煙筒すら亦た少しく傾倒せり

夫れより二層板を巡視す。船中には夥しき貨物あり開き見るに羅紗反物の類。其他胡椒。珈琲の類最も夥し商船の貨物を奪ひしと聞くは是れならん。其れより部屋〳〵を改め見るに賊將の秘密室とも思しき處に於て。英金貨。米斯哥弗取雜せ凡そ廿万發餘を發見せり。其より船底及ひ機關室を巡視す。蒸氣釜には今纔に火を加へたる儘。未た運轉を始むるに至らす。機關。蒸氣釜。與に恙なし。船底には食物及石炭も甚た少からす立花綜理の説に依れは船底の石炭庫は十ノットの速力を用ひ九週間蒸氣釜を焚續け得へきホドの石炭を積み得るの容積なりと云ふ然れとも石炭庫の七八分は石炭已に空し

此時。杉村氏來り報して曰く「降服の殘賊三十二名第二層版の一隅に扣えしむ敢て其處置を乞ふと。兩先生乃ち甲板上に出て捕虜を牽き來らしむ支那人三十一名。西洋人一名なり。立花綜理自ら西人の履歴を問ふ答て曰く「某は元とマニラに住せし葡萄牙人なり出稼

を爲さんとて水先案内の雇に應したりしか賊船とも知らす此船に欺き乘せられたり其以來絶えず遁走を心掛れとも今日まで機會を得す空く斯る仕合となれり」と兩先生相謂て曰く「其言實に似たれとも徇迫て取調ふへし」と夫れより支那人三十一名の容子を見るに何れも皆蠢々乎たる愚物にして解語の偶人に異らす。唯其中にて稍や怜悧なる者一名あり少しく日本語を解す姓は名を張山發と云ふ曰く「私し。横濱四年居つた。船長賴む。食べる〳〵出來る」蓋し料理人なり。彼れ自餘の者を指さして曰く「皆同し事」と杉村氏曰く「料理人三十人はチト多きに過く」と頻に詰問せしに張曰く「皆〳〵。船長賴む。何も知らぬ」と兩先生笑て曰く。彼等賊を爲すにあらす唯た尋常の傭人として此船に欺き乘せられしと云ふならん。尙ほ善く聞糺して異志なくんは相當の給料を與へ我船に傭使すへし。我々一行のみにては二艘の船に人員不足の憂あらん」と張又た遙に陸地を指しく曰く「まだ。賴むある。私し連れて來る」と其意蓋し彼の仲間は賊輩に驅使せらるとも元と賊心あるにあらす。先刻戰ひ起るを見て逃雖れ走りし者甚た多し若し傭ひ呉るなれは彼等を搜出して連れ來らん」との意味なるへし。兩先生乃ち張を送て陸上に放たしめ且喻して曰く「誠實に勤務する者には必す過分の俸給を得せしめん」と張大に喜ひ水兵に送られて上陸せり

已にして日暮る。陸兵をして處々の峰頂に哨兵線を張らしめ。賊徒の不意に襲擊し來るに備ふ。又た海王丸及ひ巡洋艦とも共に終夜。戰爭準備の姿にて此夜は船中交る〳〵不寐番を爲し恰も戰地に在るか如し

第二十三回　バタビヤ府

次日。機械專務梨山氏部下を率て巡洋艦の修理を始む。先つ船尾に在る巨砲の鐵壁を切開き大砲を回射し能ふ程に切廣ぐ。但し鐵壁の折れ目等は廣大なる製鐵所にあらされは修繕し難きを以て之を其儘にし。唯た巨砲の運轉に差支なき迄の手入れをなせり。又擊折られたる後檣をも海中より拾ひ揚けて之を樹つ。（海王丸の中檣及ひ前檣をも此時に修繕を加へたり）甲板左側の五寸砲二門の一は。其車臺大に破損し復た用をなさゝるか故に梨山氏の工夫にて一の磨臺に架裝せり。是等の作事を終るには少くも八九日を要すと云へり此日午後二時。張山發支那人五十餘名を隨へ（我が哨兵に護送せられて濱邊に歸り來る乃ち端艇を下たして彼

等を本船に護送し兩先生の前にて彼等を戒調ぶ。張の語る所に據れは其連れ來りし者共は皆賊奴に欺き雇はれしが中ころにして其虐待に苦み遁走せんと欲せしこと屢なれとも彼等に脅迫せられて其志を達せす今日に至りしと云ふ又現に遁走を試みたりし者の内。二三名は賊奴に銃殺されしもありと。詳にせし上にて相當の俸給を與へ我船に傭使すへき旨を傳へしに彼等皆喜へり。此時先生曰く「彼等か我々の威信に服する後は彼等を歸化せしめて散髪となさんと欲す豚尾髪にて甲板上を飛ひ廻るは甚た不躰裁なるを以てなり」と支那人の歸降せし者。前後幷せて八十五名之を一處に集るは然るへからすとて兩船に分載し。日本人の下働きに供す。獨り張のみは料理人となせり彼れ特に其技に妙なり。先生之を諢名して「小易牙」と云ふ

水先案内と云ひし葡人の所願を問ひしに。今は葡領マニラに歸り度き旨を答ふ。先生綜理と謀て曰くマニラは我々の前路にあらす此者の爲に態々立戻るも要なし因ては我々の沿道なるバタビヤに立寄り此者を上陸せしめん。同處は繁華の都府なればマニラにも里斯本にも便船甚た多しと是旨を彼者に傳へしに。非常に悅て恩を謝せり

先きに張の注進にて賊將は遠く遁逃し副將は戰死し餘兵は島中の内地に深く逃け入りたるを詳にし。今は戒嚴の要なきを以て此夜大に勝利の祝宴を張り勞らひ功を賞し大に分捕を軍中に頒つ。大砲專務萩氏。功第一。上座に在り。賞金三千圓。艦長八木田氏功第二。賞金二千圓。桂氏の風船。功第三賞金千五百圓。其他別格諸氏何れも皆千圓つゝ。余も亦た千圓（船室に在りしにも拘らす。）陸兵水兵及ひ船中一同に各々五百圓つゝを與ふ。金子は總て艦中會計長の手に預り。入用の節之を給するとと定む船中一同歡を盡くし茶番の催しあり。今や海王丸に加ふるに一等巡洋艦を以てす人々俄かに勇氣を十倍し早や已に亞弗利加の新版圖を掌握せし心地あり宴酣なる時。先生曰く「此度ひ乘取たる堅艦には其名なかるへからす。余は朝來。頻に考案を費せしが先刻に至て忽ち一名稱を思得たり。之を名けて「浮城」（フローチング。カッスル）とせは如何。是れ「海上に浮ふ鐵城の意に取るなり」と綜理始め一同賛賞して曰く「好名稱」なりと。乃ち梨山氏に命して船尾に此銘を附せしむ。是より談笑興に入る。立花綜理。余

に向て曰く。「昨日戰酣の時。諸氏皆甲板に在り。獨り子の面を見さりしか故。余は恐る。草囊子必定賊彈の爲に奪ひ去られしならんと。戰ひ止むに及ひ突然。氏の面を見得し時は余の心甚た喜へり」と余謹て答へ曰く「會々腹痛甚た敷。第二層板に在りき」と諸氏皆余の面を見。笑を忍て嘻々す。余は慚愧に堪へす。地を穿て入らんと欲す。心中誓て云ふ以後戰時必す甲板上に立たんと

此地に泊すると五日。先生。命して浮城丸の色漆を塗替えしむ。是迄水平線下は綠色。線上は黑色なりし處。此時より船躰は雪白色と爲れり。九日間。修繕の暇には。浮城丸の巨砲發射を演習し。且つ船躰の運航を試むること虛日なし。船中一同。益々技術を修む。石炭。無烟炭。及ひ硝藥の類を兩艦に分ち載せ又海王の風砲一門と浮城の五寸砲一門とを双方に交換せり。是時より浮城丸を以て旗艦（大將の船）と定め。兩先生及ひ別格諸氏大半之に在り。水兵隊長杉村氏を以て海王丸の假艦長とす。水夫火夫の役目に支那人を使用し日本人をは引上げて砲兵。水兵とす

船中。意氣揚々。第六日の早天ナツナ島を發しバタビヤ府に向ふバタビヤは阿蘭の所屬たる東印度諸島（面積總計六一八、〇〇〇平方英里にして。日本より廣き）と四倍半。人口二千五百万人を有す）の首府にして本國より此地に鎮臺を置き政を諸島に傳ふ貿易最も繁盛の地たり。先生に聞く所此の如し）

第三日目の朝。浮城。海王の二艦バタビヤ港内に投錨す。近く陸地を望めは西洋風石造の三階四階の華屋。港内に泊する船舶亦た三十餘艘。灣口海岸に櫛比す。港内には數ヶ所に堅固なる砲臺を築き。一の燈明臺其傍に聳ゆ。我〻は香港以來。蠻族の棲居する未開地のみを經廻りしが故に今此港に入るに及て始て人間世界に現はれ出たるか如き心地す

投錨後。二時間ならすして。（未だ葡人を上陸せしめざる内）一隻の端艇。浮城丸に漕付けたり。八木田氏出て〻應接するに稅關より話し度き儀あり至急艦長の上陸を所望するとの事なり先生之を聞て熟思するもの多時。曰く「艦長は任務多し漫に上陸すへからず。左ればとて化學。氣象。機械。植物。專務の諸氏は失禮ながら俗事に敏ならす。依ては兵事係の中にて何人をか煩はさん」と狙擊專務笹野氏進み出て〻曰く「某。願くは之に當らん。」先生曰く「甚た好し然れとも子は西語に通せす、依ては譯官

上井氏を同行せられよ」と余も亦た欣然たり。彼の市街を見物せんことを欲すればなり。余等兩人將に端艇に乘込まんとす。先生兩人に謂て曰く「多分は船中の貨物に課稅の事ならん。若し談判差縋れたらば。一應還り來るへし。我々更に方寸あり」と又曰く「我々已に淸國旗を飜へす。敢て累を日本に及ぼすか如き言語を吐くなかれ」と兩人唯々す。此時に至り始めて思へらく「此の使命。甚た容易ならす」と又た思ふ「本使は笹野氏なり余は譯官。責任あることなし」

第二十四回　談判

我々の端艇は稅關吏の端艇と前後相踵て波止場に着す。上陸し見るに市街の繁華宏壯なること香港に倍す。流石は廣大なる東印度阿蘭所屬地の首府たるに耻す。行くこと五六町にして稅關に入り應接所に案內せらる暫らくして三四名の西洋人出來る。一人は稅關次長。一人は警部長。他は皆屬吏。彼我双方の席定まる。此時巡査らしき者十餘名入來て余等の後邊を取卷けり。余等兩人の心中先つ不快の感あり。是より應接始まる。稅關次長問て曰く「足下等の船は貨物の陸揚を爲す乎。但しは一時碇泊して直に出船する乎。」余曰く「一時の碇泊なり」（茲に余と記するは笹野氏の答辭を余が英語にて取次くものと知るへし以下皆同し）警部長。問ふ「足下等は日本人歟若くは支那人と見受けたり。本國政府の旅行券。及ひ船の證狀あらば願くは之を拜見せん」兩人是に至て窮せり。旅券。證狀總て香港より送還せり。因て答て曰ふ「本國に忘れ遺したり」「總人員は幾何なるや」「二百餘名なり」「二百餘名の人皆悉く旅券を忘れたる筈なし。願くは之を見ん」答て曰く「何れも皆忘却せり」此時次長。警部長。低聲にて何事をか語りしが蘭語ゆゑ分明ならす次長又た問ふ「足下等の船艦は檣頭に見慣れぬ國旗を飜へせり。果して是れ何れの處の國ぞ」。余。聲に應して答て曰く「海王島」と（忽ち思ふ島と云ひしは。甚た穩かならすと）乃ち辭を改て曰く「海王國」と此時次長警部長又た不審の躰あり蘭語にて何か頻に囁きしが又た問て曰く。「海王國とは聞慣れぬ國名なり南亞米利加なるや將た亞弗利加なるや」余答て曰く。「其國は南緯四十度。東經六十度の地に在り」又た問ふ「楚國は何年在りし乎」此の時笹野氏低聲して。余に囁て曰く「何れの年と言て可ならん乎」と余も亦た少しく當惑せしが忽ち說を定めて曰く。「日本出發の時を紀元とせ

ば是れ如何ん」と。議。熟す即ち答て曰く「本年三月五日」と彼れ又た問ふ「國躰は如何ん」余。低聲笹野氏に注意して曰く「其和政國と遣付けよ」氏曰く「否な。王國」なり。々々々」と余乃ち二字を加て曰く「立憲王國」彼れ又問ふ「貴國が列國の承認を受けしは何れの頃そ」笹野氏少しく躊躇し余を顧みて曰く「如何せん」余曰く「國を立つるに何そ他國の承認を要せん」乃ち答て曰く「我々自ら之を建つ。列國の承認。不承認は顧る所にあらす」と是に至て次長。警部長忽ち興に眼を怒らし聲を荒らけて曰く「汝等敢て官府を戲調する乎汝等の船中。多勢の支那人あるは如何ん。又た一艘の巡洋艦は何國。何會社の製作に係り何時之を購ひしものなる乎。先きに支那政府より照會あり。其巡洋艦不意に海賊の爲に奪ひ去らる。見當り次第。取抑へ呉れよとの依頼なり。汝等。人目を亂らん爲め巡洋艦の外部を雪白に塗り變えたりと雖とも船躰其他の有樣甚た疑はしき事多し依ては我か鎮臺より今直に海軍士官を派出して一々船中を檢査せん若し之を拒むに於ては此方にても其心得あり」と居丈高に罵り出せり。此時余は笹野氏に囁て曰く「余の勝脆。幾んと漏れんと欲す。チョット此場を外さん」と笹野氏恨めし氣に瞰て曰く「今大切の場合なり。少しく之を忍へ」余曰く「直ちに來らん」と次の室に出て閑處に赴けり立歸て小蔭に樣子を窺ふ。應接所内。警部長の不充分なる英語にて「ナウ。エー。チール。プリソナー（汝は生擒り）」と叫ふや否や。ハタ〳〵。ドタ〳〵。大騒動の響きす。余は唯一躍。濱邊を指して遁逃す。後面。遙に靴音して多勢の追來るに似たり。端艇まで僅々五六町の距離も亦た是れ一里の遠路程。今余をしてバタゴニヤ人ならしめは一足。直に三間ならんにと。端艇に躍込むと同時に出船を命す。水夫等皆曰く「笹野君は如何ん」余曰く「待つを要せす。唯た速に本船に還れ」と波止場を離るゝこと二町餘にして十餘名の巡査等海邊に追來り。頻に手を擧け。蘭語にて何事をか叫ひたり。本船に歸て兩先生に見え。語るに應接の始末を以てし且つ曰く「笹野氏危急の際。小生も相援けんと欲せしが若か爲すときは此の大事を報ずるものなく敵兵不意に本船に襲ひ來て船中一同の大事とならんことを恐れ馳歸て候」と先生笑を含て曰く「甚た好し〳〵」と兩先生余の報道を聞て沈思するもの多時。相謂て曰く「此地。久留に便ならす一先つ出發して事を議せん」

直に出船の令あり蒸氣釜には投錨以來尚ほ無煙炭を用ひ蒸氣を絶たず。今少しく火力を加ふれは一二十分を出てず出發するを得へし。此時警部長及水上警察の巡査數十名。五六葉の端艇に乘込み浮城丸を望て漕來る立花綜理之を見て曰く「我出て、彼等に接せんと七八名の水兵を從へ階子の上頭に立つ。水上警察の端艇。早く階子の下に漕着けたり。綜理。萩氏を顧み低聲して曰く「電氣〳〵」と綜理。階子の上頭二三段の處に下り。階下に來りし警部長を揖して曰く「請ふ來り上れ」と警部長。容止傲然として。階下の踏段に片足を踏掛くるやアッと叫て海中に倒落す巡査一半之れを救ひ上けんと周章す。他の警部數名一齊に階子の踏段に競ひ上る。一齊撞然として水中に倒落す、警部長の鼻口。海水を喫すると一斗。辛して端艇に助けらる。頭頂足端。總て是れ海水滴々。一頭の溺鼠を現し來る絶て先刻の威勢に似ず余等甲板上より手を拍て哄笑す先生。余をして英語を用ひ。呼て彼等に謂はしめて曰く「汝等。歸て鎮臺に語れ。我々是れ海賊にあらす。唯賊艦を奪ひしのみ。汝阿蘭の小鎮臺。事の理否を解せす。我船の使節を捕へ万國公法。互に行人を捕へさるの義に反す。不法も亦た甚たし。我々。遠からす捕へられし使節を受取りに來らん。若し其間彼者を虐遇せは。一府焦土。玉石與に焚かん。汝等夫れ之を記せよ」と汽笛三聲。浮城海王の二艦。相並て此灣を發す港口を航し去ると十餘里。兩艦を沖中に漂はせ浮城の談話室に會議を開て笹野氏を取返すの方略を議す

第二十五回　砲臺

先生、諸氏に問て曰く「笹野氏の事。之を如何にすへき」と諸氏皆黙然として策の出る所を知らす先生曰く「パタビヤ府は阿蘭屬所東印度諸島の首府にして其鎮臺は文武の政を兼ね行ひ陸軍常備の兵數三万人。軍艦六七艘を備ふ。最も侮るへからす笹野氏を取返へすの方畧も亦た愼重を要す」綜理曰く「我〻一行の中。一人の火夫水夫を捕へらるゝも亦た之を捨去るべからさるの誓ひあり。況んや笹野氏をや。事の成敗に論なく再ひパタビヤ灣に乘込んて。鎮臺と一と談判を開かん若し事成らずんは其時更に他の策を講して可なり」先生亦た此の議を贊して曰く「我〻一行。死生相共にすへし。兎も角も今。一と談判を開かん。我〻か海賊にあらさるを明にするは容易なれとも。浮城丸を支那政府に引渡すを拒むは其事。實に難澁なり。止むとな

くんは我れ自ら鎮臺と面談して。事實を明にし笹野氏を請受けん。彼れ若し強て浮城を要求せは我れ亦た之に應ずるの口實なきにもあらじ夫等は臨機應變と爲し先つ再びバタビヤ灣に進入せん」と評議茲に決せしかは乃ち此處より引還して直に談判を始むるに決す午後一時。海王。浮城。の二艦再ひバタビヤ灣に向ふ灣頭を距ること二里餘の地に至り。海王丸を沖中に留めて豫備艦とす。是れ万一浮城丸に急あるを見は直に來り援はんが爲なり。浮城丸二十ノットの速力（一時間に日本里程十一里餘を走る。京濱間の汽車よりも疾き速力）を以て走る。螺輪琴々として舷頭海波を劈き。船の左右に分れ崩るゝ白波は海上に航痕を靡き殘すこと二里餘。日輪放光三色の國旗を翻へし。一直バタビヤ灣頭を望て突進す。灣口前頭の砲臺と相距ること二十餘町に至る時。忽ち砲臺の砲門。パッと一塊の白煙を發す空中に「ビユウッ」の響き聞えしかと思ふ瞬間。一處に集り立ちたる兩先生。桂。梅山諸氏及ひ余を合せて七八名皆一齊に甲板上に觔斗す。余は覺えず絶叫す「打たれた」と早く信ず身は是れ鬼籍中の人なりと倒れながら遽てゝ全身を撫し見れば微傷だもなし。（彼の居常沈着にして擧止整然たる作良先生が觔斗して圖子の如く軟々せし形容は之を思出たす毎に余は尚ほ失笑するを免れす）周章てゝ起立すれは兩先生始め皆已に立てり。綜理呼て曰く「狼狽するを要せす。巨彈。我々の頭上二三十尺の地を過きしのみと未た云ひも了らざるに砲臺忽ち又一巨砲を發す。我船左側の船舷「グワーン」と一轟し。七十間に餘る左しもの浮城丸も一カンバンなりと搖れ搖れて震ひたり。甲板上に在る者。一齊に盤册くとタヂ〳〵タヂ。明かに是れ敵彈我船の中腹煙突の邊を打拔きたり。立花綜理。閃電の如く身を躍らせ聲を勵まして一面には船躰旋轉の令を發し。一面には砲

を取て之を望むに砲臺の北端一半。已に崩れて形を失ひ彼れの砲臺亦た漸く衰て響なし綜理曰く「一砲臺を破壞し了る尚ほ進んで都府を脅かさん乎」先生曰く「不可なり。戰を開くは本と我々の本意にあらず。且つ先きに灣内に三四艘の戰艦あるを見る。又都府に近つくに從て灣口漸く狹く兩邊に尚ほ二三基の堅固なる砲臺あり。我々急進せは恐くは大還あらん。此有樣を以てすれは談判を開くも益なし。一と先つ沖中に引還へし更に會議を開かば如何ん」綜理曰く「可なり。但し奴輩を懲らすが爲め一巨彈を稅關の頭上に送り與へて止よん」と乃ち萩氏に命して曰く「距離方に八十町ならん子夫れ極度の仰角を用ひ十二寸砲の雷彈を最遠距離に射發し見よ多分稅關の邊に達するを得ん」氏曰く「諾」と徐ろに測量鏡を以て遙に都府の方位を望み。一發十二寸巨砲を打射す。距離遠くして煙を見る能はすと雖とも揺然一聲の轟くを聞く。余は思ふ先きに應接せし稅關次長定めて腰を撫かしたらんと令あり。海王丸を望んで馳す。八木田氏綜理に注意して曰く「先きに灣頭に進むに當たり灣内二三の戰艦。煙筒より煤煙を揚らしむるを見る彼等の追來る無きを得んや。」綜理冷笑して曰く「阿蘭屬領二三隻の朽砲艦。我れ能く蹴て之を走らせん」と

第二十六回　天上。天下

再ひ沖中にて會議を開く。諸氏此勢に乘して三たひ港内に殺到し各處の砲臺を毀ち笹野氏を取返へさんとを主張する者多し先生曰く「阿蘭。小なりと雖とも尚ほ一王國なり。其鎮臺は草賊と同視すへからす。偶ま敵の一砲臺を射壞し得るも豈毎に此の如く好運なるを得んや。他の砲臺に備る巨砲の勢力。砲手の鍛鍊は先の臺場に幾倍せんも知るへからす加るにパタビヤ港内には英。佛。諸國の軍艦一二艘をも見受けたり若し鎮臺か愈々我々を賊船と認め助を彼等に求むるに於ては彼等も直に聯合の運動を爲すなるへし是れ亦た侮るべからす。況んや鎮臺の陸兵亦た少きにあらさるをや。假令ひ我々が一二隻の敵艦を擊沈め一二ケ處の砲臺を打毀つも徒らに恨を列國に結ふのみにて肝腎なる笹野氏を取返へすと能はすんは皇情徒勞に屬すへし」。綜理亦た進擊を不可とし先きに敵丸の爲に破られたる船尖の損所も此儘に爲し難きを說くと雖も水陸兵隊長諸氏の憤激は制し兼てぞ見えにけり。此時。先生不斗何事をか思ひ起せし樣子にて俄に席を離れて立去れ

り。待つこと二十分間にして先生復席し。欣然として諸氏に向て曰く「余に一策あり。必らず笹野氏を取返し得ん然れとも今日に行ひ難し。來る六月中旬を待つへきのみ」と萩氏「六月中旬迄にては尚ほ五週間の久しきあり。其間能く笹野氏の無事なるを保し得べきや」先生曰く「大抵は無事ならん。阿蘭も亦た文明國の一なり。此地の鎮臺。如何に暴なりとも證據も無きに妄に捕虜を屠戮する事をは爲さじ。然れとも夫迄の間。笹野氏をして牢裏に呻吟せしむるの一事は實に遺憾なるのみ」と諸氏頻に先生の策を明かさんことを求む。綜理之を制して曰く「統領。自ら良計あらん。我々之を信して可なり。何ぞ必らずしも説明を要せん」と是に於て諸氏皆先生の策に從ふへしと決したり然らは先つ差當て浮城丸に修繕を加へ且つ諸島の獨立蠻族と貿易を爲し六月中旬の來るを待つへし。

ジャバ近海

に於て然るへき碇泊地を求むるにバリー。ロンボク抔云へる島々に隣りてソンバワと名くる一島あり其大さ凡そ我か四國の四分の三に當り獨立して阿蘭の制縛を蒙らす。且つ良港あり。先づ此地に赴くへしと議定す。是に於て不本意ながらもバタビヤ府を後に眺め。彼れの戰艦の追及ひ能はざる極度の速力を用ひ浮城。海王。の二艦相並んで東南に進航す

ソンバワ島の大灣に投錨

第三日目の早天に兩艦恙なくソンバワ島の大灣に投錨せり。此灣は其廣さ東京灣に似て形ち斜に長く曲り灣底の最狹處は極めて泊舟に便なり。三五間の村落海邊處々に點々するを見る。土蠻は概ね柔順にして半開の民と評すへし。畧ほ貿易にも熟れ我々の碇泊せし以來は魚類。穀類。果實等を來り賣り船中大に便利を得たり碇泊せし後は直に海王。浮城。兩艦の修理に取懸れり。先きに賊艦との戰と云ひ。バタビヤ砲臺との戰と云ひ我か戰具船躰には多少の損處を生せし上。砲臺の巨砲に打貫かれし穴は水際より遙か上の方なれとも烟突の甲板以下の處を破りし爲め煤烟第二層板に漏れ出て當分は大に難澁せり。是等の箇處〳〵の修理を第一にす又一たひ砲臺と戰を開らき阿蘭の東印度屬島は稍や敵國の姿と爲りしを以て此方には戒心あり。諸將校の説によれは阿蘭鎮臺附きの砲艦は我々の迹を追躡し或は此邊を乘廻はして探搜することあらんと云り。翌日會議あり兩先生も右の用心最も肝要なる旨を演説し哨兵を灣口の峯頂に置き以て不虞に備へんと議決せり。先きに輕氣球が大功を奏せし時ひを忘れす晴朗の日には之を峯頭に放て以て哨兵の一に備へんことを望

む者多きに因り兩先生亦た之を然りとし。翌日より日和次第。日々輕氣球を擧くる事と爲る

風船技手は最初には桂氏一人なりしが。氏をして日々空中に在らしむるも甚た氣の毒なればとて水兵隊長萩氏。轟。薊等の諸氏をして代る〳〵代理を勤めしむ。

初の程は諸氏皆得意なりしが。何分只た一人。下界を離れ空中に在るは退屈に堪えずとて桂氏に謀り。更に二人乘の大輕氣球を製造するに決したり

碇泊後八日目には二人乘の大氣球始めて出來せり因て濱邊に於て其揚け初めを試む。兩先生及ひ格別諸氏皆集り見る。此度の風船は球の大さ八疊敷四方計りにして之に附したる籃には乘手二人を容れ且つ細かなる器具望遠鏡の類。號旗。麵包等をも積込むの餘裕あり。氣球の綱糸をは岸頭なる木根の突起して穴をなすものに通し衆人集て之を持ち延縮を爲すに供す又繩の端を樹幹に結ひ着けたり。已にしてゴム管を以て硝藥筒を氣球に接し。將に點火して瓦斯を球内に導んとし。乘人を擇む。桂氏曰く。「余の算數にては此の氣球の上昇力は明に三十四五貫目を引揚くるの力あり」と。轟。薊の諸氏競て之に乘込まんとす桂氏肯せずして曰く「兩氏の如き大男の重量ある者は或は氣球の昇力を妨けん。依ては寧ろ中脊。痩形の人をして試みに之に乘らしめん。然らんには氣球の上昇力甚た強きを加ふへし」と氏。菊川氏と余とを指して曰く「兩君は諸氏の中にて其躰量。最も輕しと見ゆ請ふ先づ試みに乘れ」と余等兩人大に喜ひ。二人乘りとあれは旁々面白しとて風船に附したる竹籃の中に乘込みたり

萩氏。火を硝藥管に點するや否や。八枚敷の輕氣球看る〳〵膨脹し來り未た五分間を經ざる中に早や漸々と空中に昇ほり立つ。已に六七分間を經る頃には氣球漸々として地面を離れ空中に昇る諸氏皆な手を拍て曰く「奇妙〳〵」と。余等兩人も得意極まる

氣球漸々と上昇し諸氏漸々と綱糸を伸はす。已にして五百尺の處に至れは。脚下に山あり川あり。地上なる諸氏の姿は恰も蟻の如くに見ゆ。菊川氏呼て曰く「愉快〳〵。此の高處より一目すれは。下界は是れ一幅着色の好山水にあらすや惜むらくは我々寫眞箱を持參し上らさりし事を」と綱糸を延はすこと一千尺。氣候少しく寒きを覺ゆ此時。氣球漸々斜に傾き綱糸次第に張立つこと恰も强風の時に紙鳶の斜に傾くに似たり。蓋し余等兩人の躰量が輕きに過ぎて氣球の上昇力は餘りあるに風吹て轉た之を助るか爲ならん。余曰く「危

險〳〵綱糸は大丈夫なる乎」。菊川氏曰く「桂氏經驗あり心配する勿れ」と此時下界に當り颶と微かに聞ゆる響と共に余の兩耳を拂て空氣の走ること颶々たり。菊川氏曰く「大分。風が出た」と。氣球。益々傾き綱糸益〳〵ピーンと張立つ。菊川氏周章て「降ろせ」の號旗を振る下界の諸氏之に應して綱糸を引締む。一陣の風。颯と吹來る。風吹き。綱張る。フッと聲あり。綱糸中央より斷れ氣球倏忽颼々として中天に沖る。上にては余等兩人。下界の諸氏を望て「アッ」と叫ひ。下にては下界の諸氏。余等を仰見て「ヤアー」と呼ぶ。其の聲ばかりを名殘にて。見る〳〵山川蒼々の中に沒し。氣球。斜に天外に飛ふ菊川氏絶叫して曰く「アー情ない」

第二十七回　空中

天風。斜に氣球を捲き去る。未た一分間をも經さる中。浮城海王の船形は看す〳〵眼界より消え去れり。兩人歎息して曰く「嗚呼〳〵」

余。慌てゝ菊川氏に謂て曰く「下界山川の形ち次第に縮小するにあらすや」氏曰く「是れ氣球の上昇力。強くして。飛揚速かなるの兆なり。危險〳〵。地上を去る一萬五千尺以上は空氣已に稀薄にして周圍より氣球を包壓するの力を失ふ。然る時は氣球倏忽破裂せん」

余落膽して曰く「富士峰頂の高さより真倒さまに落下せは速力倍加の天規にて余等の身躰は浮城艦上十二寸砲の彈丸よりも速かならん。折角地上に歸到らん時は二人與に撞觸の爲め忽ち一片の鮓とヒシャゲンカナ」。氏曰く「否な。落下の速力急なるか爲め。身躰は空氣と磨擦して二百度以上の熱を發し。地上に落る前に二人早く空中に燒死せん」

菊川氏。ブル〳〵震るへながら曰ふ「俄かに寒氣を增せり」と。余も亦た凍慄す。地上に在りし節は暑熱甚しく常に夏服を穿ちしに今忽ち此の如きは。氣球已に一万尺以上に昇騰せしを知るに足る。菊川氏又曰ふ「呼吸も已に苦しきを覺ゆるにあらずや」「余も亦た然り。此儘四五分を待たは氣球の破裂する必然なり」氏周章てゝ曰く「早く氣球に孔を明けん」

余は直ちに懷中よりナイフを取出し籃綱に攀て氣球の口に躍り着けは菊川氏亦た同樣攀登り將に與にナイフを突立てんとす氏曰く「待て〳〵。下を見よ〳〵。海中に落下せは亦た是れ死運のみ」余曰く「最早や分明には認め得す。只是れ蒼々然たり」氏曰く「蒼々として白きは定て是れ海。暗々として黑きは必す是れ陸」

と

余等の身躰益〻寒を覺へ手足殆んと凍らんとす氏曰く「最早や下界を見るの暇なし。唯た一風窓を開け」と又俄に叫て曰く「成るべく風窓を少さくせよ」と兩人力を合せナイフにて氣球を搖き破る

唯た覺ふ風船飄々乎として次第に下り行くか如きを。且つ下たり且つ飛ぶ見る〳〵山川歷々として漸く眼界に入り來り其形ち亦た次第に張大す。余等與に叫て曰く「旨い〳〵」

此時一陣の暴飈。忽ち颯と吹來ると覺ゆるや。我か氣球を空中に吹廻はすこと一週轉。球は斜に。籃は傾くこと四十餘度。余等兩人一生懸命に籃綱を握り唱て曰く「南無阿彌陀佛〳〵」と氣球風に從て斜に下界に降下し始めは高き樹上を引ずり行くと里餘なりしが漸くにして一大樹の枝に懸る。二人ホット息を吐き相見て曰く「先つ〳〵安心なり」と余等の空中に在りしこと大凡二時間餘

熱帶地方の樹木は概して丈け高きもの多きに此の大木は殊に高く地を拔くこと幾十丈。枝葉繁茂して青々たり。兩人先づ籃を出でゝ樹枝に取付く。菊川氏獨語して曰く「請ふ暴飈吹き來れ」と樹上より地下を見るに其遠きこと幾十仞。平時ならんには瞑晦み。魂飛ぶべき高さなれとも余等兩人已に是れ中天一萬尺以上を經歷したれば恰も庭前の踏段を降るが如く思へり風船に附着せし斷綱を傳ひ。兩人。難なく地上に降り立てり

余等相言て曰く「此地は是れ何れの國ならん乎」と四邊を望み見れば山岳疊々として大木大樹彼處此處に生ひ茂り全く無人の境なるが如し地上に降り來ると與に又是れ土用中の暑熱なり。二人樹下に休息し。先きの空中旅行の事を思へば實に寒心に堪へず。斯くも恙なく再ひ地上の人となりしを相視したり。此時迄二人の心中に在りし唯一の熱望は何卒して天上より無事に地上に歸來らんとするのみなりしが。今や無事に降下せし後ち今此時に於て忽ち胸中に浮ひ出るは又此先きの困厄なり。菊川氏顧て四方を顧みて曰く「如何にも寂寥たる無人境なり是れ必らす未開の國土ならん。余は唯。切に祈る彼の喫人種の住地ならさらんことを」と

氏は頻りにポックトを探り見て曰く「試驗爽りの日にあらさりせは。風船籃内。幾種の食物。兵器をも貯へたらんに。見よ我〻の身邊。曾て一物を着けず差向き我〻は飢餓に苦むべし。余も亦た歎息して曰く「貳

器と云ふ武器は一片も用意せず一挺の短銃すら帶上らさりしは返すがへすも粗忽なりきと又た思ふ斯る事と知るならば彼の預け置きたる賞金千圓を腰に帶び來るべかりしにと。二人の身邊にはナイフ。ハンケチーフ時計の外絶へて自餘のものなし。平生は船中にて入用もなければ小遣錢すら懷中せず。實に是れ。着のみ着の儘にて天上より降り來りし人物のみ。菊川氏は懷中より些なる物と小壜とを取出し。恨めし氣に打眺めて曰く「之を視よ余の道具は只だ此れのみ。パタビヤの砲臺と戰ひ重傷を負ひし兵士等を療治し今日回診の時。注射器を以て一人の皮膚内にモルヒヲを注射したり。其時忘れて懷中せし儘。携へて今に至れり」余曰く「是れも亦た一物無きに優らん危急の際。敵を毒殺するの用にも供すべく。又た我〻切迫の場合に自殺する道具ともなりなん。せめては之を珍重せよ」氏も亦た實にもと思ふ顏色にて。丁寧に包み直し。之をポッケットに納めたり。此時二十間餘を隔てし林中の叢樹忽ちガサ〳〵メリ〳〵と物音す

第二十八回　砂糖圖

余等兩人慌てゝ木蔭に逃入らんとする時。灌木叢中忽ち十餘名の蠻人を現出す。之を見るより兩人一サンに逃出せは彼等も亦た隙間なく追來る。嗚呼此時我〻の手裏に短銃なりとも所持し居らは。彼等五六人を射斃すは難きにあらざるも。奈何せん身には寸鉄なし。一向ら逃げ走らんと度を失ふ。固より人跡絶えし林中なれば途と云ふべき途もなく。柵の如く茂み合ふた草木を掻分け〻〻〻走ることなれば墓〻しく捗り得ず。斯る荆棘中を走るに熟れたる蠻人等は間もなく余等に追及び。手取り足取り引据ゆるのみか。携へ持てる先太の棍棒にて處を擇ばず打据ゑられ遂に無念なから彼等に捕はれたり

彼等は兩人を捕へ。二人宛づして我〻の左右の手を攫み尙蔓樣の物にて腰繩を着け。追立て行けり。善く〳〵視るよ彼等の骨格容貌い總て先きにボルヲオ島にて出逢ひし蠻人と大同小異にて頬骨露はれ。色黑く。筋骨殊よ逞しく。腰邊に色布を纏ひし外は身躰總て露出せり。皮膚の色は黑光りに光を放ち。顏色寒醜を極む。然れども其武器とては先太の棒。古釘。古庖丁の類を結付て造り成せし幾條の槍を携ふるのみ。彼の人髮を着けたる太刀をも帶ひす。又た恐ろしき吹筒をも持たさりしかは。先つダイカ種族よはあらしと思ひしかと

も。何分蒙昧未開と見ゆる蠻人なれは。何時我〻を屠殺せんも計り難し。と思へは恐怖の念。去るときなし。斯る蠻奴の手に性命を失ふ程ならは寧ろ下界よ降り來らす空中を飛揚して氣球破裂の運命をこそ待つべかりしよ悔しきことをしてけりと。今更空中も慕はしゝ。余等兩人は僅か四五間を隔て、前後よ牽き行かるれども互よ言葉を交へなは蠻族の疑心を引起し。如何なる奇禍を得んも計られずと思へは余は只空く氏と顏を見合すのみよて一語を發せす。氏も亦た其心よや何事をも言はず。互に時〻顰蹙して相顧るの外なきは。哀れなりける身上なり

猪鹿ならては通はじと思ふ計りの深林なる小逕をたどり。草押分けて連れ行かるゝが故に。我〻の歩み捗らず。殊に氣球に乘りし以前より絶えて食事をなさゞれは稍や空腹よも及ひたり一層力なく覺もるに夕日の光熱は其力益〻烈しく。口は渴し。腹は飢え。足並み自ら後れ勝ちなるを見るや。蠻族等は小刀を鋒とせる槍もて。後面よりチク〳〵と尻。肩の嫌ひなく之を刺す今少しく歩みを怠らは一突よ突きも通されんとの恐ろしければ。突かるゝ毎よ勇を鼓し二三間の程は駈出すものゝ。五躰の疲れは爭ひ難く最早や路傍に倒臥して生殺の命を蠻奴の手よ委せん乎と思ふ中よも。又た一突き。突かるれは命惜しさよ。ヨメ〳〵と亦た歩みを運ぶのみ

纔に深林中を出つれば。川に沿て稍や廣かなる丘陵あり。彼處此處に豚小屋かと覺しき組造なる家屋相列り一大聚落をなせり近づきて之を見るに。家の柱は木を其儘に用ひたるもあり又た掘建に組立てたるもあり。屋根の形は日本邊土の農家に似たれとも。其組造なるは亦た幾十等の下に在り。椰子の葉。茅抔を以て不規則に之を蔽ひしは日光雨露を避くる迄に止るへし。柴を編みし簾を以て家〻の壁とす。家數は計なられとも彼處此處に散點するものを合すれば二三千戸の多に達すべし余等兩人の此村に引行かるゝや。家〻より大勢馳出て見物せしが孰れも其面相の見苦しきこと殆んと日本の不男の競進會をなすに劣る。彼等は。余等の後になり。前になり。或は洋服を引張て見。或は余等の身躰を嗅ぐ抔。其五月蠅こと限りなく。ゾロ〳〵と取卷き來る

已にして村内の太と大なる家に牽行かれたり。衆ねて注進ありしものと見え。小屋の正面には一人の酋長らしく。年齡五十計り翁髮半白の者。上座に在り。次で

副酋とも見ゆる三十五六歳の筋骨逞しき者次坐に在り其より十。二十の蠻人共裸躰の儘。思ひ〳〵の行儀にて居流れたり。余等を捕へたる十餘名の蠻人共は酋長に何か言上する躰なりしが。酋長より何か命ずると共に忽ち大勢立掛て余等の傍に來り。服を始め時計其他の或らゆる道具を一〻剝取て。忽ち丸裸となせり。此時已に日暮に近けれとも。熱帶地方の常として炎威尚ほ猛なり故に余等兩人は衣服なしとて凍死の憂もなく。結句心地は清々たるも。若しや此より『ビーフ。ステーキ』となるの用意かと思へば。本意なきこと限りなし。余は堪らへ兼ね低聲にて菊川氏に向ひ「此れから料理の塲となる歟」と涕り上けしに氏も潸然として言はず今や兩人は眞に是れ屠所の羊。俎上の魚

蠻人等は赤裸なる余等を忽ち牽立て去るが故に扨はと驚き地を蹈む足もよろ〳〵として牽かるゝ儘に此家より一町計り隔りし地に至れは此處に粗造中の粗造なる小屋あり。其中には已に四五人の蠻奴あり余等を連れ來りし者共も手眞似を以て兩人に此處に居るへしとの意を示し。又た小屋の後ろに連れ行けは此處に三四町の甘蔗圃あり。彼等手眞似を以て甘蔗圃の草を取り耕作をなす眞似を爲し。余等に命するに此の役目を以てするか如し。是に於て兩人忽ち生氣を回復す菊川氏低語して曰く「先つ食はれる丈けは安心ならん」と余も亦た然か思へり。此より以前の小屋に連れ歸て兩人の腰を繩にて連ね縛すること恰も我國にて懲役人を兩〻約しし置くか如し。又た此の小屋には小頭とも見ゆる蠻奴あり一切余等の逃逃を監督するものならん此の小屋に在る六七人の者も皆同樣に兩〻其腰を縛せられ居れり中には全く繩のなきもあり。察するに彼等は近傍部落の蠻奴にして戰に敗れ此村に捕へられて苦役せられ居る者ならん乎。彼の小頭は余等二人を受取りし後先つ兩人の五躰を檢めたり。余小聲にて菊川氏に囁て曰く「此地は何れの國ならん歟」氏「暑熱此の如く甚たしきを見れは蓋し尙ほ東印度諸島の中に相違なし。然らは浮城海王は尙ほ此の近傍に泊し居るならん。兩先生の慈仁なるや必す我々を探搜して救出さるゝの望なきにもあらさらん。甚た覺束なし若し此地が海邊なりせは我々を見出すことあるべきも先刻氣球より見下ろせし時を思ふに海邊を去ること甚た遠く深く内地に入りしと覺えたり。兩先生如何に慈仁なりとも日本の廣さに四五倍する東印度諸島。爾かも内地

の一村落に尋ぬ當らんことは殆んと望みの外と云ふへし。只た何とかして我々は此地を首尾好く逃れ。海邊に走るに如くはなし。余曰ふ「然らは先つ蠻奴を油斷せしむる爲め暫時は貞實に甘蔗圃に勤務せは如何ん」と語。未た終らざるに彼の小頭忽ち棍棒を提け來り余等兩人を押据ゑ臀部に數十棒を與へたり。蓋し二人が逃走の計を物語りしやを疑ふならん

第二十九回　モルヒテ劑

翌日より。同舍する七人の蠻奴と共に。早天より出て甘蔗圃の草取をなす。笠なく衣服なし。熱帶の日光皮膚を燬て血液沸くか如し。偶ま甘蔗の葉蔭に憩はんとすれば。小頭。忽ち眼を瞋らして叱責す。苦痛。言ふ計りなし。殊に食物とては蕉實を第一の好味となせども彼の小頭のみ之を着服して我々には僅々二三顆を分ち與へ。我々奴隷は總て皆半枯になりし甘蔗の切り捨てたる根や幹を嚙るのみ。余は生來下戸なる故。左程にも思はねども。菊川氏は上戸なるを以て。甘蔗には最も閉口し苦悶を鳴らせり。期く終日炎天に苦き仕事を勤め了り夕方に至て稍や涼氣を催せし時。一群七八名の蠻人此の圃に來り見る。蓋し新俘の捕虜たる我々二人を物珍らしく見物に來りしと見えたり。彼の一群の人物を見るに身体過半は裸體なるも昨日見たりし者共に比すれは稍や多く色布抔を腰部及ひ肩腕に纏ひ居る躰裁。何樣婦人らしく思はる。然れとも其面相の粗末なること言語同斷にして何れも皆額出て。鼻ヒシャげ。唇厚く。顏の形は盆に似て色の黑きと甚し。但し男子に比すれは幾分か黑色は薄き方なり。余等二人を見て彼等互に且つ笑ひ且つ囁く

余竊に菊川氏に問て曰く「彼等は婦人ならん乎」氏曰ふ「其服裝。態度。何となく物柔らかなるところあり定めて是れ女性ならん」余曰ふ「此村の女子皆總て彼か如き面相ならん乎」氏曰ふ「昨日余等を環視せし者共の面相は一層醜き者多かりしにあらすや」と余は因て思ふ。日本に生れたる男子は好運なり。日本の女性を彼等に比較せは同し人間なれとも其相距ること果して幾十級ぞや」と氏に言て曰く「此村にても女子ゆゑに騷動の起る事あるべき乎」氏曰く「定て之れあらん」余等低聲。此の物語をなす内に。彼の一群中にて二十五六歲と見ゆる一女子。ツカ〳〵と進み來て余を抱き余の頰をペロリと嘗めたり。余はアッと計りに二三間飛ひ退りしが。腰の綱にて菊川氏を引倒したり。氏慌

て丶曰く「之を忍へ。女性に無禮を爲すなかれ。一たひ其怒を激せは。忽ち我〳〵の性命に關せん」と余は止むを得す彼の女性に對して笑顔の愛想をなせり彼の一群歸り去る後ち。菊川氏嘻笑して曰く「好男子厄運多しと果して然り。余の如きは堂々たる好丈夫。威有て猛からす。故に蠻婦。亦た憚て狎れ近かす」と余も尙ほ說なきにあらざりしが彼の小頭の瞋眼。早く余等の身邊に注くを見て。其儘に默して止みたり。余等兩人。日〻甘蔗圃の草取をなすこと五六日。炎熱。疲勞。其苦言ふ可らす。然れとも蠻奴の疑ひを散せんため最も實躰に勤務し且つ意を用て小頭を崇敬せしかは。思の外に呵責も受けさりき。唯た茲に苦痛なるは彼の醜女子が時々出て來て余の煩を嘗むるの一事なり

此の如きもの十餘日。或日の夕方。村中大騷動の樣子あり我〳〵奴隷部屋の小頭も亦た余等を促し立て丶之に起く。何事にやと起き見れば。村內副酋の住家に至る家の內に蠻人多數居並ひ。聲を揚けて何事をか歌ひ騷き。中央には巫女らしく見ゆる者。角を戴く面を被り頻に躍り廻はる。是れ必らす祭禮ならんとて能く〳〵視れは其上座に當て先日見たる副酋。七顚八倒の苦を爲し。頻りに腹部を押へて煩悶し妻子とも覺しき者相集りて看病す。菊川氏眉を顰めて曰く「是れ祭禮にあらす。必らす祈禱ノ踊ならん。察するに彼の副酋。急病にて悶へ苦むを療せんとて御祈禱をなすにはあらさる乎。嘗て作良先生が東印度諸島蠻人の風俗を物語りし節。土蠻中或る部落には人の病むに當り醫藥を用ひず巫女の踊を催すとのことを語れり。夫れ或は是れ乎」と言ひつ丶頻りに眺め居たりしが氏曰く「彼處を視よ棚の上には我〳〵の時計。洋服及ひ注射器あるにあらすや。我試に彼を治療し遣らは如何ん」と兩人乃ち小頭に手眞似をなして。副酋の前に伴行かしめ。彼の注射器を以て其腹部に點すれは苦痛直ちに止まるへしとの手眞似をなし我〳〵の意を通せんとす。手眞似の通辨。甚だ難儀なりしと雖とも。「苦しい時の神頼み」なる諺に違はす副酋の妻子等は余等二人が異類の人物なるを見て何か奇法もあるへしと思ひしや。副酋の妻は彼のモルヒ子の小罎と注射器とを取來て我〳〵に授けたり。菊川氏乃ち病人の腹部を按し。皮下注射器にモルヒ子を入れ手早く之を一注す。一二分間を出てすして苦痛忽ち搔消す如く去りしと見え彼の副酋は夢の醒めたる如き樣子にて頻に菊川氏を眺め見。妻子等に何

博文館創業十週年紀念

事をか語りしは苦痛の一時に去りしを説明せしならん妻子等。慌だしく菊川氏に向て叩頭す。副酋か何事を列座の蠻人に命せしや否や彼等は俄に棚の上なる洋服を取來て菊川氏に與へ其腰繩を解くなど總へて是れ謝恩の樣子なり。前日見たりし老酋も亦た出て來て菊川氏の手を取り頻りに何事をか語りしが意味通せず。菊川氏は仕たり貌に洋服を穿て上座に据ゑられ。其れより蕉實。カヽノット等の如き珍味の御馳走を受くる樣子なり。余は裸體の儘。遙か末席に追下けられ羨しきこと限りなし。此れより復た踊りあり。祈禱の踊皆散し歸る。菊川氏來て余の背を撫して曰く。「如何んりが全快の祝と變せしものならん。此夜十一時頃衆蠻大國手何卒

〈藝は身を助ける」と余祝して曰く「無論なり。子の周旋に由て余も亦た甘蔗圃の苦役を免れんとを一氏首肯して曰く「善き機會を見て必らず子の苦を救はん」菊川氏に別れてより。余は憂を共にするの人もなく。窮愁無聊。時々刻々菊川氏の周旋にて此の苦役を免るゝの沙汰あらんことを祈ると雖ども。其後二三日を經るも未た曾て何等の報を得す。菊川氏も其後は曾て影をだも見せす。我れ一人の不運を思ひ菊川氏の仕合せを考ふる毎に物皆一として余か

〈

涙の種ならさるはなし

第三十回　循環

菊川氏とは相別れてより未た相見ず。待てとも信なし。余一人にて此地を逃げ出るも何方を指して走るへき。道なき深山を彷徨ふ中復たも猛惡なる蠻族に捕はれんより。寧ろ此地に在て菊川氏の執成を待つ。苦役を免れし上二人して事を謀こそ優しならん抔と我か行末を思ふに付け心細さの彌や增して夜々枕にする肱には涙の滴ること多かりき或日。例の通り甘蔗圃に出て又も苦役を爲し終り。稍や夕暮れ近き頃。老酋。一人の女子を伴て。余の畠に來る。此の女子こそ別人ならす。彼の時々來て余の頬を嘗るものなり。余は老酋を見て直に跪坐叩頭せしに彼れ急に余を扶け起し。其伴來りし女子を指して余に何事をか語る。女子亦た涙を垂れて余に抱き着き。頬片を嘗むること二三遍。老酋亦た涙を垂れて頻りに種々の手眞似をなし余に語る。一向に解すへからす。然れとも察するところ此の女子は老酋の最親血族にして余に愛情の切なるが爲め其乞を容れて余と夫婦になり吳れよと語るものゝ如し。之を拒絶せん乎余の前途に

は浮む瀬なし。之れを承諾せんか妖怪と配をなすに同じ。余は進退實に茲に窮ゆりしが。一寸伸ひれは。尺。伸ひる。婚。不婚は此時の事。先つ差當り甘蔗闘の苦役を免るゝを急とす。いで嘗め返して余が愛情を示さんとは思ひしが待て暫し。余は彼の女子が愛情の爲に涕泣すと解すれとも若し他の意味ならんには公主を嘗る大不敬の罪に問はれん。如何にせば是れ善けんと躊躇せしが唯た是れ死生を賭するの一擧と諦らめ。彼の女が再ひ余を嘗めたる時。余も亦た彼を抱きて其黑き頬片を嘗め返へすこと四五遍。少女は忽ち涙を收め。余を見て。ニッコリ。笑て媚ぶ。醜益〻醜。余をして一見悚然たらしむ。老酋亦た余の愛情を表するを見るや大に悅て直に小頭を呼ひ。余の繩を解かしめ。余に向つて已に隨ひ來るへしとの手眞似をなせり。余心中喜んて曰く「福運。循り來れり」伴はれて老酋の家に至る。種々の果實を出たし歓待至らさる所なし。熱ら〳〵内の樣子を見るに老酋には妻なし已に死せしものなる乎。彼の女子には前に夫ありしが今は亡きものならん。父子二人の外には他に家族ありとも見へす。尤も使役する蠻童蠻女は其數三十餘人もあるへし。此時蠻童等は先きに余が剝取られたる洋服及ひ靴帽子。時計抔をも携へ來て與へたり余は之を着服し。久振にて上井清太郎の舊形に復す。自ら顧みれは余が人品一層立上かりしを覺ゆ。此時又た頬片を嘗めらるゝこと一遍

野蠻未開の時代にも男女の別は頗る正きものと見へ。老酋は余を其家に請して佳賓となせしと雖も。余を別室に寢せしめ敢て人の入來るを許さす。是れ未た婚儀を取結ばさるか故なるへし。余に於ては一段の仕合とす。翌日起き出つれは。又た種々の馳走あり。彼の女子は朝より始終余に附き纏て瞬時も離るゝことなし。余の閑處に赴くも彼亦た隨ひ來る。余思ふ此の如くんは。余等他日必らず逃走の便を失はんと。又た思ふ我れ川を渡り逃れなは。此女必らす追ひ來て。日高川の活劇を演出せんと。余は彼の老酋と少女との歓待に對し德義を失することなからんとて何事も二人に對し務めて親切に擧動せり。唯た戀情は人生天然の自然に發し。矯飾の能く生する所にあらすと見へ愛情の一點に至ては余は如何に黽勉するも、曾て胸中一片の慾火を發する能はす唯是れ戀愛の鍍金を蒙らしむるに過きさるのみ。彼の少女か今少し淡泊にせよかしと所るのみ其五月蠅に閉口す

此日の夕方。副酋。菊川氏を從へて來訪す。菊川氏余を見て驚て曰く「子は如何にして此處に在る乎」余傲然として曰く「好男子福運多し」氏問ふ「子は亦た如何なる藥劑を用ひたるぞ」余答へて曰く「守宮の黒燒の類のみ。モルヒヂの如き野暮なるものにあらず」と氏は尙ほ頻りに室内を見廻したりしが忽ち彼の少女の在るを見出たし始めて覺る所あるか如く手を拍て曰く「解し得たり〳〵我れ之を解し得たり。子の好運寶に驚くに堪へたり。余は此國の一等侍醫に採用せられて自ら誇り居たりしに誰か知らん子は早く已に此國の太子と變化せんとは」余曰く「我實に即位せは必らす子か朋友に不信なるの罪を糺さん。子は苦役を免るされてより已に三四日を經たるも未た曾て一回も我か甘蔗圃を見舞ひに來らす。我か窮苦を救ひ出たすことを計らす。今蹔て憂然ぐして此所に來る。何そ其不人情なるや」氏曰く「我れ念々子を忘れさりしと雖とも如何んせん彼の時注射せしモルヒヂの効能は一時の苦痛を免れしむるに止り。其病根は劇しき食傷にして爾後尙ほ多少の治療を要したり。藥劑なく機械なきに我れ種々なる草木の葉を試驗し三日にして漸く彼を療し得たり。今日は即ち其床揚げの日なり。余か副酋の家を出てしは實に今日を以て始とし。他處に赴くは亦た此家を以て始とす。子之を疑ふとも後ち必らす氷釋せん」余曰く「余も必然此の如き事ならんと察したり。余も昨夕始めて此家に伴はれしのみ」

第三十一回　盛事

十餘日の後は余も稍や此家の風儀に熟し。万事。老酋と女子との氣を損せさる樣に振舞ひしかは。老人は余を二なき者に珍重し。女子は益々余に纏着して離るゝとなし一日。女子の擧止。殊にソワ〳〵として朝より家内。部落。一同取込みの樣子にて種々の器具を運ひ奔走するは盛宴を張るの準備ならん余の心早く已に覺る所あり

此日午時。菊川氏。老酋の風邪を來り診し。余に低語して曰く「今夜は是れ子か合體の良宵と定まりしに似たり。加之のみならす。國王讓位の儀式も亦た當時に擧行すへしと聞く。余も朝來已に之を疑ひ實は悲喜相半はせり」氏曰ふ「子愈〳〵女子に婚せは我々後日大に遁逃の便あらんとを悅ふと余。頭を打掉て曰く「否な〳〵余は近日已に遁逃見合せの志を生したり。試に思へ。

此の部落。小なるに似たれども處々に附庸多く。頗に朝貢を絶たず。察するに其版圖。人口亦た極めて衆大ならん。我れ若し幸にして老酋の嗣子たるを得は。此地に一大王國を建て。以て兩先生の新王國に附庸たらん。是れ豈に良策にあらずや。今より我〻再ひ浮城海王に乗込て幾多の艱難。酸辛を經。死生の間に出入するに比せは其得る所。果して幾何そや。子も亦た余と共に永く此地に留まるを可とす余が愈よ王位に即くの日は子を以て關白と爲すこと。恰も日本帝室の藤原氏に於けるか如くならんは豈に亦た善からすや。氏曰く「大形の事を言ふ勿れ。察するに此の部落は其所屬を合するも人口二三萬の上に出でじ。假令ひ其地面は廣大なるも只是れ草莽丘澤。無用の山川のみ。人口上より言ふときは日本東京の麻布區長の地位に過きさらん」余「其饅る所は子孫に至るも免職の憂なきに在り。凡そ國に貴む所は土地の廣狹に在り。一時人口の多寡にあらず。日本とても開國の初は亦た是れ戸口稀疎なりしに相違なし。余は思ふに。神武天皇御東征の頃には九州の人口必らす二三萬に越えさりしならん。日本本部もヨモ亦た二三十萬には過ぎし。然るも其以降。明君賢相相繼て民を愛し德を修めしかは今や世界屈指の上國となれり。前に氣球上より打眺めし時の事を思へ。此國の版圖。實に廣きにあらすや。我か子孫は王位に上り。子の子孫は關白と爲て。德を修め民を愛せは亦た焉んそ一大日本國を此地に生せさるなきを知らんや」氏「果して然らは子は此國の神武天皇と爲る積りなる乎」然り。余は大日本の文明を此國に輸入せし始祖なるが故に。後世我を謚して文明天皇となすべき旨を遺言せんとす。子も亦た開國の元勳なれは稱して『菊の内の宿禰』となさん一氏熟思して曰く「否々。余は此の如く氣候暑く。人種醜き國の關白たらんより。寧ろ日本の車夫たらんとを欲す」と氏又た曰く「何は兎もあれ。ビーフステーキとなる所より一躍して國王と變化す。子は先つ仕合に相違なし。子。夫れ愼て蠻人の怒を激する勿れ。子の失錯は忽ち禍を余の身に及ぼさん。今夜の婿入殊に大切なり。能く彼の女子を愛敬せよ。と余は忽ち思ひ起す。今夜の大難事。如何にせば是れ善けんと。菊川氏には安心せよと諭して一と先つ相別れたり午後一時。老酋。余を伴て新に取設けし廣大なる假小屋に至る。見渡せは副酋始め。部落の重なる蠻人千

餘名已に集會し兩邊幾重にも居流れたり。老酋余を導て上座に伴ひ已れ第一位を占め余をして第二位に着かしめ。衆人に向て何か宣言する所あり蓋し「上井氏を我家に留めて其人と爲りを察するに智慮周到にして度量寛宏。舉止温雅にして心術潔清。眞に是れ大國に王たるへき人物なり是の人。位に即かは民富み國榮え五風十雨。天長地久。國祚無窮ならん。依て今日此處に讓位の式を行ふものなり」との意味なるへしと推察す。此れより副酋亦短き演說をなせり。余は上座より見渡すに菊川氏も亦た蠻人中に打交り十四五番目の處に異り居り。時々横目にて余の面を仰き見る。余は威儀を整へ殊に人品を繕ひ。日本人種の高尚なる風采を示し呉れんと聊か氣取て。少しく作良先生の風采に倣へり。演說終るや衆蠻人一同余に向て匍匐頓首し敬禮を表す。余も亦た老酋の指圖に從ひ長拜して其禮を受けたり。菊川氏益々余の面を見る。此にて式終り。家に歸る。武器を携へたる蠻人四五名余に隨ひ來るは蓋し近衞兵ならん。

部落中處々に松明を點して晝より明かなり。彼處此處に異樣なる舞蹈を開き。余等の家にも三組四組の踊り絶へす。余が皇后は。何れの國より買來りし物品なる歟。種々樣々の彩布を。足とも言はす手とも言はす。結ひ着け得へき限り彼處此處に結ひ下けたるは。恰も是れ古着屋の店頭に似たり。已にして夜も早や十一時ならんとす。今一二時間を經は。華婿。新婦合歡の盃を擧けざるを得す。之を思へは殆んと人身犧牲に上るの心地す

第二十二回　クロコダイル

夜十二時。余家。將に宴を撤せんとす。部落中他の處々にては尚踊りサヾメけり。華婿新婦此より愈よ鴛鴦衾裏の人たらんとす。忽ち聽得たり外面俄に物騷かしく。叫喊の聲。遙に耳に達するを。余は先つ外面に躍り出て。ト見れは聚落の一端。焰々として火光起り。老幼の叫ひ苦む聲。壯丁の喊を合する聲。物凄ましく聞ゆ。四隣の男子等は槍を提げ馳廻る。余と家の老酋も此時は已に在らす部落の急に赴きたるならん。家内三十餘名の者も只管散走し四五名の蠻女は馳集て無理に新婦を擁し。遁走を勸む。

菊川氏喘ぎ〳〵馳來て曰く「事あり〳〵」余は問ふ「定て是れ内亂ならん」氏曰ふ「否々。外寇ならん」と火勢益々盛んに吶喊の聲。近つき迫る。余等相言て

曰て「此場合。寧ろ遁走に便ならずや」と二人相伴ひ一サンに逃け走る菊川氏曰ふ「川に沿て岸を辿らは自ら海邊に出てん。先つ草樹多くして身を隠し易き地に投ぜん」と余等は火光の遙に路を照すを幸ひに稍や二十餘町を落延ひたり。小高き丘より顧みれは余か宮殿は已に一面火炎の裡に在り。余の心中。密に彼の老酋と女子とが幸ひに死を免かれかしと祈りたり尙は只管走り去ること一里餘。火光稍く遠く。前途辨すべからす。余等二人灌木叢中に伏し隱れて天明を待んと決し。疲れたる儘暫時睡に就んとするも蚊軍。隙間なく攻圍し安眠する能はす。兎角する內。夜も早やホノ〳〵と明くイザ是より川ある方に赴かんと。行こと未た七八町ならすして遙の彼方に物音せり。二人樹枝を攀て窺ひ見れは五十餘名の蠻人。此方を指して來るなり。兩人膽を消して。直に一叢茂れる笹藪の中に埋伏し。息を殺して彼等の通り過るを待つ。待つこと十四五分。一群來り到る。余等二人を隔つること僅かに十四五間計り。小笹の間よりチラ〳〵と彼等の姿を見る。其中一蠻人忽ち立留て四方を眺め顎に鼻をヒッカセて何か臭を嗅く容子なりしが自餘の蠻族等亦た皆鼻を土に着け顎りに嗅廻すこと恰も犬の如し。其中最も鼻の利たる奴なん一人顎に臭を嗅きつゝ余等の埋伏せし笹藪に向て進み來る。最早堪え得す余等二人絶叫して躍り出つれは。彼等吶喊を作り一斉に得物を擬して進み來たる。此際我々。策の出つへきなし。唯地上に平伏して哀を乞ふ。彼等亦た屠殺せす。余等を縛して伴ひ行けり。此種の蠻族か相貌の猛獰なること我が部落の人種に十倍す。筋骨も亦た一層の逞しきを覺ゆ。彼等の過半は槍を帶ひ。十の一二は異樣粗造の少銃を携ふ。何の地の製なるを知らすと雖とも不器用なること日本火繩銃の下に出つ。又た腰には大刀を帶ふ。刀柄。飾の部落を來襲せし軍團中の一部と見へ槍の尖には各々人頭を貫き擔へり已にして川岸に出れは彼等の乘り來りしと見え二十餘艘の獨木舟あり一隻僅に二三人を容る。彼等は余等をも伴ひ載せ。流に沿て川を下る。下るに從て川幅は三四十間。水流甚た急なるに定めて是れダイカ悪蠻族。彼等は我々人髮を以てす。

川幅漸く一丁餘となる。船。水流急ならす船を操るの術亦た拙し因るとは雖も川の大なること知るへし。午後四時に至れとも二人。食を得す。蠻族等も亦た食はす。余低語して曰く「空

腹に堪へず此の如くんは必ず餓死せん。蠻人等亦た食ふ所なきは何ぞや」菊川氏曰く「未開の蠻族は。一時に多食して一日。半日。食はさるも平氣なりと聞く。彼等蓋し食溜めを爲すならん。然れとも奴輩實に事を解せず。羊。豚。家鴨の如きも之を屠るの前には必らず多量の食を與て之を肥すを常とす。余等二人を飢瘦せしむると此の如くんは之を啖ふに當て必然其好餌を減せんと。今や余等は明日の死生を憂ふるに暇あらず唯是れ現在の餓死を免れんとするに止るのみ。此日薄暮。川幅二三町の廣さとなる岸上一部落あり。船此處に留る。引立てらるゝ儘、赴き見るに其家屋の粗末なるは先の部落に劣ること數等。家の周圍には棒を並へ立て。其端には幾個の人髑髏を並へ懸く。又た棚の上にも二三の髑髏の並へ陳す。又クロコダイルの皮骨わるを見る。余等魂飛び神消ゆ。此夜は縛せられて屋外の樹下に繫き置かるゝこと終夜。菊川氏低聲嘆息して曰く「上井氏之を聽け。余は日本を發する前。同學の友人より大學醫學部に推薦されたりしに余は之を謝し告るに海外行を以てす。其人固く之を止め。余の不量見を諫めしと雖も余は倘ほ前志を飜へさず。遂に兩先生に從て出發せり。今にして之を思へは實に淺慮の至りなりき。若し友人の言に從はゝ今頃は本鄉邊に出勤して衣食住も不足なく。世間一通りの尊敬をも受け居らんに。非分の大望を懷きし爲め斯も果敢なき悲境に陷る。蠻族輩にムシリ食はるゝことの口惜さよ」とて咽嗚せしかは余も亦た涕泣して曰く「余も神戸の稅關に知人有て周旋し呉れたりしに唯た東京にて身を立つる事の望ましく其好意に背きしが今更思へは不運なるかな。返す〳〵も。身分不相應の大望は懷くましきものぞかし」と相對して落涙せり夜明く。空腹に堪えず眩暈を催さんとす。此時二三の蠻奴來て蕉實八九顆を投與ふ。二人。足を延へて搖寄せ。口つから之を食ひ。稍く死を免る。午後小銃を肩にする者十餘名出來て樹根の綱を解き又た二人を追立て行りゝ。行くこと二里餘にして草樹蘆葦森々として生茂れる川端に出ゝ。二人をジカと岸頭に繫し置く後ち彼等は皆退て彼所此所の草樹中に埋伏せり。余。菊川氏に低語して曰く「何事を爲すならん乎」氏「彼等小銃を以て我々を狙擊し。然る後疾う食ふならん」と最早此時に至りては二人とも觀念して空しく死命を待てり。今か〳〵と四五分間を經るも曾つて小銃を發すべき態なし。此危急の際ながら。不審に堪えず。菊川氏忽ち余

に言て曰く「彼等は。我々を狙撃するにあらず。何物をか待つの狀あり。先刻彼等の村落の鰐魚の皮を多く乾しありしを見たり彼等或は我〻二人を餌となしクロコダイルの水中より現はれ來るを狙撃するにはあらざる乎」余も亦忽ち悟り得たり「此說或は當らん」と此時川の有樣を打眺むるに人頭を沒する計りの蘆葦莽々として汀渚を蔽ひ。大江の水流漲溢して此處には四五十間四方の淀みを爲し。一の深潭を形つくる。水色深藍にして黑みを帶ひ。水の深さ幾十仞。九淵水黑くして。惡魚下に躍るに似たり

第三十三回　伍長

余等兩人岩頭に縛せられながら眼を凝らして瞬きもせず水面を見詰め居たること二時間計り十四五間を隔る岸畔の川底俄に浮み上るが如く。川涙左右に高まると見ゆるや忽ち金晴巨口の一大惡鰐クロコダイルを現出す。大小の鱗甲總て灰黑色を帶ひ。隆起低鮫古松の膚の如く。水を帶て光澤あり。巨豚の長き六尺に餘り。全身方に三丈なるへし守宮の如き短矮の四足にて余等の縛せられ居る岩頭を望み徐々として這來る。兩人絕叫して身をモがき。空しく眼を睜て彼を睨み付るの外。爲す所を知らす彼已に好餌を貪る他を顧るに暇あらす。歩一歩を進め來り余等に迫り近くと五六間。巨口を張開す。其上顎下顎に植列べたる鋸の如き鋭牙はアヤ今こそ余等の兩脚に達せんとす。前後の草叢中忽ち一齊に小銃を亂發す。惡鰐高く吼ること一聲其聲牛の如し。沙上に悶倒して七顚八倒す。進み近くへからす。時蠻族等跳出て來り七八間を隔て鰐の眼に擬し。又た二三發を放つ。余等兩人始めて蘇生の心地せり。蠻族等相集りて頻に鰐の銃痕。揄め見る。我等の銃丸は多く其眼邊を望んて亂射せしと見え眼の邊より頭部にかけて血に染む所多し。蠻奴等相集り彼の獲物を牽き上けんと欲すれども殊に重大なるを以て十餘人の力。容易に動かし得へきにあらす乃ち余等兩人の縛を解き（腰繩を解かず）與に之を助け牽かしむ余等際間あらは遁走せんと欲すれとも彼等已に小銃を帶ぶ追射せらるゝの恐れあり。止むとを得す彼等の命に從ひ。共に鰐魚を陸上に引揚るの手傳を爲す。已にして又余等を一町計り隔てし樹下に繫きたり此時江上二十餘間を隔てゝ蘆葦の茂みより忽然二三發の銃聲起る。鰐の周圍に環立せし蠻奴三名。聲響に應して。顚倒す。餘衆吃驚して四方を視廻す中。又二三發

を發射す。響に應して斃るゝ者二名。蠻奴狼狽し深林中を望て遁逃す。唯た見る一葉の端艇。遙に水面上に現はれ來るを。余等兩人第一の砲聲を聞きし時。樹邊の草叢中に埋伏して樣子を窺ふ。蠻奴遠く遁走して敵に應し銃を發するなし。船中の人々漸ゝにして來り近く。余等草叢中より遙に之をスカシ視る。彼等は岸上の鯉魚に驚きしと見え。舟を洲渚に漕着て上陸せり。余等兩人叢間よりツク〳〵と熟視すれは何ぞ圖らん小銃を携へて先頭に進み來るは是れ海王丸の水兵伍長吉田ならんとは。余等二人覺へす草中より轉かり出てゝ曰く「吉田〳〵」と吉田及ひ五六の水兵人有りと見るや小銃を擬し。余等を凝視す。余等慌てゝ叫んて曰く「菊川上井なるぞ粗忽する勿れと。我々の日本語を用ふるを聞くや。彼等忽ち馳來て兩人を環視し愕然たり。吉田曰く「兩君何の爲に縛せられて此處に蟄伏し玉ふや。余等船中にて皆噂せり。兩君は長く空中を旅行し瞞ゝ面白き事ならんと。何そ料らん此地にて相ひ逢はんとは菊川氏曰く「余等空腹堪へ難し。長物語を爲さは恐らくは眩暈せん。舟中些少の麵包なき歟」曰く「有り」「然らは先つ取來て我ゝに喫せしめよ」我ゝの後に廻て縛を解き呉るゝあり。ハンカチーフを水に絞り躰を拭ひ呉るゝあり兎角する中端艇中より種々の食料を持來る。吉田。水兵に命して二三名つゝ遙に哨兵線を張らしめ蠻奴の來襲に備ふ。先つ毛布を持來て樹下の小陰に敷列らね病人を息はしむ余等注意して曰く「此邊鯉多し。油斷せは又た復た現はれ出てんと。乃ち端艇二艘を涉上に引揚け一行十四五名川より一町餘を隔てし走生に集る。余等兩人先つ差向き。麵包を貪り食ふ其幾片なるを知る可らす。吉田傍らより制して曰く少く戒めすんは必ず霍亂を發せんと。然れとも二人。親の讐仇に出會ひたる如く。塩豚。サンドウ井ッチの類を攻擊して遺す所なし。水夫等。菊川氏を指し笑て曰ふ。御醫者樣の不養生。果して然りと。氏叱して曰く「命は食に在り」三人且つ食ひ且つ語る吉田。其携帶せる些少のブランディを進む菊川氏。一飲。舌を鳴らして曰く「酒氣五臟に徹す」

第三十四回　大患

余等。飢を醫する後ち直に端艇に乘込み流に沿て漕き下ること三四里。始めて遠く海王丸を望み見る。二人喜ひ極て雀躍す。醫時にして其下に漕着けたり。杉村。梅山。鞏の三氏甲板の繩欄に憑て瞰下ろせとも

却て余等に氣付かざるものゝ如し。伍長吉田大聲を發し遙に呼て曰く「某等。菊州。上井兩君を連れ歸れり」と諸氏俄に甲板を駈け下り。二層板なる階子の上頭より余等を望て曰く「兩君。恙なかりし乎。今日迄何れの地を彷徨しぞ。芽出度し〻〻〻」と余等赤裸の儘、謝して曰く「幸に命を拾へり」此より諸氏に誘はれて。甲板上テントの蔭なる椅子に着き。互に無事を祝するの挨拶終る。梅山氏余等の容子をツク〳〵と打眺めて曰く「風船の飛去りし後は一同の氣遣ひ一方ならず。風強く氣球輕し多分は印度地方か左なくは交趾支那の邊に落下せしならんと評議區々なりしが圖らざりき近く此邊に在らんとは」菊川氏問ふ「此地は是れ何れの國なる乎」梅山氏「子等久く此地に在りながら却て其何の國なるを知らざる乎」我々は久米の仙人同樣。雲間より落下せし儘。幾旬間。人間世界に有りと有らゆる難義を嘗め盡し一日片時も安堵せし時なし。豈又た地理國名を探り聞く抔の暇あるを得んや」梅村氏。傍より言て曰く「此地は是れセレベスの西北岸。ハムバワの碇泊處を一海峽を隔つる一足端まで。看〻看し覺えず噴笑して曰く「兩君の頭髮は蓬々として塵芥を戴き皮膚は黑光を放て漆をかけし如く。顏一面に泥と垢とを混し兩眼のみ。バチ〳〵と光るところは殆んと唉人種に異ならず。上井氏も情けなや好男子たる傷は全く消去て別人の如し」と菊川氏遽に答て曰く「否々。輕蔑するを休めよ」上井子はセレベスの公主に愛着せられて一たひは其王位に即けり（諸氏皆驚きし色あり）唯た新王。色に荒んて。政を忘り。武備を修めさりしかは。忽ち敵國に襲擊せられ余も亦た之が爲に非常の苦楚を被れり」と是れより。余等兩人代る〳〵風船の飛去りし以來。今日に至る迄の履歷を物語る士官水兵等を初とし幾十人余等の前後を環圍して聽聞す。余等益ふ興に入て演說す。杉村氏。羨まし氣に曰く「惜むべし〳〵。余をして彼の部落の新王たらしめば必す能く一大王國を興さんに。上井氏が武技の心懸けなきより即位僅に一日にして忽ち亡國の君と變ぜんとは返〳〵も遺憾に堪えす。余は他日兩先生に乞ふて必らすセレベスの內地を廻歷し。最強部落の公主に謁して必らす一大強國の基を建てん」と列坐の壯年士官等は皆喧し。余の履歷を羨ざるものなきに似たり。余心中笑て曰ふ「彼等若し公主を一見せは必ら遂巡辟易すへきに」と菊川氏が未た彼の女子の面

相を説明せさるを幸ひに余も亦た彼の公主は相應の美人なるが如く裝し居たり。此時一士官曰く「敵人襲來の後上井君の皇后は如何に成行きし乎」菊川氏曰く「死生未た詳ならす。或は其禍を逃れしならん」士官余に向て曰く「果して然らは上井君は他日復た彼の美人に邂逅し義兵を擧くるの時あらん。幸運〳〵」余亦た答て曰く「他日兩先生に乞ひ必す再擧を謀らんと欲す」

菊川氏。梅山氏に問ふ「兩先生始め一同定めて御健安ならん。諸君は何用ありて海王丸を此地に乘込みしぞ。我〳〵二人を探搜するか爲乎」氏曰く「左れは其事なり。兩君の空中に去りし後。日ならすして探搜に赴かんとの議ありしが。我〳〵一行の中に大事變起り其混雜にて探搜も後廻しになれり。余慌てゝ問ふ「大事とは何事そ」氏曰く「他にあらす。作良先生非常の大患に罹り性命殆んと覺束なし。船中藥劑なきにあらぬとも肝腎なる大國手（菊川氏を云ふ）は不在なり。先生連日四十度以上の大熱にて絶えす譫語を吐くに至る。一同の心配。筆紙に盡し難し。化學專務桂氏は聊か醫術を心得居るが故に。菊川氏の使ひ居たる二三名の助手を相手に種々の藥を盛れとも一向に其驗なし先生は我々一行二百餘名の腦髓なり若し万一の事あらば我々は死者も同樣なり彼の慓勇絶倫百難に撓まざる立花綜埋も大に弱り入て又た一の病人を生し出とんとす。余等の心配御察しあるへし。先生の熱を冷さんとするも彼地には一片の氷だもなく。手近き都府はバタビヤなれども是れ已に敵地なり。因て船中一同評議の上。彼の葡人に謀りして彼者は已れ故にバタビヤの戰爭を惹起せしを氣の毒に思ひ居る上。今又た先生の重患を見るに及び憂慮に堪へす。其住地なる蒿領ヒリッピン群島の首府マニラに赴き然るへき醫者を傭出さんと申出てたり同地には氷の用意も澤山あるへしとて俄に海王丸をマニラに赴かしむるに決す余は艦長たるの故を以て此船を督し。梅山。轟の諸氏と共に直にマニラに赴きたり葡人の周旋に依り同地にて氷塊をは多量に購入したれとも。同地は元と殖民都府なるが故に然るへき良醫なく偶ま之れ有るも政府隋きのものにして私に人の傭に應せす。是れには實に困却せり。然れども人間萬事金の世の中なれば余等も高金を吝ます約束を取結ひし爲め。相應なる一醫生を傭入れ。即ち船中に在り。作良先生の性命旦夕に迫るか故に我〳〵は日々極度の速力

を用ひ急航せしか爲にや。今朝此の海上にて俄に蒸氣機關を損し已むを得ず河口に投錨し其修理を爲し居れり。多分明日午時迄には修理を終らん。嘗てアラアン灣の河口に投錨し蠻族に燒討せられしに懲り。今朝直に此川の測量旁〻端艇一二艘をして上流を探搜せしめたり。然るに沿岸にて早くも二三の蠻族が端艇に發砲せしかば我々も敵地の心得にて蠻族と見れば銃擊して上流を測量せしめつゝありし内計らず兩君を救出せしのみ。今にして之を思へは我船の機械が損せしも是れ或は天意ならん。久く作良先生に附添て其身躰構造より持病の有無迄をも明かにする菊川氏を我々に授けんが爲め天夫れ或は此舟を河口に碇泊せしめたるにはあらさる乎之を思へは先生の大患も前途回復の望あるに似たり」

第三十五回　散兵

余等兩人之を聞くや大に驚き憂しが又た先生の病に侍して看病をなし得るの身と爲りしを喜へり。菊川氏は。梅山。杉村の兩氏に就て頻に先生の容躰を問ひ且つ曰く「先生の精力人に過る大なりと雖とも。事を視る多きに過て動もすれは健康を害す。先生の胸中常に宇内の形勢を明にし大業を成さんとするの念。晝夜胸中を離れす故に生來健康に出來たる躰も亦た之か爲に病身と爲るに至る。余は常に先生に勸むるに深く自愛すべきを以てするも先生尚ほ聽納せす。遂に此度の如き不幸あり其病症を察するに蓋し熱帶地方に普通なるマラリヤ熱の類ならん。果して然らば左迄驚くに足らすと雖とも發病の初期より治療に手落ちあらは或は大事に及はん何卒一刻も速かに此地を出船せよ」諸氏曰く「必す明日の十二時を過きじ」諸氏の注意にて直に余等兩人を湯浴せしめ又た洋服。帽子の類をも貰受け始めて人間並の一人と爲るを得たり。夕方より諸氏祝宴を張り兩人久々にて種々の料理を賞翫す。好味言ふべからず。彼の甘蔗の根を咬りしに比すれば實に是れ天淵寔酣にして杉村氏問ふ「兩君の經歷中。危險。最も大なりしは何事ぞ」余曰ふ「問ふを待たず。岸頭に縛せられてクロコダイルの巨喙。將に足先に達せんとせし時のみ」氏俄に思ひ起して曰く「蠻人等が射殺せしクロコダイルは其儘に乘て來りし乎」「然り」氏曰く「惜むべし〳〵。作良先生病中定めて無聊ならん。兩君が彼の鰐の皮を土産として持歸らば先生を慰するの

好談柄ならんに」伍長吉田傍に在て曰く「なるほど。其時は左程大切の物とも思はず棄置きたりしは殘念なり。然れども彼地は此處より僅か三四里を隔つるのみ。某等今より赴く持來らば是れ如何ん」余。心中に思へらく「彼のダヤカ蠻族。我々を遇せしこと如何にも殘忍なり今こそ復讐の機會到れり」と乃ち建議して曰く「若しクロコダイルの皮を得んと欲せば。今吉田氏の語りし地より上流僅か三里餘の沿岸に蠻奴の部落あり。多くクロコダイルの皮を藏す。諸君若し序に彼の部落を襲擊せば必ず多少の獲物あらん」壯年下士官等雀躍して曰く「殊に可なり。輩奴。已に菊川上井の二氏を辱しむ是れ亦た我々の兵器を辱しめたるに同し何ぞ彼等に數箇の銃丸を喫せしめざるを得ん」杉村氏曰く「出船の期。遠きにあらず。不用の戰を開て時間を遲却せば先生の大事を誤らん」と然ども下士官吉田等皆逸り制すべからず。氏も已を得ずして之を許す是に於て遊擊隊長轟氏を司令官とし直に端艇四艘を救下し。下士水兵五十餘名之に從ふ。余。杉村氏に請て曰く「此役や半は余等復讎の爲なれば余も又た之に隨はんと欲す。依ては氏の所持する最遠距離を射るべき射的銃一挺を恩貸せよ」と氏。銃を與て曰く「可成子は遠方より射擊せよ敵に近くとなれ」余口中獨語して曰く「無論なり」轟氏曰く「未た陸戰なき爲め人々より無用の長物の如く罵られし四斤後裝の山砲一門は今尚ほ船底に積みあらん」と水夫等に命して車臺ど砲身とを二艘の端艇に分載せしめ尚ほ燒彈。着發彈を他の二艇に積込み準備全く整ふ夜十時。新月天に在り銀鈎の如し。端艇四隻此地を發す菊川氏は大切の人なるを以て船に留まる

江流を溯ほる三時間。六七里を行きしと覺ゆ。江岸に沿て幽に火光の點々するを見る。余。諸氏に告て曰く「新月光淡くして慥には保證し難けれども地形と云ひ。里程と云ひ余の心に見覺えあり彼地こそ心然惡蠻族の部落ならん」是に於て我兵は聚落を隔つる十四五町の地に上陸し。先つ砲車と砲臺とを擔き揚く。轟氏地形を相するに是處より進むと五六町にして一座の高丘あり。氏曰く「彼地屈竟なり。俯して聚落を砲擊せん」と水兵二十餘名をして砲身。車臺を丘上に引揚けしめ砲兵六名をして之を司らしめ。他の四十餘名を小隊に編制す。余は嚮導たり。轟氏。砲兵に命して曰く「銃兵は聚落に近つく八町にして散兵式を用ひ三面より進まん我れ小銃

打發の喇叭を鳴らさは之を合圖に四斤野戰砲。先つ五六の燒彈を連發せよ聚落に火起らんとき。銃兵其光りに乘して蠻奴の四方に散走するを狙擊せん砲兵は連々着發彈を發射せよ。我か銃兵は「大砲止めよ」の角聲を合圖に銃鎗の總進擊を爲さんと部署定まる余等銃兵。聚落に窺ひ近つくこと八町餘。二人を一伍として聚落の周圍に散布し草樹の中を這ひ進む。距離三町。開戰の角を鳴らす丘上の野戰四斤砲。忽ち一聲の燒彈を放つ。之を合圖に銃兵亦た樹間より亂射す五六分間ならずして村落火起る。殘忍猛獰の惡蠻族等も事の不意に生せしに驚きしと見へ取る物も取り敢へず右往左往に散走す尚ほ幾多蹈留て抗戰する者ありと雖とも我は暗中に在り彼は明處に在り。銃射の利大に彼我を異にす。又四斤山砲は燒彈に次くに着發破裂彈る以てす。響き山澤に震ふ。余は銃兵の後面遠地より大木を小楯に取り蠻奴の走る者を狙擊す。一二名を射斃し得たりと覺ゆ。面白きと猪狩に似たり。若し戰爭をして常に此の如きものならしめは。余も亦た陸軍少尉たるを辭せず。一時間ならずして村落全燒す。進擊の喇叭と與に我兵三面より銃鎗を用て攻入る蠻奴早く散走して抗戰する者なし

燒餘の部落を巡視するに蠻奴の銃砲丸に斃れ居る者數十名。又彼處此處に髑髏人骨堆を成すを見る。諸人相言て曰く「天。我手を借て惡を懲したり」と折角に我々か分捕を目的と爲せしクロコダイルの皮も多くは皆な燒爛れて用に立つへきもの僅か二三枚のみ。是より丘上の山砲を引卸して端艇に積載せ凱歌を奏して中流を下る。先きの蘆葦生茂りたる洲渚に乘りつけ見るにクロコダイルは尚ほ其儘に存在せり。躰量の重さ。一艘の能く積む所にあらさるを以て二艘の間に木を亘し之に約して水中に吊り下け。辛ふして海王丸に歸り來る

第三十六回　大穴

修理早く終るを以て次日午前十時。海王丸此地を發す此日は風なく。海上極て靜穩。只管ら南を望で駛す。セレベスの南岸は遙に蒼茫として右手に見ゆ。余。菊川氏と與に回顧して感慨に勝へず尚ほ當時の事抔を語り出て衆人の笑柄となれり

水夫等相集り第二層板に於て昨夜。持返りしクロコタイルの皮を剝く。甲皮。堅くして刃を受けす。辛くして腹部より之れを割き丸剝と爲し。皮を曝して干し堅

む。クロコダイルは卵生なるか胎生なるかの爭論。諸人の間に起る。地質家梅山氏は動物學に通す諸氏の爲に說て曰くクロコダイルは卵生動物に屬す。其の多き者は一腹百五十卵を生む少きも亦三十卵に下らす。又。クロコダイルは四足短きか故に陸上を走り行く能はす徐々として這ひ進むのみ。又猪頸にして頭を左右に轉折する能はす故に追はるゝ者。廻り走るときは彼れ亦如何ともするを得す。但一たび嚙み付くときは死すとも放つことなし。餓て餌を貪るに當ては惡にして怖れを知らすと雖とも本性は左して恐ろしき者にあらす動物學者の說に據れは之を飼ひ狎らすを得へし現に亞弗利加內地の蠻民中には之を飼置く者あり村家に於て小兒の傍に這居ると犬猫の如きを見たりと云ふ。クロコダイルの種類に十二の區別あり。其大なる者は三丈に過く此獲の如きは最も大なる部類ならん一と午時近く海岸に沿て驟す、陸地を去る三四里の間に在り。諸氏嘗な甲板上の談話室に集まる。葡萄牙の醫師も亦座に在り菊川氏と頻に病理藥劑の事を談す。（英語にて）其外梅山。壽の兩氏及余を合せて五六名。骨牌を弄し輸贏を試む互に勝敗あり。一同餘念なき折柄。船躰忽ち揺と響きて。舟中の物。一ト搖れユルグを覺ゆ。余は吃驚す。必定他船と衝突せりと室外に飛出て見るに四方。物なし。只看る五六名の水夫甲板上に馳來て頻に何物をか搜求す。續て又火夫等。甲板上に馳來る。果して是れ船中異事あり。余等水夫に何事なるやを問ふ彼れ答ふる所なし。薊氏。水夫の肘を握り引止めて曰く「船中何事をか生したん」彼者慌てゝ曰く「船底を乘り破り七八間四方の大穴より海水。瀑布の如く浸入す。我々之を塞かんと材料を搜し求むるのみ」と言ひも了らす忽ち肘を振り拂て走り去る。余等愕然たり實際の樣子如何を視んものと我〻三四名。第二層に馳せ下るや此處には水夫火夫互に力を合せて穴を塞く材料を持運ふ。其騷動言語に絕す。早く杉村氏の令せしと見へ。船中有る限り五六挺のポンプを船底に仕懸けて浸入する海水を汲出さんと盡力す。尙ほ下層底に降らんとすれは其混雜余等の足を着くへき地なし。杉村氏遙に余等を麾て曰く。「諸子甲板上に扣へ居よ。徒らに水夫の妨を爲す勿れ」と余等已むを得ず甲板上に馳上る。此時海王丸は早く航路を轉して陸地に向ひ見る〳〵一二里の地に來れり。今十四五分を經なは一小灣に乘込むを得へし。菊川氏忽ち叫て曰ふ「親よ

〈此甲板は次第に海水に沈み近つくにあらすや」余等。水際を望み見れは已に四五尺を沒するに似たり。此時は船の速力も亦大に減するか如し。然れとも陸地は已に手近かなり假令ひ此儘に沈沒するとも端艇を投下して逃れ去らは。性命には別條なけん唯恐るセレベスの陸地に又た復た多少の厄運を生出せんことを。危急の場合遁走の用意を第一とす余等先つ船室に馳行て各〻身邊に着け得らるゝ丈けの物を帶ひ來り。直に端艇に乘込むの支度を爲す杉村氏甲板上に馳來り率ゆる所の水兵五六名に令して急に端艇を下さしむ。余等五六名我れ劣らしと之に乘込まんとす。杉村氏叱して曰く「諸君狼狽すること勿れ。假令ひ沈沒するにもせよ海水が甲板上を浸す迄には尚ほ多少の時間あり。況んや未た大切なる此船を見棄つ可きにあらさるをや余は今端艇を下たし水夫をして船底の外部を檢査せしめんとするのみ。逃れ走るが爲めならす余等又慌て潤ふ。船。果して沈沒すへき乎」「未た必とすへからす」「破穴は廣大なる乎」「否。六尺四方に越へし船腹礁頭に觸て半は岩を乘り崩し。船腹に損處を生したれとも。船は乘り据へたるにあらす。穴の破れしを見るや直に板片を以て之を塞き螺釘にて杜ち塞かんと欲したれとも如何せん海水の船底に突入し來る勢は恰も水壓器を以て押上くるか如し勢ひ抗すへからす。七八人の力も亦忽ち外部の水力に押上けられ今や下層板は已に半水込となれり。何とかして此穴を塞かすんは到底此船を助くべき望みなし。余等落膽して惘然たり

第三十七回　帆布

先刻より船中騷動の樣子を察し。船底に破竅を生したるを。知り得たる補醫は英語を用ひ忙く余等に說て曰く「昔し航客か印度洋中にて岩礁に船底を乘破りし時。破竅を塞くに苦みたり。然るに一舟子機智ある者。帆木綿を以て之を塞きしに果して効能ありしと云ふ今や危急の際試みて可ならんのみ」杉村氏點頭して直に甲板上を馳去る。此時船は已に灣内に投錨し陸地に近くと七八町なれとも。船脚は次第〈に沈み行き。今此儘に打過きなは暫時にして海水は將に第二層板の下に達せんとす杉村氏水夫に令して帆木綿を五六疊敷の大さに切り裂き之を二重に重さね潛水具を被て水込となり居る内部の船底に下り。帆木綿を以て船穴を蔽はしむ。此時は

船内の水と。船外の水と未た平均を得るに至らされとも船内已に多量の水を含入せしが故。外部より浸入する水勢は已に甚た衰へ居れり。是か爲め水夫等は彼の帆木綿の縁を隙間なく螺釘にて船体に綴着くることを得たり杉村氏又水夫をして潜水器を被らしめ前記する如き帆木綿を帶て海底に下らしめ船の外部より破竅を澈ひ帆木綿の縁端を螺釘にて船体に綴付けしむると船内に於てするが如くせしむ此穴を塞くの働きに殆んと一時間餘を費やせり。是時より海水浸入の勢も稍や衰へたるを覺ゆ杉村氏呼て曰く「今ぞ大に力を用ゆへきの時至る船中の人員。悉くポムプに集れ」と余等の如き者迄亦皆ポムプ方の手傳いを爲す船中八九十名の人員。六七挺のポンプ。間斷なく一生懸命に船内の水を排出す六挺の大ポムプは一分間に十石餘の水量を汲出し得へし。二時間を經る後は船内の水量次第に減し。船体漸々に浮ひ上るを覺ゆ。船内の水量を減すると與に水夫の働き自由と爲るを得て更に帆木綿を巧に破竅に當てがへり帆木綿の十分にピッタリと船体に附着し難き些少の空隙及帆の經緯間より海水ジビ〳〵と浸内すとも其入來る水量と汲出す水量とを。比較すれは出つるもの十の七六。入るもの十の二三に過きす故に三時間を經し時は船体已に全く浮上り。船内の仕事は内より十分に着手するの便を得たり杉材氏更に令して又た幾重の帆木綿を破穴に藏はしむ此時は船底に水なきを以て仕事の働き頗る自在なり堅固なる螺釘を用ひて隙間なく帆木綿を船体に綴着け。短艇の「カイ」を以て十文字の格子と作り帆木綿を壓し其四端を船体にシカト捻留めに爲せり。帆木綿のことなれは外部より海水の壓するを軟かに受け聊かの水を浸出すのみにて。却て板片の如く外部より噴き離さゝるの恐れなし船中の者始めてホッと息を吐く。杉村氏尚ほ潜水器を用ひ亦更に外部より二重の帆木綿を破竅に藏はしむ。若し大風浪に遭逢することなくんは此儘航海するに差支なし。午後五時。此地を發す。船底常に一挺のポムプを用て浸入する海水を汲出しつゝ。再ひソムパッを望て駛す幸にして海上靜穩。二日目の午時ソムパッの大灣に進入す。遥に浮城丸の恙なく碇泊するを望む余等兩人は杉村梅山の諸氏と共に我船の投錨するや否や直に葡醫を伴て上陸す。是より先き。先生の病を療するに船中にては温熱甚たしく不便多けれはとて陸地の

清陰多き地を擇ひ土木專務眞木氏の盡力にて假小屋を建築し先生を此地に移せし由なり。余等諸氏と共に小屋に至る。先生寢床に安臥す。立花綜理を始め諸氏皆其枕邊を環圍せり。杉村氏先つ醫者を伴ひ氷を齎し歸へりし旨を述ふ。余等二人亦進て。只今歸來りし旨を告く。立花綜理始め諸氏皆余等二人には久々の對面にて無事を祝し欣々たらさる者なし先生亦枕を擡げて余等兩人を打眺め無事の再會を喜ふ旨を述へられたり。餘程の重患なりしと見へ流石の先生も肉瘦せ顏衰へ。曾て年生の沈勇壯快なるに似ず。余は覺へす落涙せり。然れとも今兩先生の膝下に歸來りし心强さは恰も地獄を逃れて佛菩薩の懷に抱かれたるか如し

綜理。菊川氏を傍の人無き處に伴ひ語て曰く「此一週間は統領の疾重きを加へ疲勞苦痛亦增し來るか如く我々實に痛心せり請ふ速に之を診せよ」菊川氏先つ枕頭に至て脉を診し全躰を診檢す次て傭來りし葡醫又之を診察すること一遍。菊川氏綜理に言て曰く「思ひしよりは重症なり且熱度も今方に最强時期に在るに似たり」と諸氏相見て顰蹙す菊川氏は葡醫と與に頻に病躰及藥法を相談せり。此時岬頭の哨兵遽てゝ來り報して曰く「荷蘭の國旗を翻したる砲艦五隻遙に沖中に見へたり」と立花綜理俄に諸氏を伴ふて浮城に歸り去る。菊川氏葡醫及余三人先生の枕上に侍して看護す

第三十八回　紀行

頃刻にして立花綜理歸來る。余等に告て曰く「前きの砲艦五隻は我〻の此灣に在るを知らさるにや又其目的我〻を探搜するにあらさるにや。此島の沖を直線に航し去て東南に赴けり多分パプア地方を指すならん」と人〻安堵す。此日は諸氏先生の看護に心を盡す外。他に事なし

翌日に至り。菊川氏葡醫等の藥劑果して其効を示せしにや又は已に熱度の峠を經過せし故にや先生の容躰稍や輕快に赴き。余と菊川氏とに向て種々の事を尋問す。依て水夫等に命して彼の鰐皮を齎らし來らしむ杉村氏。傍らより先生に吹聽して曰く「是菊川上兩氏の土產なり」と先生熟視して曰く「面白き物を持還へれ。余を顧て曰く「定て上井氏が銃殺せしものならん。天晴の手際なり」余甚た答辭に窮す。實を述て曰く「否な。某等兩人殆んと此鰐の爲に食はれんとせり」と是より兩人更る〻風船以來の履歷を演說す。

雨先生始め一座。輿に入る綜理余に問ふ「足下の公主は醜美如何ん」余は聊か返答に躊躇す。先生臥しながら笑て曰く「兩氏經歷の地形を察するにヨモ端麗の美人にはあらじ」菊川氏傍より其面相容貌を説明す此に至て余が國王たりし品位を減することと數等。先生曰く「兩氏の落下りし地方は蓋しセレベスに有名なるサンダ河の上流なり。彼の河は其長さ百六十英里にして同國第一の大河なり。セレベスは其の地形。不規則なる楓葉の如く。四つの長き支脚中央より南北に延長す其二つは北東に在り他の二つは南に在り南端より北端に至る闊の長さ七百五十英里其幅は平均六十英里とす。面積は幾んど日本の半に過ぐ。同地は阿蘭に半屬すと雖ども。内地には獨立の部落多し。阿蘭の殖民地は同國の極南マカッサラの一地あるのみ。夫すらも洋人の數は僅か二百名に過きず。其他は南部に重もなる小邦八九あり何れも皆な阿蘭に同盟す。是等諸邦の民は半開にして字を知り事を記す。又耕稼陶漁の業を知る。然れともサンダ河上流の内地には多少の悪種族あり。旅客の記する所に依れは其獰猛なる殆んとボルネオのダイカ蠻族に同し蓋し其同種の何れの世にか分移せしものならん。菊川上井の二氏が最後に捕はれたるは蓋し此の種族の部落なるべし西班牙の海客バルボサ氏の紀行に依れは。内地の蠻族は實に人肉を嗜み食ふ。酋長が罪人を死刑に處するや人民其肉を乞ひ求むること恰も牛豚の肉を乞ふが如しと云ふ。又酋長死する時は之を葬るに必す二個の新髑髏を要す之無れは葬儀を行ふを得さるを例とす。故に之か爲め他の部落と戰を開くことあり。又マルスデン（印度の神名なり。此族の教法は同地より傳來せるものならん。日本にて摩利支天と稱する者も此神と源を同くするならん）の祭日には必す人肉を供するの例あり。又老て死に瀕するの老人は大に親族を招集し置き已れ喬本の上に登り自ら身を投して死す然るときは親戚矣て之を食ふとも云ふ是等に皆目擊せる旅客の紀する所に懸る。今日はよも夫れ程にはあるまじけれとも彼等は喫人種の一なるに相違なし

先生又曰く「兩氏の落下せし地方が南に偏したるは遺憾なりき若し同國の北端に落下せば上井子も實に仕合せなりしならん。米國の海客ビグモール氏の紀行に依れば。セレベスは北端には印度人種と混合するもの甚た多く其身躰骨格の割合よく美事なるのみならず容姿亦極めて端麗なりと云ふ。上井子若し此地の公主

に尙せは極めて幸運ならんに餘り早まりて風船を搖破りしか爲め北部に達せさる中早くもサンダ河の邊に落ちたり。余をして風船中に在らしめは今暫らく空中に辛防すべきところなりしに」と余等之を聞て今更遺憾なきにあらす

先生又謂て曰く「セレベスの動植物は東印度諸島の中にて最も奇異なるもの多く往々他の諸島に產せさるものあり。動物の如きは最も然りとす。此地の禽鳥百六十種の中にて九十種は他地に類なきものとす。動植物學者の說に依れはセレベスは他の東印度諸島スモタラ・ジャバ・ボルネオ等よりも早き昔し亞細亞大陸より隔離せしものならんと云ふ。子等は彼の有名なるペビロサと名つけ鼻上に角を戴く野猪を見さりし乎。此奇獸は全地球中今は只此地に見るを得るのみ。其兩牙か象の如く高く突出するのみならす。鼻の上に長き二本の角あり。余等答て曰く「何分。死生の際。一向。之に氣付き申さす」地質植物專務松本氏。傍に在り大息して曰く「珍らしくもなきクロコダイルの皮より寧ろペビロサを持歸るべきものをと兩先生杉村氏に向ひ兼ねて注文し置たる諸種の西字新聞をマニラに於て購入せしやと問ふ。杉村氏。水兵をして齎らし來らしむ。立花綜理頻に繰返へして之を讀むこと數十葉。先生に語て曰く「彼事少し延引して七月上旬と爲れり

第三十九回　出船

菊川。葡醫二人か精神を凝らして藥法を案し攝養に注意せし驗にやあらん。先生の容躰日々快復に赴くと著しく。一週間を經過せし後余等か歸着せし時に比すれは先生の容子全く別人の如しマニラより買來りし新鮮の牛乳其他滋養物の効能。大なりと見へ肥立ち方亦頗る速なり。今一週間を經は全然復常すへしとの診斷を聞き一行へく二週間を經は全然復常すへしとの診斷を聞き一行二百餘名始めて愁眉を開きたり

浮城。海王が此地に投錨せし以來。土人と貿易を行ひたれとも。小島のことなれは思はしき產物なし。唯た海產にて眞珠。陸產にて肉桂。珈琲の類のみ。先きに海王丸のマニラに赴くや。其序を以て兼て買置ける珈琲。カヽノット。胡椒。眞珠。珊瑚の類を葡萄牙人に賣捌き。相應の利潤を得。大に船內の積荷を減するを得たり。今此島にて買入れたる物品は左迄多量ならす故に兩船は荷物にて船內を充塞するに至らす

此灣碇泊場の要害に付き余等の不在中に增加せし戰備に灣內の要衝たる水底處々に點火水雷火を伏せたるの一事なり。先生の病中。阿蘭の軍艦か乘込み來ることあらは最も大切なりとて。立花綜理。水雷專務楠氏と相謀り灣口の要處十餘个處に之を仕掛けたる。其法たる海面より深十尺前後の水底に水雷函を浮しめ函に附るに鉄鎖を以てし之を海底の錨に結ひ付く。函は水面に浮揚るの力あると恰も空氣中の小風船に似たり。函の大さ二尺五寸。鉄或は銅を以て之を作る其形分銅を逆まにするか如し。電氣線を以て之を岬の麓なる水雷兵の埋伏處に通す。埋伏處には水面の遠近を測り。水雷函の所在地を明にするの仕懸あり。敵艦か水雷函の周圍三町以內を通過する時は。埋伏處より雷線を以て之に點火す。然るときは水雷函爆發して船体忽ち粉砕すへし。然らさる迄も尙ほ修理し能はさる大穴を生すへし（潮流の急なるときは水雷函。水中に於て斜に傾き海面上の淺深に相違を生し且其位地も亦從て馳變移するを常とす。是れ尋常水雷に伴ふの不便なり然れとも我ふの水雷函には桂氏發明の雷藥を盛りしか故に是等の事に懸念なし何となれは我か一尺立方の雷藥に二町四方に廣かるの爆裂力を有するに今や之を二尺四方の水雷函に盛りたれば。潮の干滿と潮勢急流との爲に生する水面の深淺。位地の變移は敢て顧るに及はす水雷函は三町四方の遠地に爆裂力を及ほし得るを以てなり）

又歸着以來海王丸を灣內の淺瀨に泊し機械專務梨山氏部下の船大工を督して日夜其修理に慌たし。一週間を經る後損處は大略舊に復するを得て海水侵入の憂ひなく。怒濤中に於ても決して再破の恐れなきに至れり

雇はれ來りし葡醫は其名をアルベキルクと呼へり。先生の病に侍すること一週間。大に衆人に愛せらる。其履歷を聽くに長く東印度諸島に流寓しジャバ。スモダラの間に在ること六七年。頗るマライ語に通す（前記する諸島土人は皆語を用ゆ。人となり亦快濶にして舉止。大に日本人に類す）先生の病を看る殊に親切丁寧なりしかは大に衆人の愛敬を得たり。此人。初めの間は唯た備はれ金の爲めに力を盡す。樣子なりしが。雨先生と稍く親みを重ぬるに從て深く景慕の情の發し又余等一行か總て皆濶達にして尋常市儈に類せさるを知り且船中大砲小銃の準備一切戰艦の如きを見るに及ひ。大に疑ふ所ありと見へ。菊川氏に就て頻に一行の目的を聞居たりしが。其人の異志なきを察して諸氏亦

告くるに實を以てせり。是れより其人頻に一行の中に加らんことを欲するの念を生し。二週間の後遂に菊川氏を以て此事を兩先生に請願せり。兩先生亦見る所ありしと見へ。倘ほ其經歷等を聽糺せしに。其人性も明白なるを以て倘ほ別格諸氏一同の衆議に附せしに。皆異存なき旨を答へしかは乃ち愈よ一行の中に加入するに決す。先生。諸氏に語て曰く昔し千七百年代に僅々二三艘の小艦隊を督して遠く印度沿岸の列國を征服せし葡萄牙の英雄。其名をアルベキルクと云ふ。氏は必らす其遠裔ならん。我〳〵の前途に取て最も吉兆なりと遂に別格取扱の名譽席を與る旨を告けしかばアルベキルノ氏大に喜び。東印度諸島の形勢を兩先生に詳述して我か一行は大に後來の便宜を得たると回を進て說出す所の如し

越て七月三日となる一先生の容貌益〳〵快く諸事平常に異ならす。菊川アルベキルク兩氏の診斷にては最早一點の氣遣ひなしと云ふ。依て兩先生協議の上此月五日を期して此地を出發するに決す。此地に碇泊以來砲礮を響かしむる時は傳へて阿蘭領臺の探知する所となり再ひ事を生せんことを恐れ小銃の外今日迄大砲を放つことなかりき然れとも第三日は出帆に間もなく最早之を憂ふるに足らさるを以て浮城。海王の二艦。此日大演習を行ふ。午後一時より戰爭準備の令あり。二艦相伴て大灣中を乘廻し。霹靂風砲。十二寸巨砲。五寸クルップ砲。交も〳〵發射を演習す。船中の兵氣大に振ふ。演習終る後。各處に伏せ置きたる水雷函を悉く船中に收入す。第四日は早天より飲水を汲入れ諸種の食料を積込む。其他出船の用意忙し

五日早天。浮城。海王ソムバヲの大灣を拔錨し遙に西北の航路を取る。ポルヂオを右にしジャバを左にし只管ら急航す。此日事無し。二日目の午前。早くパタビヤ洋に至る船中一同想像す必定是地より南に轉折して直にバタビヤ灣口に殺到し。談判に及ひ。事に寄らは直に開戰に至らんと。船中。意氣激昂す然るに兩船の進路を轉ずへき令もなし。浮城。海王。バタビヤ府を後へに望み。益〳〵西北を望て駛せ。スモダラ洋に至る。察するに兩艦必らす是れより阿蘭屬領スモダラの都府ペーダンを襲ふならんと。然るに兩艦は益〳〵西北を望て駛す。第三日目の早天。遂にマラッカの海峽に乘込たりマラッカの海峽は東洋。西洋船舶の航路にして。西を望て駛するの商船あれは東を指して來るの軍艦あり。

帆船あり。濠船あり海峽中に於て我か船と行逢ふもの其幾隻なるを知るへからす。海上の禮式に從て。彼我の行違ふ時は必ず互に國旗を揭けて相語す我船は常に日輪放光三色の旗を揭げすして亞弗利加或は南亞米利加の諸小邦の國旗を揭く行逢ふ船毎に皆號旗を擧て我船に問ふ『何れの地より來ると』と敢て實を告げす。此日我船亦號旗を用ひ答て示す『新嘉坡より來る』

の午後三時。一大商船の西より來るものを見る船躰の全長。七八十間の間に在るへく。其噸數亦蓋し六七千噸に下らす。舷頭は切落したるか如く水面上より直立し船尾は丸形にして船舷に比すれは少しく水に近し。船躰の水平線上は眞黑色にして線下は淡紅色なり。然れとも舷頭の下のみ僅に淡紅色を波間に隱見せしめ中央以後此色を見さるは舟中。貨物を滿載して船脚深く海に入るを察するに足れり。双眼鏡を把て打眺むれは甲板上には一面に日除テントを張詰め乘客の數。幾百人。三々五々彼邊此邊に群處せり。問はすして東西洋を往復する一大飛脚船なるを知るへし

是時我船始て日輪放光の國旗を揭く。彼れ亦國旗を擧て答禮す。是れ即ち英國の飛脚船リバーポール號なり

南先生相謂て曰く。「是れなり」と我か檣頭忽ち彼れに對して『止まれ』の號旗を揭く。彼船乃ち赤白兩色のダンダラの細旗を揭く。萬國海上の信號に於て是を『諸せり』の號旗とす。是時海王丸は浮城丸を隔ること十町餘の後へに在り。浮城丸直に端艇二艘を投下す。兩先生之に乘込て英艦に赴く余も亦隨ふ

第四十回　應接

立花綜理。此日の服裝は。上には黑色薄羅紗の正服を被り下には。白色薄羅紗のズボンを穿つ。上衣は襟頸より腕板に至るまて細微金線を以て堆く繡ひ上けたる唐草黑地の見へ兼る計りに光り輝き。ズボンの外側には一條金色の雷紋。腰部より繡ひ下て足頸の邊に至る一双の豹肩は金線もて組成せる『エポレット』を握り固めたるが如くに附着し。下端には金線幾十條の短き房を刻らぬ懸く。身躰少しく動く毎に。双肩の金線房。ユラリ〳〵と閃き輝けり。頭には黑羅紗韮山形の海軍帽を戴き。足には薄皮製。踵高の輕靴を穿つ日本刀を革鞘。鮫柄のサヘベル形に製し成して金銀を縷はめたる一口二尺餘の寶劍。緩帶して腰間に懸れり紫石稜々。眼光人を射。威風凛然。氣。三軍を呑む。

梅山及余の三人赤皆『エポレット』附の正服を着

く左右の筒袖には各〻等級に從て二三條の金筋あり轟氏は右手に蒼色鴿を居へ（拿紐の短きを指に挾みて之を持つ）梅山氏は左手に白色鴿を居ゆ。隨行の水兵十餘名各〻磨き立てたる小銃を携ふ。作良先生は例に依て薄羅紗のフロックコート。同質のツボン。頭には山高の「シルク。ハット」黒帽を戴き手には。一枝の瑞竹洋杖を携ふ。容子殊に洒々たり。總理と水兵とは一隻に乘込み。先生と余等とは他の一隻に乘込む。我が艇は見る〳〵英船に漕着けたり。船の長さ八十間。兩側には端艇八九艘を懸け列らね。流石は東西洋の間を往來する有名の飛脚船たるに恥す。我か號旗に從て進航を止め船を海上に漾はせ居れり。永き航海中は無聊にて物珍らしき故なら我艇の乘り近つくを見るや。滿船の乘客は擧て船舷に來り集まり皆〻我が名早く立出て挨拶せり兩先生亦答禮す。一個の英人は身材五尺五寸以上。躰格肥大。面色赭紅是れ船長なり端艇を覗き見る英船より階子を下す。兩先生一同甲板上に上る。英人二人は稍や丈け低く身材尋常。此船の事務長なり。今一人は海上往來の訪問なれは則に主客の椅子なし相向て對立す。兩先生相並て一列を爲す。轟。梅山及余の三名。其背に並て。第二列を爲す水兵十餘名。並立して第三列を爲す。此時余は兩先生の名刺を取次て船長に與ふ名刺には探征艦隊大統領作良義文。水師提督立花勝武と。記しあり船中の乘客は何事ならんと我〻より二三間を隔て堵の如く圍繞せり又密に囁き合へり彼等何事をか云ふならんと余は耳を聳て聞居たり。甲曰ふ彼等は支那人ならん。乙曰く否。豚尾髮を有せず定めて日本人なるべし。丙「日本人と支那人とは頭髮のみ相異なる乎。丁「支那人は溫和なり日本人は慓雄なり。戊「日本は開明國なる乎。己「地理書には近來開明に向へとも尚ほ半開國と記しあり」余心中冷笑して云ふ「饒舌奴汝等の頭上に浮城艦上十二寸巨砲の雷彈を一轟せしめは如何ん一ぺ盡し彼等は西より來る。東洋は初旅にて萬事不案内と見へたり。是時淑女等三四名出て來る其中の二名は芳紀方に廿三四にして。容姿端麗。輕裝楚々たり。ホンノリと淡紅なる玉顏。點するに碧瞳を以てす金色の鬢髮は雲の如く。亂れて微風に輕動す。嬌態嫣然。日本の美人とは又自ら別種の趣あり。歐洲の女子已に斯の如く妖美なり。先生か謂ふ所。カウカシユス。アルメニヤの女性は果して是れ如何なる者ならんと坐ろに彼等を眺め居たり。

彼等早く余等一行の人品に評し及ふ。淑女甲曰く「フロックコートの人眞に是れ好紳士」同乙「水師提督も亦好武官」丙「彼の背後に鶴を持つは何の用を爲すか」丁「彼の紳士。定て是れ禽鳥を愛する者ならん」余は思ふ彼等の評必す余等の上に及ひ來らんと威容を裝て心待ちに待つこと多時。彼等一向に評を下さす。甲曰く「日本人は皆斯の如き小身材ならん乎」乙「思ふに然らす。國人皆此の如きにはあらさらん」余は因て思ふに兩先生始め此處に在る者は何れも皆日本人中にて中以上の大男なるに彼等女子の爲に斯く嘲笑せらるること安からぬ。以後は皆師に命して皆の底皮を厚くし且皆の踵を高くせしめんと。此時兩先生と船長との談判已に大切の場合と爲る最初より問答の大要を略記せん

船長問ふ「此船に如何なる用向ありや。且貴艦は何の國に屬するや」立花綜理「貴船は船旗にて英國飛脚船リバーポール號なるを承知せり。敢て問ふ支那廣東に赴任する阿蘭領事フレーヘード氏を貴船に載せ居や」「然り」然らば同氏を我〳〵の船に迎へ取たし」「同氏は貴所等と知人なりや又貴所等は何の爲めに同氏を迎へ取らんと欲するや」「他故にあらす。阿蘭バタビヤの鎮台故無して我か〳〵艦隊の士官を抑留す。是を以て我〳〵亦阿蘭の領事を我〳〵の船に迎へ取らんと欲するのみ」と船長は先より已に我〳〵形裝擧止の尋常ならさるを訝かり居たる樣子なりしが今此一言に依て益〳〵事の容易ならさるを覺れりと見へ。彼れの面上少しく赭色を注き頓を打揮て曰く「ノオ〳〵。乘客と約束を取結ひ。此船に乘せたる以上は。其人を約束地に送り届くるを以て我〳〵のヨウチー（職務）とす。故無して乘客を他船に引渡すは一切相成申さす」綜理曰ふ「我〳〵の志望已に述ふる所の如し。是非〳〵阿蘭領事を迎へ取らさるは差置き難し。船長顏を膨らして曰く「余は唯余のヨウチー（職務）あるを知る其他を知らす。抑も貴所等何國の艦隊に屬すれは斯る非禮をなす歟」綜理曰く「我〳〵は地球を以て家とし。天下を横行す何そ必しも所屬の國を是れ問はん」船長低聲猛語して曰く「ノオンセンス」と綜理。聲を勵まして曰く「汝等我〳〵の命に從はすんは已むを得す火と鐵とを喫しめん」と言了て轟氏を顧みメクベセす。氏其右手なる蒼色鴿を放つ。鴿。空中に翔上し飛廻ること一回。遙に浮城丸を望んで翔り返り甲板上に止る。艦上一聲戰爭準備の喇叭鳴る。船首船尾の十二寸巨砲。忽ち旋轉して砲

口を英船に擬し。霹靂風砲及船舷二門の五寸皆與に砲門を開く綜理「足下等若し我〻の請を容れずんは。我一令の下。此船忽ち海底の藻屑と爲らん。足下等尚ほ抵抗せんと欲する乎」船長。己れの兩手を胸邊にて力を込め揉み合せながら。益〻顏を膨らし氣張りて曰く「船の水面に浮び居らん限りは唯た余の職務あるを知るのみ」と兩眼をパチ〳〵せしむるのみ他言なし先きより彼我の問答を傍聽し居たる滿船の乘客は今浮城艦上忽ち砲門を開き談判手詰めと爲るを見るより三々五々彼處此處に退て互に低語して心痛の色あり。容姿楚々たる淑女等も早や何處にか避け隱れて影を留めず此時一人の事務長忽ち綜理に向て曰く「貴所等は此船を何れの國の所屬と思はるゝ乎。此船は即ちグレート。ブリテイン（大英國）女皇陛下の保護の下に在る飛脚船リバーポール號なるを記憶せよ。又此船の上等客には佛國公使及曼國領事其他グレート。ブリテイン（大英國）の貴族を始め歐洲諸强國の旅客多數なるを記憶せよ。貴所等若し聊かにても無禮を加へなは必ず大なる後悔あらん一綜理冷笑して曰く「大英なれ小英なれ。女皇なれ男皇なれ。歐洲諸國の帝王參候。我に於て何か有らん我か取らんと欲する者は之を取り。奪はんと欲する者は之を奪ふ。列國の聯合艦隊亦將た我々を如何にせん」と此言を聞くや彼の事務長は滿面朱を濺きしが如く。空く綜理を視詰むるのみ。イザと言はゝ浮城艦上十二寸巨砲は直に英船の橫腹に蜂巢の如く水六を打開せん。一方には船長事務長が眞赤になりて氣張り居るあり一方には兩先生が先方の返答。如何んと詰寄するあり今一言の成行にて彼我の死生を決すべしと余等隨行者は片唾を呑んで窺へり

第四十一回　領事

作艮先生は今迄。彼我の問答を傍聽するのみ。一言を發せさりしが。此時容を改め船長に向て曰く「足下等が乘客を保護するは感するに餘りあり。左りなから若し强て我々の言に抵抗せは其極。獨り乘客を保護し得さるのみならす又幷て此船を失はん。利害得失甚た覩易きにあらすや。我々の本意は毫も足下等を苦むるにあらす。又此船を奪取るにあらす。只一人の乘客を迎へ取らんと欲するのみ。能く〳〵此邊を熟慮あれ一船長。事務長。不興なる顏色をなすのみ默して答る所なし先生又曰く「然らは阿蘭領事を我〻に引合はされよ。

我れ能く足下等の職務を全からしめ。彖て又我〻の所望を達するの術あり」と是に於て事務長はシブ〳〵彼方に去れり蓋し先刻より乘客等は彼我の問答を漏れ聞て種々の噂をなし居るか故に闌阿領事もか談判の始末をは知り居るに相違なし。須臾にして事務長。一紳士を伴ひ來る。上下一揃ひ白地の旅裝半マンテルを著け。頭には廣簷低頂の夏帽を戴き。名刺を先生に與へ帽を脱し禮を表して曰く「拙者は阿蘭領事アレイヘイドなり。敢て貴下の來意を問ふ」兩先生亦禮を返して曰く「拙者等は地球中未開の國土を探搜する者なり。七週間前。貴國の屬領バタビヤに於て圖らず一士官を抑留せらる。依て事の委細を陳述せんと欲せしに又非理の砲擊を蒙れり貴所は已に此事を御承知なるや」「如何にも承知せり。乘船の際。同地より達せし新聞をブリンジッシュに於て一覽し始て其事を知るを得たり」先生「拙者等は貴所の紹介に願て彼の士官をバタビヤ鎭臺より取返へさんことを望む者なり依ては貴所を我〻の船に迎取り。同府まで御同行を煩はさんと欲し今日まで相待つこと久しかりき尤も我〻が貴所に求むる所は唯た士官返還の一事に在り敢へて一點の害心殺意あるにあらす。是れ我〻か兵器の面目を以て固く保證する所なり。先刻より貴所迎取りの一事を船長。事務長に談判すれとも一向に埒明かす。依て只今御直談に及ふなり」是に至て彼の領事は。早くも我〻の企が捕虜交換の策たるを覺りしと見へ。兩先生と相對したる顏を轉して遙に海上を見詰め沈思せり。先生又曰く「貴所自ら此船を去るにあらすんは我〻已むを得す或は武力に依頼すへし。果して然らんには船中一同數百名の乘客に云ふへからさる累ひを及ぼさん。此船と乘客一同とを全からしむると否とは唯た貴所一人の胸中に在り。願くは之を熟思せよ。領事倘ほ言なし先生又曰く「貴所或は我〻を疑ふにあらさる乎。我〻は決して殺人奪貨を業とするの徒にあらす。抑留せられたる士官を取返すの外。毫も他志あることなし。篤と此邊を思考せられよ」と是より先き領事と我〻と應對を始むるに當り多數の船客及ひ淑女等。再ひ來り集りて應接の摸樣を聽居たりしが此時淑女等は頻に小聲にて「領事君のみ彼船に行かは夫れにて事は濟むならん」抔と囁く聲。微かに漏れ聞ゆ領事は如何に思ひけん先生に向て曰く「御所望の旨。如何にも承諾せり。拙者も貴船に搭載してバタビヤに赴き申さん」先生大

に滿足の旨を答ふ。立花綜理。船長に向て曰く、「斯く當人か承諾を爲す上は之れを我船に迎取るも足下等に於て異論あることなけん」船長。大に氣張りたる顏色なり答て曰く「余か船客は敢て之を他船に引渡すまじ」作良先生微笑して曰く「然らは。一たひ貴船に乘込みし客人は當人の都合にて中途より上陸せんと欲するも一切之を放ち遣らさるの規則なる乎。當人か中途に船を變るは世間往〻有り勝ちの事なるすや」領事亦船長を宥め喩して曰く「拙者自ら求めて彼船に赴く以上は敢て足下等の職務に關する所なけん」と彼の船長。始て安意の模樣ありしが領事に向て曰く「貴所の船賃は如何にすへきや。新嘉坡より香港迄一千五百七英里。新嘉坡より此沖中まで大凡三百英里。幷て一千八百七英里の割合を以て貴所の船賃を差引き返戻するを至當と考ふ。但此地は海上の儀なれば新嘉坡迄の里程聊か實測と相違し双方の間に二三シルリングの損得あるやは保し難し其邊は御容赦あれ」領事笑を含て曰く「斯る塲合。船賃の如きは如何樣にても苦しからず。拙者自ら求めて他船に移る譯なれは」領事は事務長と共に船室に至り急に支度を整へ再び甲板上に上り來る。二三名の小使等七八箇の荷物を持運ふ。領事曰く「余の身に帶るは手荷物のみとせん。他の行李は尙ほ此船に積置かん恙なく廣東の荷蘭領事館に送り呉れよ」此時。上等船客多人數。送來て阿蘭領事と手を握り互に別を告く。英人なるへし上等客の中には低聲にて領事に「心配し玉へ」と。新嘉坡着の上は我〻亦工風あり」抔と語る聲も漏れ聞ゆ。淑女貴婦人等も今は最早開戰の憂なきを安心せしと見へ互にサヾメき合ふと早晨の囀雀に似たり。彼等の話中。頻に『ジャパニース』〻〻の聲あるを聽く。蓋し彼等。日本男子の壯武なるを稱讃するに相違なし。兩先生已に領事を伴ひ。船長。事務長と相別れて端艇に下らんとす余等。列を正し甲板上を大足緩歩し肩頭の金線イポレットを。搖り得らるゝ丈け。搖り閃めかし。整々として端艇に下り去る

見る〳〵英船の階子を引揚げ。我艇は浮城を望て漕出たす。程なく漕着くれは領事を伴ひ一同甲板上の談話室に集る。兩先生始め首尾よく領事を奪得たるを祝す。程無く浮城丸の螺輪。轉旋を始め將に廻航を爲さんとする際。忽ち英船より我に『止まれ』の合圖をなし。一艘の端艇飛ふか如く漕來る。余等皆曰く「阿蘭領事必定。大切の物品を忘れ來りしならん」と領事も頻に考

ふる樣子なりしが「余は何物をも忘れ遺したる覺なし」と曰ふ。衆皆疑ふ。已にして英船の端艇。我船に漕着るや一小冊子を差出して曰く「是れ荷蘭領事の物なり。慥に贈り屆けたり」と直に本船を望て漕き返る。領事。冊子を見て笑て曰く「是れ我が閲し了りし一雜誌のみ。彼船に棄置きても宜しきものを」と衆之を聞て皆英人が不用なる一冊書の爲にワザ〳〵端艇を走らせし愚を笑ふ。先生曰く「是の緻密堅固なる特性則ち英國の富强を致すのみ」

第四十二回　書翰

見る〳〵英船リバープール號は煤煙を噴き立て。新嘉坡を指して航し去る。浮城海王も亦ヂャバを望んて廻航す。阿蘭領事の爲に艦内の最も潔麗なる船室を選ひ其手道具を積込て此處を其部屋と定む。兩先生。領事を遇する甚た厚し。一同服裝を改むる後領事を談話室に伴ひ。茶菓を侑む。兩先生領事か我〻の乞を容れて遠に我船に移り來り船中一同滿足する旨を述へ。バタビヤ迄航海中不自由なる事あらは何事も遠慮なく所望あらんとを求む。領事も亦安心せる旨を答ふ。一名の小使を專ら領事の使役に充つ

談話室内。卓子の上席には領事あり。兩先生之と對坐す。別格諸氏八九名亦列席して相懇話す。先生先つ我か一行かナッナ島にて支那の賊艦を奪ひし顚末よりバタビヤ顚臺か笹野氏を拘留せし迄の一伍一什を詳話す。領事も亦「歐洲出發の際。東洋より着せし新聞紙に記する所と先生の談話と大同小異なる旨を答ふ。此時領事の話に依て始めて浮城艦が砲臺の一角を打壞せしとき砲臺兵二十餘名を殺傷せし事を知り得たり。先生。笹野氏の安否を新聞上に記する所なきや否やを問ひしに。領事。新聞紙上。別に記する所なきを答へたり

是より話柄。雜事に移る領事問ふ「船内の乘組員は總て日本人のみなるや」先生「否。賊艦を奪ひし節。歸順せし支那人百餘名あり」領事「日本か外交を始しは僅か卅餘年前なるに十九世紀の利器たる船艦砲礮の取扱ひ斯迄鍛錬せしは西人の眼より見れは實に意外の事なり。阿蘭。日本間の交際は遠く三百年前より始まり。歐洲にて日本の事情を詳にするは蘭國に若くものなし現在同國にては日本の醬油に摸擬せしソースを釀造する者あるに至る。且東洋國中にて日本人か武勇義俠の特性有るは蘭人の最も善く知る所なり。二十年來。

日本か文明の進歩は世界古今の歴史中殆んと無比なりと聞きしが。今此船艦の運用。砲礮の裝置。水兵の働き振りを見て益々其虚ならさるを知れり。然れとも日本國内の電信。鐵道の便は尚ほ不十分なるへし」先生曰く「現在の統計に依るに日本國内電線の延長は六千八百英里に餘り其技手は皆日本人を用ゆ。又鐵道は當時方に建築中に在り是れ亦專ら日本の技手を用ひて西人に依頼せす今十餘年を經すして日本の内地には其鐵道網の如く縱横に布設せらるへし。又全國就學の兒童は其數三百万人に餘り小學校のみにても二万八千餘校あり七万二千人の教員を用ゆ。斯の如く百事年一年より進歩せり」領事は之を聞て感歎の樣子あり。又問ふて曰く「陸軍の兵數は如何ん」「日耳曼の全國兵に傚ひ有事の日は全國の壯丁皆起て兵器を執る者二百万人。但平日は節儉を旨とするか故に常備兵數は七八万に過きす」彼れ又問ふ「軍艦の數は定めて夥しきことならん」と余等傍に在り是を聞て手に兩把の汗を握る。何なれは統計上に於て日本戰艦の有樣は明に阿蘭陀の下に在れはなり。先生曰く「列國の間にも近頃大海戰の説のみにて一定なく。故に日本は莫大の金員を輕卒に戰艦に費すを見せす。戰艦の構造方も得失利鈍區々の説のみにて一定せす。

合せ。當時は專ら士官人材を養成するの最中なり。船艦は直に造り得へし人物は容易に作り得へからす故に日本は熟練ある幾万の水兵を作り出たすに汲々たり」彼れ又た問ふ「現在の艦數は幾何そ」と此時。流石の先生も少しく當惑の樣子ありしが已むを得す答へて曰く「甲鐵艦三艘。其他。スループ及砲艦の類合せて二十七艘なり」領事點頭して言なし彼れ蓋し日本政府の艦船の過半が我々の所有物たる浮城丸に及はさるもの多きを訝かり疑ふならん

話頭轉して又ペタビヤ府の事に及ふ。先生曰く「前々已に詳説する如く我々は實に賊にあらす。唯た此船を分捕りしまでのみ。故に申さは此船は戰爭の分捕物にして。舊持主たる支那政府に還付すへきの理あるとなし。ピタビヤ府到着の上は貴下よりも懇々此旨を鎮臺に詳説せられんことを望む」領事曰く「如何にも一理ありと存す」先生曰く「阿蘭屬領東印度諸島の法律は鎮臺が之を專らにするを得るものなりや。一たひ笹野氏を捕へし上は一定の法律に從ひ處分するの外。他に赦免の道は之れなきや如何ん」領事熟思して曰く「否な是等の赦權は總て皆鎮臺に屬す。當府の鎮臺は副王の資格を有して二千五百万の民衆を統治す。東印度所

韓内に於ける宣戰講和の權より罪囚赦免の事に至る迄一切皆其權内に在り。必らずしも本國政府の法律に照らして處分するに及はず」然らは貴下の紹介を以て我か士官を赦免すると否とは一に鎮臺の意見次第に在るへく思はる。若し貴下より我々の素性を詳記し。我か士官の返戻を求めなは事果して行はるへきや。貴下の所見如何ん」「多分は事成るへし」先生依て領事自ら鎮臺に書を送り事の詳細を陳述せんとこを求め又其文案を一應南先生に示さんことを望みしに領事承諾せり

此夜船中に盛宴を張り。領事を饗應す。船中一同待遇に意を用ふと雖も彼人。尚時として沈鬱の狀あるに似たり盡し實際は捕虜の身に異らざるを以てならん。夜九時頃。宴を撤す。領事は甲板上を散歩し勝手に寢に就く。其後ち立花紬理纂に先生に言て曰く「新嘉坡。パタビヤ間に海底電線あらば。彼の英船は明朝必す新嘉坡より電信にて必す領事を奪取られたる始末をパタビヤ鎮臺に通知すへし。此の如くんは我〻か捕虜交還の策を行ふに大なる妨けとなるの恐れあり」と先生亦沈思せしが俄かに地球電信線圖を取出して點檢せしに兩處の間幸にして未た電線なし

次日。浮城海王又只管ら東南を望みスモダラの地方に沿ふて駛す。兩先生領事を遇する頗る厚し。領事と與にアム、ステルダムの事抔語り出て其遊觀場。或は貿易等の事を談話し日暮に入る。彼の人二三日兩先生と談話交際するに從ひ始て其人となりを詳にし得たりしと見へ兩先生を畏敬する日に厚きを如るか如し第三日目の朝。兩艦早くパタビヤ灣頭を望む。先日砲臺か非理に開戰せしに懲り此度は船を灣頭に乘込ますして洋上に漂はしめ。先つ端艇を下し轟氏をして領事より鎮臺に宛てたる書翰及兩先生よりの書翰を齎し砲臺に漕着けしむ。蓋し砲臺の鎮戍兵に右の書翰を渡し鎮臺よりの返翰を洋上に待受くる都合なり領事をは上陸せしめす偖は艦中に留め置く

第四十三回　返翰

古人。句あり曰く。咸陽原上英雄骨。半是君家養馬奉と。土と爲り草と爲る古今多幾の人物。夢の如く幻の如し。世間幾般の憂樂。居常は唯快活勃々の空氣のみを以て充たされたる我〻の一行も圖らさりき今や人世に悲哀の情なるものあるを經驗せんとは

兩艦を洋上に漂はせて待つこと凡そ三時間。遂にバタビヤ灣内より一艘の小蒸氣船。矢の如く進み來る。瞬間にして浮城艦に乘着けたり。此舟一通の書簡を齎らし來る。其一は領事に宛てたるもの。他の一は兩先生に宛てたるものなり。兩先生諸氏と談話室に集り之を披らき見るに我が書簡に對し英文を用て認めたる鎮臺の返書なり。先生。諸氏の爲に之を讀下する一遍。其の略に曰く

貴翰の趣。逐一承知せり。過日拘留せし貴艦の士官笹野繁氏は最も意を用ひて待遇し置きたる處。其後一週間をも經さるに府内の風土に慣れさるが爲めにや。不慮發病の兆あり。因て種々の手當をなし療養に手を盡したれとも。醫藥其効なく。不幸にして。四日目に死沒せり。依て其屍は當府の例に從ひ未決四を葬むるの墓地に埋葬し置きたり。同人を貴艦に生還し得さるは鎮臺に於て實に遺憾の至なれとも是亦事の已むを得さるものなり。依ては貴艦が我に廣東の領事を送還せらるゝに於ては彼の士官の死屍を貴艦に引渡すへし。尤も右の屍は貴艦より一應檢視の上にて受取あらんとを希望す云々

一同之を聽くや思ひ懸けなき事なれは皆な打濕りて悵然たり。兩先生相語て曰く「バタビヤ府は其位置。河口の濕地に在るを以て最も不健康の稱を得たり。笹野氏或は風土に熟せず重病を受けたるものならん。孰れにしても此儘に打棄つへきにあらす責めては遺骸をなりとも受取て厚く葬祭を營むへし依ては直に菊川アルベキルクの兩氏をして一應其遺屍を檢査せしむへし。乃ち鎮臺に對して檢視を希望する旨の一書を認め。蘭氏をして兩氏に附添ひ端艇を投下して。同府の小蒸氣に伴ひバタビヤ府に赴かしむ

此日午後六時。端艇兩氏を載せて歸り來る。兩先生諸氏と共に會議室に迎入れ相會して報告を開く。菊川氏曰く「死屍の骨格より頭髮の黑色なる處等如何にも笹野氏かと思はるれとも腓腎なる皮膚は此熱地に於て已に五十餘日を經たることなれは一切腐爛して分明ならす」綜理問ふ。死者の服裝は如何」「遺屍は通常の寢衣を穿ち居れり。笹野氏の洋服は療養中に着更へしめたりとて劍。靴。帽子の類は別に之を示したり。右品々は余等兩人之を受取て持歸り則ち此處に在り一とて一包の品物を取出す。先生始め諸氏。忙はしく打寄て之を繙き見るに。帽。履。衣。劍。總へて皆な笹野氏の物なり。此人を取返さんと思へはこそ兩先生始め船

中一同心配に心配を重ねたりしに今や我々の手に入るものは是等の什具のみにて其の人は復た相見るの期なき九泉の客と爲りしか。思へは悽愴の感胸に滿ち。涙眼を拭ふ人々も多かりき。平生部下を愛すること骨肉の如き立花綜理。涙を呑て曰く「勇鋭にして狙撃に妙なる世間豈に又笹野氏の如きものあるを得んや。氏の性。持重を喜ひ冒險の事を好まず唯我か强勸せしに因り此行を與にしたり。若し斯る果敢なき運命ありと知らは我自ら氏に代てバタビヤに上陸すべかりしものを」と聞く者皆黯然たり

默考し居たる作良先生諸氏を顧みて曰く「我々未た漫りに愁傷するを要せす。事の眞僞。尙ほ保し難きものあり。先きに領事の新聞に記する所を語りしを聞くに砲臺の兵士我か砲艦の爲に死傷せる者二十餘名に及へりと云ふ我々に對する鎭臺の恨み益し骨髓に徹せしならん。是際或は假托の言を用て笹野氏を抑留するの意なきにも限らす且つジャバの土人は概ねマライ種に屬するを以て。頭髮。皮膚。骨格。總て日本人に同し。若し尋常囚人の死屍を僞て笹野氏と言はんも五十餘日を經は誰れか其眞僞を別つを得ん。彼の言必しも輕信し難き所あり然れとも今强て事の眞僞を辨せんと欲し我〻一行上陸して如何に吟味すとも其手掛りを得るに道なし。却て無益の事にあらん何となれは獄中の事は世間常人の知り得へき所にあらされはなり。因て考るにアルベキルク氏は今尙ほ葡萄牙マニアの旅行免狀を携帶せり。氏を煩はして當府に上陸し事實を探らしめ。我〻一先つ此地を引拂はゝ如何ん。然らんには鎭臺も亦油斷してアルベキルク氏の事の眞僞を探り出たすに便なるへし。我か兩艦は是よりスモダラ地方に向ふ爲め一先つ此地よりソンダ海峽に廻航しウエルコム灣に泊してアルベキルク氏を待合はせん。氏は一週間計り同府に滯在し然後ち陸路より同灣に來るを可とす此灣にはバタビヤより陸路行程僅に六七十英里に過きす行通亦甚た便なり」

第四十四回　五砲艦

今笹野氏の遺屍を迎取らん乎。若し尙ほ氏か生きて在らんには鎭臺の愚弄を甘受するに似たり。若かず此儘に打捨置き他日重ねて來て厚く葬るへしと云ひ送らんには。乍去ら彼の領事をは如何にすへき乎事の眞僞を明にする迄は尙ほ我船に捕へ置かん歟。但しは此地に於て放還せん乎。之を一問題とす先生の說は「我〻

か今笹野氏の死生に就て分明に其眞僞を證據立つると能はさるに尙ほ領事を拘留するは甚た穩かならさるに似たり。鎭臺の執念已に斯の如くんは假令ひ幸にして笹野氏か尙ほ存生すとも手强き手段を用ひすしては我〻の望を達せんと迚ても覺束なきに似たり一人の領事を以て交換を望むも或は是れ無益の事ならん。依ては我〻日本人か襟胸の濶大なるを示さん爲め領事をは一先つ此地にて放還し遣るを可とす若し万一幸にして笹野氏か尙ほ囹圄の裏に在らは我〻か領事に對する寛大の所置は幾分か鎭台をして氏の虐遇を寛大ならしむるの利益あらんと依て領事フレーヘード氏を請し來り。告るに送還の事を以てせり。氏も亦鎭臺の書面に依て始て笹野氏の訃音を知りし由にて我〻一同に向ひ不幸を吊するの意を述へたり。此人は兎も角も此地より放還せらるゝと聽きしかは。容色自ら欣々たり。然るに之に引換へて兩先生始め我〻は皆な快々として樂ます此夜八時。端艇を下して同氏を上陸せしめんとせしに恰も好し同府の小蒸瀛再ひ我船に漕來り。先きの書翰に對する返簡を求む。兩先生別に書狀を與へす委細は領事より談話すへき旨を通し領事の荷物を小蒸瀛に積込ましめ。甲板上に於て互に惜別の情を述ふ。領事は在船中意外に鄭重の取扱を得たることを長く記臆すへき旨を頻に繰返して小蒸瀛に乘遷る。ノルベキルク氏も兼て諜し合せたる通り表向きは雇はれの仕事已に終りし旨を領事に告け請て同行しバタビヤに上陸せんと小蒸瀛に乘込みたり小蒸瀛は灣口に向て駛去り看す〳〵其影を沒す兩先生か笹野氏を奪返さんと企てたる折角の奇計妙算も是に至て全く畫餅に屬したり。ソンバッよりマラッカの海峽を返復して數日間多量の石炭を費すのみなら船中一同不愉快の感限りなし。此夜十二時直に灣口を發し遙にソンダ海峽を指して航行す。ウエルコム灣に於てアルベキルク氏を待合はせんが爲めなり翌日は風急に浪高し。船少しく動搖す。今一時間ならすして將にソンダ海峽に進入せんとす。渺々遙々水天相接する處。忽ち遙に一抹の煤煙。影の如く空に横はるを見る三四十分間の後ち漸くにして微かに船躰を認め南たり八木田氏及ト兩先生一同甲板に在り。皆な望遠鏡を取て彼船を遠望す。八木田氏曰く「彼れ商船にあらす軍艦なり」と已にして二里以内の近距離となる。

八木田氏水兵に命し檣頭に上て之を諜視せしむ。水兵下り報して曰く「砲艦なり。其數五隻。前後に相次て進み來る」。綜理曰く「果して五隻なる乎」。然り確かに五隻なり」。綜理俄に八木田氏に謂て曰く「其五艦は先日我〻がソムバヲに在りし時。彼地を航過せし砲艦にあらさるなきを得んや」。氏直に綱梯子を攀ぢて檣頭に上ぼり望み見ること四五分間。急に下り來て曰く「確に彼の砲艦なり」。此時彼我の距離凡そ一里餘綜理「八木田氏に向ひ何事をか命す氏急に第二層板に馳下る。頃刻にして交番の喇叭手を伴ひ來る。此時は早や已に肉眼を以て彼の諸艦を分明に見るを得へく。彼我の距離將に三十町ならんとす横さまの隔りは蓋し二十五町内外ならん。我れ行き。彼れ來る。彼の艦隊の先頭に進み來る第一艦を見るに。其甲板上只た一門の大砲を備ふ。是れ砲艦にして巡洋艦の下に位するもの其外。船舷に小口徑の大砲二三門を備ふ。なれはなり。船の大さは四五百噸を越へじ。貨物を積まざるか故に船脚輕くして船躰の過半は水平線上に浮み居れり。先頭第一艦に次き五六町つゝを隔てゝ其背後に四隻の砲艦あり。船形及ひ大砲の門數總て皆な第一艦と大同小異五隻の砲艦各〻五六町を隔て聯珠の如く相次きて煤煙を中天に漲らせ此方を望て航來す。其時日を推すに蓋し彼等は我〻を探搜してソンバヲ島を過きフローレス。ベリー。チモール諸島を經てバツアの近海に出て。夫れより南に轉して前記せる諸島の南面を廻航しジャバを一周して今將にソンダ海峽を乗り拔け將にバタビヤに歸らんとする者ならん。彼等は我〻が鎮臺と穩なる談判を爲し領事を放還せし事等は未た露知さるべし彼が先頭の第一艦。浮城丸と行違ひさま。方に相對する時彼れ青赤白三色横線の阿蘭國旗を掲く八木田氏綜理に問ふ。「如何なる旗を掲くへき」綜理曰く「我か正旗を掲けよ」と我か檣頭に日輪放光の旗を掲けたり彼艦之を見るや忽ち其の檣頭に二旒の號旗を擧ぐ。綜理。八木田氏に命して曰く「應するなかれ。止まるなかれ」と此時海王丸は遙に砲艦より遠く我船より斜に南に進み居ること三十餘町。同艦は尋常商船の形なるを以て砲艦の怪みを免れたりと見ゆ彼艦は我船か其號旗に應せすして益〻急航するを見るや第三艦の檣頭に忽ち一片の細旒を飜へしたり。此第三艦は蓋し艦隊の旗艦にして海軍上將を載せ居るに相違なし見る〳〵前後自餘の四艦亦之に應して一種の號

旗を掲げたり。綜理。八木田氏に言ふ「事急なり。彼が今諸艦に命する所は必然戰爭準備の合圖ならん一と我か浮城艦上亦忽ち一聲の喇叭を鳴らす水兵砲才各〻持場〳〵に馳集まる。此時浮城艦は彼れの第一艦。第二艦〻乘り拔けて第三艦と行違ひ彼我船腹の横面相對する處敵艦忽如一聲の巨砲を放つ。正に是れ天轟き海震ふ開戰の第一彈

第四十五回

雪白艦。大に蛇波洋に戰ふ

敵艦の第一彈。浮城の手前二丁餘の海面に落發し。海水を中空に飜飛すること幾十尺。綜理叱咤して曰く「速に戰線を脫出して早く前路に乘拔けよ。海王丸は戰鬪圈外に離れて見へ隱れに我々に附添べし」と傳令せよ」と我艦二十ノットの速力。斜めに南に開て急走す。敵艦五隻前後相連て聯珠の如く。横さまに我艦の北廿餘町を駛行す。彼我の船腹遙に相對して行違ふ。綜理。未た此令を下し終はらざるに。敵の第四艦早く已に我横面に在り巨砲を轟發す。前きの第三艦も行過きさま斜め後ろに我船を射る。第四艦の我船と行違ひ去るや第五艦。方に來る。彼れ亦發砲す敵船は孰れも皆な砲艦なるが故に甲板上一門の巨砲を裝置するのみ其他には二三斤の小砲二三門を備ふるに過きす。然れとも甲板上の大砲は其口徑八九寸の間に在るへく。發射の響き洋上に轟き震ふ。敵の第三。第四。第五艦か行違ひさま發射せし數彈。或は空中に爆發し或は我船を打越して二三丁の彼方に落發し。或は我が手前の海水を蹶起す。我船は恰も破裂彈の裂片驟雨の下に在るか如し。然れとも彼我の距離三十町以上なるが爲め幸にして大損害を我か船躰に與へす。我艦。彼か最後の第五艦を乘拔け十餘町の地に出る時。綜理曰く「我か船尾の巨砲を發せよ一と我艦始めて第一彈を放つ。蓋し敵艦に對して我か應戰の志を示すならん。此時彼我の距離已に四十町を隔つ我か彈丸遙に彼か第四艦五艦の中間なる海面上に發射せり敵艦は孰れも十ノット以内の速力。我船は二十ノットの速力。我か進度の早きこと幾んと彼に二倍す。敵艦の横擊を凌ぎ直線航走して乘拔ること五十分間。我船七八里を走り得て遙に敵艦を顧れは其第一艦は右に廻て我船を追躡し來る其第二艦も亦已に旋轉の半に在り。彼我の速力の差あるが爲め第一艦二艦か我を追來るの時。我船は已に遙か四五里の遠地に在り。忽ち一令を發して曰く(右に廻れ)と我船旋轉す。凡そ

小船は十間二十間内に於て容易くクルリと一轉し得へしと雖も。六七十間以上の大船に在てはクルリと一周轉をなすに殆と二三里の長さを走らさるを得す。敵艦は小なる者五六百噸。大なる者も亦千噸に上らす。旋轉容易なるの便。大に我に優れり。唯た我船は遠く駛て四五里の上に在るか故に。一分を經て我船稍く一轉し。附入らるゝの憂なし。二十分を經て我船一轉し一船首東に向ふ。此時敵艦を望めは其五艦總て旋轉し一直線我船を追來る。彼我此時の位置は正に開戰の第一彈を放ちし時の位置を南北に反對す前には敵の五艦連りて北側に在り我は南側に在りしに。今我は北に在。敵は南に在り。第一艦より第五艦に至る迄。各四五町を隔て恰も珠數繋きの如く斜に我船に向て殺到す。彼我の距離尚ほ里餘を隔つ綜理。八木田。萩氏に令して曰く「今や我れ往き彼れを來る。我か横擊すへきは敵の中央旗艦に在り他の諸艦より發射する砲彈雨の如しとも唯た之を冒して旗艦を衝け。假令ひ寡間。二三彈の我か船腹を打貫するありとを我船には區處多し直に沈沒するの憂なけん。中央旗艦に迫近して彼れを亂射する迄は漫に發砲すへからず

敵の第一艦。方に我船と行達ふ横斜の距離十八町。彼れ早く巨砲を發す。尖彈空氣を劈く。倏然。聲あり。我か煙筒を中央より打碎す。我船慴せ指して突進す。敵の第二艦早く次ぎ來る距離凡そ十五町。彼れ亦巨砲を發す。尖頭の實彈我船の後檣下。水際より八尺計りを打貫す。前の第一艦も行抜けさ尚ほ砲を轉して斜め後ろに遠く我を射る。二彈幸にして中らす。我船二十ノットの速力。敵艦十ノットの速力。双方行違ふ速力を合算すれは。一分間忽ち九町の隔りを生すへし。我か浮城が第二艦を乘り抜け未た一二分を經さる内。早く敵の中央旗艦と八町以内に行違ふ。彼れ早く巨砲を發し斜に我が前檣を擊折たり。萩氏聲に應して曰く「一齊打發」と綜理。艦首の聲を厲まして曰く「一齊打發」と綜理。

十二寸砲を轟發す。距離甚た近きに加るに氏の妙手を以てす。猛烈無比の雷擊を盛りし大尖彈。我か船舷五寸砲二門。正に彼面上の機關室を打貫て爆發す。亦同時一聲に發射す。一彈は狙ひを外して敵艦を打亦同時一彈は正しく船舷に着發す。此恐るへき大爆裂彈。敵艦の後檣中儲の間なを發す。甲板上に落つると見へしが。一聲の轟響。忽ち落越し。一彈は正しく船舷に着發す。此恐るへき大爆裂彈。敵艦の後檣中儲の間なを發す。甲板上に落つると見へしが。一聲の轟響。忽ち落雷の如く前檣。後檣。合せて一齊大木を倒すが如く顛

倒す。敵艦中遙に叫喚の聲を聞く。我が船尾の十二寸砲。二三十秒を後れて又一彈を發す。敵艦の手前三十間餘の海面に達着し。海水を連蹴して敵艦の中腹水際の邊に着發せり。此發砲此戰闘は只是れ一呼吸四五十セコンドの間に起る。我か十二寸砲。五寸砲。發射の響。是等諸砲の彈丸及魚雷砲大爆裂彈の破裂する響きに加ふるに又敵艦の大砲發射。彈丸着發の響を以てす。實に是れ山鳴り海谷へ天震ひ地轟く蛇波洋底幾十尋の下に在る魚族も遠く四五十里の外に逃散せん

第四十六回　酣戰

我船。旗艦を亂射し去て。斜に進路を轉し。左方に開航す。敵の第四艦早く我船と行違ひさま大小砲を連發す其最巨彈。我か機關室の上頭を打貫す。我船の機關は一切。水平線下に在るを以て運轉を止るに至らす。我船早く左に開きし爲め横さまの隔り已に十餘町。萩氏霹靂砲を發す距離を遠くして達せす敵艦の手前一二町の海上に爆發し。海水を二百歩四方に奮迸す。我か船首の十二寸砲。正に裝塡を終はる。後しろ斜に第四艦を射り。中檣の上頭を打碎す。此時敵の第五艦早く次ぎ來り横さまに我船を隔ること二十町。巨彈を發す幸にして我船の頭上十餘丈の空中に破裂す我か船尾の十二寸砲彼の中腹機關室を望て轟發す。敵艦煙突下の船舷を打貫て破裂し巨響を發す。分明に是れ煙突の周圍を打壞し。機關運轉を止めたらん。我船矢の如く第五艦を乘拔くること二三里にして令あり。「左に廻れ」と。再ひ旋轉して。舊路に旋り戻り。船首正しく西に向ふ此時。敵艦の有樣を望めは。第一艦は引返して遠く我船と相對し里餘の地に在り。第二艦は後るゝこと十五町。第一艦に次ぎ來る。我が爲に圍射されし旗艦は船躰の一半。船尾の方已に斜に水平線下に沈沒し。第四艦其傍に在り端艇を下して頻に士官水夫等を救ひ上く。第五艦は果然機關を損して潮流に漂ひ居れり今や敵の旗艦は沈沒せんとし第四艦は之を救ふに慌たしく。第五艦は空く海上に漂ふ。今や我と接戰するに堪るは唯た第一艦と二艦とのみ。綜理。乃して曰く「第一。二艦に向て急進達航せよ。斜に我艦を保ち。正しく横面を現はすなかれ」と直に第一艦に向て殺奔す。此時は彼の二艦。甘航路定まらす或は逃走せんと欲するならん。我船の速力非常なるを以て。瞬時十五分間を出てず早く第一艦に逼近す。距離正に十餘町。敵艦

巨砲を發す中らず。我船亦十二寸砲を應發す。飛彈彼れの後檣に着發して之を粉韲す。次で又霹靂砲を發す萩氏、瞑て打起すこと三町餘。海上に爆發す。海水を降下する雨の如し。敵艦は我か霹靂彈に恐怖せしが後檣を擊折られたる儘、一直東を望て逃走す。我船早く第二艦に向ふ。彼れ已に敵すへからさるを覺り第一艦の後檣を擊折られしを見るより已に南に向て走り去。距離二十餘町を隔つ。我船より船尾十二寸砲を以て追射す中らず。彼我の距離看す〳〵已に三十餘町となる此時旗艦を回顧すれは。船躰將に海面に沒し盡きんとし水面上纜に一檣を剩すのみ。敵の第四艦は旗艦の士官水夫等を積みも敢へす忽ち東を望んで逃れ去る我か海王丸は是迄常に三十町以外の距離を保ち戰圈外に立ちしが此時浮城より號旗を以て傳令し海上に漂ひ流るゝ第五艦を進擊せしむ

上將を救ひ載せる第四艦遙か四五里の遠地に在り浮城艦黑煙を張らして之を追ふ。彼船到底バタビヤ迄逃れ難きを覺りけん。忽ち航路を轉して西北に向ふ。彼れ走り我れ追ふ四五里を進み得て彼我の距離已に三里以内と爲る此時同艦進航の方位に當て海上遙かに煤煙の靉靆くを見るに一艦あり西北より來る。望遠鏡を以て望見るに彼船。蘭艦と相近くや互に號旗を用て相語る。八木田氏檣頭に登り諜視することと數分間。下り報して曰く「彼れ戰艦なり。敗亡の蘭艦或は彼に向て救援を求むるならん」と見る〳〵已に二里以内。彼の兩艦は尚ほ頻に號旗もて相語る。間もなく蘭艦轉廻して舊路に引返し來れり彼の新艦と左右に分れて開航し我船を左右兩側より引包まんとす。近つくこと一里以内新來艦の檣頭には。青赤白三色の十時旗章翻飜たり。是れ問はすして海上第一等强國英吉利の戰艦たるを知る

第四十七回　提督。連破す二戰艦

蘭艦は三十餘町を隔てゝ我か左に開航し。英艦は里餘を隔てゝ我か右に乘廻はす。蓋し此艦は新嘉坡に屯駐せしに。飛脚船リバーポール號か同港に着して途中の顚末を報告せしより。洋上を巡邏する爲めスモダラ洋に航廻せしものならん今まで遁走せし蘭艦が直に引返へして進來る有樣と云ひ英艦蘭艦か左右に別れ兩面より我船を挾むの擧動と云ひ分明決戰の意あるを知るに足る。蘭艦は號旗を以て我々を海賊と誣告せしに相違なく。リバーポール號は新嘉坡に於て英艦に我艦の色

合。船形等を詳報せしに相違なし英艦我艦彼我の斜度。已に二十五度以内。距離尚ほ三十町を隔つ。我々今詳に其の船形を認るを得たり。英艦は浮城と均しく一等巡洋艦の部類に屬し其大さ六七千噸。甲板上船首船尾に二門の巨砲を備へ。船舷亦六門の小砲を裝置す。船艇大砲。機械噸數。正に浮城と相匹す其利鈍強弱已に蘭艦の比にあらず況んや將校兵士の海事に習練する世界第一の稱あるをや。英艦を見るより我か艦中兵氣肅然たり綜理聲を勵まし諸將校に言て曰く「視よ彼艦は世界列國に海上第一強勇の名を博する英國の戰艦にあらずや今や大に我々か海上の武力を試むるの時到る。諸子夫れ奮勵勇鬪せよ。彼れの船形大砲は我れと匹すと雖も我には雷彈霹靂彈の利器あり。且彼れの速力は早しと雖も十四ノットの上に出てざるに我船は二十ノットの速力あり。兵器機關我已に幾分の勝算を占む若し今此艦を一擊打壞せは以て碧眼奴の膽を破るに足らん。勉めよかし」と勵まされし砲兵。水兵。機關手に至る迄皆血戰と覺悟せり。此時蘭艦は我か左側三十餘町の遠地より早く一彈を發す距離遠くして我船の手前に落つ

英艦は我船を望で遠く輪を掛け車輪の如く乘廻しなから。距離廿五町始めて第一彈を發し。次て船舷の二三砲を連發す。我船は乘拔けて常に三十町以上の距離を保ちつゝ船首船尾の十二寸砲を以て應戰發射す。左には蘭艦あり。右には英艦あり。彼我三艦より打違かゆる大小砲礮あり或は我船を擊越すあり我船の手前一二町にて着發する彈丸は海水を蹶起し中空に爆發す。洋上海面の處々に轟々漠々たる硝烟を遺しながら二隻の黑艦。一隻の白艦。馳せつ戻りつ決心す双方より發轟する砲聲は山崩れ海翻る如くジャパ。スモダラの地方に向て轟き渡る響聲は殷々たる遠雷かと怪まる我艦は輪を掛けて右に旋轉し英艦は之に應し輪を掛けて左に旋轉す。二羽の水鳥水上に於て巴の如く相追ふに似たり。英艦已に一旋轉を終るの時我艦も亦早く旋轉を終り行違ひさま七八度の斜角に來る距離正に二十町英船より發射せる巨彈一聲。我か右舷五寸砲の砲門夕擊碎て爆發す。砲車。車臺。一齊に顚倒し附屬の砲兵將棊倒しに甲板上に卒倒す。綜理之を見て大喝一聲。我船目眦悉く裂く。聲を勵まして八木田氏に一命す。彼れ極度の速力。旋轉して英船を乘廻はす。我か速力彼れに二倍するの利益忽ち此時に分明なり。彼が旋轉を始

めんと欲する頃我船は旋轉を終て其背後の航路に乘込んだり。我船は船首の側面を敵船の船尾に擬しつゝ一直乘近づくこと十二町霹靂砲を一發す。如何にしけん誤て敵艦を擊越し其前路斜め五六町の海面に轟雷の響きをなして爆發す。海水を降らすこと雨の如し。綜理叱咤して曰く「十二寸巨砲」栽氏自ら巨砲を一發す。直徑一尺二寸。長さ二尺に餘る巨彈。爆裂雷藥を滿盛せしもの。正しく英艦後檣下の砲門に着發し轟然一響す。分明見得たり彼か鐵張りの砲門。半は斜に倒壞せることを。敵艦は其儘一直線に船首の斜路を取つて遁走す。我艦の追尾すること里餘。是より先き我か蒸滊機關は五砲艦との戰ひ以來速度の火力を用ちひしが上。今一層盛度を出はし故にや又將た第二艦より前きに船腹を打貫れて差響きにや此時機關の一部に損處を生して螺輪旋轉の力。忽ち七八ノットの速力に減殺す英艦は。益々西北を望て駛去る蓋し新嘉坡を指すなら ん。又最初より闌艦は專ら戰を英艦に讓り是迄常に三十町以外の距離を保ち遙に我船を砲射し居たり我艦は英艦に追ひ及ひ難きを見るや船首を轉して再ひ闌艦に向ふ。彼れ敵し難しとや思ひけん其儘東を望て遁走す蓋しパタビヤを心掛くるものならん。我船は平生の速度に似す今は七八ノットの速力となり彼等に追及ふの望を絶ち引返へして海王丸を求めソンダ海峽を指して進行すること四十分間。遙に船影を望む近つくに及んで果して海王丸なり又海王丸は先きに浮城が敵の第四艦を追行く時に下たせし號令に從ひ直に敵の第五艦を進擊せり然るに敵艦は蒸滊機關を打破られて未た帆走の準備も整はさる内海王丸に逼近せられ進退窮て白旗を掲けたり因て海王は此艦を引船となしソンダ海峽の口に漂て浮城丸を待居たり遙に再ひ砲聲を聞きしかども唯是れ敵の殘艦と戰ひ居るものと思ひ一勁敵と更に交戰するを知らざりしかは別に來り救はざりしなりと云ふ。我艦は海王丸を望み見て船艇旗を揭け。相伴ふて分捕りの砲艦を引きつゝウェルコム灣を指して進航す

我か（）初め五砲艦と開戰せしより英艦との戰を終る迄。其戰鬪通して三時間に亘る。之を綜理に聞くに近世の開戰史中に於て戰鬪時間の最も短からさるものなりと云ふ。之を要するに陸戰は戰ひ長く。海戰は戰ひ短し。是れ海戰陸戰の大に其趣を異にする所以なり。陸戰は時を以て算すへく。海戰は分を以て算すへし。陸戰にして二時間以上に亘らさるはなく。海戰

にして兩々相對し勝敗の決。一時間以上に出る者は稀なり。是れ他なし海戰に在ては一門初發の砲丸にても敵艦の要部に命中すれは忽ち之を降服せしむるを得へけれはなり乘込人員は幾百人の多きありとも本と是れ船艦破砲を以て其の命脈と爲すが故に是等の要具を打壞せらるゝときは遺憾なからも術の施すへきなく空く手を束て降を乞ふに至る今日の海戰ほど技術の巧拙。機械の利鈍に其勝敗を懸るものはあらさるなり。幾千万の民衆を有する大帝國相戰ふの際にも其艦隊より互に發射する僅々一二彈の巧拙を以て勝敗存亡の命運を決するに至る懼れざる可けんや。我々已に蘭艦を連破し又英艦を走らしむ。是れより雪白艦の威名。大に東印度諸島に震ふ

第四十八回　ウェルコム灣

此日午後五時。我三艦恙なくウェルコム灣に投錨す。杉村氏直に海王丸より來り勝戰の祝辭を述ぶ。兩先生余等皆英艦と接戰せし顛末及彈雨を犯して旗艦を衝き危險を語り。相喜ふと限りなし杉村氏亦敵の第五艦を分捕りし始終を報告す。綜理問ふ。「生擒りし士官の數幾何そ」「上士官十名。水火夫合て二十三名なり」彼の砲艦に比すれは乘組人員甚たた少きにあらすや」我船の追躡するを見るや數人の士官兵士。早く端艇二艘を下たして逃れ去り。其數多分四五十名と見ゆ我船之を追はんと欲せしかとも肝腎なる敵艦を取押ゆるに慌たしく其儘に打棄てたり故に生擒りしは艦中兵士の全數にあらす」「分捕りし艦は大破なる乎」「否な。蒸氣機關は大破したれとも他の部分は左迄の破損なし若し帆船として之を用ひば尚ほ我用をなすに足らん」「兵器彈藥は如何ん」「船首に裝置する八寸口徑の大砲一門。船尾には五寸砲二門なり」「火藥は「綿火藥。通常火藥。」「興に多量を積み居れり大小の彈丸亦甚た多し。石炭をも滿載す」「兩先生相言て曰く「帆船として之を用ふるも尚ほ大なる得分あり。況んや三門の大砲と多量の火藥石炭を得たるをや。此戰は差引き損耗にあらす然れとも此戰に我か船体。器械及兵士を損したること亦少からす。先つ我々一行の入員を點撿すれは砲兵の重傷を負ふ者三名支那水兵の重傷七名。其他水兵の輕傷十餘名。加ふるに萩。轟兩氏の如きも亦破裂彈の小裂片近傍に落下せしか爲め其足部に負傷せり。當時の繁忙菊川氏に若くものなし戰鬪の最中より今に至

る迄治療に寸暇を得す斯ることゝ知らはアルベキルク氏をして船中に在らしむへきものをと皆其不在を遺憾に思はさる者なし

斯く我か將卒を傷けたるのみならす。浮城艦の船舷にも亦幾多の破損あり。第一には機關室の上なる船舷を打拔れ居れり第二には後檣下の水際より八尺許り上を打拔れ居れり第三には煙突の中央を打折られたり第四には前檣の上半を打碎かれたり。且大切なる船舷の五寸砲一門は全く廢物と爲れり。尤も煙突の如きは直に易ゆるは容易なり。然れとも船腹二ヶ處の破竅は其修理甚た困難なり依て先つ厚さ三四寸なる鐵板を内外より掩ひ被ふらしむるに決す

兩先生諸氏と與に我か士官兵士の傷痍。及船躰の損處、砲艦兵器の巡見を終はり又分捕り砲艦の巡視を終はる後浮城の艦上に於て大に勝戰の宴を張る。九時頃宴終りし後兩先生。會議室に於て一々生擒の士官等を取調ふ。先つ最高等の士官より一人づゝ呼出たす。先生問ふ「足下等の砲艦は本と何れの地より發せし乎」「パタビヤ府なり」「何日頃出發せし乎」「正に二週前なり」「何れの地を經てソンダ海峽に來りし乎」「ブリー。チモール諸島を經てジャバの南面を廻航し將にパタビヤに歸らんとする所なりき」「艦隊航海の目的は如何ん」「第一は嘗てマニラより報知あり。我か砲臺と開戰せし賊艦二艘の一と覺しきものジャバ近海を往來すと云ふ。且セレベス洋上に於て此艦を認めし數隻の船舶より其旨を鎮臺に報告するもの多し。依て之を取押へんが爲め出發せり是れ第一の目的なり」「爾日洋上に於て我々より一の無禮をも加へさるに突然砲擊せしは何故なる乎」「兼ねて鎮臺より命あり若し賊艦と見受くるならは。有無を論せず。直に開戰して打取るへし。列國間開戰の例に依るを要せす。敵は海賊なるを以て見當り次第臨機に差押へよとのことなりき」「我々の船を如何にして其賊艦と思ひしや」「七週間前。砲臺との戰及び灣内碇泊の時に認めたる船形塗色の正しく符合するか上に其國旗の正しく同物なりしを以てなり」「我々を取押ゆる外に足下等の艦隊は他の目的なかりし乎」「尚ほ有り。第二の目的は東印度諸嶼島の人心を鎮壓せんか爲めなり。先きに貴艦と我か砲臺と開戰して我か砲臺を毀たれしより種々の浮説傳播し諸島の土人此機に乘して動もすれは叛亂の萌しあり依つて砲艦をして各地を乘廻らしめ武威を示して之を鎮壓するの企

なりき」「土人の叛亂とは何れの島。何れの地方なるそ」「最も蜂起の憂あるは空輕太。横輕太の二地なり」先生曰く「鎮臺に抑留せられし我か船の士官は其安否如何ん」「余は全く之を知らす。余は唯た此砲艦の軍務に關するのみ」先生彼者を慰めて曰く「武事に從ふ者は勝つも負くるも天運なり。捕ふるも捕へらるゝも亦是れ命のみ。我か艦隊は決して海賊にあらす。最も信義を重んす。敢て捕虜を虐遇するの意なし。足下等を鎮臺の手に引渡す迄は万事遠慮なく振廻はれよ決して不自由を感せしめさる樣に取扱ふへし」と此にて第一士官の取調へ終る夫より順々に一名宛尋問す。其答亦大同小異なり第七名の士官に調へ至りし時。意外の事を發見せり先生が笹野氏安否の問を下たすに當て。此者曰く「余の知る所にては其人尚獄中に在て健康なり」綜理慌てゝ問ふ「足下等の出發せしは何れの頃そ」「余か艦隊に乘込みバタビヤを發せしは正に二週前なり」然らは二週前まで果して笹野氏は健全なりし乎」「余は然りと信す」「足下は何を以て其然るを知る」「余の親族は典獄の一人たり具さに獄中の事を知る。依て余の聽得たる所此の如し」と兩先生始め諸氏之を聽て皆互に顔を見合せ莞爾たり。彼の士官は未た鎮臺が一兩日前に我々に對して笹野氏死亡の事を通知せしを知らさるなり立花綜理罵て曰く「賊鎮臺。敢て我々を侮慢す。彼れ人を欺くも尚ほ文明國副王の稱を辱しめさる乎」先生宥めて曰く「彼輩。本と我々の素性を詳かにせす。一概に目するに海賊强人を以てす故に我々に對する所又尋常列國に對するに異なりと見へたり。然れとも幸にして笹野氏の存生を知る此上は之を取返へすの策を講するを第一とす」

又曰く「我々已に敵の五艦を走らすと雖とも東印度の阿蘭屬領には砲艦運漕船を合せて尚ほ二十七艘の艦船あり。敢て油斷すへきにあらす。彼の敗艦バタビヤに歸り報せは。兩三日を出てす再ひ新艦を以て此地を襲はんも測り難し。且我々已に英艦と釁を開く。彼れ亦或は南洋艦隊を催して寄來らん。アルベキルク氏を待合はする間。先つ此灣を以て運動の根據と爲すへし」と乃ち明早朝。楠氏をして點火水雷を灣口の海底要路に隙間なく敷設せしむるに決す

第四十九回　日本男子の本分

次日早天。楠氏。水兵を率て水雷を各處に布設す。梨山氏は鐵匠を指揮して浮城の破損處を修理す。同艦の

船舷五寸砲は英艦の爲に擊壞されしを以て分捕砲艦より六斤後裝砲一門を移し來て之を補ふ。又分捕艦内の石炭。兵器等を浮城海王に積移し或は負傷者の療養看護等の爲め此日は殊なり多忙なり碇泊以來已に三日を經たり今にも敵艦の寄せ來かと。日々警戒の外なかりしが。幸にして音沙汰もなし。第四日目の早天。アルベキルク氏陸路より歸り來る。兩先生。同氏を密室に招て訊問せり。此日午後重要の會議を開らく旨の廻狀あり。午後四時諸氏一同。數を盡して浮城の會議堂に集合す。兩先生は上坐に在り。桂。梨山。梅山。松本。杉苗。眞木。楠。菊川。八木田。萩。アルベキルク。轟。薊。及余を幷て皆列坐す。海王艦長杉村氏も亦來り會す。一同先つ茶を喫し終る。

爾時作良先生。從容として話を起して曰く「アルベキルク氏の歸へり報する所に依れば阿蘭の敗艦。即夜バタビヤ府に逃け歸り同府の人心惶々たり。又鎭臺は更に艦隊を集めて再擧を謀り居る由。東印度の阿蘭屬領には元來二十餘艘の砲艦ありと雖とも其過半はポルチオ。スモタラ。バブア等の各港に分屯し。現にバタビヤに在るものは敗艦の外。五六艘に過ぎさるを鎭臺は急に令を諸島に傳へ方に其艦隊を招集するの最中に在り

鎭臺が我々を欺き士官を拘留して返付せさるに依り五砲艦は洋上に於て我々に攻擊せられたりとの噂。バタビヤ府内に喧しく。之に因てアルベキルク氏は笹野氏の安否を探り出すの便利を得たり。氏は今尙ほ確かに獄中に存在せること愈よ分明なり。是れ我々に取て一大快報と言ふへし

余と綜理との意見を以てすれは。笹野氏を取返へし得るのみならす兼ねて又我か雄圖の第一着手を爲すへき。好時機を發見せり

抑も阿蘭か日本の廣さに八倍せる此東印度諸島の幷呑を始めたるは三百年前に在り（一。六七七年）又今日の如く全く各地を畧有せしは尙ほ僅に五十年前のみ（一。八三〇年）其委計や。最初はジヤバの一王に結て互市場をバタビヤに開らき厚く金帛を賄て城寨を同地に築くの許可を得たり。是れより兵數を增し。戰艦を備へ。少しく事ある毎に年一年諸邦を征服し五大戰（短きもの五年。長きものは十五年）の後遂に呑噬の志を遂るを得たり

今日。蘭人の土人を遇するや實に不法を極む。其一例

を擧けんに（此ジャパ島には一千五百万の人口あり）珈琲。砂糖其他の産物を耕作するには政府より一定の賃錢を以て土人を使役す。又土人の産出せし産物をも土人をして自由に之を賣買せしめす政府か自ら定る所の價格を以て之を買上く。故に雇賃より貨物の價格に至る迄。此地の人民は自由に之を高低するを得す。鎮臺政府は斯く廉價に買占めたる多量の産物を歐洲に輸入し非常の高價に賣捌て莫大の利潤を網し。年に幾千万圓を收入す其定る所の日雇賃産物の價格は假令ひ相當なるにもせよ。人民をして需要供給の天則に從ひ賣買の自由を得ると能はさらしむ其非法も亦甚し。然るも尚ほ此地の人民は半開の稱を得なから無氣卑屈。一個頭首を擡げて回復を謀るの男子あるとなし。我々實に東洋人種の爲に之を恥つ

此國正統の帝室は今尚ほ微々として中部の一區を統治す。首府を空輕太と云ふ。人口十万以上を有す。王室の直轄する生齒尚ほ百餘万口あり。然れども王は空名を擁すのみにて實權は蘭人の手に在り蘭人は同府に鎮戍を置き兵威を以て之を鎮壓す。又同府に近き印度洋の沿岸に横輕太と稱する一區あり其王は門地の貴きと空輕太の王室に次ぎ互に代々親姻を結へり。此王の統治する民衆亦五十万人に下らず。蘭人は幽かに此二王室を存して以て人心を繫ぎ。無事を保つと雖とも其實は自家掌中の玩弄物と同視せり。以上說話する所は東印度地誌を閲する者の必す詳知する所ならん然處蘭人專横の極。遂に此一ヶ月以前多からさる金圓を以て右兩王の領土を政府に強買する旨を申込みたり兩王は其力遂に抗敵し難きを知るか故に一向ら鎮臺に此議の中止を哀願するの最中なる旨。アルベキルク氏探り來て報告せり

彼れ歐洲人が他洲に屬領を開き植民地を樹るの手段は概ね此の如くならさるはなし。其本國に於けるや。信義を重んし禮節を尊ふと稱しなから其一たひ足を他洲に容るゝに及ては非法無禮。他の人種を遇する幾ん禽獸を以てす。我々豈天に代て彼等の暴横を懲らさゝるを得んや。正弱を助けて邪強を挫くは仁人義士の素懷なり。絶世を繼き廢國を興す元と是れ日本男子の本分。我々今より横輕太の地方に赴き二王を助けて蘭人を東印度諸島より放逐し。二王をして正統の位に復せしめん。然る後此地を我々の保護の下に置き我が新版圖の一附庸となさんも亦快ならすや。若し此策を擧行せは笹野氏を取還へすか如きは固より容易の業のみ」

と諸氏一同皆寂然として言なし。余も亦心中竊に顰蹙して思へらく「先生果して又此の如き大膽なる計圖を畫き出し我々の一行に是より幾多の苦樂を與せしむるならん」と暫くして轟。蘭杉村氏を始め一同皆な同意の旨を答へしかば兩先生大に喜ひ菊川氏をしてアルベキルク氏に此企を語り聞かしむ（氏は倚ほ日本語を解し兼ぬるを以てなり）氏聞て大に此議を贊して曰く「自家數年間此地に流寓せし經驗を以てするに土人が蘭人に滿たさること一日にあらされとも。阿蘭も亦文明國の一にして極度の虐政を行はざるか故に人民事を擧るに至らす然れとも横輕太。空輕太兩地の人民は其王室が日に式微に向ふを見て恐々の情に堪へさる者多し。況んや今や又其領土を强奪せられんとするを や。此機最も乘すへし且已れ先きに横輕太に在りし時王の病を療せしとあり王は年方に壯にして常に先王の遺業を恢弘する志あり。若し愈よ我々を信用せは事を擧くる亦難きにあらす」と諸氏益々喜ふ綜埋亦曰く「此ウエルコム灣は地形廣濶にして防禦に便ならす。阿蘭數艘の砲艦は意とするに足らさるも走り歸りし英艦か支那海及南洋の艦隊を糾合して再ひ此地に寄せ來んには其防禦實に難し。依ては一日も速かに此地を解纜して横輕太に赴かん」と是に於て衆議一決す

翌日未明。海王は分捕砲艦を曳き浮城は戰鬪の準備を整へウエルコム灣を拔錨してソンダ海峽より印度洋に乘出せり。地誌を讀む者の詳知するが如く。夏期は印度洋にムーンスーン大風浪の絶へさる時節とす。殊に四月より十一月迄の七ケ月間はジャバ島の南面に東南の貿易風常に吹續くを例とす。今や七月下旬にして風浪我船に逆ふ。此際に一砲艦を曳き行くは航海殊に難儀なり我か三艦とも多少の困難を經たる後三日目にして辛く横輕太の小灣に投錨す

第五十回　調見

投錨の即日アルベキルク氏横輕太に赴きしが次日歸り來て復命す。万事都合よしと云ふ。因て此日兩先生。轟。蘭。アルベキルクの諸氏及余。其他水兵三十餘名を從へ上陸す先生船中の貯藏品中より日本京都の西陣織物錦地數匹。九谷燒花瓶一對。其他漆塗手箱等を一籠りとなし之を携ふ。先生はフロクコート。他は皆海軍正服を着く

横輕太より海灣に至る三里餘の小河あれども過半は水淺くして舟を通せず依て陸行に決せりジャバ内地は一帙に山多く平地少し。故に旅行には皆駕籠を用ふ。其制は日本の駕籠と粗ほ同し余等の一行は灣頭の村落（戸數千餘）に立寄て駕籠を雇ひ出發せり。此邊は四面一望。大小の峯巒。疊々として相重り溪野には田畝の耕耘遺る所なく行屆き。一の荒蕪地を見ず（三百年前に西人の此地を發見せし時。已に斯の如しと云ふ萱萱の農家に村里をなして處々に點在せり。山々は何れも草樹繁茂して鬱々蒼々たらさるはなし。海濱より行くと三里餘。始て一都府を望む。人口五六万。家屋鱗次すは是れ即ち横輕太なり。近て府門に入れは。ポルチヲ。セレベス等に住する蠻族の家屋とは大に相違し。實に半開以上の國土たるを知る家屋の精粗は日本の田舍名主の家作に比して可なり。但家の建築は甚た異樣なり。之を先生に聞くに。マラッカ。緬甸。暹羅。印度南部の建築風なりと。地圖を按するに灣口より横輕太府迄は日本路程の三里餘とす同府より此國の舊帝都。空輕太迄八里餘。夫よりサマランの港迄十五六里を隔つ。サマランは即ち蛇波洋に面する繁昌の互市場なり。サマランより空輕太を經て横輕太に通する鐵道及ひ電信あり。空輕太には阿蘭の鎮戍兵五百人を屯駐すと云ふ我々府門に至る時。兼ねてアルベキルク氏の通知に依り國王よりの案内者數名此處に出迎ひ居れり我々を王宮の前に案内す。宮殿の大さは日本十万石以上の諸侯の御殿に比すへし。宮殿の大理石柱。兩行に立列ひ。室中は黑白の度洋に屬し暹羅。緬甸の者に同しと云ふ。蓋し此地には總て印度風の文化を及ぼせしものと見ゆ。宮殿の屋根作りは三階或は四階にして四方の棟に尖塔の如き突出せし角あり。正殿の前には大なる一双の石獅子を安す恰も日本の神社に似たりと。暹羅の風に同し。我が一行導かれて休憩所に入る。待つこと多時。侍從の類なるへし彩布を身に纏ひ劍を帶びたる人物兩名出來り國王御對面の旨を通知す。是に於て水兵三十餘名を遣し置き。兩先生及余等導かれて宮殿に打通る。幾個の石疊の廊下を打通る後。一の廣濶なる廣間に出て上段の下も左右二行には數十百疊敷計り。正面には高き上段あり内殿の左右兩側には紫色の大理石を以て碁盤の目に石疊す。上殿の間には印度風の煌き耀く帳幔を垂る。

廣さ此處に小憩す。暫時にして又一殿に案内せらる。

名の侍臣立並へり已てにして國王臨御あり。其寶算二十七八歲なるべく頭には回教風の彩布冠を戴き幾個拇大の寶石五彩の光を放ち、て玉冠の前面に煌めけり。其の服裝亦實に異躰なり余の生れて始めて見る所のもの。蓋し東洋風にあらず西洋風にあらず是れ必す印度より馬來諸島に行はるゝ一種の服裝ならん作眞先生。最初に進て禮を爲す。國王亦答禮す。立花綜理之に次き。其他我々一同與に進て謁見す。アルベキルク氏通辨す。兩先生の齎らし來れる日本の織物。陶器。漆器類を進獻せしに國王殊に滿足の旨を陳謝せり。是等の什器の精巧なるは。是の國人をして日本文明の進度を驚かしめ從て我々を尊敬せしむる一方便となれり其より余等一行又以前の休憩室に伴はれ。此處にて晝飯の饗應あり。料理の鹽梅亦是れ不可思議。東洋西洋の間に位す。要するに肉少くして野菜多し。蓋し熱帶地方は人躰に黙熱を要すると少きを以て自からこの如き精進料理に似たる風習を生せしならん因て思ふに佛教の如き精進料理は熱地より行はれ來りしならん寒地にては獸熱を要す。人類豈に常に菜食をのみ爲し得んや余等竊に謂て曰く國王を始め侍臣の容貌頗る日本人に近きにあらずや只た其顏色少しく黑みを帶ひ身躰の長大なるのみと轟氏低聲して曰ふ「彼の國王にも亦必然公王あらん」と余等相見て莞爾たり。兩先生は室の一隅にて頻りにアルベキルク氏と密談せり。饗應終る後侍從出來り。國王殿下更らに便殿に引見し玉ふ旨を傳ふ。此時は兩先生とアルベキルク氏のみ案内せらる。蓋し同氏は通辨役にして國王と兩先生と大切の談話あるものと見へたり。余か後に兩先生に聽得たる所のものを以て今此處の事を補記せん

秘密の内謁見に於て先生。殿下に向て曰く「某等已に東洋人種に屬するを以て同人種に對する親愛の情殊に切なり。若し殿下某等を用るの地あらは。水火も亦辭する所にあらす某等先きに阿蘭鎭臺の侮辱を蒙むり已むを得すして一たひ其砲臺を毀ち。二たひ其艦隊を走らしめたり仄かに聞く蘭人暴横にして此國の帝統王統を辱しめ其宗廟社稷を滅絶するの企あり。殿下若し先王の遺業を恢弘するの盛意あらは不肖某等亦死を以て之に從はん」とアルベキルク氏亦傍より我々と蘭人との兩度の戰を述べて盛に我か兵威を誇張せり。王も已にマサラン發兌の新聞にて畧ぼ我々の武力を承知し居ると見へ。頻に日本人種の獨り東洋に雄飛するを欽羨せり。然れとも兵を擧くるの一段に至ては敢て

輕々に語り出さず。唯深く兩先生の好意を謝する旨を述へ。此日の謁見は終りたり

兩先生休憩所に歸來る。是より一同府下の旅館に案内せられて家屋の構造は日本に比して幾分か粗末なりと雖も亦遙に野蠻の境を脱し居れり。兩先生。アルベキルク氏をして其知る所の臣僚の家を訪問し。此府の近況を探り來らしむ

夕七時頃。同氏歸り報して曰く「阿蘭鎮臺の半屬邦を御するや空名を與へて實勢を奪ふを勉む故に諸王の宮中には必らず蘭人の味方と爲るへき者を据へ置くを例とす此者已に鎮臺と相ひ親しきを以て隱然と勢力を占め自ら威權を專らにし。内外相應するに至る。當府の國王に老叔父あるは某亦已に之を知る。彼者は即ち阿蘭鎮臺の最も深く結納する所の者なり。今日國王の語氣を察するに。事を擧けんと欲するの志念甚た切なれとも尚ほ暗に畏憚する所あるに似たり。是れ或は彼の老叔父か蘭人の爪牙たるを恐るゝならんと」兩先生顰蹙して曰く「是れ一難事」

第五十一回　鉄道線

夜九時。俄に國王より密使あり再ひ急に兩先生を召す。兩先生即時アルベキルク氏を從へて赴く。一時間餘にして歸來る。綜理直に水兵二十餘名を從へ王の侍從一二名と共に出行きたり。先生余等に語て曰く「バタビヤに派遣しありし國王の使臣より先刻電報あり。阿蘭鎮臺愈よ殿下の哀願を拒絶せし旨を報告し來り。殿下の意。始めて決す。亡國の君とならんより寧ろ社稷の爲に死戰して先生に地下に見へんと決意せり。依て我々に万事を依頼すとの宣旨あり。我々直に王宮を守衛すへし」と余は問ふ「綜理は何れに行きし乎。此處に殘り在る水兵は僅か十餘名に過きす」先生曰はく「立花綜理は蘭人の爪牙たる老叔父を掩襲せんが爲めに赴けり」

夜十時。綜理。老叔父を捕來り之を王宮の内に幽閉せり先生。綜理に言て曰く「此際第一に掌握すへきは停車場と電信局なり。先きに殿下にも此事を忠告し兵士を派遣せしめたれとも甚た心元なし。已に老叔父を捕へ得たれとも尚ほ鎮臺に消息を通し間諜をなす者なきに限らす。速に電信局停車場を奪取て鎮臺に此變を聞知せしめさるを必要とす」綜理再ひ兵士を率て停車場電信局に赴き。國王より派遣せし兵士を留て一切の往來通信を絶たしむ

此夜の混雜。兩先生の繁忙。實に名狀すへからす。是より先き先生轟氏に命して急に本艦に歸り號令を傳へしむ兩先生の不在中。八木田氏を海上軍事總務とし杉村氏を副總務とす。楠氏は水雷專務たるを以て亦た留守せしめ菊川氏も我が將卒及捕虜の創痍看護の爲め一兩日は尙ほ艦內に在留せしむ。海灣に於ては氣象の豫察大切なるを以て杉芒氏も留守たり其他。桂。梨山。梅山。松本。眞木の諸氏は即刻上陸して來會せしむ浮城海王丸は我々一行の根據なり。万一陸上にて失敗の不幸あるも彼の二艦だに安全ならんには之に投して何れの地にも航走し再擧を謀るを得へし。又陸戰に要用なる軍器彈藥を輸入するも自在なり。然るに之に反して二艦を失ふ假令陸地に大勝を得るとも軍器彈藥輸入の道絕へ。遂に敗亡の悲運を免れざるへし。兩先生此旨を詳に八木田杉村の二氏に傳へ、專ら海灣の防禦に注意せしむ。兩先生の考にては灣口の要衝各處には已に遍く水雷を伏せ置きたれは敵艦容易に侵入し得へきにあらす。且つ灣口の山腹には左右の要處に假砲臺を築一方には分捕敵艦の九寸巨砲を備へ付けあり雷彈を四五十町の遠距離に發射して敵艦を追却し得へし又一方には霹靂風砲を海王丸より引上けて備付け置きたれは是亦大爆彈を發射して充分に敵艦を抑ゆるの力あり。且防禦困難の場合には浮城海王を乘出たして應戰を試むるも自由なり。八木田。杉村。楠の三氏は十分是等の掛引を心得居るが故に先つ海上は左したる憂なきに近し然れとも右二ヶ處の砲臺及浮城海王の諸砲には皆夫れ〳〵砲兵を附屬せしめさる可らす。歸順の支那人等も此頃は稍や兵器を採るに熟したれとも。彼等のみに專任するは尙ほ不安心の場合あり。故に少くとも砲兵の一半は日本兵を以て之に充てさるへからす。之が爲に大に上陸の人員を減し。諸氏の引率して來着し得へきは僅々五十餘名に過きす。先きに我々と與に上陸せし分を合せて尙ほ八十餘名のみ。千五百万人の民衆を有して日本の九州に二倍する一帝國を回復せんとする大事業に比較すれは實に是れ罌粟粒の如き種子兵なり。兩先生の大膽。驚ろくに堪たり次日晴爽。諸氏本艦より到着す。齎し來りし軍器は何々ぞ。分捕砲艦の六斤後裝砲二門。浮城海王兩艦のガツテリング、ガン四基。海王丸に積載りし山砲一門。小銃六百五十挺。其他軍用電線。發明三種の火藥幾十函なり。諸氏は灣口の村落より數十匹の馬と幾十の人夫とを傭ひ。徹夜して漸く府內に輸送せり

是より先き。國王より兩先生に王宮の一部を賜て起臥の處とす。又王宮に近き一二戸の大家屋を以て我々諸〳〵氏の事務所とす。今日朝。國王檄文をジャバ國内に發して。一々關人の暴横無道なる秕政を摘擧し。大に先王の遺業を恢弘して關人を國外に放逐するの義擧を宣告せり又是と同時に愛國の義勇を募る旨を布告す。又作良先生を以て假攝綜理大臣とし立花綜理を海陸軍帥となすの宣旨あり。先生之を辭して曰く「殿下の臣僚。深く兵事に慣らはさる以上は我〳〵海陸軍の事務を帶ひ王室回復の責に任すへしと雖とも。文政の如きは風俗民情を審にするにあらされは不可なり願はくは之を從來の重臣に委任せよと峻拒すると再三。然れとも文政武政は連關して離るへからす。一方に費用を徵せさるへからす。一方に境土を拓らけは一方に政令を布かさるへからす。兩先生に軍務のみを委するは不便少からすとて殿下より再三の命ありしかは先生遂に其命に應したり然れとも尚ほ請て舊來の重臣中にて最も門地ある人物を選ひ副務大臣と爲して先生と諸事を協議すると爲れり。王の兩先生を信任する斯の如しと雖とも。數多の臣僚中には意に滿たさるものなきを保せす

先生。副務大臣と謀て直に許多の間諜を即時四方に派遣せり又府内恰好の民家を以て大製作場と爲し桂氏は直ちに藥劑の製造に着手し。梨山氏は種々の陸戰軍器を製造す。立花綜理は眞本氏に命して府外一里餘の地勢を相し。攻守の便を謀り。八稜形の砲臺八坐を築起し。砲臺より四町計り先きには一線二十餘丁の長さ二重に胸壁を築きたり。今朝遲ひ來りし大砲三門を要地に裝置せしが奈何せん砲數不足なり。副務大臣に相談して兵器を集むれとも兼ねてより關人か兵器貯藏を許さゝりし由にて今日の用に供すへき物なし。兩先生も是には大困却の樣子なり。兩先生依て梨山氏に命して俄に大小の臼砲百餘門を鑄造せしむ。蓋し其製作に容易なると運搬に便なるを以てなり此地は石炭及銅鐵の類に不足なし

余とアルベキルク氏は兩先生に附屬し王宮の一部に在り。國王の寢殿は正殿より遙か隔たれり後宮の園ひ甚た嚴重なり。なか〳〵公主抔を瞥見し得へき譯けにあらす先生に聞くに。此國は總て回教を奉す同教は耶蘇教佛教等に比すれは男女の別を正すこと最も嚴格にして婦人は貴賤を問はす一寸も外出するにも覆帽を被て其面を露はさしめす又男子には一切會見を禁すと云

ふ。知るへし同行諸氏の中大に失意の人あるとを此夜十二時。殿下急に兩先生を召す。兩先生歸來て曰く「今。空輕太の間諜より秘密電報あり。此地の變亂。今始て彼地に達したり明日早天阿蘭の鎮守兵寄せ來るへき手筈なり」と先生諸氏に語て曰く「阿蘭鎮臺の常備兵數は三万と號すれとも。或はスモダラに屯し。或はポルチオに駐め或はバパァに派遣す。故に此國に在るものは。一万内外に過きす。且募兵を用ふるか故に。歐洲諸國の無賴漢。高給を得んか爲め應戰せし烏合の兵。其一半を占め土兵其一半に居る。又空輕の鎮守兵は平時五百人に過きす。同地と雖も土人蜂起の憂なきにあらされは全數を盡して此地に攻來る能はす然らんには此地に寄來る者多くとも四百人内外の兵ならん歟。但サマランには多數の兵あり電信を以て招來し瀌車にて來集せは其兵數。意外に大なるやも知るへからす。何分にも我〻の手勢のみにては不足なり少くとも二三千の土兵を集る迄は中途に於て兩三日敵兵を喰止めさるへからす。依ては此府と空輕の間なる鐵道線を破壞し其行を遲却せしむるを上策とす」と綜理自ら之に赴かんと欲す。先生之を止めて曰く「府内の百事多端なり明朝より募兵は續々來集せん。其編制訓練最も大切たり元帥一時間も此地を去るへからす」と薊氏。梅山氏及余を顧て曰く「三氏今より日本兵二十名を率ひ幾函の雷藥を帶て瀌車に飛ひ乘り速に由樂城の停車場を取れ同處は殿下の領内に屬するを以て抵抗する者なけん。同處を根據とし雷藥を以て停車場以北の鐵道線を可成く大に破壞せよ諸氏夫れ直に赴け」と余等三人即時。夜を冒して停車場に向ふ

第五十二回　地雷函

横輕太よりサマランに通する鐵道は小形（ナルロー。ゲーヂ）にして我が日本の横濱東京間の者に同し。余等一行上等車にて急行す。車中に在て熟ら思へらく。鐵道線路を破壞するのみにては余等の功小なり。何とか一工夫を廻らし此際諸人に先て天晴れ大功を立て兩先生の感賞に與り且つ衆人の目を驚かし吳れんものと種々に考案せしが忽ち思起す。我々は鐵道破壞の爲めに猛烈なる雷藥を携へ居れり。是れ奇貨用ふへし」と依て梅山轟兩氏に謀て曰く「余は今一舉兩得の奇策を案出せり。彼の爆裂藥を以て鐵道を破壞すると同時に蘭兵四百人を中天に吹飛さは如何ん」梅山氏首を傾け默思して曰く「奇策は則ち奇策なれとも我々に導

火の雷線具なきを如何せん。自發の地雷法を用て瀛車が矢を突く如く馳來る二三秒の時間を誤らず爆裂函をして自ら破裂せしめんことは極めて精微の算測を要す是れ實に行ひ難き技術なり」と余の妙計も是に至て窮したり。此時瀛車の窓より沿路の雷信柱のチラリと眼に觸るを見て又忽ち思得たり。梅山氏に謀て曰く「破壞すへき鐵道線路の電信柱を斫仆して其電線を爆裂藥の導火線に用ひ停車場の電信用に備へ在る電氣器を用て點火せは如何ん」梅山氏手を拍て曰く「奇妙〳〵」轟〳〵と明く氏等大に喜ふ。我々が是等の評議をなす内。四里餘の路程を馳て瀛車已に由樂城に達す。此時已に夜はホノ余等に伴來りし横輕太の役人より命を驛長に傳へしかば。停車場直に我〳〵の有となれり。驛長の報告に據るに十五分前に空輕停車場より電報あり蘭兵四百餘人六時を以て彼地を發車する旨を通し來れりと。余の時計を見れは今已に五時廿分なり敵兵の此地に着するは今一時間を出てじ。余等既に騎虎の勢ひなり。彼我衆寡の勢ひ固より已に懸絶す若し彼等を鏖殺し得すんは我〳〵忽ち彼等の手中に落ん。勝たすんは則ち死せん。ナカ〳〵氣樂の場合にあらす

瀛車に由樂城に達す。此時已に夜はホノ余水兵二十餘名と與に先つ直に停車場以北の鐵道線路の電信柱を切倒し。長さ五町餘の電線七八條を得たり又梅山氏は直に停車場の電信函を吟味せり。轟氏は驛長に令して停車場の技手人夫をして近傍の土人百餘名を雇ひ來らしむ氏曰く彼等を遠地に埋伏せしめて吶喊の聲を擧け我か軍勢を助けしむるなりと。然れとも余は其必要を解せす。梅山氏停車場の電氣函二個を檢査して曰く「機械小形にして發火の力甚た弱し。然と我か爆裂雷藥は唯た一點螢の如き火氣あれは忽ち發火するの妙あり」と依て試に小銃のバトロンを毀ち電線の一端を其火藥に接し置て點火せしに難なく發火せり。余等大に喜ふ。是等の奔走に早や三十分間餘を費せり。余等三人水兵人夫合せて百餘人停車以北の線路を走り行くこと八九町此地の線路より十間餘を隔て灌木一面に路傍に茂生せり余曰く「此處を倔強とす我か雷藥は一尺立方の爆裂力遠く二町に達するにあらすや。線路を去る十間なれは已に甚た近し」とて直に爆裂函一個を草叢中に突込み置き。電線を五町餘の處に引き電氣函を居ゆ梅山氏曰く「一函は爆發を誤るときの用心の爲め。更に一函を伏置かん」と又た二三町以北の草叢中に一函を伏せ導火電線を先きの電氣函

に接す電氣函より爆裂函まで五丁餘の隔り。三十間毎に小杭を建て電信柱の臂杭を附し地上より五寸程の高さに電線を安し斯くして電氣の中途に迸散するを防ぎたり

此邊は地形丘岡を爲して鐵道線路より地勢斜に隆起し七尺以上の灌木一面に生茂れり瀛車の馳來るを望み見るに便なり。梅山氏余に謂て曰く「先頭第一車を擬して發火せん乎」將に中央を擬せん乎。余曰ふ「瀛車の速力甚たし第一車に發火せは可ならん又た伏置きたる第二函の中にて先つ南の者を發火し一列車を吹飛せよ迹より一列車の吹き來るあらは其時第二函を爆裂せしむるの利益あらん」と未た言ひも終はらさるに北方に當てゴーッと遠雷の如き響を聞く。余等相顧て曰く「必然列車來る」梅山氏令して曰く「皆な地に伏せよ」一行百餘名。哇の如く地上に平伏す。二三の士人等樣子を望み見んとチク〳〵と頭を擡く。轟氏之を叱す彼等忽ち低頭す。須臾にして又たポッ〳〵と頭を擡くも氏又た之を叱す轟聲益〻急に響益〻近し。北方の山角。忽ち一群の列車を現し出たす驅過る鐵道線上には一文字の黑煙を靡き殘しつゝ十五輛の列車一直線に由樂坡を指して突進す先頭の機關車方に草叢を突過する際。梅山氏拇指を以て電氣函の局處を一押す。百雷一轟。砂煙土石半天に捲上かる。五六町の間。晦冥にして咫尺を辨すへからす

轟氏立上て曰く「吶喊を發せよ」雇ひ來りし土人百餘名大聲吶喊の聲を作る。轟氏又喇叭を吹鳴らす。敵は何處に在りと見へ分かねとも。唯た塵煙の裏を望て水兵頻に小銃を亂發す三四分間にして稍や薄らきたる砂煙塵埃濛々たるすきまより白衣の蘭兵七八十名北を指して逃走るを見る。蓋し殘兵の辛く命を拾ひし者共ならん余等尚ほ遠く彼等を追射す。此時淡霧稍く霽れ互に面を見るを得たりしが何れも頭頂より全身總へて沙を浴ひ塵土は軍服の鍍に堆し

線路に近つき見れば鐵道線路の四邊は其地形全く一變し。恰も一火山の噴出せしが如く。一町四方パッリなる摺鉢形の凹みを生出し十五輛の列車は一片の影をも留めず。遙か二三町を隔てゝ碎片處々に散落し。手とも言はす足とも言はず血塗れの人躰四邊に散飛し居れり。人をして一見戰慄せしむ。嗚呼我れなから殘酷の計をなしたりと空恐ろしく覺へたり

轟氏は水兵を擁して停車場を占據し。土人の斥候を

一二里外に出して蘭兵の襲來を伺ふ。今や由樂坡以北は鐵道電信總へて不通となれり

余は即時兩先生に向て電信を發し。蘭兵を吹飛ばし鐵道をも破壞し了りしを注進せり。二時間の後ち立花綜理より電報來る「我れ直に其地に赴く。馬牛驢騾の類騎乘に堪るもの數百頭を至急に集め置け」

第五十三回　舊帝都

午後二時横輕太よりの列車到着す。綜理。萩氏。具木氏。薊氏。日本兵五十餘名。王の重臣數名。新募の土兵ならん異樣の服裝をなすもの百五十名出來る。余梅山氏と之を迎ふ綜理。大に余等の功を稱し且曰く「寄せ來りし蘭兵。地雷の爲めに死傷する者過半ならは首府必らず空虛ならん。今ま此機を外つさず長驅して首府に突入せは手に唾して之を陷れん。兼て注文せし馬匹は集め置きたる乎」「何分不足にて困却せり馬は唯た一百頭。耕牛驢馬の類二百頭あり」綜理曰く「善し」と談話中。又た第二の列車到着す。土兵三百名下り來る。又た十五分間計りして第三の列車到着す。馬匹二百餘臼砲四門を積めり

綜理曰く「今や一分時間をも空過すへからす」と依て直に臼砲彈藥輜重を牛驢に積乘せ全軍四百三十名。各〻馬に打乘て馳出たせり。本來乘馬に仕立てし馬とては僅〻二三十頭に過きず餘は皆な荷馬或は耕作用なるが故に。劍ね廻るあり。躍擲するあり。恰も是れ粗雜不規律の大騎兵隊を現出す。薊氏は五十騎を帥ひ本軍に先つ上一里餘。斥候隊と爲る

我〻一軍北を指して急行す。元來ジャバは蘭人が交通の便に意を用ひしか爲め道路の手入れは國内到る處頗る行屆きたり余已に三里餘を進む一の敵兵を見す。唯路上を來往する人民か大事變の湧出せるに驚くあるのみ。二時間を出てずして早く遙かに横輕太の首府を望見たり

ジャバの大山脈は西端より起て東に連ると幾十里。蘭丹と稱する一座の大火山に至て絶ゆ。此の山尾。陵夷して起伏せる丘陵を爲し東に赴くに從て彌〻平地と爲る。平地より東すれは又た山脈の起るあり此の西東の兩山脈間の平地は即ち首府の所在なり何れの國も昔時の王都は險阻を擇て交通の利を慮るに暇あらさるものと見ゆ。日本の奈良京都の如き亦た皆な此類なり

都門を去る廿町餘にして綜理。全軍を駐め。薊氏をし

て府内の狀を斥候せしむ。待つと冊分間。同氏一聲の號煙を揚ぐ敵の殘兵已に府内を退去せし信號なり。全軍都門に入る。綜理。轟氏に命して又電信局。停車場を取らしめ。薊氏に命して王宮に向はしめ余に命して阿蘭鎭戍の兵營を襲はしむ。余一百名の土兵を領して之に赴く。兵營の前。二町餘に至る時。令して此地より一齊に兵營を亂射せしむ。敵兵の一銃を應發するなし依て偵ひ見れは全く是れ空營のみ。余の一隊は空く銃丸を費すこと二三百發。サマラン府よりは未た兵を送り來らす。屯兵は取る物も取敢へす遁走せしと見へ。營中の諸物は一切遺しあり。炊出所のパン及ひ料理すら尙ほ其儘に厨下に羨へ居れり余も空腹に堪へさる時なれは勝戰の祝宴として部下の土兵と共に飽食し勇氣十倍す。土兵の一半を留めて兵營を守らしめ。余は綜理に王宮に會せんとて出行けり府民は未だ横輕王の義擧を詳かにするに及はさる中直に我々の突入するに會ひしかは。唯是れ一軍天上より降しか如き思ひあらん。彼等は未た我〻を敵とも昧方とも知らすと見へ。戶々の壯丁は家具什物を負荷して逃け迷ひ。老幼婦女子は街上に泣叫ふ。其混雜騷動。恰も火事場の如し

王宮に至れは綜理の兵已に諸門を守衛す。此地の老土人は蘭兵塗に敗走して我兵進入するの變を聞き早く逃走せり然れとも横輕王の詳報に接する上は再ひ王宮に歸り來るへしと云ふ

余は綜理に首尾よく兵營を奪ひし旨を報し又た同處に於て小銃千餘挺。附屬品。彈藥の類及山砲二門を分捕せし旨を上申す。綜理大に余の功を稱したり余は思ふ先きには地雷を以て蘭兵を吹飛ばし今亦た兵營を乘取れり少くとも余は陸軍大佐以上の榮位を賞せらるへしと

是より先き綜理の王宮を取るや直に轟氏をして土兵五十餘名を隨へて六里餘を隔るサラチガの停車場を取り斥候たらしめしが此夜十一時。轟氏より電信あり蘭兵千人寄せ來るの摸樣ありと次日拂曉。立花綜理。萩氏。薊氏及ひ日本兵土兵幷せて三百餘人を率ひ。蘭兵に會戰する爲め出發す。余は梅山氏と共に府内に留守す梅山氏は王宮を守り余は停車場に出張して百事を處辨す空腹にては戰爭難儀なら ん先つ第一に近處の民家を借受け焚出を爲す。此國は總て米を耕し土人亦た米飯を常食とするが故に余は差向き日本風の握飯を用意す。又戰地よりの報知次

第。直に土兵を送出たすの用意をなす。朝八時に至つて戰地よりの電信あり曰く「戰始まれり」同時三十分又た電信あり曰く「臼砲四門至急運送せよ」と依て直に戰地に向け發送す。十一時電信あり曰はく「辨當を送れ」と次て又た電信あり「臼砲の彈藥欠乏す至急送れ」と十二時又た電信あり「戰ひ難義なり。送り得らるゝ丈けの兵士を送れ」と依て急に梅山氏と相談し府内には五十餘名を殘し置き他は皆な戰地に出發せしめたり然るに恰も好し此日午後一時。横輕多より新募の士兵千五百人到着す彼等の服裝を見るに黄赤色を染め交ぜたる彩布を斜に腰部以上に纏ひ。兩手は腕より。兩足は膝より以下を黑〻と現はし居るもの多し實に是れ異觀なり又た兵器は『ゲベール』あり『ライフル』あり有らん限りの獵銃の類を携へ來りしものと見ゆ。其他には異樣なる投槍刀劍類を携る者もあり。恰も是れ日本の百姓一揆を見るか如し。余は甚た心配す。斯る亂雜なる兵士を以て兩先生果して能く阿蘭鎮臺節制の兵に當り得へきやの否やと。然れとも流石は先生なり昨日以後未た二日を經さるに早くも幾千人の土兵を横輕多に募集したりと見ゆ。此の工合ひならは人員頭數だけは明日中にも隨分の多數とならん

新着の土兵中。五百人をは府下に留め。銃器を携ふる者千餘名は直に戰地に送り出せり。二時三十分電信あり「蘭兵繰り引きに引揚け里餘を隔てゝ對陣す。新募の土兵着せしより大に軍勢を張り。味方は攻め敵は守る主客の形勢を一變せり尚ほ新募の土兵來着せは續〻戰地に送れ蘭兵の側面を廻襲せしめん」と然れとも其後は新募の兵未た來らず

今やサラトガより進んてサマラン府を陷るゝを得は我〻の領分は南のかた印度洋より北のかた蛇波洋に貫き達し。此國を中分して其一半を我か有と爲すを得ん何とならは中央以東は鎮臺と全く聲息を絶てはなり我〻か横輕灣に到着せし日より起算すれは投錨後二日目に國王に謁見して即夜義擧に決せり。第二日には瀛車線を破壞し蘭兵を吹飛はし。長驅して空輕を畧取せり今日か即ち第三日目にして空輕より北に進み又た已にサラトガを畧有せり。僅かに三日間。將にジャバ東半部を掌握せんとす是れ一に兩先生の方算。神速機敏にして疾雷耳を掩に暇あらさるかごときに因るならん。バダビヤ鎮臺は昨夜か今朝こそ始めて此の變報に接せしなるべく。國内各地は未た此の大事變を詳かにせ

さる者もあるへし。今日迄は兩先生常に敵の不意に乘せしが故に斯く奇功を奏し得たりと雖も。ペクビヤ鎮臺が愈よ軍略を整へ其完備せる兵器と節制の大軍とを以て寄せ來るに及はゝ。後來の成敗果して如何があるへき乎。之を思へば甚た痛心は堪へさるものあり

第五十四回

騎象天滿宮

立花綜理戰地より歸來る余等停車場に出迎て勝戰を祝す。綜理曰く「地形。山多して戰野砲を用ひ難く且敵兵は首府鎭戍の後備として繰出し來りしと見へ十分の戰備なし其兵數は多しと雖とも小銃のみにて野戰砲を携へず。我は臼砲を以て劇烈無比なる雷藥を盛りし圓藥を八町以外の遠地より彼等の頭上に注ぎ掛けしかば彼等潰走して山腹の嶮地に引揚け。只ザマランに侵入せしめじと防くのみ。最早や侵來の勢なし余は府內の事も心掛りなれば一先還來れり」と綜理。王宮に入て『楚祖南（『ソーソーナン』とはジアベの王稱なり猶ほ日本の『ミカド』露西亞の『ザー』土耳格の『ソルタン』波斯の『シャア』と稱するがごとし）に謁し。戰捷を奏問す。楚祖南大に喜ぶ。今迄は已むを得すして我々に一味すれとも心中尙ほ阿蘭の兵威を恐れ首鼠兩端の有樣ある臣僚なきにもあらさりしが今や全く其形勢を一變して心服の摸樣あり又た此邊は總て王室の領土なるか故に人民は再たひ王室の盛時を見んとて簞食壺漿の姿あり夕七時。横輕太の作戰先生より電報あり。明日夕刻は晩涼に乘して新募の土兵を隨へ首府に來着して。老帝楚祖南に謁し兼ねて新政を國內に布き行ふへしとなり。是より先き空。横。兩輕太の王室は互に打合せあり二國を合して此義擧を興にし。兩先生を以て兩地の事を幷せ掌らしめんとなり

横輕太空輕太の王室を回復する義擧の統領として。假攝總理大臣の高位を占め智勇絕倫にして不日蘭人を此の國外より放逐し得へしとの噂さ暄しき日本義勇兵の大統領作戰なる英雄が明日は入府すへしと聞こへしかば。王宮にて輕旅の支度盛なるのみならず府內にては衆庶が見物出迎を爲さんとて此夜より大騷ぎなり扨愈よ明日となりければ。府內の人民は各々最寄々々の街頭を清らかに掃除し。沿道の町々には印度樣なる色々の派手々々しき旗飾りを爲し美麗にして芬芳ある草花木葉を家毎に飾付るなど其賑ひ一方ならす。恰も日本に於て祭禮の神輿を拜するの用意に似たり。府民

は此日の午後より皆々職業を休て待受け居れり已にして午後五時となる。最早や先生の入府に三四十分の時間となりしかは余と梅山氏は王宮より出迎の爲に派遣する重臣七八名と共に當下の土兵五百餘人を引率して郭門に赴けり府内の道筋兩側には已に見物人の山を築き。老少男女我も〳〵と詰掛け來る。之を幾會としてカヽノット。無花菓。鳳梨杯。熱帶地方甘美の果物を賣り歩るく商人あり。實に大祭禮の賑ひなり。余等は兵隊を二列にして一人は左。一人は右の街路の兩側に整列せしむ。余と梅山氏は騎馬にて一人は左。一人は右の街上に立ち各部下の兵を指令す。待つこと凡そ十五分間。斤候に出たし置きたる二三名の先觸れ。馬を馳來て唯今先生入府の旨を告けたり。市民皆な頸を延て行列の來るを望む五分間を經て日本の飴賣の吹くチャルメラとか稱する如き喇叭樣の奇聲を吹鳴らして一群の樂隊先頭に進み來る。其次には種々樣々の旗隊進來る之に次で土兵二百餘人。半裸躰の奇裝を爲し殺槍を携る者進み來る。夫れより土兵の銃隊一千餘人進來る。之に次て又一群の樂隊進み來り其次には二名の土人。訓獅子雌雄二頭を鐵鎖にて牽き來る獅子より十四五間を隔て土兵一群二千餘人整々として進來る其中央に小山の如き大象一頭。ノソリ〳〵と歩み來る。象背は印度織の錦襴綾羅を以て之を蔽ひ一面に小なる鈴を附す象頭には繡箔せる馬面の如きものを蒙らしめ。金銀の瓔珞をすき間なく垂れ連られたり。象の背上には疊二枚敷き計りの廣やかなる臺を載せ其上には日本風の衣冠束帶をなせし人物泰然として跪坐し手に笏を持す。恰も騎象の天滿宮とも稱すへし沿道の民衆は之を望て跪拜敬禮す余は遠望して是れ必らす祝賀の意を表せし山車を飾て先生の先驅をなす者なら んと思へり。稍くにして近つき來れは誰れか圖らん象背に儼然として日本衣冠を着けたる者は我か作戛先生ならんとは先生ならんとは先生の奇裝實に人を驚倒せり先生は平生の沈着なるに似ず時として奇を好むの一癖あり。見物の老少男女は頻に畏敬して サヽヤき合へり。彼等は此異樣なる日本衣冠の人を見て果して如何なる感想を生せしならん乎。先生の象に次で土兵二千餘人進來る余と梅山氏兩人は左右より馬を進めて象の傍に進み出で斜に先生に向ひ帽を脫し敬禮す。先生此時兩手にて笏を高く捧け答禮す。余等兩人之を見て堪へ得ず失笑

せり楚祖南の重臣等又馬上にて禮をなす先生答禮す。是より一同王宮の前に至る。立花綜理此處にて先生に迎接せり此夜先生。國王に謁見す。宮中の諸臣皆な先生の威容擧止に感服せざる者なし。謁見終つて宮中より兩先生に盛宴を賜ふ梅山氏余も亦與る此時先生余等兩人に横輕太を出發せし以來の事柄を尋問す。依て余は盛に余等の働きの花々しきを陳述せり。先生大に賞歎して曰く「上陸以後第一に敵兵を走らせし大功は幾と子一人に屬す」と余は拜謝す。立花綜理も亦た今日闌兵を走らせし始末を物語る重要の談話終り宴の將に徹せんとする頃。余竊に先生に問て曰く「今日御入府の際は人民皆な畏敬の色あり。大象に騎し給ひしところは異觀なからも壯大にして申分なく覺へたり乍併ら日本風の衣冠束帶に至ては其事あまり異常にして平生に御不似合なる樣に存じたり」先生笑て曰く「東印度諸島の人民は何事によらず壯大なる物に服事するの性質あり。敵に入府の行裝に付ては余も亦た大に工夫を費せり。象は元と此地に產せざるを以て人民之を珍奇とす。横輕太王の御厩に六匹の馴象ありしかは之を幸ひとし其一頭を乞得て之に騎したり。又余の服裝に付ては聊か政略の在るあり。偶然奇を好むの致す所にあらず抑も衆民の具瞻する入府の際に我れ若し平生の如くフロックコート洋服を着けなは此國の人民或は服裝上より我々を西洋人に近き者の如く思ひ傲し蘭人に代ゆるに又た一の西洋人種を以てするの感を懷かば其心に樂まざること分明なり。依て蘭人等と全く別種なる東洋一帝國の義人が救援の爲に來れるの思を爲さしむるを必要とす我れ已に洋服を用ひすとせは。日本風の衣冠束帶こそ最も用ふへきものにあらすや子の知る如く幸にして我か船中。是等の服裝を蓄へ居りしか故に態々本艦より取寄せて之を着服せしなり」と余は之を聞て先生か一擧手。一投足も亦決して道理なき事をなさゝるに感服せり

第五十五回　旅團長

先生大に新政を國内に布き行ふ先づ首として人民に產出貨物の價格を隨意に定るの自由を與へ又た人民の日雇賃は雇主被雇人相對に取極むるの自由を與ふ。其他租稅を輕減し警察を更革し。一方には人民の疾苦を救ひ。一方には爲政の紀綱を嚴にす人民皆な悅服して益々蘭人を憎むの情を生したり。數月を出てすして百事の面目を一變し此國をして東印度の日本たらしめんと

期して待つ（きに似たり）

二日を經さる中に新募の土兵各地より續々と首府に到着す立花綜理大に軍團を編製して十二聯隊を作る。其編制法。六十人を以て一小隊とし。十小隊六百人を以て一大隊とす。二大隊千二百人を合して一聯隊とし。聯隊を合して旅團を作る

我兵進てサマラン府を陷るれはジャパの中央を横斷し。東半部は自ら我々の有に歸すへし敵亦之を知るが故に必らず大兵を同府に繰込むに相違なし（バタビヤより同府迄海路なれは廿四時間。陸路なれは早きも二三日を費すべし）今ま我軍の部署に於ても亦た首府とサマランとの間を以て最緊要の地と爲せり。抑も首府空輕太の地勢たるや北にはサラトガの大路あり（サマランに通す）西には子ガラの間道あり（バタビヤに通す）東にはマセダンの道有り（マジユラ府に通す）首府背後の南路は即ち由樂城の路（横輕太に通ず）にして是を昧方の本據とす。阿蘭の大兵か不日に寄來るとあらは先つサラーガの大路に全力を用ひ此處は彼我勝敗の大戰地となるへし。然れども傍路より首府に突入せんが爲め西のかた子ガラよりも侵し來り。東のかたマセダン道よりも侵入せん我軍。依て兵を三路に別つ。

先つ第一にサマランに通するサラトガは最緊要の地なるを以て七聯隊。之れに向ひ。北旅團と稱す立花綜理自ら之を總督し轟氏を以て旅團長とし秋氏を以て副長とす。又子ガラ道は亂山の間に在り地形險隘にして大兵を用る能はす防禦に便なれはとて二聯隊をして之に向はしめ西旅團と稱す旅團長は梅山氏一人にして副なし。又た万一の變に備るが爲め。此後に續々到着すへき募兵を以て三聯隊を編製し薊氏をして之を統へしめ由樂城の停車場を本據として前面に砲臺胸壁を起さしむ之を豫備旅團とす。又た横輕太には追々と集來る士兵を以て後備旅團を作らしむ。桂。梨山の兩氏は同府に滯在し製造に從事するを以て傍ら後備旅團を監督すへき筈なれとも本務多忙。晝夜休息を得さるの恐れあるを以て建築專務眞木氏をして兵務に從事せしめ横輕太に歸て副務大臣と協議し專ら後備旅團の訓練編製に盡力せしむ

抑もマジユラ府はサマランに次くべき要地なり敵兵横さまに首府を衝かんと欲せば必らす此道よりマセダンを經て侵入せん最も大切の道路たりとて三聯隊。之に向ふ東旅團と稱す兵數三千六百人。余を以て旅團長と爲すの命あり。副長は植物地質專務松本棟一氏との別

格諸氏の中にて八木田。杉村。楠。杉苗。菊川の諸氏は皆な本艦に在り上陸せし諸氏の中にて萩。轟の二氏は已に大切なる北旅團を受持てり。栁山氏は西旅團を帥ひ。薊氏は豫備旅團。眞木氏は後備旅團を統ぶ故に東旅團の重任は余と松本氏に歸せさるを得す。軍勢上より之を言はゝ東旅團は北旅團に次ぐへき大切の要衝なり然るに今き兩先生が余を以て旅團長となせしは蓋し他にあらす上陸以後忽ち奇策を以て團兵を天外に噴飛はしたる奇勳と余か平生機智有て事物に行屆きたるとを信用せらるゝに由る者たると相違なし又た松本氏は元來地質植物專務にして仙風道骨を帶ひたる人なるが故に或は余をして旅團長の重任を帶ばしめ。氏を以て副長と爲せしにもあるべき歟兎にも角にも。余か此度の任命は本懷の至りと云ふへし我れ天晴れ東旅團を以てマサユラ府を陷れ大に兩先生に報ひんと決心せり

北旅團。西旅團相次て打ち立ちしかば此日午時余部下の東旅團三聯隊を引率して。首府を打立ち靜づ〳〵とマセダンの道に向ふ。兵士の小銃には『ライフル』あり『ゲベール』あり鎗刀あり種々樣〻の混合隊なりと雖とも總數三千六百餘人の大兵にて。余を初め聯隊長大隊長以上皆な騎馬にて。劍を拔き持ち令を傳へ。小隊。大隊。部伍嚴肅。シズ〳〵として押し出せしは我なから天晴れ勇々敢く覺へたり「百夫の長と爲るは一書生と爲るに優る」の諺を思起しア、我れ若し日本にて小官に屈し居りしならは今ごろは窮屈なる服務紀律に縛られ居らんに。斯く三聯隊一旅團三千六百餘人の大軍を率ひ上將と仰かるゝ身となりしは我なからデカシたりと意氣揚々馬上にて時々前後の諸隊を顧み自ら軍容の盛なるを誇れり。春風滿地馬蹄輕なりの句は方に余が此時の心事を形容し盡すものと云ふへし

進むと五六里にしてマセダンに至る其地形を察するに南には山脈峨々として相ひ連なり北には丘陵起伏して平野を爲す平野纔て耕地ならさるはなし。マサユラ府に通する道路は山麓を距る十餘丁の地に在り依て松本吉田（先きに水兵伍長にして今は聯隊長なり）山田（元探偵なりしに今は聯隊長）の三氏と相議し旅團を分て一聯隊を松本氏に附屬せしめ險阻守り易き山腹に據り陣せしめ吉田をして之を助けしむ余は自ら難地に當り三聯隊二千四百人を統率して道の左なる平野に陣したり

到着の即日より余は山田と與に部下の聯隊を訓練し又

た一面には人夫を雇來て二十餘町の胸壁を三重を築き起さしむ余が當時最も困却せしは士兵の訓練なり。他の別格諸氏は七八週間ソンパの滯在中兩先生の命に依り暇ある節は務めて馬來語を土人より習ひ覺へしに余は風船の災厄ありし爲め諸氏の如く土語を解する能はず。船中にて暇ある節に諸氏より傳習し上陸以來も之を心掛けしが故に日用普通の語だけは七八十語を記し得るのみ。此の不十分なる言語を以て部下の兵士を指揮す其苦心想ふへし。然れとも聯隊長山田の助により二日目には各小隊各大隊の士兵。號令に從て駈引をなすに至れり。余は松本氏の部下なる一聯隊の事甚た懸念なるを以て此夕曉涼に乘し二十餘町を隔る同氏の陣營を訪へり見れは氏は方に種々の木葉を集て其區氏の營中に至り分をなし居る最中なり。坐右には何とも知れぬ土塊大小百餘種及彈射し得たる異樣の禽鳥抔を堆積す拶挨終るや松本氏欣々として曰く「上井君。此地は實に不思議の國なり。我れ一昨日此地に來てより。有名なる歐米の植物志中に漏るゝ所の草樹フェルン族（蕨の種族）に屬するもの已に三種以上を發見せり。余は直に幸便を以て之を歐洲の萬國植物學會に送附し余が新發見の名を永く植物志中に留めんと欲す」と夫より坐右に在る一種の木葉樹幹を指し講釋して曰く「之を見玉へ。蕨の族なり日本抔にては此族。單に草と髮して芝朶の類と爲る。此地は年中熱度強きを以て此族の樹を生出す」と蕨樹（日本にて「ヘゴ」と名る如き樹）を出し示して餘念なし余因て氏に訣て曰く「今日は兩軍對陣し兩先生を初め我々一行實に危急存亡の秋なり。明日にも敵の大兵マジュラ府より此地に寄來らん務を專一と願ひ度し。昨日より定めて君の聯隊も訓練も測り難し。植物學の事は何卒ぞ兩三日の後と爲し軍十分に行屆きたるへしと存ず氏曰く「其事は万事吉田氏に依頼し置けり」君は皆て訓練の事に關せさるや」一然り。一昨日奇異なる種々の草木を見しより何分にも捨て置き難く余は先つ之を蒐集するに盡力せり」と聯隊長吉田は先刻より傍らに在て苦々しき顏色をなして聽居れり。余立て閑處に赴く。吉田翻かに追來て余に耳語して曰く「松本君には實に困る。昨日以來軍務とては何一つ爲すことなく草木のみを集め居れり。小生も心痛に堪へず少しく忠告を試みしところ彼人曰く戰爭の一度二度の勝敗は人類の智識上に大關係あるものにあらす。植物志中にて古人未發見の種類を發見す

るは其事。大に人類智識上の事に關すとて一向に小生の言を取り上け呉れず。依て已むを得ず小生一人にて昨今兩日專ら土兵を訓練せり然ども何分にも小生に實に難澁致し居れり。此際貴君より能く〳〵御忠告なくんは前途甚た覺束なし」と

余は席に復して松本氏に諷して曰く「此の旅團一たび潰へは敵兵直に首府に突進せん。王國の存亡。我々の勝敗。兩先生の安危。總て我々の勤惰に懸れり。君も能く〳〵此邊を熟考ありて當分植物の事を打捨て一意兵事に勉勵あらんことを望む」と懇々と依頼して。暇を告け本營に歸り來れり途中馬上にて熟ら思へらく。我れ此度こそ大功を立てんと期せしに兩先生。途方もなき人物を副旅團長となせり」

第五十六回　接戰

余は聯隊長以上の諸氏と謀て一方には日ふ兵士を訓練し。一方には遠く斥候細作をマジュラ地方に放て敵狀を窺はしめたり。斯くして無事に數日を經過せしが第六日の夕刻。先生よりの飛使來り。「鎭臺果て一万有餘の大兵を招集し。正面はサマランサラトガの道より進み。東西はヲガラ。マセダンの兩路より進み。三路一時に大兵を出たすの企あり。依ては遲くとも一兩日の中を出てすして大に交戰するに至るへし。正面の北旅團は立花綜理之を督し兵數亦た多けれは深く慮るに足らす。又西路ヲガラは地形嶮隘なるが故に是亦容易に敗走するの憂なし。唯た東路マセダンの方位は甚た懸念に思はるれは諸氏充分に防禦の力を盡さゝるへからす。念の爲め此旨通報に及ふとの事なり。依て此夜遠に松本。吉田。山田の諸氏を招迎へ相集て評議を凝らし翌日は未明より二聯隊を以て第一の胸壁を守らしめ。一聯隊を以て豫備兵と爲し。二十餘町の背後に於て更に胸壁を築き山田をして此を守らしむるに決したり

次日早天より諸隊を戰線の胸壁に配布しイザと云はゝ直に發砲するばかりに用意して待居たりしが朝八時と覺ぼしき頃。兼て出し置きたる斥候等續々として來り報して曰く「敵兵三千餘人已にマジュラ府を發して此地に寄せ來る」と兼て覺悟の上なから。余は此報知を聞くや否や動悸。俄に高まり來て上頤下頤卅二根の齒。ガチ〳〵と打合ひ始めたり。心中自ら責て曰く「嗚呼も一旅團の上將たる者は何そ此の如く怯懦なるや」と

頻に手をもて兩股を抓り。神經の感しを痛の方に向んと務めたり。卅分間を經たりと思ふ頃。甘町餘を隔て。山野草樹の間に夏服白衣の敵兵チラリ〳〵と出現して寄來れり彼等は山腹の嶮地を避けしと見へ平坦なる原野に向て我か引率指揮する左翼を目懸て遙に散兵式を用ひ喇叭を吹立て繰出せり。余は先つ砲兵に命して二門の臼砲を打發せしむ之を開戰の合圖とす凡そ人は愈よと覺悟する場合には其心膽却て落付くものと見へ此の臼砲の一發は忽ち余の動悸戰慄を拭去るか如き心地せり。敵兵進來ること十町。叢樹木石を小楯に取り發銃す我兵は胸壁より之れに應して銃擊す。此邊の原野は一面に煙草珈琲の耕地にして高大なる樹木なし。我兵は胸壁に據り彼は身躰の過半を露出して進み來るが故に我かライフル。ゲベールの如き劣小銃も亦た彼等を殺傷するに堪へたり。殊に我か土兵等は王室回復の義擧に集まりし忠臣義士ども言ふへき慷慨の者共なれは。假令ひ其容貌は醜しとも其服裝は粗雜なりとも勇氣に於ては敢て敵兵に下らす。彼我四五千の大兵。双方より間斷なく互に小銃を連發し遠く聞はバラ〳〵として豆を拋つか如く其間には我は臼砲を轟かし敵は野戰山砲を發す山谷之か爲に震ふ。敵は我兵の爲に喰止められて四町餘の所より進み得す。空く銃戰に時を送れり然れとも唯た味方の最も困却せしは敵の四斤野戰砲門なり。其尖彈は時々十五丁以上の遠距離より飛來て我〳〵の頭上にバット白煙を發して爆裂し鐵片を地上に迸らせて砂煙を打揚ぐ之か爲に味方の兵氣を奪はるゝこと甚し我〳〵亦た之に應戰するか爲め三十五度の角度を以て臼砲の圓彈を間斷なく彼等の頭上に轟發せしめたり猛烈無比の爆裂力を有する我か雷藥は頗る敵兵を苦しめたり

余は初め騎馬にて號令し居たりしが敵兵に狙擊せられ僅か四五間を隔る草樹にブッ。カチ。と昔しど銃丸逮着し又た十間内外を隔つる畠の中にも時々バッ。バッと砂煙を打揚けたり。甚た危險なるを以て馬を下り徒步して指揮したり我か舊砲と胸壁とは其利益最も大なりと見へ。敵兵次第に繰引きに左翼を引揚るか如く見へたり

然處。何ぞ圖らん敵か我か左翼より引き退きしと見へたるは其全力を我か右翼に集め山腹を經て之れを猛擊するの軍畧ならんとは看る〳〵敵の戰線は次第に我か右翼を迂廻し來り今二三十分を經は斜に右翼の背後に押し廻はらんとす。コハ大事なり。松本氏はあてには

ならねとも右翼の聯隊には經驗に富む吉田あり多分氣遣あるとなし今少しく右翼を張り出して之に抗するならんと思へとも懸念に堪へさるか故に直に馬に一鞭を加へて右翼に馳せ到る。叱咤已でに敵兵は右翼に全力を集めて攻擊し味方も血戰最中なり余は戰線の背を乘り廻くれとも一向に吉田を見ず依て小隊長たる日本兵に問へは先きに敵丸の爲めに右足を傷けられしを以て豫備旅團に送り歸へしたりと曰ふ「松本氏は如何ん」と問へは今迄彼の茂林の邊に見掛けたりと答ふ直に一鞭を加へて到れは樹下に氏の馬を繫きあるを見たり鞍上には種々なる草葉樹枝を一擔ばかりも結着けあり。氏は何處に在るやと二三十歩。林中に進み行けは藪陰にチラリと氏の影を見る。余は急に聲を掛け「松本君々々」と叫ひ稍く遲ひ及て劇しく告けて曰く「敵今まで力さに全力を君の部隊に用ひ右翼を輔翼して側面より我か戰線の背後に出んとす今や危急存亡一刻を等ふの場合なり何そ部下を指揮せさるや。氏曰く「今まで一の小奇禽を見たりジャバの動物志中に於て未た曾て記載せさる所のものなり我れチョッと彼の奇鳥を彈射し了て直に部下を指揮せん」君の部下一たひ敗れば一路の旅團悉く潰走せん。敵兵横さまに此道より空輕に突入せは兩先生は言ふに及はす我ふ一行悉く敵中に陷沒せん豈に悠々緩々として動植物學を研究するの時ならんや」氏曰く「見よ。彼の奇禽は彼處に在り余に許すに唯一彈を以てせよ」と余は此時最早や堪り得す。聲を厲して曰く「兩先生始め一軍危急の場合。朋友の情誼も是迄なり。若し余の言に從はすんは我れ君と決鬪せん」

氏も余の劍幕を見て唯事ならすと悟りしにや余と共に林中を馳出て馬に打乘り二人一サンに歸り來る。歸來れはコハソモ如何に。敵は已に八町はかり我か右翼の背後に迂廻し來り右翼の味方はバラリ〳〵と引揚けて敗走を始めたる其最中ならんとは。余等兩人の走り來るを見て彼等は之を逃走すると誤認せしにや今迄踞止つて戰ひし者迄も皆な空輕を喫んて逃走る。余が手と共に馬とも賊み切たる左翼の二聯隊も既に我か右翼を覆へし我か右翼の敗走するを見るや其走路を絶たれんとを恐れて一齊に總崩れとなり西を望んて逃走る。余等兩人も今は一生懸命の場合。馬を走らせて豫備旅團を指し遁走す。何分にも騎馬の大將は敵の爲に最も狙擊せらる勢あるを以て余等兩人齊して馬を捨て草樹木石の蔭を傳ひ銃丸を避けつゝ。半は這ひ半は走る。

松本氏を望見れは小銃を捨て軍器を擲てども一擔の草葉樹枝だけは確と之を背上に荷て走り居れり

第五十七回　鎮臺三路に大兵を出たす

余は背後の豫備聯隊を指して逃走る。部下の敗兵も亦の役に警視隊に從て充分戰地の經驗ある者なれは前隊の敗走を見るや己の胸壁より八町許り手前の地に人を出たし置き。逃來る敗兵をして皆な左右に分れて胸壁の左右翼を廻り背後に集らしめムヤミに前面より壞れ掛るを禁し。斯くして胸壁の前を清め以て追り來る敵兵に應戰の用意を爲せり

敵兵は透さず。戰鼓を鳴し喇叭を吹立て軍勢を張り散隊を用て逼來る植物專務松本氏は豫備隊にも止らず。一サンに空輕を指して逃け來る。余は遙に松本君々々と呼留むれとも聞入るれはこそ振返りもせす逃走るゆへ餘義なく其儘に打捨てたり。我か旅團の潰走するか爲めに敵に背後を突かれて首府陷沒するに至らは我れ將た何の顏有て再ひ兩先生に見ゆることを得んや若し豫備隊を以て敵兵を喰止め得すんは寧ろ此地に自殺すへしと決心し追來る敵をば山田に防かせ。余は敗兵を胸壁の後に呼集めて再ひ一團躰を成んと盡力せり然れとも蹈止りし殘兵は僅に一聯隊にも上らす

戰事は氣勢の盈虛に懸かる一たひ頽れ立ちし敗兵を盛り返へすは名將勇卒と雖ともなか〳〵能くし難きものと見へ。一旦引色になりし上なれは何分にも味方の兵氣振はす。敵は勢に乘し益々我か兩翼を覆へさんと競ひ掛る。余は己むを得す山田と協議し且つ戰ひ且つ退き繰引きに引揚けて要地に喰止むる積りなりしが繰引は忽ちにして總敗軍と一變せり。最早や絕躰絕命上井清太郎一期の安危イデ此處にて自殺と一タビは思ひ定めしかとも流石に命惜しけれは一應實況を先生に報告し其上にて兎も角も決心せん左るにても徒歩にては。はか〳〵しく遁逃する能はす如何にすへきと苦慮する中。首府なる先生より騎馬の飛使。來着せり彼者は余を見るより忽ち馬を下り先生の命を傳て曰く「鎮臺。三路に一時大兵を出だし西北の兩路ともに只今方に戰ひ酣なり多分は敵兵を喰止め得へし。依ては此の東旅團も他旅團に愧ちさる樣に必死防戰あるへし」との事なり余は使者に答て曰く「此處は何分地形の味方に便ならさる爲め今ま一寸と繰引きを爲し居る最中なり余は今朝よりの戰に馬を捨て足疲れ令を諸隊に

傳る能はす。依ては暫時。子の馬を借用せん」と言ひも終らす忽ちユラリと打跨て馬の首を西に向け一鞭當てゝ飛ふか如く首府に向て遁走せり首府に駈入り王宮に赴き先生の事務所に走り行けば先生從容として平時の如く諸事を指揮し居れり余は漸愧に堪へす遙に先生に向て拜跪し駑に叩頭せり。先生聲を掛けて曰く「只今松本氏逃還り略ぼ東旅團敗軍の狀を詳にせり依て直に新着の土兵一聯隊を間道より繰出たし敵兵を横擊せしめたり尙ほ一二聯隊。今にも新着すへき筈なれば到着次第我直に之を帥て自ら出陣せんと欲す。元來風船を一万尺以上に放ち我れ之に乘て諸路の懸引きを窺ひ見。令を下して緩急相ひ援けしむる積りなりしに今方にムーンストン大風の氣節にて連日强風吹續き風船を用る能はす夫れ故大に軍機を誤まれり」と先生か敗將を責めすして自ら咎を引くを見れは余は益々漸愧に勝へす一向ら叩頭謝罪して曰く「某等も必死血戰したれとも何分敵は潮の如き大軍にて迎も我〻二三聯隊の力の能く支ふる所に之れ無く。本意なくも敗走に及ひ候」と此時忽ちサラトガの停車場より飛使あり急報して曰く「立花綜理。旅團長萩氏。副長薊氏總て重傷を負ひ人事を辨せす只今濠車にて停車場に送り來り候」と流石の先生も色を變し慌たしく問て曰く「諸氏の容躰は如何ん。氣分は確かなる乎」使者「某も一寸と見しかは如何ん。氣分は確かなる乎」使者「某も一寸と見しかは如何ん。氣分は確かなる乎」使者「某も一寸と見し儘。颯來りし故へ疾處を詳かにせされとも三君共に死人の如く昏絶し居るは目擊したり」先生憮然として沈吟せり。又た問ふ「北旅團の骨髄たる三人負傷せる後は誰れか指令の大任を帶ひ居るぞ」「其邊は詳かならぬとも日本兵の小隊長等一同に苦戰最中にてサラトガより當府迄の鐵道線路を處々破壞し。且戰ひ且引揚け來る由に候」談話未た終はらさる中ち人夫ども忽ち立花綜理。萩氏。薊氏三人を舁き込めたり先生松本氏及ひ余三人慌てゝ綜理の支躰を撫め視るに一點の傷なく又た一點の血痕なし。萩。薊の二氏も亦同樣なり。然れとも三人昏絶して死人の如し。呼吸丈けは僅かに通ひ居れり。先生。戰地より看護し來れる小隊長に問て曰く「三人ともに。一時に負傷せしか其遲速如何」小生も確かには存せされとも三君共に一時一處に負傷せり時方さに戰酣にして味方稍く勢を得。敵の右翼を追卻けて總進擊をなさんとする際。三君相ひ集て大樹の下に集合せしと見へしが二三分を經さる中に忽ち

此の如き有樣と爲れり」先生問ふ「其時に敵の砲丸が近處に破裂せしことはなかりし乎」「確には承知致さぬも野戰四斤砲の彈丸二ッ三ッ空中に破裂せり」先生曰く「創なくして昏絶す。三君或は敵彈に盛裝せし毒煙に觸しものならん

松本氏。彼者に問ふ「三人の憩ひし大樹の葉は如何なる形なりしぞ」「遠方の事ゆへ詳かに分り申さず」「然らば木の恰好は如何ん」「日本の楠に似たり」松本氏膝を拍て曰く「解し得たり〳〵。是れ必すウーパス樹の毒氣に觸れたるものなり。是の有名なる毒木はジャパ火山の特産に屬する者にて。此樹下に憩ふ動物は或は死し或は悶絶す樹上を翔るの禽鳥亦地に墜つと云ふ三君とも植物學に明ならさるか故に此奇禍を得たり」先生容色忽ち釋然として曰く「然り〳〵。吾全く彼の毒樹の事を忘れ居たり。火山の穴中なる毒瓦斯を地中より傳て樹根に吸入し樹身枝葉に毒氣を充滿せしめ。又其毒を空氣中に吹出して動物を斃す。地誌中に於て（アンチアリス。トキスカリヤ）の蘭甸名を附するものなるへし」「然り〳〵。此の毒樹には本來特種の毒液あるにはあらぬとも火山の毒瓦斯を吸入するに因るなり速に解毒劑を用ゆべし」と余は此時始て彼の植物先生が亦た大に人生に入用あるに感服せり先生余を顧て曰く「子。速にアルベキルク氏を呼來れ」と頃刻にして同氏を伴ひ來る。氏診して曰く「身躰異狀なし確かに毒樹の害を被ふりしなり」と直に解毒藥を口中に灌入し又皮下に注射す。先生問ふ「性命に別條なき乎」氏曰く「未た詳かならす」先生直に綜理及二氏を王宮の大駕籠に積入れ早打にて由樂坡に送り出さしむアルベキルク氏附屬して出發す

此時。ズドーンと一響し。野戰四斤砲の尖彈。宮外の墻壁と前殿との中央に落下して爆裂せり余等吃驚仰天す先生曰く「敵兵已に逼近せり。然れとも敵彈か斜に墻壁を打壞せすして中間に落下せしを考ふれは彈道の角度。甚た高きを知る蓋し敵は尚ほ十五町以外に在るならん。併し最早。危急なり。松本氏は速に王族を護送して一刻も早く由樂坡に逃れよ」松本氏直に出行けり此時先生籠を開て三羽の鴿を放つ。三鴿遙に由樂坡。橫輕太の天を望て飛去る此時敵の砲彈又王宮の屋根を打貫し我々の隣室に爆發す。硝子戶を微塵に破壞し。室壁。壞るゝこと七八尺。先生曰く「事益々急なり我自ら出陣して敵に當らん。上井氏。馬を牽き來れ」と此時宮中の臣僚及ひ先生の

従卒等は何時しか逃去て一人もなし。余は直に御廐に馳到るに兼ねて先生の乗馬と定まりしもの二三頭其外二十餘頭ありしに王族遁走の用に充てたる乎。將た他人か之に騎して遁れし乎」今は一頭をも見出たす能はす唯た一隅に先生ノ騎り來りし大象あるのみ。馳歸て先生徒歩して余とゝもに小銃を携さへ停車場に馳向ふ委細を報す。

府内。已に大騒動なり府民は家具を持運ひ老幼は街上に叫喚す其間戰地より逃歸る味方の兵士は已に彼處此處に走り入れり敵の野戰砲丸は連々府内に爆發す實に一面の修羅場なり。士兵は散亂して收拾するに由なく。日本兵は已に各旅團に分遣したれは此の地に在らす。纔に殘り留まる者は停車場近く攻來りし敵に當らんと隊長伍長等必死と爲て敵に向ひ居れり。智勇一世を蓋ふの先生も此の場合に至ては最早や其手を下すへきの地なし

第五十八回　象。驢

余は先生に向ひ「是際。如何にし給ふ與」と問ふ先生曰く「唯た遁走して再擧を謀るの外なし。我れ前きに已に三鴿を放ちたれは。本艦は何時にても出發の用意整ひ居るならん。又横輕太には新募の土兵戰爭の準備を爲し居るならん。由樂坡の二三聯隊は已に胸壁に據て敵を待ち居るならん。我々は唯た速に此地を遁走すへきのみ」と又た余に問ふ「馬は一頭もなき乎」余曰く「廐中には影をも留めす」象は如何ん「尚ほ廐に在り「我々之に騎して走らは如何ん」と先生及ひ我再ひ王宮に走り歸る。敵の野戰彈時々空中に爆發す御廐に至れは大象尚ほ在り。余等直に之を牽出さんとすれは。象は不審に思ひしと見へ。長やかなる鼻を廻はして我の面部を撫で廻はせり。全身の長さ十八尺に餘り高さ九尺に超ゆる大象なれは我々二人の力にて容易に牽出し得へきにあらす。引けとも突けとも泰然として動かす先生曰く「我れ先日之に騎せしとき象奴の御法二三手を覺り得たり。象背より長鞭を以て右耳を叩けは右に廻り。左を叩けは左に廻る。脊頸を撫すれは前に進み。喉邊を叩けは乃ち止る我れ今之を試みん」と大縄を取來て胴中を三重四重にしかと締め結ひ其端を地上に垂れ先生直に之に攀ちて象背に上ほる。余も亦之に倣ふ象背の高きこと日本家の屋根に上ほりしか如し先生。鞭を以て象の脊頸を撫でしに。果してノソリ〳〵

と厩より歩み出てたり右耳を打ては右に折れ左耳を打ては左に廻る。進退意の如し。府民は兵亂を避けんと負擔して遁け迷ひ我か敗兵は三々五々四度路に逃け來る眞中を遠慮もなく我々は大象に騎して落行けり。二三の街路を經て稍く都門の外に出つ。是處迄は先つ首尾能く遁來りしか彼の大象不細工なる巨大の身躰を以てノソリ〳〵と徐歩するか故に先生。焦急に堪へず。力を極て頻に鞭つと雖も。象は尚ほ平氣にて徐歩す。余先生に告て曰く「某し嘗て聞きしとあり象を走らしむるには象奴。常に尖錐を以て其脊頸を刺すなりと。今之を試みは如何ん」と先生の同意を得て余は腰なる洋劍を拔放し。僅か五分計を刺さんと欲せしに異常の大象なるか故にや其皮膚。固くして入らず。依て力を極めて一刺しに劍尖。思はず象背に入ること七八寸。流石の大象も痛さに勝へさりしと見へ今迄は躰に沿て垂れ居たりし双朶の大耳を忽ち颯と左右に打開き一丈二尺餘の長鼻を高く前面に擡げ起こしつゝ忽如として奮跳し走り出たすこと疾風の地を捲く如く。居へ風呂の如き大地大地を蹈鳴らし。沙煙を蹴立て奔進す唯た是れ小山の突飛するに似たり。背上に跨る余等の身は恰も大浪の上に在るか如くゴクリ〳〵と響き應へ。象の一飛する毎とに。余の股は象背より空中に飛揚ること三四尺。先生呼て曰く「上井子確と取り付き居れ。落ちるぞ〳〵」と象は野とも言はす谷とも言はす。草藪叢樹の嫌ひなく一直線に哮り走る先生。鞭にて象の喉を撫てんと欲すれとも。兩手を放つと能はす瞬間にして忽ち茂林の中に馳入たり。大小の樹枝茂り合ふと柵の如し先生叫て曰く「危險〳〵。唯た象背に伏せよ」と言ひも終らす余の伏し方の足らざりしが故歟。路傍より指し出て居る大樹の枝と象背と擦れ〳〵に突過し。アット叫ふ遑もなく余は忽ち樹枝の爲に掃落せられて地上に顛倒す聲を放て「先生待ち給へ〳〵」と叫べは先生象背より「來れ〳〵」と叫ふのみ象は奔跳すること尚ほ旋風の如く余は遂に林中に置去りの身となれり

今朝未明よりの戰ひなれは身心共に疲憊し今此時には一歩も曳けす迎も徒歩して由樂坂まで三四里の道を走り得へき見込なし又た遙に里餘を隔てゝ小銃亂發の聲を聞く我か殘兵と敵の追兵と戰ひ居るに相違なし。今にも敵兵此地に迫到らんも計られすと急に上衣を脱し合印を引きチキリ。白地の下着のみを被り敵兵に似寄りたる姿を爲し此邊に農家あらは馬なれ牛なれ奪取て

打騎らんと痛き足を曳きなから進、行けは前面には大樹森々として生茂れり是れ或は毒樹「ウーパス」なるも知る可らす後ろには敵あり前には毒樹あり進退實に窮せしが。呼吸を忍て通過せは毒氣を吸ふの患ひなけんとハンケチーフを口に押當て。息を殺して一町餘の樹下を馳拔けたり漸くにして森林外に出て遙に望めは前路四五町を隔てゝ二三の農家あり是れ屈竟と近つき見れは牛もなく又た馬もなし。尙ほ屋背に廻はり見れは家より蒼下けて小廐あり一頭の驢を養ふ。主人に金を與へ買受けんと望みしかとも中々に承知せす。已むを得ず劍を拔て彼を脅かし五六個の金貨を投げ與へ。驢馬を牽出たして打乘たり（無錢にて物を奪ふは兩先生軍法の嚴禁なり）

驢は實に鈍物なり其行歩極めて遲々たり且二三町を進む後留て動くことなし。驢は其性温順なる者なれとも亦た極めて頑固なり。一たひ自ら止らんと欲する時は如何に爲すも動くものにあらす。余は鞭を以てシタヽカに叩けとも一歩を進めず。已むことを得すして地に下り之を牽けは徐々として進む。再ひ騎すれは又止る此時小銃の響聲。漸々迫り來るを覺ゆ

我れ嘗て先生に聞きしことあり」鞭て進まさる者は誘て進ましむ」と我れ今ま一奇策を出たし呉れんと身邊を探るに兵糧麵包二三斤をポケットの内に見出せり。先づ其一片を驢馬に與へしに喜て嗜み食へり。依て七尺餘の竹鞭の端に一片の麵包をブラリと結ひ著たり余は之を以て驢背に跨り。手を伸へて麵包を驢馬の鼻先き三四尺の處にブラさゞ。驢馬は麵包を食はんと欲して駈出たす　從て進めは從て先きに在り。驢馬益々食を得んと欲して一サンに走り進む。此の如くして漸く一里餘を行き乃ち一片の麵包を與へ。又鞭頭の麵包を鼻先きにブラつかしむるこ前の如し。驢は身躰の小なる割合には力ある者なり自ら走らんと欲する時は又甚た遲からす。此策を用ひて余は漸く由樂城の手前二十町の地に至りしとき忽ち三四町を隔てゝ不意に小銃を亂發す五六の銃丸或は路傍の樹枝を擊折り。或は驢馬の跡下に沙塵を打揚くこと大變なり危險なり。味方は我を敵と見しぞや。驢を停めて徒歩せんと思ふ間もなく續き發する一發の銃聲に余は驢馬と一齊に屏風を倒すか如く顚倒せり倒れなから地に匍匐して銃丸を避けつゝ。聲を放て我は日本人なるを告けんと欲すれとも先頭に在る者は土兵にて日本語を解せさるへし尙ほ頻に小銃を連發す余の伏し居る近傍の樹本に弗々

として聲あり

第五十九回　生擒

凹地に平伏し居り少しく頭を擡れは銃丸又た飛來る余は此時。立上て聲を發し「我は味方なるぞ」と叫ひたきは山〳〵なれとも。土兵等は日本語を解せす少しく頭を擡けてすら彼等は爭て我を狙撃す若し我か立上るを見は一齊に亂射せん。一丸胸部を貫かは余は忽ち死骸と爲らんのみ如何にすへきと苦心せり生憎く平伏せし窪地には水溜りあり衣服も迫々に濕れ潤ふ。此時忽ち一策を案出せり。先きに落したりし六七尺の長鞭を掻寄せて其一端にハンケチーフを結ひ付けたり。然後ち仰向けさまに凹處に寐て身は銃丸を避けながら頻に白ハンケチーフを振り動かして降服の合圖を爲せり。二十分間の後ち遙に足音を聞く。首を擡けて窺ひ見れは三四名の土兵近つき來る。十四五間を隔て余は馬來語を用ひ「降伏〳〵」と連呼せり彼等迫來て小銃を擬しながら余を緊縛せんとす余は種々の馬來語を用て敵人にあらさる旨を説明すれとも余の體に合印無きを以て彼等なか〳〵聞入れす蓋し彼等は余を以て關軍に應募せしポルチヲ邊の人物と考へ居るならん（ポルチヲ語はジャバ語に異なり）何は兎もあれ本營まで連れ行かれるは仔細なしと諦らめて牽かるゝ儘に隨ひ行けり。唯た今朝よりの疲れに加るに兩足とも皆にて底豆を蹈出たし胸壁に赴く中にも足並み自ら後れ勝ちとなるや土兵忽ち銃を擬して突撃の眞似をなす。敵ならさるを説明せんと欲すれとも語意通せず。口惜しきこと限りなし。已にして胸壁線内に入る誰れにても日本人あらは呼懸けんと思へとも此の豫備旅團は一切土兵の將卒のみ。しかも新着の者にして余の面を知るへき筈もなし先きに林中に於て。上衣を脱し合印を棄たりしを悔ゆれとも及はす

此の豫備旅團の戰線には敵兵未た攻寄せされは。我兵の敵を生捕りしは盡し余を以て始めとす夫故に之を珍重するが故にもあらん乎胸壁線後に至て又た六七の土兵附添ひ引立てゝ由樂坡の停車場に達し同處の物置小屋に幽閉せり。余は慣りに堪へすして思へらく。如何に言語通せさればとて味方の一旅團長を幽閉するものやある。我れ今ま日本語を用て大聲に「我は上井清太郎なり誰れか來て我か急を救へ」と連呼せん。然らんには日本人聞附けて忽ち我を解放する者あらんと。物置小屋に縛られながら四五町に響くへき大音を發し

て連呼すると未だ三回ならさるに忽ち數人の馳せ來る足音す。是れ必ず日本人ならんと思ふ間も無く入來れは又三四名の土兵なり。手〻に棒を提け會釋もなく余を打居へたり。蓋し彼等は捕虜が怒狂ひ罵叫ふと誤解せしものならん。余は怒りに堪へす縛られながら抵抗せしに彼等益〻激して散々に余を打擲せり余も今は餘義なく苦痛を忍て平服す。彼等は其儘立去れり。余は嘆息に勝へす嗚呼偶ま敵の虎口を遁れなから。却て味方に苦めらるゝとは如何なる因果ぞや。假令ひ余の性命は奪るゝの氣遣ひなしとも。敵の寄來るへき大混雜の場合なれは今夜より明朝までは食を送り呉るゝものも無く差向き絶食の厄運あらん。若し又万一敵兵に此地を攻取られなは。余は又敵の捕虜と爲るの患ひあらん如何なる悪運そや。と痛嘆しつゝありしに程なく日も暮れたり停車場の方は尚ほ大混雜の樣子なり。終日の疲れに覺へずトロ〳〵と居睡りしに人の來るに驚かされて目を開けは十兵又八九名の生捕を引來れり暫時にして一士官出來る土兵等匍匐敬禮す。之を見れは豫備旅團長薊氏なり。氏。圖らす余を見て喫驚して曰く「子は上井君にあらすや何の爲に此處に在るぞ。先きに土人の大隊長が敵の斥候一名降服せしを以て物置に繫きし旨を報告せり。子は何故に味方に降服せしぞ」一時の場合。餘義なく降服せり」先生は中途に子を失ひ今まに至る迄。返り來らぬは必定敵手に墜らしならんとて心亂し居られたり。一刻も早く本營に赴かれよ」とて余の縛を解き呉れし節の嬉しさは譬るに物なし。土兵等は之を見て底氣味。悪くや思ひけん余を打擲せし物共に一人二人ボツ〳〵と逃け去れり停車場の別室は先生の本營なり薊氏に伴はれて之に赴く先生余を望み見て曰く「先つ〻安心せり」。余も子に別れより島ともなく林ともなく大象に擔ぎ廻はされて實に危難を極め。中途にして顛け落ち已むを得ず徒歩して其地に達したり子の安否を氣遣ひ居るところなりし。他の諸將校は未た一人も返り來らす薊氏と余二人のみにて繁忙言ふへからす子も早く我々を助勢せよ」先生か首府より放ちし三鴿は悉なく此地と横輕太とに達せしと見へ横輕太よりは汽車にて土兵三千餘人を送り來り先生已に之れを胸壁砲臺に配置しあり。余か帥ひ居たりし東旅團の敗兵も此時ボツ〳〵と逃れ來る者多し余は先きに味方の爲めに狙撃せられしに懲り斥候を胸壁戰線の前八町餘に出たして逃れ來る敗兵に夫れ〻合印を持たしむることに爲せり逃れ歸る味方には

蓋し非常の便宜を與へたるならん此夜十二時過迄もマセダン。サラチガ兩路の敗兵續々として逃れ歸る。東北二路の敗れし以來事急なりしか爲め。此事を西旅團に通するの暇なかりし。先生此地に歸るや直に使を馳せたる由なれとも今に至て消息なし或は一軍全く敵手に陷沒せしにはあらさるかとて先生大に心痛せり東北兩路の二旅團九千六百人。此夜十二時迄逃れ歸り人以上なるへし然れとも此地留守の豫備兵二聯隊及ひ逃れ歸りし六聯隊を合すれは已に一万に近き兵數あり且先生自ら之を統督すと聞きしかは一たひ沮喪せし兵氣も自ら振興の色あり唯世事は禍福ともに偏りたが

し者已に六聯隊に及へり死傷及ひ失踪せし者三千六百

るものと見へ。此夜構輕太より電報あり。敵艦七艘。海頭を封鎖し洋上三里餘の地を乗り廻はして同灣の交通を絶てり未た開戰には至らすと云ふ

今にも敵兵の逼躡し來るかと味方は徹夜して胸壁に據り休息せす。余の如きは今朝以來身心を休むるの時なく咖にても暇ある時は我れ知らす睡を催すに至れり。次日早天。朝涼に乗じて敵の大兵寄來れり。彼等は已に首府を奪ひマセダンを破り又北路を破りしと見へ三路の大兵。皆な此地に集り來る兵數凡そ一万五千人。双方六時より開戰し。戰線は一里餘に亘れり。我か左には山尾あり右には平原あり。我兵は半は山に據て停車場を中央とし右は平原に連りて胸壁に據り歴戰す

我軍の最も不利なるは昨日の敗戰に野戰砲。臼砲等を棄てたること是なり。北旅團には山砲二門。臼砲五六門あり。又東旅團にも臼砲二三門ありしに。敗戰の際殘らす之を捨て走りたり。尤も其節。砲兵は臼砲の火門を叩き壞し。野戰山砲は後裝機械を打毀ちたるか故に今日も敵の用をはなさねとも。此の利器を失ひしは今日我軍苦戰の一原因となれり。敵は野戰山砲十餘門を曳來り（地形山多きか爲め今朝は未た戰地に五六門の外を有せす）十五町以外の遠距離より着發彈を我か戰線内に遠射し折々頭上に爆發して裂片を降らせ大に味方の兵氣を奪ふたり

開戰後已に二時間を經たれとも我か土兵善く戰ふを以て未た敵の爲に一胸壁をも奪はれす。彼も亦た土工兵を用ひ胸壁を起して對戰す。偶ま一二小隊の彼より突進する者あれは我か臼砲を落しかけて逼ひ崩し。我か胸壁より二三小隊の突出つるあれは彼れの連發銃に打卻けられて引返へす。双方目覺しき勝敗なし

第六十回　兩雄。營裏に死戰を決す

敵は常備兵にして平素の訓練行屆きたるが上に各〻後裝銃を携ふ我兵は口裝の舊形銃のみ後裝銃は全軍を擧けて僅に千七八百挺に過きす。兵器の利鈍同しからさるが爲めにや我か右翼は殆んと敵丸に打立てられ一聯隊許り胸壁を捨てゝ逃走る。先生。急に薊氏に令して之を防かしむ。此時天幸とも言ふへきは器械專務梨山氏。横輕太より大臼砲二十餘門及ひ彈藥を贈り來る。（又た明後日迄に八十餘門出來すへしと云ふ。）薊氏之を右翼の背後なる高丘に配置し。連々間斷なく大破裂彈を敵兵の頭上に注き掛けたり。直徑一尺以上の大圓丸に盛りし雷藥は敵兵の前後左右に引きも切らす爆發し。恰も地雷を發するに似たり。一巨彈の發裂力。二町四方に及ぶを以て流石の蘭兵も四五町を繰退けたり。味方之に乘して再ひ胸壁を取返へし應戰す時方に午時にして赤日。天に中し炎熱。熱帶地方に於て大兵相戰ふには最も不利なる時刻なり。燬くか如し。

敵兵次第に繰上けて一里餘の地に胸壁を起し屯駐す。双方對陣して午後五時に至る。晩涼に乘して彼れ又た寄せ來るへしと味方見へ先生亦た休戰の令を發す。

の手配り嚴重なり然れとも何事もなく稍や息を繼くを得たり。此日は實に苦戰なりき。然れとも前日より幾度の戰を經て士兵も稍や戰鬪に熟し號令に慣れ今は十分大用をなすに至れり此夕。轟氏。横輕太より來り解毒劑の功能にて其疾復常せる旨を述ふ。立花綜理。萩氏も既に人心地に復したり明日に至らは必然全癒すへしと云ふ。先生始め我々蘇生の思ひあり。作戛先生は非凡の人物なりと雖とも人各々長處あり戰鬪の一事に至ては實に立花綜理を恃みとす若し此人だに軍中に在らは昨日の如き三路の大敗を見るに至らさりしならん。

此夜事なし翌日早天拂曉。敵軍再ひ寄來る然れとも昨日に懲りしと見へ其兵鋒猛烈ならす。蓋し昨日は我を烏合の土兵と侮り一蹶して走らしめんと意氣込み切て掛り來りしに其戰難義なりしかは今日に我か兵威を恐れ且は疲勞を增し十分の攻擊をなさゝるならん。我兵應戰すると昨日の如し。二時間の後敵兵又た引揚けて胸壁を守る日中は休兵の時刻にて事なし。此日午後四時。立花綜理。萩氏。アルベキルク氏を從へて横輕太より到着せり先生始め一同出迎へて全癒を祝す。綜理及ひ二氏等の言を聞くに彼の毒樹の下に息ひし時。最

初一分間より頭腦強く頭腦重き心地せしが斯る毒樹とも氣付かず尚ほ戰略を談する中覺へず昏倒して夫より前後を知らざりしと云ふ横輕太に送り歸へされし頃は稍や回復したれとも炭酸瓦斯の毒氣の差響にや腦上に千鈞の重きを負ふか如く苦痛に堪へさりしと云ふ。午後戰なし

ウ〳〵の躰にて此日逃け歸れり同氏等は我か兩路の大敗を知らすして防戰し居たる中。敵兵の爲に首府の路を絶たれて散々に擊なされ深山に逃入り一兩日の間は藝丹山の茂林中を逃あるきたりと云ふ。氏の帥ゆる旅團の死傷は左迄多からさるも皆な散走して行衞を知す此夜。兩先生諸將校を招て會議あり立花綜埋曰く「此儘に曠日持久せは鎮臺益〻土兵を募り其兵數非常に增加すへし。闌兵三路に我〻を破り得しと聞かば。横輕太。空輕の臣民と雖とも心に兩端を懷き忽まち禍を蕭墻の中に生せざるに限らす。陣對すると一日なれは一日敵の利益となり味方の不利となる。兎も角も勝敗を一戰に決して王國の存亡と我々の運命とを定めさるべ可らす一と衆議一決して乃ち大に全軍を部署す味方の全軍十八聯隊を五部に分つ。四聯隊を以て左翼

とし蠶氏之を帥ひ梅山氏之に副ふ。又た四聯隊を以て左翼とし薊氏之を帥ひ余之に副ふ。五聯隊を以て中央軍とし萩氏之を帥ひ眞木氏之に副ふ。三聯隊を以て豫備軍とし停車場を守り先生之を帥ゆ。立花綜理は全軍を統率し自ら慄悍精選の騎兵二聯隊を帥ゐ遊擊軍たり我軍は尋常の陸軍に比すれは甚た異狀なると多し先つ我か一軍十八聯隊を擧けて後裝銃の數は僅かに一千七八百挺。（其中の六百餘挺は本艦に備へありしの者他の千挺餘は兵營にて分捕せしもの）其他は皆な口裝ライフル。ゲベール銃の類にて。新式舊形相ひ混す是れ一異狀なり而て又尋常陸兵に異なる所は大臼砲二百餘門あり是れ亦た一異狀なり

臼砲とは其形短くして大なるを以て名とし臼に似たるを以て此名あり。日本の器物に譬ふれは其形ち水瓶の如し。筒の長さ僅かに彈丸の直徑に均し（直徑一尺の圓丸とすれは筒の長さ亦た一尺二三寸に過きす筒中に込めたる彈丸の半分は筒口より現はれ居る程に砲身短し）亦た甚た小なる筒底には藥室あり彈丸の大なる割合には砲身甚た小なるを以て運搬に便なり。小なるものは馬に駄するを得へく大なるのもは人夫十餘人を以て輕〻と運搬するを得へし。其發射法は空中に向けて斜に發射

するか故に彈道大なる山形の半圓線をなして落下す（通常の鐵砲は之れに反して其彈をなるべく眞直に射出するを常とす尤も距離を隔つるに從ひ仰度を增し斜に仰て發射すれども十五度以上の仰角に發射するものは甚だ少し、又た臼砲は野戰砲抔の如く車臺に裝置せす三十五度内外の角度を以て据へ附けの臺に造り着けたるもの多し。自由に仰度を上下する能はさるが故に彈藥の量を增減して。遠近を測り射擊す近かけれは少量の火藥を用ひ遠けれは多量の火藥を用ゆ斯く火藥を增減して彈丸の遠近を取捨す

我軍の大臼砲には一門毎に砲手助手合せて二十人。馬三頭。を附屬せしむ。故に二百門の大臼砲には馬六百頭砲手運送兵彈藥方合せて四千人を要す

双方二万餘の大兵なれは明日の戰線は一里餘の長さに亘るとし我か全隊に沿て三十間内外毎とに一門の臼砲を配置し全線に百門を羅列すへしと定めたり尤も一砲にして十餘發を連發する後は砲身。熱して破壞するの恐れあるか故に十發を過くれは直ちに豫備一門を以て繰替ゆへしとす。即ち發射の臼砲は一百門にして豫備を一百門とす。二十餘町を隔る敵の戰線には三十間を隔てゝ巨彈隙間なく落發するの算當と爲るへし

明日こそは横輕太。空輕。王國の存亡を決し合せて我〻勝敗の運命を定むへしと決せしかば會議を終はる後の〻皆な夫れ〻の準備に慌たし。綜埋。諸將に向て明日こそ我〻皆な由樂坡を墳墓の地と覺悟すへき旨を命したり

第六十一回　由樂坡前に大兵を戰はしむ

今朝六時より進擊の筈なるを以て各騎隊ともに拂曉四時より彈藥の割付輜重の運送等。出戰の準備最中なり

し處。五時。斥候歸り報して曰く「敵の全軍方に進動して寄來れり」と急に立花綜理より令あり「我軍は進擊を見合せて胸壁に據り敵を引受くへし」との事なり。時稍く六時。朝陽。光を放ち地平線上より半天に昇れとも朝涼尚ほ存す。爽氣人に可なり。只た見る首府空輕の方位に當り十五町を隔てゝ。敵の大兵一万餘人整〻として寄せ來れり。地勢高低にして樹木參差たる間を一面平押しに進來る。彼れ皆な白色の戰衣を着けたるを以て前面十五町の地は一面に白み渡て見へたり。敵の戰線。大凡そ四十餘町に亘る彼れか戰隊の背後より忽ち野戰山砲五六門を轟發す。我か戰線第一重彼我の距離方に十町以内と覺しき頃。

の胸壁五六ヶ處に着發して許多の味方を殺傷す。味方の一二聯隊は色めき立て見へたり我軍尚ほ應ぜず靜まり返て待受けたり

敵兵已に迫近すると五六町。彼れの隊伍を見るに密列の戰隊にもあらず疎薄なる散兵にもあらず。兩酋中間の兵式と稱するも可なり。敵兵油々皆な凸處。樹木。畎畝。を小楯に取り進來る。此等我軍は敵の戰線に向て百餘門の大臼砲を一齊連發す。打發の響は破裂彈の聲と相混し。其響き山野を震盪す。余は生來始めて此の如き凄ましき景狀を目擊せり我か全軍。亦た小銃を發射して開戰す。敵味方双方二万餘挺の銃口より擊出たす銃聲はパラ〳〵として間斷なく恰も挽臼を挽くか如く。双方より擊ち違ゆる二万餘個の小銃は鉛丸の驟雨を横さまに降すに似たり。我か百門の大臼砲と敵の野戰山砲の爆裂彈。着發彈は互に敵味方の戰線内に破裂す眞に是れ天柱地軸も亦撼搖せんと欲す。二万餘挺の銃聲は其響き盛ならさるにあらねとも大臼砲野戰砲の轟響の。凄ましきに比すれは。耳に入らさること恰も太陽の前の灼火に似たり。戰線の背後には幾千の夫人。馳違ひて彈藥を持運ひ討死手負の兵士を運送す。

敵も一万以上の大兵なれは少くも野戰砲三十餘門を有すへきに其發射する砲數は僅か十餘門に過きす而も口徑甚た大ならすして何れも皆な。四斤以下なり蓋し此戰線の過半を繰廣ろけたれとも平野の耕地には珈琲樹多く且其間には草樹茂生し。野戰砲車を曳進むると能はす。故に彼か野戰砲の過半は遙かに二十五町の背後に控へ。輕便なる砲車のみ戰線に曳來るを得へし。此の一點に於ては我か臼砲は砲車に駕せす。人夫と馬とを以て擔き廻はすか故に山谷にあれ樹間にあれ自在に之を運搬し得へし

一万餘挺の小銃は其勢猛ならさるにあらねとも我か大臼砲の猛勢に比すれは尚ほ一着を讓らさるを得す。四十餘町に垂んたる味方の戰線に沿て三十間毎に配置せる大臼砲は各々其大さ人頭を二つ合せたる如き巨彈を敵の戰線に擲射し其破裂する處は一面に沙煙を打揚く我か臼砲は三十間に一門を備るか故に其巨彈は敵の戰線に沿て三十間毎に一面を爆發する割合に當れり。一巨彈の爆裂力を二町に及ふものとすれは僅か十餘門を以て敵の戰線二十餘町に爆裂力を普及するを得へし百門を用ふれは二百町（幾んと三里）の戰線に在る百

物を粉齏するに足る。然に今や四十町に過きさる敵の戰線に向て我か百門の巨彈を間斷なく擲射するとなれは巨彈の落る處。爆裂して砂石を噴飛はし。彼れの戰線は一面に砂石塵烟にして敵兵を見分くる能はさるに至れり敵の銃聲稍や衰へ來りしは流石の阿闍節制の兵も我か雷礮の爆裂力に色めき立ちしと覺へたり此時我か全軍に進擊の喇叭鳴る。味方は勢に乘して胸壁を躍出て。樹木。畦畝を楯に取りツツ〳〵と進攻す。此時我が豫備聯隊。右翼の平野に向て繰出せり蓋し敵は我か右翼を迂回せんと戰線を左りに張りしに相違なし我か戰隊は尚ほツリ〳〵と押進めり立花綜理。俄に令を下たし。五十餘門の大臼砲を拔て悉く之を左翼の山尾に集めしめ力を極めて巨彈を落發せしむ。此の猛烈なる破裂丸。雨の如く落下るが爲めに我か左翼に對して敵兵は漸く潰へて引色に見へたり。敵の戰隊は本と由樂坡の大道と十文字に打違へ我に對して一面四十餘町に戰線を張て寄來りしに。我が臼砲と左翼兵の小銃に打ち立てられて此時の有樣は首府に通する大路と十文字なる姿を失ひ今は大路より東の平野に追出されんとす。綜理。馬を躍らせ左翼に馳來り諸將に令して曰く「今は一劇戰を以て全く敵兵を平野に追落すへし。進擊の喇叭を合圖に我自ら部下の騎兵二千餘人を提率して先つ彼の右翼を進擊せん之れと同時に左翼の聯隊亦た銃槍を以て突進せよ。今日の勝敗。只た此の一擧に在り」と馬を返へして走り去る十分間ならずして進擊の喇叭。鳴り響く。綜理自ら騎兵二千餘人を引率し。我か臼砲の巨彈に打亂されて引色となり居る敵線を目懸け山尾より斜に旋風の如く突進す。之と同時に我々左翼の諸聯隊も吶喊を作り銃槍を以て殺進す。敵も亦た早く此の戰略を覺りしにや二三千人と見ゆる豫備隊を背後より繰出たして邊へ戰かふ。立花綜理。漆黑肥悍の駿驥を躍らせ戰隊より二三十間の先頭に奮進す華々しきこと無双なり。只見る一發の野戰砲彈。馬腹下に着發してパット白煙を發し沙煙を打立ると同時に人馬一齊屏風の如く顚倒せり。四近の味方はアット叫ひつゝ馳寄て抱き起せは。幸にして足部に微傷を負ふのみ。騎馬は太腹紛齏して臟腑。地に塗れ。綜理の半身總て鮮血を浴す。慓悍無比の人なれは事ともせす直に騎兵の一馬を奪て之に騎し味方の騎隊に馳付たり我か臼砲五十餘門は山尾の高處より味方の頭上を打超しつゝ絶へす巨彈を轟發して潰走を始めたる敵の線後

に爆發せしむ。我か左翼の諸聯隊は銃槍を以て進擊し敵の右翼を平野に追落し首府の道路。全く我々の手に落ちたり

此の一擊を以て此日勝敗の運命を定めたり。敵の戰隊と其彈藥輜重部の間は正に我か左翼の爲めに遮斷されたり前記せる如く開戰の始め敵の戰隊は一列に大路を横て之れと十文字の形をなし居たりしに今や我か左翼は山尾より突進して大路を奪ひ敵は平野に押出たされたるか爲め我か線戰は斜に大路に沿ふて平野に向ひ彼は全く平野に在て半は大路に面す。綜理令を諸將に傳へて曰く「我已に首府の路を奪ひ得たり。此際。息をも繼かず猛擊せは彼れの銃砲は彈藥の量に限りあり彼決して二時間を支へ得じ」と眛方益々勢を得て小銃臼砲を連發し喇叭を鳴らして軍勢を助く。戰ふと一時間餘にして敵の銃聲次第に衰へ繰引を始めたり。此時我か全隊一軍大進擊の喇叭を鳴らして急攻す敵の一部は戰地より東南に押出され他の一部は北東に押出され我兵は櫟子の如く彼か戰線の中央を突き凹めて敵を兩部に分ちたり。敵の大半部なる右翼は彈藥竭きしに時間道を指して山を越へ谷を渉て引退く。我か中軍は息をも繼かず砲銃を發して追

迫る。敵の左翼の一部たる二千餘人は走路を絶たれ彈藥に竭き我か臼砲。小銃。大小の彈丸に打ち立てられ遂に白旗を揭げたり

第六十二回　ルタン新聞の通信者

此時兩先生相議し我か右翼及中軍の一半九聯隊をして敵の敗兵を追ひ勢に乘じてマジュラ府を衝かしめ左翼及中軍の一半九聯隊をして大道に沿ひ長驅して首府空輕を衝かしむ東に向ひし一軍は轟氏等之を帥ひ首府に向ふ一軍は綜理自ら之を帥ゆ余は固より左翼に在るを以て此手に屬す

我軍揉に揉んで急行す敵の輜重彈藥及ひ野戰砲等途中に於て分捕りたる者算無し首府迄は五六里程日暮ならすして到着す敵は全數を竭くして必勝を期し戰地に向ひたりと見へ此地には殘兵幾許もなし我軍難なく再ひ首府に入る兩先生此機に乘し直に長驅してサマランの空虛を衝かんと期したれとも何分燬くが如き炎熱に殆んと終日の戰をなし且五六里を走りしとなれは兵士疲憊して殆んと立つ能はす依て嚮きに打棄て逃けたる壁に斥候兵を配布し砲臺に野戰砲を配置し且兵士を息はしむ翌日先生は首府に駐まり綜理自ら一万餘人を引

奉しサラトカを指してサマランに向ふ敵兵一人の道を遮るなし此日先きに我兵か築き起せし胸壁ある地迄全り先つ此地に宿し斥候を放てサマランの狀況を窺はしむ都府には屯駐の敵兵已に甚た少數なるを窺知りしかば翌日拂曉より劃涼に乘して軍を進め日中は休息し夕涼に乘して再ひ進軍しサマランを去る二里餘の地に至る斥候を四面に放て進擊は明朝と決す

翌日早天我か前隊已にサマランに迫る都府は人口七八万蛇波洋沿岸に在て屈指の地なり其人口の少き割合には貿易貴た多し都府の家屋三分の一は西洋館なり此邊の地形たるや海灣より地勢次第に隆起して山をなす都府は山を背にし海に面す我軍は都府を隔つる一里餘の山頭に現はれ出で伏して都府を見る灣頭には砲臺あり灣内には敵の砲艦の碇泊するもの四五艘あり我は山頭より伏して都府を射る敵は仰て我を狙擊彼れの兵數僅に二千の上に出す一揉みにも足らぬ相手なれとも灣内に碇泊せる砲艦は遠く進み得す密列の巨砲を運發し陸兵を蔽ひ守る砲艦の巨彈に我軍容易に向て隊伍を用ふれば敵の疎なる散兵式に組立て都府の恐れある周圍の山より故に我か半軍は陸兵支ると能さるを見て皆海岸より船に三面攻下る砲艦を指して乘込みたり我兵進んて灣頭の砲臺を取り其大砲を用ひて以て砲艦を擊たんと欲し馳至れは砲臺兵逃れ去るに臨みて早くも大砲の後裝機關を打壞し去り大砲用をなさず

此時府内已に我手に落つるを見るや敵の砲艦は間斷なく燒彈を發射せり之か爲めに土人の家屋各處に火起り洋館の過半も亦彼れの砲彈に毀たるゝもの多し我軍は洋館を小栖に取り白砲野戰砲を以て砲艦と對戰す即ち是れ魚と獸との戰空しく砲戰をなすのみにて我も彼を走らしむること能はす彼も亦我を敗ぶること能はさりしか到底空しく都府を砲擊するも一の結果なきを覺りしにや薄暮に及んて砲艦は輜重船四隻と共に沖合に鑑を指して乘込みたり

萩氏部下を帥ひて灣頭の山腹各處に七座の假砲臺を起し一座毎に白砲十五六門を据ゑ敵艦の侵來を防くに備ふ又色に使を横濱太灣に派して水雷專務楠氏を迎へし灣内一面に點火水雷を敷設せんか爲めなり

我軍此府を陷れし第三日にマジュラ府に向ひし味方より通報あり昨日漸く都府を陷れし由然れとも洋上の砲艦に砲擊せられしこと我軍の如くなりしと云ふ今や我軍は全く南印度洋の海岸より北蛇波洋に貫連せり百

十度以東の地は勢自ら我有に歸すべきこと分明なり此時よりベキス。パスバン。ブーゼル。マタニス等の各州の人民蜂起し皆爭ふて款を南王の下に通す此破竹の勢に乘して西の方大兵をバタビヤに進めなば七八週間を出てずして大事容易に定まるべきに似たり兩先生始め一軍欣々たらざる者なし

凡そ人生快心の事は戰爭の後に如くものなし各營を往來する各人の間相語る所のものは皆な其手柄話ならざるはなし我々此地に屯すること八九日作良先生の軍師を犒ふか爲めに首府より來り此の地に留まること兩三日

一日西の斥候線より土兵三四名一團の西洋人を護衛し來る余先生の命に依り對面せしに身材甚た高からず稍や日本の中男以上なるへし其恰好長大なるより寧ろ肥短なる方なり頸短く面相豐下なり毛髪黑褐色舉止活潑片時も靜まり居らず總督に面會せんことを乞ふ自ら稱て曰く「余は佛國ルタン新聞の通信者なり此地に大戰ありと聞き交趾支那より昨日渡航せり兩軍の勝敗を本國に通報せん爲め此軍中に加はらんと」を乞ふ」と余は此奴或は間諜なもんと思ひ兩先生に往て此旨を通し其處置を乞ひしに作良先生曰く「歐洲諸國に在りては戰地にて新聞記者を遇する殊に厚し軍中常に待つに士官以上の格式を以てす普佛其他の戰皆此の如し其狀貌に依れは佛人たること相違なし全く蘭人にあらじ先づ其處に案内せよ」と依て彼者を作ひ兩先生の處に至る彼者活潑に身振りをしながら頻りに不十分なる英語を話せり先生笑て其手を振て曰く「氏はウヰクトル。ミロー氏にあらずや余は巴里滯在中ルタンを訪問せし時屢〻相會せしを忘れしか」と。彼者忽ち頸を縮め眉を聳かして曰く「然り〳〵〇〇君なりしか此國は日本にあらずモッシュ如何にして此國の大將となり居るか」と愕然たる色あり先生依て立花綜理にも紹介し又我〻にも紹介して曰く「是れ奇人なり余は先年巴里に於て相識れり」と是より茶菓を出たし主客興に入て物語すミロー氏曰く「歐洲諸國共に無事にして力を展ふるに足らす余は遊歷旁〻ルタンの通信を兼ね東洋には面白き事あらんと五六ケ月前出かけたりしが是亦欠伸を催すの地なり。羨むへき哉君が此地に大將となりしこと」先生曰く「我はプライムミニストルなり大將にあらず」と是れより日本を出てし以來の顚末を物語る氏曰く「絶快〳〵我直に本社に通報せん」先生慌てゝ之を止めて曰く「以ての外なり

我ふは尙ほ此先きに大望あり歐洲列國には最も秘せざるへからす」同氏頻りに其企を問ふ先生其大略を物語りしに氏忽ち先生に乞ふて曰く「願くは余を兩君の一行に加へ呉れよ余は先年の大戰に普魯士の軍に生捕れしかとも軍事には最も經驗あり一二旅團を率ゆるは奴婢を扱ふよりも易し。明日より直に何れの地の大將に か採用あれ」死生驚て曰く「餘り匆卒なり今少しく熟考あらば如何」氏曰く「十年思詰めたる事も一分時間に思起せる事に及ばざるは世の中の常なり今善しと思はゝ今之を行はん後に至て不利なりは之に罷むるも容易のみ」先生曰く「直に加はり直ちに去られては迷惑なり」氏曰く「否々決心は瞬間なれとも行狀は永續すへし」と立花綜理傍に在て嘻笑す是等の問答中此人暫らくも躰を休めず或は椅子に憑り或は起つ一言一語も手眞似の之に伴はさるなし實に快濶なる奇男子たるを知る兩先生熟議して「先づ今夜此軍に在る別格諸氏を會し評議の上にて返答せん」と對ふ氏大に喜ふ翌日に至り先生より衆人異議なく一行に加入せしむる旨を告けしかはミロー氏躍上りて喜へり先生戒めて曰く「我々に不利なる事をルタン新聞に密報するとは最も嚴禁なり」氏曰く「今日より一切通信を廢すへし」先生曰く「夫も宜しからす我々に不利ならぬ事は時々通信せよ彼の新聞を以て大に利便を得るの日もあらん」氏曰く「我か本社に對する通信は我常に自ら事柄を引出たして之を通知するのみ是れ通信者の秘訣なり我れ若し自ら慎まは通信の種は一切之れ無し」と氏を加へ花綜理試みに一大隊を受持たしめたりしに此先生毎日部下の土兵と共に酒を喫し相樂しむ外何事をもなさず諸人に語て曰く「我れ經驗あり他國の土兵を率ゆる法は號令簡易なるを第一とす進擊。發銃。繰引。休息此四號令を除けは他に一語をも要せず」と作戛先生の此地に來りしより七日目の朝首府に在る兩王副務大臣をして一の宣旨を齎らしむ兩先生之を開き見る中看す〳〵顏色一變し面上朱色を注いたり必然何事か生し來りしならん綜理見終て宣旨を地に拋て曰く「咄。柔惰子共に謀るに足らす汝等闌人に誘惑せら れ將に成るに垂んとするの大業を壞つ」と我々慌て其故を問ふ先生大息して曰「橫輕太空輕太の兩王阿蘭副王の請求に從ひ彼等と和を講するに議決せし旨を通し來り且我々の功勞に報ゆるか爲め空輕太王より米十万石を贈與すへしと云ふ嗚呼是れ橫輕太王より米五万石を贈與すへしと云ふ嗚呼是れ

何等の怪事ぞや此ジャバ一國の富は其價幾億万金に價すへし我々今王室を回復して死生の間に出入し其事已に八九分を成就し僅に一簣を缺くのみ然るに我々に一應の協議をもなさず卒然此の如き宣旨を送るは何事ぞや」と我々一同皆忿々たらさる者なし兩先生是より我々を伴ひ兩殿下に忠告するか爲め直に首府に向ふに決す

第六十三回　蛟龍豈遂に池中の物ならん

兩先生早天に出發し日暮既に首府に到着す我々軍務所に至り休憩し兩先生は直にアルベキルク氏を伴ひ王宮に至る待つこと二時間餘にして歸り來る兩先生共に快々として樂しまさるの色あり綜理先生に言て曰く「我々手兵を以て直に幾多の奸人を捕へは如何」一先生沈吟して曰く「不可なり。我軍全く蘭人を逐ひ終はるの日は我々の權力制すへからさるに至り兩王の臣僚皆勢を失はんとを憂ふるの情あり是れ一難なり。文武の庶政總へて我々の手に歸す宮中に在て賄賂を納れ威福を專らにする姦臣等其利を營むに由なし我々の在るを利とせす是れ一難なり。假令我々今奸人等を捕へ此戰を續くとも彼等益々我々の心を疑ひ或は蘭人に通して裏切りをなし我々日本人を蘭人の手に陷沒せしむるの詭計をなすも測り難し是れ一難なり。然らさる迄も毒殺暗刺の卑劣なる姦計を行ふ者なきに限らす是れ一難なり。是等の諸難を犯かして我々に利する所幾何ぞ我々の胸中遠大の計畫あり何そ必すしも此地に戀々たらんや一と然れとも立花綜理尙ほ此勝を棄つるに忍ひさるの色あり

ミロー氏はアルベキルク氏の通辯に依り此事實を聞くや忽ち建議して曰く「兩王室とか云へるものは腐朽せる老木に同し此國の土人等何事をかなし得へき。此勝を致せしものは全く兩君の力なり兩君何そ兩王を幽閉し自ら此地に王たらさるや。若し那破翁第一世なりせは必らす此策に出つるならん」と先生微笑して曰く「余等をして天上より降りし者ならしめば或は是等の事を爲さん余等已に王室を助くるを以て名となし事を擧け終りに臨んで却て之を奪ふ假令幾多の富貴光輝を得るも正潔義俠を以て稱せらるゝ日本人種の榮名を穢かすを奈何せん一と言訖りて又た大息して曰く「偷安苟且是れ東洋列國の通弊なり亡滅を致すもの皆之に因らざるはなし」立花綜理又黙て曰く「奴輩國人の爲めに誘惑せらる我等此地を去るの後豈能く十年の無事を保ち得んや。汝兩王數す不祀の鬼とならん。

汝等先王の宗廟社稷を思はざるか」と先生曰く「此七は已むを得ず和睦の條約を吟味すへし蘭人の兩王に申出せし所は第一に兩王の領國を永遠無窮に存在せしめて敢て掠奪せざるを以て第一條とし又蘭人兵の鎮守を其國内に置かざるを以て第二とし兩王か兵士を畜ふるを許すを以て第三とし我々に笹野氏を還付するを以て第四とす。然れとも余は尚ほ一ケ條を加へしめ日本義勇兵彈藥兵器の損害料として一二等の巡洋堅艦一隻を買得る丈けの金員を拂ひ渡しむべし」余問ふて曰く「五十萬圓ならんか」先生曰く「否。一百万圓なり。一余曰く「それは過多なるなからんか」先生曰く「否。阿蘭副王か土人を搾して得る所の歳入幾千万圓なり一百万圓何かあらん」先生又諸氏に言て曰く「既に媾和の已むへからさるを知らは務めて此國の兩王と安堵を全くするを以て得策とす他日我〻に不幸あらん時或は來り投して身を容るるの地ともなり又兩王の名を以て各地を往來するの利便もあるへし諸君此旨を服膺し敢て不滿の意を現はすことなかれ」と

此日午後兩先生再ひ王宮に至り更に議定せし一ケ條を加へんことを求め承諾を得たり是に於て兩王大に喜ひ即ち其重臣三名をバタビヤに派遣して講和承諾の旨を告け且其要求を述へしに一週間の後副王よりの返翰を得一切之れを承諾すへしとなり。蓋し此戰永續せはスモダラ。ボルヂオ。セレベス等の土人各處に蜂起し十万以上の大兵を集むるにあらされは副王之を鎮撫するの能はす是等の大兵は急に募集するの道なきに一方に我軍は旬日を出てずしてバタビヤを襲ふに至るへく假令五百万圓一千万圓の償金を出すも利害得失彼に於て大なれはなり尤も笹野氏を還付し償金を受取る迄は我軍敢てサマランの兩府を明渡さずとの約束なりしかば尚ほ三週間は軍備を弛めす待居たり第四週目に至て副王の次位を占むる者委員としてサマランに出張し償金笹野氏引渡しの事を通知あり依て我軍も亦先きに砲艦を分捕して生捕りし阿蘭の士官兵卒及由樂坂の大軍に降伏せし陸兵四千餘人を引渡たすの手續をなせり當日には阿蘭の委員七砲艦の水兵四百餘名を從へてサマランに上陸す兩先生又我が一万の兵を濱邊に整列し兩先生と副王の委員と此處にて双方の捕虜を還付せり笹野氏は副王より給せし新調の洋服を着け委員と共に我陣頭に出で來れり兩先生始め諸氏一同帽を脱し聲

を放て之を振り其無事なるを祝し互に手を握り別後の情を述ぶ我々の喜極まりなし。我々已に陸戰中諸處にて敵に捕はれし捕虜を受取り金貨百万弗を受取りしかば乃ちマジュラ府を引揚け首府に歸へるマジュラの一軍又同地を引揚けて首府に入る。同日は府内の人民處々に緑葉の凱旋門を作り我が二軍は兩路より凱旋の式を以て歸り來る兩先生及余等王宮に入て謁見す兩王深く恩の意を表す即ち各地の米廩に於て十五万石の米を贈與する旨を傳ふ兩先生其好意を謝し尚ほ兩殿下と我々の間に交情の永久に存在せんことを希望する旨を述へたり

兩先生相謀り彼の贈與されたる中十万石の米をは從軍せし土兵の功勞に從ひ等級を定めて分ち與ふ兩先生一も取る所なかりしかは諸隊の兵士感泣せざる者なし兩先生又五万石の米をサマラン。マジュラの地に賣拂ひ二十万圓餘の金を得此金員は上陸以來功勞ありし日本人の將卒等に分配せり

阿蘭副王より行たる金貨百万圓を以て直に歐洲の造船會社に巡洋新型艦一隻を注文するに決す是より一週間を經て兩王より船兵の命あり。兩先生諸隊を散す軍中の兵士皆父母に離るゝか如く別を惜まさる者なし。兩先生は我々一行と共に是よりジャハの東部を遊歷し此邊有名の温泉多けれは之に入浴して戰勞を休め再ひ印度洋に向て浮城。海王を乘出さんと議決せり

附言。此小說は第一回小華囊より起て千八百八十三年（明治十七年）馬島の女王バナバロ第三世位に即き越て二年佛人馬島と和を講する迄凡そ二百餘に渉るへき筈なり今此第六十三回を以て假に一小段落とす是より以後は兩雄か浮城海王を印度洋に乘出し種々樣々の珍事奇聞あり或は南極に漂ひ或は南亞米利加の内地に漂泊し或はアビシニヤ。アラビヤ沿岸を歷走し或は南亞米利加に彷徨ふ等其結構は雄壯偉大兒女の情少く風雲の氣多く人をして一讀快濟ならしむべし

（完）

博文館十周年紀念臨時增刊

太陽

第三卷第拾貳號終

本號ニ限リ定價金卅八錢

太陽定價　毎月二回五日廿日發兌

定價

一册（三百頁以上）金拾七錢
六册（三ヶ月分）前金九拾八錢
十二册（半ヶ年分）前金壹圓九拾錢
廿四册（一ヶ年分）前金三圓七拾錢

內地郵税一册三錢
外國郵税歐洲十四錢北米七錢

注意（本誌ハ前金ニアラサレバ一切發送セズ●前金切レ候節ハ直ニ遞送ヲ止ム●郵券代用一割增ニテ五厘壹錢切手ニ限ル）

販權所有

發行所　東京市日本橋區本町三丁目八番地　電話本局三百三番　博文館

編輯人　岸上操
發行人　大橋新太郎
印刷人　愛敬利世

廣告揭載料

三等（五號活字廿四字詰）一行金三拾錢　全廿四字六十四行　一頁金拾九圓貳拾錢

一等　一頁金廿三圓〇四錢
二等　一頁金二十圓拾二錢